

2017 年度  
博士学位請求論文

## **コロンタイ;理想と現実**

ージェンダーから見たロシアにおける女性の社会的地位ー

A. Kollontai; The Ideals and Reality  
The Roles and Status of Women in Contemporary Russian Society  
from a gender specific perspective

千葉商科大学大学院  
政策研究科博士課程  
1250009  
杉山秀子

# コロンタイ；理想と現実

## 目 次

	頁
序 論	1－5
第一部 コロンタイの生い立ちとその後の活動	
第1章 生い立ち 世界初の女性大臣	6
第2章 ロシア独特の女性解放論	17
第3章 マルクシズムへの覚醒とベーベルの影響	24
第二部 コロンタイの母性論	
第4章 誰に戦争は必要か	37
第5章 母性原理	51
第6章 母性論の集約『社会と母性』	65
第7章 初期ソヴェート政権における母性と子供をまもる政策策定	71
第三部 コロンタイの恋愛観	
第8章 赤い恋における衝撃的ネップ批判	83
第9章 新経済政策—ネップと労働者反対派	94
第10章 世間を驚かせたコロンタイの恋愛観	101
第11章 超法規的性道德論	105
第四部 コロンタイの家族論	
第12章 事実婚衰退と登録婚固定化へ	108
第13章 事実婚主義の終焉へ	119
第五部 コロンタイ後の推移	
第14章 女性解放の挫折とその後	122
第15章 プーチンの少子化対策	128
結 論	140－141
参考文献 リ ス ト	142－151

## 序 論

ソヴェート政権期における女性のおかれた問題点は、ソヴェート憲法で保障されている形式的男女平等と実社会で認知されている状況との間の乖離をいかに埋めるかであった。社会主義革命の草創期にソヴェート政権にコロンタイという才能ある女性が彗星の如く現れた。彼女自身の念頭には常に女性は国家に対して男性と等しく働き、国家にまた新しい成員を与えるという二重の意味での義務が課せられている。それゆえ、国家も女性のその義務を女性が遂行できるように十分配慮すべきだというのが彼女の根本的持論であった。しかしこのマルクス主義に立脚した持論は現実生活では数々の葛藤と矛盾に満ちていた。

コロンタイは「新しい女性とは、第一に自立した労働単位であり、その人の労働が私的な家族経営への奉仕ではなく、社会に役だち、かつ必要とされる労働にむけられるのである」<sup>(1)</sup>と定義づけているが、当時の現実との落差は想像に絶する。

従来ベーベルや、エンゲルスは女性の解放は社会制度の変革のあとで達成されると主張し、女性独自の解放のための闘いは単なる「ブルジョア的なもくろみ」<sup>(2)</sup>にすぎないと論述し、このことはコロンタイももちろん肯定していた。しかし、権力が労働者の手にわたっても、女性と男性の意識変革と新しい制度や政策がきちんと遂行されなければ、いつまでもたっても両性の真の解放はえられないのは自明の理なのである。

ベーベルは当時賢明にもこのことを洞察し得た稀有な存在であった。彼は『女性と社会主義』（ペトログラード1918年刊）の中で注意を促している。女性の立場が、本来の階級の枠内でも同じ階級の枠内の男性と立場が同一でないこと、女性と労働者の立場の類似点は多くあるがある一つの点では女性は男性の先を行っている、つまり、女性は奴隷制度に置かれた最初の人間的生き物である。奴隷が存在する以前に女性は奴隷とされてしまった。このことから、自己の要求を階級的同志に注意を促し、党を女性の利益を目指す闘争に参加させる、女性の社会的運動を引き出す特別な課題が生じると女性解放の本質を炯眼にも見抜いているのである。このような根本的観点がないと、例え社会主義的闘争が日夜行われたとしても、大抵、男性達の闘争の主目的を第一の共通の課題としてそれに向き合い、女性にとって最も先行させるべき課題は後回しになってしまうことはその後の歴史が証明していることである。

「10月革命が、然るべき重みのある言葉を発しなかったならば、おそらくそれ以上に女性解放の過程は進まなかったに違いない。10月革命は女性を新たに評価する事に役立ち、社会的な有効な単位としての女性に対する見解を確固たるものとし、明らかにしたのである。一省略— ところが、この現象をさげがたい歴史的事実として認めること、新しい女性のタイプの形成は新しい労働社会の形成をめざす全般的な進歩と関連していると理解することであるが、ブルジョアジーはそれを行うことができないし、やりたくないのである。10月革命がなかったなら、自分で稼ぐ女性は一時的な現象であり、女性の場所は家族のなか

にあり、生活の糧を得る夫の陰にあるという見解が今まで支配していたであろう。」<sup>(3)</sup>と10月革命を高く評価しながらも、常に革命理論の後塵を拝む女性の解放を意識的に幾つかの著作でカバーしようと努力した。

ソヴェート政権時代の社会主義建設の揺籃期の1917年11月4日、国家保護人民委員部が設立され、主として家族政策を扱うこととなった。すでにコロンタイは1917年10月29日には人民委員すなわち今日でいう大臣に任命されていた。この時期コロンタイは堕胎の横行を防ぎ、母子を保護する目的で「母子宮殿」の設立を呼び掛け、家族政策の一環としてその設立に奮闘した。残念ながらコロンタイの国家保護人民委員としての期間は1918年の3月19日までの短いものであったが、1917年11月19日には、婚姻と離婚に関する婚姻制度を抜本的に変化させる布告ができた。すなわち、「市民婚、子および身分登録保護の家族に関する布告」を行い、婚姻と離婚が教会を経ずに行われる自由が保障され、また庶子と嫡子の同権や、堕胎の横行に対して出産は女性の社会的権利と義務であることを高らかに宣言するものであった。そしてロシア史上初めて、「母子保護課」がコロンタイの手で設立されたのであった。僅か、数か月の間に輝かしい実績をコロンタイは造ったが、惜しくもその後海外に出奔することになった。その後、初期社会主義政権において自由な婚姻形態は様々な曲折を経ながら、実質1936年まで続行された。しかし、スターリンの専制的政治により家族を国家の単位として生産と人口を増大させることの強化策により、女性は再び性別役割分業という頸木に繋がれる羽目になった。

現代ロシア人女性の延々と背負っている社会労働と家庭内労働という二重負担の構造を間接的に評して、「脱社会主義化の時代には、当該社会の持つ家父長制規範が露呈してくる。」<sup>(4)</sup>と主張する論者もあるが、要はソヴェート政権が崩壊したから、家父長制規範が露呈されてきたのではなくて、ロシアでは革命以前から家父長制的な規範が延々と温存されてきたというのが偽らざる実情であろう。

さて現代におけるロシア人女性の状況はどうかと言えば、体制転換のひずみを一身に受けていると言っても過言ではない。もちろんかつてソ連時代にロシアの女性がおかれている立場を正直にかたり、社会を批判することは反体制の烙印を押される事であり、タブーであった。その状況はサミズダート（地下出版）でのみ可能であった時代から見ると隔世の感がある。一部とは言え、才能のある女性達は小規模ながら起業家としてどんどん活躍しており、評論、哲学・文学の領域では、ニーナ・サドゥール（1950 -）、ワレーリヤ・ナールビコワ（1958 -）、リュドミーラ・ペトルーシェフスカヤ（1939 -）、オリガ・セダコーワ（1949 -）などが注目の作品を世に送り出しており、さながら女性作家の時代といってもよからう。しかしこれらの人々はあくまで選ばれた女性達であることに注意する必要があるであろう。97年7月10日付けの独立新聞（Независимая газета）<sup>(5)</sup>によれば、ロシアにおける現代の女性は国民経済の半分を担い、平均的教育程度は男性を上回っているにも関わらず、

1) 失業率の割合が極めて男性に比較して高いこと

2) 女性の平均賃金は男性の三分の二にしかない（非公式では三分の一と言われている。）

3) 女性は新しく進出してきた小規模のビジネスにはきわめて活動的であるが、大企業や大生産部門においては決定権をもっていないこと

4) 育児や家事の負担は依然として昔と変わらないこと

5) 女性の数は選挙人のなかでは優勢で、選挙においては男性に比べてはるかに積極的であるにも関わらず、政権機構のなかでの女性の参加はきわめて少ない。

これらのことを列挙して、女性差別はますます増大するばかりであろうと予測し、現在女性がおかれている広範な諸状況はほとんど 80 年近くの間、独立した女性自身の運動が欠落してきた事に部分的には起因しているとし、女性の利益のための女性の代表部が、国家機構に半ば統制されてきたと結論づけている。

新聞はさらに女性の利益を守り、民主主義的原理の継承のために第二回全ロシア女性大会の開催を報じている。言うまでもなく、第一回の大会は 1908 年に開かれ、この大会で脱階級的な女性センターの設立が提案されたため、コロンタイとその同調者達は自立した別グループを組織しようとした。しかしその目論見は頓挫した。一方、ロシア社会民主労働党の内部ではコロンタイとその同調者達をフェミニストであると決めつけ、コロンタイが女性の問題に比重をおきすぎると告発したものもいた。その後 90 年余りの時の経過を経て、体制転換の怒涛に流されながら現在のカオスの中で、今や女性の意識も大きな変換を迫られている事は事実であろう。本論では世界初の社会主義政権を樹立し、貧富の差をなくし、男女同権を約束したソヴェート政権の初期にあつて、コロンタイが如何なる論理によって、母性と子供の権利を守り初期ソヴェート政権の特性である男女平等を唱道したか、またその後如何なる事情によってその実績が歪曲されていったかを明らかにしていきたい。

本論を始める前にコロンタイに関する先行研究とその評価に触れておく。

まずロシアにおいてはこれまでマルクシスト研究者で、コロンタイにまともに正面から触れたものは残念ながら、ほとんど皆無である。そのうち特筆したいのは、ロシア人研究者のロシアの研究者イトキナ（1971）『革命家・雄弁家・外交官—ロシア革命に生きたコロンタイ』大月書店が最もコロンタイの生涯とその業績を開示したものとして評価し得る。この著作のよい点は網羅的で全体をたどるとコロンタイがなした業績が分かりやすく論述されていることである。但し、二月革命から国家人民委員としてのコロンタイのソヴェート政権における仕事の詳述、また、1918年の党におけるレーニンとの軋轢、その後の労働者反対派との動き、また何ゆえに彼女は労働者反対派と行動を共にし、レーニンの譴責を受けなければならなかったのかの詳細は語られず、その後の労働者反対派の運命についても一切語られていない。また、コロンタイの独特な恋愛論についても何故か詳述を避けている。つまり、イトキナ氏の著述した当時の時代的背景を抜きにしてはこの著作の内容を真に把握することは困難であろうし、時代的制約というものを念頭に置いて読む必要がある。

次に触れておきたいのはイェー・シェプキナの月刊「女性のサユーズ」誌（１９０８）の「男女平等の深淵におけるロシア女性」編のなかのコロンタイ批判である。この批判論文は１９０８年執筆のコロンタイの「女性問題に対する社会的基礎」に対するフェミニスト側からの反論である。本論で言及するが、当時コロンタイはフェミニズム運動にも関心を払い、実際その大会にも参加する意向もあったが、彼女の著作の出版はフェミニズム側から言えば完全に党の意向を反映させたものであり、フェミニズム運動を押さえる方向であることに対して、厳しく反論を展開させている。しかし革命当時のレーニンとは同時代の西側諸国における私的所有権が社会に根付き、それぞれの利害を政党が代表し、お互いに議会において調整しあうという制度が当時のロシアで極めて脆弱であったが故に社会主義制度を選択したわけである。従って様々な諸利益を代表する政党が存在するならばきくようにフェミニズムを唱道すればよいが、マルクス主義社会主義制度をとればそれは不可能である。ここにこそコロンタイがフェミニズムとたもとを分かち正当な理由があったのである。アイヴァゾヴァやユーキナなどのフェミニスト研究者はこぞってコロンタイのその後のフェミニズム運動排斥を非難しているが、コロンタイのマルクス主義女性解放家としての立ち位置が全く理解されていないし、何ゆえに排斥されたのか、その理由さえ理解されていない。

次に欧米でのコロンタイ研究においても、ロシア同様初期ソヴェート政権におけるコロンタイの人民委員としての活動とその後党内の抗争、コロンタイの翼ある恋愛論に触れたものは知りうる範囲内で皆無といえる。わずかに B. Clements が恋愛、母性について詳述しているが、コロンタイの理論が原始共産主義的なユートピア的なものであり、現実の女性解放には結びつかないと主張している。（Clements B. E. “Emancipation through Communism”; The Ideology of A. M. Kollontai, Slavic Review vol. 32, No.2）また Clements は Russian Masculinities in History and Culture の中でロシアの男性支配の共同体社会を分析し、ロシアの地においての女性解放の容易でない状態を暗示させている。その他、J. Lokaneeta もコロンタイに言及して彼女はラディカルフェミニストとして位置付けているが、彼女の社会主義に対する滑稽な解釈は、知見不足を窺わせるものでここでは触れないことにする。

さて１９９２年に出た Helena Goscilo の “Domostroika or Perestroika ?”, “The Construction of Womanhood in Soviet Culture under Glasnost” in Thomas Lahusen, ed., Late Soviet Culture : from perestroika to novostroika (London, 1993) P233 が面白い。総じて Goscilo はロシアの女性は家父長的な紋切り型から解放されていないというのが感想である。そこで Goscilo はロシア人女性のペレストロイカ期の意見を収集。ロシア人女性はいか弱い存在なので、男性にまもられるべきである。女性がコロンタイのような権利主張すれば、残酷で暴君になる。かえっておとなしくしていた方がいいと述べている。またこの論理を敷衍したものとして、現代ロシア人気女性作家のヴィクトリア・トーカレワのインタビューを見てみると、コロンタイに対する彼女の意見は次のようなものだ。—コロンタイは彼女の時代には必要なものでした。しかし、現在解放が家庭崩壊を導いています。女性が本来、男性が背負うべき

荷を担うからです。女性が男性を責任から解放すると男性は損なわれ、女性は両性的になります。というのも女性は両方の性の特徴をもつからです。女性が社会的イニシアチブを握ってもいい報酬が得られないのならどうしてよい仕事をすべきか？女性は生まれつきか弱い性と運命づけられています。戦争が起きれば、男性が女子供を守るでしょう。もちろん男性の補助者と家政婦が女性の仕事に割り振られるのには聖書が決定的役割を果たすでしょう、一と。まさにこのトーカレワの言質は現代のロシア人インテリ女性の一部の考えを詳述している。もちろんその対極にはコロнтаイの論理があり、その論理の正しさを肯定しつつ、狡猾にふるまおうとする女性の論理の一部である。このインタビューを読むと、目覚めている女性もそうでない女性も総体的に聖書にからめとられて、覚醒からは程遠いというのがコロнтаイ先行研究から得られた知見である。

なお、本論文は 1994 年刊行の『もう一つの革命 アレクサンドラ・コロнтаイと《その事業》』（杉山秀子著 学陽書房刊）と 2001 年刊行『コロнтаイと日本』（杉山秀子著 新樹社刊）の著書をベースに、以下の何本かの論文—コロнтаイとロシアの現代女性（駒澤大学外国語論集第 47 号）、翻訳研究：コロнтаイとベーベルの追悼（駒澤大学外国語部研究紀要第 25 号）、A. K. コロнтаイ『誰に戦争が必要なのか？』について—（駒澤大学外国語部論集第 39 号）、極東における人口動態とジェンダーから見たプーチンの少子化政策—駒澤大学総合教育研究部外国語第一、第二部門外国語論集 第 15 号 2013 年 9 月、『人口動態、ジェンダーから見たチエホフと《サハリン島》』2014 年 9 月 地球倫理学会刊行、ロシア極東科学アカデミー刊行の論文 Политика президента Путина против снижения рождаемости с гендерной точки зрения стр. 27-40 Материалы 24 Российско-японского симпозиума историков и экономистов ДВО РАН и района Касней 2014 年 9 月刊行等を加えて加筆・訂正をしたものであることをここにおことわりしておく。

## 註

- (1) Что дал Октябрь женщине запада? А. М. Коллонтай. Избранные статьи изд. Полит. Лит. 1972, стр. 362
- (2) К. МАРКС и Ф. ЭНГЕЛЬС, Сочинения, 2-ое изд., Том 38, стр. 145
- (3) Что дал Октябрь женщине запада? А. М. Коллонтай. Там же, стр.361
- (4) 瀬地山角 『東アジアの家父長制 ジェンダーの比較社会学』、勁草書房、1996 年、83 ページ。
- (5) Независимая газета 1997 г., 10 июля, стр. 6

## 第一部 コロンタイの生い立ちとその後の活動

### 第1章 コロンタイの生い立ち 世界初の女性大臣

まず初めにコロンタイの歩んだ生涯を俯瞰する。その後、世界初の女性全権大使としての北欧着任時の記録は残されているが、従来漏れていたメキシコ着任時の貴重な経験をここに特別に収録しておく。彼女の関心はロシア国内以外にも遠く離れた国外の米国の隣に位置するメキシコという国に対しても注がれている。アメリカ大資本が如何にメキシコ国内の地主連中と結託して農民を苦しめているか、その実態と彼女の苦しむ人々への共感を、美しいメキシコの自然描写を背景にして生き生きと描かれ、その記録は資本家対労働者という構図を鮮明に浮き彫りにしている。ここに忘れずに書きとどめておく。

1872年アレクサンドラ・ミハイロヴナ（幼名はシューラ）はペテルブルグで産声をあげた。シューラの父ミハイル・アレクセーヴィチ・ドモントヴィチはウクライナ地方の古い家柄の地主の息子で、のちに将軍にまでなった。コロンタイの母、アレクサンドラ・アレクサンドロヴナは、フィンランドの木材商の娘で離婚の経験のある女性であった。彼女は離婚という行動を敢行することができた、当時としてはかなり大胆な性格の持ち主であった。シューラをとりまく家庭環境は開放的で、自由闊達な雰囲気があり、シューラは末娘としてかなり自由に、過保護に育てられたようであった。母親は当時、貴族の家庭に生まれた子弟が貴族社会と縁を切って「ヴ・ナロード（人民のなかへ）」この運動に身を捧げるために家出するナロードニキ思想が中学や大学にはびこっていることを極度に恐れ、娘の教育には家庭教師をつけ、家庭で教育をおこなった。しかし皮肉なことに、この母親の意図とは裏腹に家庭教師として招かれたマリヤ・ストラホーヴァは政治闘争にこそ参加していなかったが、「人民の意志」派に共鳴していた。ドモントヴィチ家に入出入りしていた使用人の生活や、父の任地であるブルガリアのソフィヤでの幼年時代の生活を通じて、シューラの心のなかには不平等や不正に満ちた世界に対する抗議の気持ちが次第に育っていった。また少女時代にむさぼり読んだロシアの革命的民主主義者、ゲルツェン、ドブロリユーボフ、チェルヌイシェフスキーなどが彼女に大きな影響を及ぼし、彼女に社会的不平等と圧迫を憎む気持ちを植え付けたのである。シューラの好きなロシアの作家はツルゲーネフで、ことに小説「その前夜」のエレーナの激情には共感をもった。また、ジョルジュ・サンドやイプセンの作品にでてくる主人公たちの、社会の偏見に抗議して自らの人生を切り開く、自主的な女性の生き方に激しく心を揺さぶられたのである。

#### チューリヒへの留学により、コロンタイは覚醒する

シューラが17歳の時、父の新しい任地チフリスで流刑者の息子でまた従兄にあたるウラジーミル・コロンタイとはじめて出会い、それ以来二人は急速に接近し、シューラは母の強い反対を押し切ってウラジーミル・コロンタイと結婚する。翌年一子をもうけるが、この家



庭生活は3年で終わっている。

1896年春、アレクサンドラ・ミハイロヴナは夫のコロンタイの出張に同行して、ナルヴァにあるクレンゴルムスカヤ織物工場を訪れる。当時、この工場はロシア最大の工場で、一万二千人以上もの人たちが働いていた。しかしアレクサンドラ・ミハイロヴナがそこで眼にしたものは、この世のものとは思えないほどの過酷な労働者たちの生活であった。折しもペテルブルグにおいて、三万人規模の紡績工の大ストライキが起こった。これらの事件を通してアレクサンドラ・ミハイロヴナの意識も次第に政治参加に駆り立てられていったのである。夫ウラジーミルを深く愛してはいたが、アレクサンドラの胸のうちには単に個人的・家庭生活の充足感にどっぷりつかってられないような、やむにやまれぬ焦燥の炎が燃えあがってしまったのであった。アレクサンドラ・ミハイロヴナは今更ながら、夫と自分の間に見解の相違があることに気づきはじめ、長い懊悩の末、ついに離婚を決意したのであった。一般的には1898年の8月に離婚したとされているが、正式離婚は夫のウラジーミルが再婚する1916年5月5日にはじめて成立したようである。

コロンタイは息子のミハイルの養育を両親に任せ、自分の姓はコロンタイのまま、1898年8月、スイス行きの列車に身を投じた。チューリヒのハインリッヒ・ヘルナー教授のもとで経済学を学ぶためであった。夜行列車のなかでコロンタイは、なぜこんなにひどい仕打ちを夫や子どもに対してしなければならないのかと自問しながら涙に暮れた。「国境線から間近いある駅で、私は反対側からくる列車に乗りかえようと思えた。その列車に乗れば私の夫のもとに送りかえてくれるだろうと思われた。でもそれは私の希望やこれからやろうとすることを全て拒絶することになってしまうように思われた。……実際私には家庭の幸福よりも大切なことがあった。私は労働者の解放や、女性の権利、ロシア人民のために闘いたかったのだ」<sup>(1)</sup>とコロンタイは当時の気持ちを切々と回想記のなかで書いている。

この年コロンタイは論文「ドブロリューボフの教育思想の大綱」を雑誌『教育』に三回にわたって連載した。チューリヒでコロンタイははじめてレーニンの『『人民の友』とは何か、かれらはどのように社会民主主義者とたたかっているか?』を読み、次第にマルクシズムに傾斜していった。1899年サンクト・ペテルブルグに戻ったとき、非合法のロシア社会民主党に加わった。そして同時にフィンランドの独立運動の擁護者としても活動した。それは少女の頃、祖父の領地にたびたび行った経験からも、ツァー政府のフィンランドの自治を脅かす政策に我慢がならなかったからであった。1903年、3年がかりで書いた大著『フィンランド労働者の生活』が出版された。フィンランド労働者の状況と国民経済発展の見地から、マルクスの精神で書かれたこの著作は地下活動労働者からは賛同されたが、多くの合法的マルクス主義者からは否定的に見られた。同年夏、コロンタイは再び国外に出た。それはロシアにおける農民蜂起の時期であり、南の労働者は決起していた。革命を目指す非合法のロシアと頑なに権力を守る専制政治が衝突した。ストルーヴェを長とするグループ「解放された人々」は中間的立場をとり、多くのコロンタイの知人は「解放された人々」に加わったが、それは彼らが現実的な力を認め、ロシアにとり、より純粋な社会主義はユートピア的な

ものであると判断を下していた。コロンタイは自分の身近な人や戦友を失くし、身を切られるような思いであった。

亡命生活中も度々論争に見舞われたが、それは主として「メンシェビキ」と「ボリシェビキ」間の論争であった。彼女はボリシェビキの革命的非妥協主義により賛同したが、両陣営には多くの友人がおり、とりわけ彼女を引き付けたのはプレハーノフの論客ぶりであった。

こうしてコロンタイは労働運動家、著述家としての自己を堂々と確立させることができた。後年この時代のことを回顧してコロンタイは、夫に対する愛がどんなに大きかろうと、女としての献身の限界を越えるなら、私のなかには直ちに反抗心が新たにあらわれるのだと率直にのべている。そしてこの性格をさらに鮮明化させているのはつぎのくだりである。「私は前進しなければならない。私は夫と選択を別にしなければならない。さもなければ自己喪失の危険に身をさらさねばならなかったろう」<sup>(2)</sup>と述べ、自己形成という過程のなかでは、自分の世界観を決定するような男とは今まで一度も出会わなかったこと、むしろ自分の方が常に男をリードしてきたこと、自分の世界観形成は、自分自身の生活とたえざる読書のたまものであると結論づけている。

### 職業革命家への道

1905年、血の日曜日のあと第一次革命が勃発した頃、コロンタイはすでにプロの演説家としての名声を得たと自伝に記されている。山川菊栄の著述のなかでも、彼女の弁舌の巧みさはトロツキーとならび称せられ、世界一流の雄弁家の一人に数えられている、としている。ある年の第三インター女性部大会で、ロシア語で二時間とうとうと弁舌をふるい、つぎに同じ演説を二時間フランス語でまくしたて、さらに二時間をドイツ語で弁じた精力には各国の代表も舌を巻いたという。

第一次革命期の頃、ロシアの地にも強力なブルジョア女性運動が存在していた。しかしコロンタイがこの運動と一線を画していた点は、彼女の女性解放論が、女性の解放は新しい社会秩序と経済体制ができてからはじめて勝ち取られるというマルクス主義世界観に立脚していたことにあった。一方ではブルジョアの女権拡張運動と闘いながら、一方では党の女性問題に対する関心の低さを嘆き、女性問題を党の綱領のなかに入れるよう要求したが、コロンタイは党内では孤立するばかりであった。しかし、1908年には、ブルジョア女権論者によって召集された第一回全国ロシア女性会議が開催された。しかしこの大会では、〈脱階級的〉女性センターの形成の問題が提案されたので、コロンタイの同調者たちは自立した別グループとして行動しようと試みるが、ついには大会を放棄する。党の同志たちは、コロンタイやコロンタイに同調する女性党员たちを〈フェミニスト〉とし、女性の問題に比重をおきすぎると告発した。当時は女性が、精神的に自立すること、女性労働者たちが、自活のために闘争に立ち上がることがきわめて重大な意味があることがまったく理解されていなかったのである。この大会に参加したコロンタイは警察にかぎつかれて、大会を途中で断念し、国外に脱出せざるをえなくなった。こうしてコロンタイの政治亡命の日々が始まった。

## 亡命時代

1908年12月、ドイツへの政治亡命を皮切りに、ツアーリズムが崩壊する1917年まで、ヨーロッパとアメリカでの生活を余儀なくされる。1908年の全国ロシア女性会議で演説する予定であった「現代社会における女性労働者」の原稿はヴェ・ヴォルコーヴァによって代読された。ドイツ亡命後ドイツ社会民主党に入党し、そこでカール・リープクネヒト、ローザ・ルクセンブルグ、カール・カウツキーらとの親交をあたためた。とりわけ、ロシアで女性労働者のための原則をうちたてるには、クララ・ツェトキンの影響が多であったとコロンタイは自ら回想している。コロンタイは、ドイツ社会民主党からはアジテーターとしてドイツ各地を廻るように要請されそれに応じたが、ロシアの党でもドイツの党でも指導的役割は意識的に避けた。それは双方の党の政策を完全には首肯しえなかったからである。当時、コロンタイはロシアの党内でもメンシェビキ派に属していたが、ボリシェビキへ移る気はなかった。ただコロンタイがひたすら願ったのは、全身全霊をもって働く女性の奴隷化に抗し、女性の解放とその平等に心を砕くことであり、自らそれを自己の命題としていた。その頃、ゴーリキーの斡旋によって『女性問題の社会的基礎』が出版された。この著作はブルジョア女権論者に対するボレミークな性格をもつと同時に、女性労働者運動にもっと身を入れるべきだという党に対する要請をも示していた。その後も、女性を奴隷的桎梏から解放するために党が努力を惜しまぬよう一貫して要求しつづけた。この要求が効を奏したのか、第一次大戦勃発前に、ロシア社会民主党のメンシェビキもボリシェビキも女性問題を取り上げはじめたのである。

コロンタイはロシアから遠く離れた存在でありながら、祖国の女性労働者たちとは緊密に連絡を取り合い、1910年の第二回女性社会主義者国際会議に、繊維労働組合から正式代表として派遣された。

1913年、ロシアの第三国会の社会民主党議員団が労働者のための社会保障案を作成するに際し、コロンタイに母性保護法案の作成を依頼してきたとき、コロンタイは早くからこの問題に関心をもっていたため、すぐとりかかる決心をした。この依頼により彼女はイギリスの大英博物館に通い、各国の母子保護の実状を知るための入念な研究にとりかかった。コロンタイの綿密にして膨大な資料の収集によって、資本主義諸国における女性の生活と労働条件が母親を苦難な道におとしめ、子どもの高い死亡率を招く結果となっていることが究明できた。その結果生まれたのが『社会と母性』という600ページにも上る大著であった。この著作にとりまとめられた根本的原則と諸要求は、のちに1917年のソヴェート政権下における社会保障法として実現されたのである。

政治亡命の日々はコロンタイにとって実に生き生きとした歳月であった。党派遣の演説家としてベルギー、スウェーデン、イギリス、スイス、の各国から次々と招かれた。1911年にはイタリアのボローニャにあるロシア社会民主党学校の講師として招かれ、ルナチャルスキー、ゴーリキー、ボグダーノフらと講演をした。

その後第一次大戦勃発時には、ドイツ社会民主党黨員までもが愛国的感情の陶酔から戦争

肯定論に走ったが、コロンタイは決して戦争を肯定することはなかった。コロンタイと同じ立場をとったのはカール・リープクネヒトとその妻ゾフィー・リープクネヒトらで、彼らは戦争反対の立場をとることは社会主義者としての義務であると主張した。戦時予算に対してドイツ社会民主党が反対投票を拒否したことはコロンタイを落胆させ、孤立させた。コロンタイはドイツを去り、スカンジナビアの国に移ることを決意した。まずスウェーデンに移り住み、反戦運動をしたが官憲に逮捕され、クングスホルム監獄に入れられ、その後マルメ監獄に移送された。その後デンマークを経て、ノルウェーのクリスチャニア（現オスロ）に移り住みノルウェーの社会主義者とも接触をとった。この時期ロシア社会民主党のなかには決定的分裂が生じた。そのうちボリシェビキは首尾一貫して愛国主義者と共に闘っていたので、1915年コロンタイはボリシェビキに参加し、レーニンと活発に文通した。1916年コロンタイは「誰にとって戦争は必要か？」（1915年）という反戦のための小論文を発表し、数百万部の売れ行きをあげ、数カ国語に訳された。これと前後して、コロンタイはアメリカ社会党のドイツグループの要請をうけ、アメリカの180の都市を5カ月かけて訪問し、アジテーション演説をおこなった。

1916年春、コロンタイはふたたびノルウェーのオスロ近郊にあるホルメンコーレンに住み、反戦運動と国際派の勢力結集のために活動した。

### 人民委員部の設置、コロンタイ人民委員（大臣に匹敵）になる

1917年3月コロンタイはロシアをめざして帰国の途についた。当初ケレンスキー臨時政権に身柄を拘束されるが、10月革命の直前には解放された。ソヴェート政権の樹立後、コロンタイは世界で初の社会保障人民委員（大臣）に任命された。この役職に就くや、ただちに、人民委員部に母子保護課を設置する決定をコロンタイ署名で公布した。この決定は母子保護が決して慈善や私的なものでなされるのではなく、それは本来国家の義務であることを宣言。

またこの他、彼女の肝煎りで、男女同権と、同等の道德基準に貫かれた数々の法令と規定が制定された。たとえば離婚の自由に就いての法令、夫婦の完全な市民的ならびに道德的同権を規定した民事婚についての法令、庶子と嫡子の権利の平等についての法令、女性の産前・産後の有給休暇についての規定、若い母親への手当支給など、従来、女性の権利不平等を公然と許していたような既成の法律とはうってかわった画期的なものであった。

しかしコロンタイから言わせると、法的には女性は男女平等の権利を手にしたが、実際生活では依然として不平等で、無数のこまごまとした家事の奴隷であった。この奴隷状態を解消させるため公営食堂の設置、乳幼児ホームの設立などに日夜奮闘したのである。しかしこの頃コロンタイにとって生涯忘れることのできない辛い事件が待ちかまえていた。

1921年3月、第10回党大会が開かれ、そこで戦時共産主義から新経済政策（ネップ）への歴史的な方向転換が決議される。この席上、コロンタイやシリャープニコフをリーダーとするネップの政策に反対する〈労働者反対派〉が、レーニンのはげしい攻撃にあい敗退する。

1920年末には、ネップをめぐって見解を異にしていたコロンタイは人民委員の職を自ら辞任した。彼女はあらかじめ大会用に宣伝ビラを用意し、ボリシェビキによる歪んだ体制の修復、官僚主義の撤廃、プロレタリアートの階級独裁を主張したが、逆にレーニンから名指しでプチブル的・アナーキストの反革命グループという烙印を押されるハメになってしまったのである。こうして〈労働者反対派〉の分派行動に参加したことは、コロンタイの胸のなかに生涯かき消すことのできない汚点として残ったが、私見では〈労働者反対派〉の言い分のなかにも傾聴すべき点はいくつかあったわけで、今後ロシアでも必ずや再評価される日がくると思われる。

### 1923年以降の全権大使としての仕事

1920年、人民委員の職を自ら辞任した後の1923年、コロンタイは世界初の女性ソヴェート全権大使としてノルウェーに派遣され、その後はメキシコ、スウェーデンの全権代表として外交畑でめざましい実力を発揮した。その後1952年3月9日に永眠するまで、外務省顧問としての輝かしい後半生をおくった。コロンタイといえば、主として北欧での大使としての活躍、また母方の親類がフィンランド出身であったため、フィンランドに関する優れた著作があるが、なんとメキシコにも全権大使として赴任しているのだ。以下の文章はコロンタイが外交官としてもその実力をいかんなく発揮させ、またすぐれた感性のもとに当該国の特色を俊敏に理解し得る稀有な能力を持っていたことが分かるので、ここに引用しておく。

### メキシコ駐在時のコロンタイ

大体コロンタイを知るものなら、コロンタイが駐在公使として活躍した場所はノルウェー、スウェーデン、等の北欧の国と言うのが常識になっているが、実際にはメキシコ駐在公使にもなっているのである。1923年5月ノルウェー駐在ソヴェート全権代表に任命されてから3年後の1926年9月にはメキシコ駐在公使兼通称代表に任命されているのである。もともとコロンタイの母方の方には北欧系の血がまざっており、コロンタイは子どもの頃、よくフィンランドにある祖父の荘園に遊びにいった経験があった。この子どもの頃に得たフィンランドにたいする深い印象と共感が後に、フィンランドの土地問題、フィンランド労働者の生活、等の数々の名著を世に出すきっかけとなった。また大変なドイツ語通であったことも周知の事柄である。1980年代、フランクフルトのイリング・フェッチャーフランクフルト大学教授にお目にかかった時、彼女は全くバイリンガルと言ってもおかしくないほどのドイツ語力をもっていたことが彼の研究からわかっていたそうである。これらのことからわかるように、コロンタイはもともと語学的センスがいいところにもってきてドイツ語の素養があることから彼女が公使として勤めたノルウェーやスウェーデンの言葉を難なく話せたことは想像に難くない。しかし一方ではフランス語の素養はあったにせよ、さすがのコロンタイもスペイン語まではできなかったようである。しか

し彼女のあくなき好奇心は果敢にも未知なる国へ誘わせている。北欧の諸国への駐在に比べるとメキシコ公使としての期間は1926年12月7日にメキシコ入りして1927年6月5日の出発まで約6カ月ときわめて短いものであったが、彼女はメキシコから忘れない印象を得たようであった。当時のコロンタイに関する回想として彫刻家のヴェ・ピンチュークはツアーリズム打倒を記念して催されたパーティでコロンタイが優雅で、趣味のよい着こなしをし、見事に振る舞っていたこと、彼女の演説は情熱的で、機知に富み、聴衆の心を虜にしたことなどを書簡の中で記している。コロンタイは短い滞在ながら、メキシコ人の心と性格を的確にとらえている。彼女の観察によれば、メキシコ人は普段はじっと耐えていて、物思わしげで、ちょうど悲しみでうちひしがれているようだが、祭の日になると、悲しみをかなぐり捨てて突然小さな子どものように陽気になる。そしてそういう時の彼等が特に好きだとしたためている。コロンタイはこの愛するメキシコで2、3年は仕事をする予定であったが、メキシコの首都が海拔2400メートルの高さのため体調をすっかりこわしてしまったことから滞在が不可能になったようである。シャドルスカヤ・イエの手紙の中で「この気候はとても辛い。空気が薄くて心臓に負担がかかり、呼吸困難になってしまう。」<sup>(3)</sup>と書いているほどである。ちなみにコロンタイの死亡原因は心筋梗塞で1952年3月9日80才でなくなっている。つまり逆算すれば50代のこの頃より、除除に心臓は弱り、ダメージを受けていたわけであった。1927年6月5日、コロンタイは後ろ髪をひかれるような思いで、客船“エル・パヌーコ”でメキシコを後にする。客船の中で彼女はメキシコへの思いを次のように書いている。「この国には未来がある。メキシコ人は輝きをもっており、強い意志をもっている。メキシコは独自の文化と底知れぬ美をもっている。この数カ月わたしはメキシコを観察し、人々を感じることを学んだ。人々は堅固で、スペインの支配にもうちひしがれず、ニュー・ヨークの資本にも侵されない。独立心の高い、意志堅固な人々である。人々は学問や、文明、文化、組織を求めている。学校の子どもたちはなんと素晴らしい子どもたちであったか。そしてなんと大学生たちはきびきびとして賢そうであったか。人々ははっきりとした芸術的な才能をもっている。色彩というものを彼らは理解し、好んでいる。そして音楽も……わたしはメキシコを離れるけれどわたしの一部分はそこにきつと残ると思う。わたしはここに来たときとは違う自分になってここを離れる。彼らの文化によって一層豊かになって祖国に戻る。何か世界が前より、広がり、好奇心がより湧いて来たような気がする。」

こうしてコロンタイはモスクワに戻り、4カ月後にはまたノルウェー駐在公使に任命されている。しかしメキシコでの彼女の思い出は生涯彼女の脳裏からは離れなかったのである。次にメキシコから帰国後、コロンタイがノルウェーに派遣される直前に夕刊モスクワに書いた記事を紹介しておこう<sup>(1)</sup>。この文章を読むとコロンタイのメキシコへの思い入れが生き生きと伝わってきて興味深い。1927年9月の革命的メキシコを描写して次のように高らかに謳う。

メキシコは、海や大海原の向こうのはるか遠いアメリカ大陸にある。われわれはメキシコのことをよく知っているだろうか？ メキシコで労働組織（労働党と各労働組合“Kromom”）によって支持されている政府のこと、帝国主義の絶えざる攻撃から身を擁護し、自らの民族の独立を目指して“北の隣人”（北米のこと）と激しい闘いをおこなっているメキシコ人たちのこと、外には外国の資本主義に反対し、内には地主とカトリックの神父に反対する、二つの戦線で労働者や農民が闘っていることに気がついている人は少ない。

メキシコは実に遠いかなたにあるのだ。

他の世界的事件は、メキシコから隠され、締め出されてしまう。その間、メキシコはボイラーのように沸き上がっている。外部からは合衆国からの圧力、内部からは封建体制の残り滓を引きずっている反革命勢力がある。これらの勢力はメキシコ共和国の目覚めた、自覚した革命的勤労人民を共同戦線で攻撃する。そして、メキシコ人民の力と生産力の成長が速やかなほど、メキシコにおける社会的紛争が先鋭化することはますます避け難くなるのである。

メキシコは、二つの大洋と、熱帯沿岸の細い地帯の上に台地としてそびえている。台地の上では、メキシコの最も高い火山ーオリサワ、“眠れる乙女”、ポポカテペトリの雪帽子が、まばゆいような白さで、銀色に輝く青い熱帯の空に、くっきり浮かび上がっている。驚くほど青く、サファイアのように清らかで、まるでさめないブイヨンのような暖かいメキシコ湾の波が、黄金の砂の岸辺を洗っている。高いココヤシの木立は、山の登り斜面では、熱帯の木々、コーヒーと綿花のプランテーションの豊かに茂った青みを帯びた草木に、先を譲りながらメキシコの沿岸を駆けめぐっている。

メキシコの土壌はあまり肥沃とは言えず、砂が多く、火山灰も多量に含まれている。トウモロコシを植え、アルコールを得るために特別な植物である龍舌蘭を育てており、南の沿岸近くでは、コーヒー、サイザル麻（ロープや細引き用）、綿花、タバコが産出される。農民・インディオは貧しく、肥沃な土地はメキシコの旧戦争相手である、スペインがとうの昔に取りあげてしまった。そして、現在、主として外国人である地主・封建領主とインディオ・農民、貧乏人の間で、土地を得るための激しい闘いがおこなわれている。労働分子は“農業改革”を堅持している。それは土地から地主を追い払い、土地を農民に渡すことである。労働党政府は、この“改革”に取り組んでいるが、農民や労働者の意見では、その改革があまりにも遅々たるもので、危険を伴うものであると言われている。ところが、メキシコの地主たちにありとあらゆる支援をおこなっている“北の隣人”は、ありったけの声をはりあげて、カリエス大統領を首班とするメキシコ政府は、「ボリシェビズムを吹き込まれた」、「危険なもの」となった、メキシコから病原菌が「あらゆる自由のある」、富める国にある小農場に飛び散っている…と叫んでいる。

土地が痩せているにもかかわらず、メキシコは裕福である。その富は地中にある。世界市場で輸出第2位を占めている石油、メキシコを金属の採掘量で世界第1位にしている銀（全世界採掘量の39%）、鉛、金、銅が挙げられる。メキシコは不思議なほど金属類に富ん

でいる。アメリカ大陸発見の最初の年から、意図的にヨーロッパ人たちはメキシコにあらがれ、意図的にスペイン人コルテスは剣と炎で原住民であるアステカ人を絶滅させたが、それはメキシコの領地をスペインに割り当てるためであった。

既に 100 年以上も前にメキシコは、革命蜂起という方法で、スペイン統治の圧迫を退けた。しかし、スペインの代わりに他の貧欲な手が伸びた。まず初めに、メキシコ人が冗談で合衆国を指す“遠い親戚”の手であった。それはメキシコを身内のコロニーへと称する帝国主義者たちの胸に秘めた夢想だ。だが、メキシコの民衆は革命的気概を持っている。その民衆を征服することはできるが、支配下におくことは不可能だ。

メキシコは、1700 万人の住民を有する国である。網のように各州が大きく広がっており、その各州には今では海の覇者であるイギリスの島々が全部収められてしまうはずである。熱帯の太陽が育んだメキシコの色あざやかな自然。農夫が身につけているのは、白いシャツとズボン、頭には、刺繍模様付きの帽子、腰には回転拳銃を常備している。そして、黒みをおびたブロンズの顔には、黒い瞳が輝き、秘めた眼光の鋭さに物思わしげな哀愁が隠されている。

工業の発展が不十分であるが、そのため一箇所に集中している。繊維工業は、白雪の火山オリザワ山麓で盛んになっている。石油は、メキシコ湾沿岸からさほど遠くないところで産出し、そこには港がある。工業の基幹部門は、北アメリカ、イギリス、オランダ、フランス、スペインの外国人たちの手中にある。カトリック聖職者階級の影響は強い。この聖職者階級こそが、農民と“農業改革”に反対する地主を支持しているのだ。まさにこの闘いが、国家から教会を分離する問題で、労働者に支持された政府に断固とした政治をとらせるきっかけを与えた。政府から教会を分離するための闘いは、成功裏に終わった。労働党の政府は、反動分子・カトリック教徒に勝利したのである。

巨大な民族ブルジョアジーが、メキシコではほとんど存在していない。メキシコのブルジョアジーがいるとすれば、商業ブルジョアジーのみである。労働者階級は数では多くないが、各工業の中心部に集まっており、組織されている。労働者と農民インディオは、メキシコのブルジョアジーより多く、メキシコへの帝国主義者の攻撃を撃退することに利害関係があった。帝国主義が地主を支持している間は、農民の利益を守る労働問題の解決は思いもよらぬことであり、また工業の“基幹部門”が外国人の手中にある間は、国の生産力の正常な発展を促進できない。富の“蓄積”はメキシコ国境の向こうに去ってしまい、社会的付加価値が国内では増加しないのである。

労働者にとっては、困難で、貧しい生活である。しかし、政治的、階級的自覚は高まり、強く…なっている。労働者と農民の革命的気運が、本質的には小ブルジョアジーのメキシコ政府を、左に歩ませ、自らの地下資源に対するメキシコの権利問題を提起し、北アメリカに対して石油利権にかかわる問題を本格的に持ち出している。労働者と農民によりはっぱをかけられるメキシコ政府の左翼政治が、帝国主義者たちの苛烈な非難をよんでいる。彼等には、アメリカのその心臓部にこの“革命の巣”のあることが気に入らないのである。



中央アメリカの小さな共和国が、メキシコによる北の帝国主義への反撃の例にならい、不穏な動きをし、目覚めることが気に入らないのである。

ニカラグア、ベネズエラ、ボリビア…では不穏な動きがあり、ラテンアメリカは、アングロサクソンのアメリカに対決している。有色人種は、白色人種に自らの生存権を提起しているのである。

この闘いでは、メキシコは先進的立場を占めている。メキシコ人たちがよく理解していることは、彼等の前には二つの道しかなく、北の隣人に自らを“召し上げてもらう”か、経済と社会文化の各分野で自らの民族の独立を守るかである。メキシコ人たちは、断固として忍耐強く二番目の道を歩んでいる。

ソヴェート連邦に対し、メキシコでは大きな関心が見受けられる。ロシア人とその音楽や絵画を知っているし、好きなのである。メキシコ人たち自身と言えば、ロシアが形成されるずっと以前に咲き誇ったマヤ民族古代文明の子孫である。彼等は美を愛し、色彩を理解している。現代の偉大なる芸術家の一人として、精神的には革命的文豪であるメキシコ人のディエゴ・リベラをあげることができる。彼等の音楽は魅力に満ちている。メキシコ人たちは素晴らしい職人であり、手工業者である。彼等の文化には、千年を経た経験と将来における勇敢な革命的跳躍の豊かさ…がある。

メキシコ人たちは、興味深い民族である。文化面でも、貿易に関しても我々と彼等の間の交流がさらに大きくなればなおさらよい。メキシコには、毛皮、植物油、亜麻製品、苺、缶詰、我々の穀類、木材が送られる。交換としては、メキシコ鉛、コーヒー、龍舌蘭、バナナ…がある。ソ連邦がメキシコと商うものはある。そして、両国間の貿易交流は少しずつ軌道にのっている。ひとたび貿易が発展すれば、自然にそれに伴い民族の交流が活発になる。そうなれば、ソ連邦では人々がメキシコをさらによく知ることになるのである。

コロンタイは大使としては短期間の滞在ながら、メキシコ人が帝国主義の絶えざる攻撃から身を擁護し、自らの民族の独立を目指して“北の隣人”（北米のこと）と激しい闘いをおこなっていること、外には外国の資本主義に反対し、内には地主とカトリックの神父に反対する戦線で労働者や農民が闘っていることを熱いまなざしで観察し、彼等にエールをおくりながら、メキシコという国の中南米における位置づけを鋭く分析しているのだ。

## 註

- (1) 『共産主義への道』278 ページ、『十月』第9号 1945年

Мой путь к коммунизму, Октябрь, Номер 9, 1945

- (2) イリング・フェッチャー編、『性的に開放された女性の伝記』13頁、ロンドン 1972年

Edited with an afterward by Orbach and Cahambers, *Irving Fletcher*,  
*Autobiography of a sexually emancipated woman*, London, 1972

(3) この文は 『ヴェチエルニャヤ・モスクワ』 1927年9月22日より転載した。

Непроторенными путями, Москва, 1988 Наука стр.43

Там же, стр.45

#### 参考資料

Не проторенными путями, А. И. Сизоненко, Москва, Наука 1988

Избранные статьи, Изд. Полит. Лит. Москва 1973

Революция Великая Мятежница

Избранные письма 1901-1952 Москва, Советская Россия 1989

## 第2章 ロシア独特の女性解放思想

1825年、ロシアでは史上初めてツァーリズムに対する革命的行動がみられた。そしてこの行動は殆ど例外なく貴族によっておこされたものであった。当時ロシアの地を占めていたのはツァーリの専制のくびきの下におかれていた圧倒的多数の農民とごく少数の一握りの貴族たちであった。大部分の農民たちは文盲で、日々の生活に追われるばかりで、自分たちのおかれている構造的矛盾の解決には眼が行き届かなかった。この構造的矛盾にまず気づいたのがいち早く西欧的な合理主義を身につける機会を得ることのできた裕福で教育のある青年貴族たちであった。これらのごく限られた良心的貴族たちが1825年12月、ツァーリ専制に反旗を翻しておこした蜂起、当時ヨーロッパ中に名を轟かせたデカブリストの乱（ロシア語では12月のことをデェカブリということからこの名がついた）によって、多数の貴族たちがシベリア送りになり、家族と引きさかれることになった。シベリアの所轄所はツァーの命令がある以上女たちを夫や息子の下にやるわけにはいかなかった。

最初にやって来たのはトルベツカヤであった。彼女は夫がぼろぼろになった毛皮の室内着をまとい、腰縄をつけているのを見て、最初は卒倒してしまった。アンドレイ・ローゼンの回想<sup>(1)</sup>によれば、エカテリーナ・イワーノヴナ・トルベツカヤはさして美貌でもなかったが、話しはじめると、その穏やかで美しい眼は光り輝き、快い声と流れるような知的で、善良な話言葉は人を引きつけずにはおかないので、すべての人が彼女の話に聞き入ったと記録にある。

トルベツカヤについて、マリア・ヴォルコンスカヤが二番目にやってきた。夫のセルゲイは足かせを鳴らしながら、彼女のところに走り寄ってきた。後年マリヤ・ニコラエヴナはその有り様を回想して つぎのように語っている。「その足かせを見て、私は気も動転して彼の膝の前に走り出て、まず足かせにキスをして、それから、彼自身にキスをした」。彼女が夫を追ってシベリアにやってきたことは、純粋で無私な愛国主義の激情のために献身した人間に対する深い尊敬心を証明していた。トルベツカヤやヴォルコンスカヤにつづいて続々とシベリアに女たちがやってきた。女たちは監獄の近くの粗末な木造の小屋に住み、自分で食べ物を準備し、水汲みにいき、薪をわり、ペチカをおこした。女だけの共同生活がはじまった<sup>(2)</sup>。女たちの存在は囚人たちに大きな喜びとはげましを与えた。その時ロシアの有名な詩人アレクサンドル・オドエーフスキーは喜びの詩を歌った。

瑠璃色の空より天使が舞い降りて、  
うつせみの娘のすがたとなりかわり、  
慰めの笑みを浮かべて、  
囚われびとに  
愛と心の安らぎをもたらせり<sup>(3)</sup>。

このようにシベリアに単身やってきて夫の身近で生活をはじめた女たちの存在は囚人たちの大いなる心の支えになった。とりわけつぎの女性たちは歴史に名をとどめている。エリザヴェータ・ペトロヴナ・ナリシュコーヴァは他の女性と同様夫の最良の友であった。五年間は夫とともにネルチンスキーの採炭場にて、最後の五年間はクルガンのトボルスキー郡にいた。アレキサンドラ・イヴァーノヴナ・ダヴィドワは、子どもをペテルブルグに残して夫のもとに赴いている。彼女の切々とした気持ちは、ラエフスキー総督宛の書簡のなかに赤裸々につづられている。

「あなたさまは私とあなたの兄弟のことをお忘れにならず、私どもの子どもたちのことを父か本当の兄弟のようにおしらせくださいました。夫はたびたび私どもの子どものことを嘆き悲しみますが、私と同様神とあなたさまに希望をもっています。私はすでに自分のすべてを哀れな夫に捧げています。そしてたとえ子どもとの別れを惜しもうとも自分の聖なる責務をはたしているのだと言うことで慰めています」<sup>(4)</sup>。

音楽家のチャイコフスキーは 妹がデカブリストの息子と結婚していることから このダヴィドワと知り合いになった。エヌ・エフ・フォン・メック夫人との文通のなかで、彼はこのアレクサンドラ・イヴァーノヴナについて一度ならず尊敬と親しみを込めて書いている。

「ここの生活の魅力はカーメンカに住んでいる人々や、総じてダヴィドフ家の家族の人々の高い精神性にある。この家族の首長は年とった夫人のアレクサンドラ・イヴァーノヴナで、人々と衝突するときに味わわねばならない数々の失望のぶんだけそれに報いてくれる人間としての完成度の高さをそなえている。……」<sup>(5)</sup>。

そのほか1829年チタよりベレーゾフへ夫について移動したアレクサンドラ・ヴァシーリエヴナ・エンタリツェヴァや、カミーラ・レ・ダンチュ（のちデカブリストのヴァシーリー・イヴァシヨフの妻となる）等がいる。カミーラは音楽の才に恵まれ、十分に教養があり、グランドピアノをひき、歌を歌い、マリア・ヴォルコンスカヤと上手にデュエットしたりしたといわれている。カミーラとイヴァシヨフの結婚はたいへんうまくいった。1832年の結婚記念日にはカミーラは母親につぎのように書き送っている。「私たちのこの一年間の結びつきはまるで幸福な十年間のようにすぎました」しかし、幸せは長くはつづかなかった。八年後カミーラは早産のため他界した。夫も彼女のあとを追って一年後に他界したといわれている。

デカブリストの妻たちは夫と別々にならないで、監獄で夫とともに過ごすことができるように憲兵の主任に嘆願書を提出した。1830年9月30日、それは受理された。当時の監獄の苛酷な状況はたとえようもなかった。「監獄のなかには蠟燭がなければ、半日はなににも見えない状況で、壁は多数のひび割れで、隙間風が入り込み、寒気はことのほか酷かったので、骨身に応えた」（1830年9月、イエ・イ・トルベツカヤの母への手紙）ほどであった。

エヌ・デ・フォンヴィーヅナも当時つぎのように書いている。「あなたにはこの監獄の暗さや、湿気、寒さを想像することができないでしょう。もしもみんな健康で、健全な頭のま

までいられるなら、それは驚くべきことなのです。なぜならここは全く暗いので、全然なにもやることができないのです」。こうして過酷な自然と向き合い、また夫たちに対する国家権力の理不尽な干渉と非人間的な取扱いを眼のあたりにして、デカブリストの妻たちは次第次第に目覚めていったのである。

エム・ヴェ・ニェシュキナはつぎのように言っている。「妻たちは夫の流刑の原因について考えるようになった。そしてそれらを考えていくうちに彼らの味方になった」<sup>(6)</sup>、女たちは自分の名前で手紙を書き、時としては夫の手紙をコピーし、夫のために、文通の手紙や小包を受け取り、ロシアや外国の新聞や雑誌をとった。この仕事は社会的な性格をもっていた。シベリア流刑者の情報が祖国の枠を越えて遠隔の地まで広がることをねらったのである。しかし、女たちはつぎの規則に同意させられてしまった。「監獄ないし、その壁のなかに住む囚人の妻たちは手紙を開封の状態で司令官に委託する以外は送付することができない。あらゆる手紙による伝達は他の方法では禁止されている」そこでデカブリストのなかのイヴァン・プーシンはシベリアに到着するや、父親と姉妹につぎのように非合法的に書いている。「そちらには合法的であろうと、非合法的であろうと書きます」好機をとらえて、プーシンは姉妹に予告している。「僕は行間にレモンジュースで書くよ。だけどレモンには注意してくれ。なぜならムハーノフが、この巧妙さはすでにあきらかにされているとこの前言っていたから」<sup>(7)</sup>。

流刑生活において夫とともに過ごした長い月日は女たちにとってはことのほか辛いものであったが、反面人生の良き学校になった。それは人生経験を豊かにしたばかりか、彼女たちのなかに専制に対する憎しみと積極的な抗議の感情を芽生えさせ、彼女たちを社会の不正を追及し、祖国に真に献身するという社会性のある、自覚ある女性に成長せしめたからである。こうしてデカブリストの妻たちの活躍はロシア中に広まった。これらの妻たちの勇気ある行動は女性の意識を目覚めさせ、一人の独立した人間としての自由をかちとる闘いに女性たちを駆り立てていった。すでに30年代から40年代にかけて、個人的自由と親からの束縛からの解放をかちとるための闘いがロシアの地でもみられたのである。

この新しい型の女性の典型はア・イ・ゲルツェンが主宰するモスクワグループの参加者のなかにみられた。19世紀半ばのブルジョア的な改革と解放を望む革命的な精神は、女性運動の意識を高揚させた。しかしはっきりとした政治的綱領がないまま、女性運動は完全に限られた社会的傾向である反封建主義と、民主主義を守るものであった。一方では、ロシアにおける女性運動は革命的な経過や社会主義的教義の影響のみならず、西欧のフェミニズムの影響もうけていた。とくに影響を及ぼしたのは医学博士のジェニー・ド・エリクールが執筆し1860年パリで刊行された『解放された女性』であった。しかしながら反封建主義、民主主義的傾向が極めて鮮明なロシアの女性運動は、ヨーロッパのフェミニズムの枠を越えたものであり、より一層広範な、深いものであった。

西欧では特に女性解放で名がのぼるのは女性自身である。しかし専制主義のロシアの条件下では、女性がいまだ市民として未成熟であったがゆえに、女性運動の思想的黒柱になっ

たのは男性であった。しかしながら、女性解放思想が形成されるやいなや、その積極的な唱導者となった女性たちはそれを継承し、活発な行動によってその内容を豊かにしたのである。とりわけ1861年の農奴解放にいたる大改革時代には農奴の解放と同時に女性の解放も叫ばれ、農奴解放論をとなえる革命的知識人たちは同時にまた女性解放論者でもあったのである。これらの革命的知識人としては、まずチェルヌイシェフスキー、ピーサレフ、ドブロリューボフ、ゲルツェン等をあげることができる。とくに『何をなすべきか?』（1862年）（後で詳述する）を執筆したチェルヌイシェフスキーの女性解放思想は当時多くの人々の感動を誘ったのであった。

1853年チェルヌイシェフスキーは今や自分の幸福そのものである人との関係をつづった日記のなかで強い決意を書いている。

「ぼくの考えでは、女性は家庭ではふさわしい地位を占めていない。あらゆる不平等がぼくを憤慨させる。女性は男性と同等でなければならない。しかし、棒が長いこと一方にねじ曲げられていると、それをまっすぐに伸ばすためには、もう一方の方向に長いこと曲げていなければならない。それで今でも女性は男性より低い地位にいる。一人一人の男性がもしもともなら、自分の妻を自分より高い地位におかなければならないとぼくは考える。この一時的な置き換えは将来の平等にとって必要欠くべからざるものだから。

ところで、もしも彼女の人生で真剣な恋が生まれたなら、ぼくは彼女に見捨てられる。でも、ぼくは彼女のために悦ぶだろう。もしも彼女の情熱の対象者がそれにふさわしい人ならば。それはぼくにとって深い悲しみではあるが侮辱ではない。彼女がもし戻ればぼくにとってどんなに大きな喜びになるだろうか!……君に全く忠実なぼくは繰り返していうよ、君の幸福を願うと同時に、ぼくは全生涯をかけて君が満足するためにそして君の幸福のために君が必要と思うことをやるだろう」<sup>(8)</sup>。

25歳の青年が書いた家庭と社会における女性の地位についての思いは彼の全生涯のプログラムになった。このプログラムは無条件に遂行された。たとえチェルヌイシェフスキーが愛する人から辛い試練をうけても。そればかりか、彼によって十年後に長編『何をなすべきか?』で展開された思想は、周知のように全世代の福音書になったのである。この小説では封建的家庭から脱出するために名目的な結婚という手段を選んだ娘ヴェーラ・パブロブナが精神的にも経済的にも自己を確立させていったことによって、妻は肉体も精神も完全に自由であること、その恋愛をも肯定したことは当時の若者に甚大な影響を与えたのである。

ア・ヴェ・ルナチャルスキーはつぎのように公平にみている。チェルヌイシェフスキーにおいては個人的なものと社会的なものとがみごとに統一されていた。チェルヌイシェフスキーは、自分の個人的な生き方や、〈棒をまげる〉という原則にのっとって打ち立てられた妻との関係を長編『何をなすべきか?』のなかに具現化させた。いみじくもこの個人的なものと社会的なものとの明確な一体化は長編の抽象的なイデーを同時代人に生き生きと伝えるものにした。もしもチェルヌイシェフスキーが家庭と愛の問題を決定するのに独特の基準を最初につくった人であるとするなら、彼の実人生は先駆的なものであったといえる<sup>(9)</sup>。

1861年のロシアにおける農奴解放はロシア人に新しい価値観の展開をもたらした。1873年から74年にかけては、ロシアのインテリ青年の間では、農民共同体に基礎をおく社会主義を理想とする「ヴ・ナロード」（人民のなかへ）の運動が華々しく広がった。「ヴ・ナロード」運動は、当時の革命的知識人であった、ドブロリユーボフ、チェルヌイシェフスキー、ピーサレフ、ネクラソフらの思想的影響のもとにまたたくまにロシア全土に広まっていた。当時の若いインテリたちは、圧倒的多数の農民が専制の圧制のもとに無権利な状態におとめられている事実を眼のあたりにして、ツァーリ打倒の必要性を痛感させられたのである。1876年の秋頃には、ナロードニキ綱領が作成された。ローザ・フィグネルの回想によれば、このナロードニキ綱領の基礎にすえられた思想はつぎのようなものであった。すなわち、ロシア人民は、一定の歴史的発展段階にある他のあらゆる人民と同様に、独自の世界観をもっており、それは、彼らが生活している諸条件の下で培われ得る知的・道徳的理解力の水準に照応するものだという思想に立脚していた。

この土地の上で人民は自分たちの古来の習慣に従って、つまり農村共同体によって生活しており、彼らは千年この方一度もこの農村共同体を手放したことはなかったし、いまでも伝統的な敬意を込めてそれを保持している。農村共同体のためにあらゆる土地を没収すること—これこそは社会主義学説の基本的要求と完全に合致する人民の理想であった。この「ヴ・ナロード」運動に参加した女性ナロードニキ革命家たちの数はおびただしいものがあり、ナロードニキの五人に一人は女性であり、彼女たちのストイックな運動への献身ぶりは実に超人的なものでさえあった。当時の革命的知識人たちの思想展開は彼女たちの人生観にも大きな影響を与え、彼女たちをして精神的、経済的自立へと駆り立てたのであった。とりわけチェルヌイシェフスキーの『何をなすべきか？』は広範な女性活動家たちに深い感銘を与えた。この恋愛小説に触発されて、モスクワやペテルブルグでは、経済的女性の自立をもとめてアルテリ式裁縫店があちこちで経営されるようになり、男女平等による教育の機会均等が盛んに叫ばれるようになった。ところで女性が最初にペテルブルグ大学で聴講したのは1859年以前のことであった。チェルヌイシェフスキーは1860年2月しばしば講義にでていた従姉妹のことを親類に報じている。「奥さんや娘さんたちが大学を訪れるという習慣はここ二年間ぐらいのことです……しかし今や30人までの奥さんや娘さんたちが毎日講義にでています。……すべての人が既にこれに慣れていたので、大学の講義で奥さんたちを見かけるのは今やコンサートでみかけるのと全く同じようです」<sup>(10)</sup>。

モスクワ大学で、はじめて聴講したのは学生エヌ・エス・スラヴチンスキー（父は有名な文学者エス・テ・スラヴチンスキー）の姉妹たちであった。しかし学生は監督官に呼ばれ、もし姉妹が講義にでることをやめなければ、大学から退学させると宣告された。この噂が直ちにロンドンまで広がり、『カラコール』紙に「モスクワ大学で聴講したがっている娘さんが拒絶され、彼女がもし教室に現れることをやめなければ、当局は断固とした措置をとると脅している」という非難の意見書が掲載された。1863年6月18日には新しい大学法が確定された。大半の大学が女性に門戸を開くことに好意的であったが、大学法によれば、女

性が講義にでることは絶対的に禁止された。例外はただ一人、医学アカデミーで学んだヴァルバーラ・アレクサンドロヴナ・カシェヴァーロヴァだけだった。彼女はロシアで医学の学位をうけた女性第一号であった。

1861年の学生運動の後、女性のための門戸は一時的に閉鎖された。その後女学校が開設され、ペテルブルグ大学での女子の聴講もおおやけに認められるようになった。60年代の女性解放思想の波は多くの傑出したナロードニキ女性活動家たちを生んだ。例えば貴族出身のヴェーラ・ザスーリッチ、ベロフスカヤ、フィグネル、スピリドノヴァ等が続々と輩出し、中には革命的活動のために名目的結婚（当時は名目的に結婚することにより親権から解放されることを望み、多くの女性がスイスやドイツの大学で学ぶために名目結婚により出国した）をしたりする女性もいた。彼女たちは年頃の娘が好んで身を飾るようなことはいっさいせず、ひたすら学問に励み、革命運動に献身した。たとえば、『ロシアでの赤き六カ月』（1918年 ニューヨーク刊）を刊行したルイズ・ブライアントはその著書のなかで、スピリドノヴァの人となりをつぎのように回想している。マリア・スピリドノヴァはまるでニューイングランド出身のようであった。小さい白い襟のついた質素な黒い服や、彼女の廻りに漂う洗練された上品さ、厳格さの雰囲気は、きちがいじみたロシアというよりも、そんな地方に属するように思える。彼女は非常に若い—30歳を越えたばかりである。また、ひ弱そうに見えるが、いわゆる『繊細』な人間特有の針金のようなくじけることのない強さと大きな回復力をもっている。しかしこの外見的印象とは裏腹に、十九歳のときにはタムボーフ総督ルジェノーフスキーを暗殺している。

ルジェノーフスキーは税金を払えない農民たちを拷問にかけたりすることで凶悪な人物として知られていた。ある時鉄道の駅に居合わせたスピリドノヴァは最初の一発を彼の頭上に発射し、二発目はまっすぐ心臓めがけて狙いうちしたといわれる。彼女は明晰な頭脳と確かな腕をもっていたのである。取りまきのカザークたちは彼女を鞭でうち、「丸裸にして冷えきった独房に投げ込んだ。後で戻ってきた彼らは彼女に同志や共犯者の名前を話すように命じた。スピリドノヴァは頑として口を割らなかった。そのため彼女の長い美しい束髪は引き抜かれ、体中をタバコで焼かれたのである。二晩彼女は憲兵やカザークに取り囲まれてすごした。しかし結局のところスピリドノヴァは重い病に倒れてしまった。彼らはスピリドノヴァに死刑を宣告したが、彼女はそれについてなに一つ分からなかった。また宣告が終身禁固に変えられたときも、それは同様であった。彼女は半分意識不明の状態でシベリアへ流刑に処せられた」<sup>(11)</sup>。

これと相前後するがザスーリッチが1878年特別市長官を撃ったのは余りにも有名な事件である。この事件の後、権力者を狙撃するテロ行為が相次いだ。結社「土地と自由」はプレハーノフ派の「土地総割替」とツアーリ専制の打倒を標榜する「人民の意志派」との二つに分裂した。この時ベロフスカヤもフィグネルも「人民の意志派」に参加し、ベロフスカヤは1881年3月のツアーリ暗殺の首謀者として処刑された。こうしてナロードニキ女性革命家たちは歴史を塗り替える大きな事業に参画したのであるが、革命運動の主流が次第に



マルクス主義に移ると、個人的テロ行為を忌避する傾向がでてきて、彼女たちの存在は疎まれるようになった。しかし彼女たちの社会変革をめざす私情のない純粹さや革命に対する熱意、そしてまた経済的・精神的独立心の旺盛さは長く人々の記憶にとどめられたのである。

このようにロシアにおける女性解放運動は欧米のフェミニズム運動とは違って専制主義打倒と女性の経済的・精神的自立をめざす運動が混然一体となった極めて社会性の高い、イデオロギー的運動であったところに特殊性があった。そして政治的民主主義が未成熟であったロシアの地では欧米のように女性参政権を追求することがなかったところにも特色がある。

このようなロシア的な特殊性と空前の女性解放運動の高まりを背景とした時代にアレクサンドラ・コロantaiは幼年時代を過ごした。その誕生は、いわば生まれるべくして生まれたものであり、その存在はまさに当時の時代そのものに必要とされていたといっても過言ではない。

## 註

- (1) アンドレイ・ローゼン『デカブリストの記録』1907年、152、153ページ。  
A. E. Розен, *Записки декабриста*, стр. 158 Изд. Наука 1984
- (2) エ・ア・パヴリューチェンコ『自発的な流刑で』ナウカ社、59ページ。  
Э. А. Павлюченко, *В добровольном изгнании*, Изд. Наука 1984
- (3) Там же стр.60
- (4) Там же стр.64
- (5) チャイコフスキー『メック夫人との往復書簡』1934年、310ページ。  
Чайковский, *Переписка с Н.Ф.Фон Мекк*, т.1М.Л.,1934, стр. 310
- (6) エム・ヴェ・ニエチキナ『デカブリストの運動』1955年、438ページ。  
М.В. Нечкина, *Движение Декабристов*, т. 2 М., 1955, стр.438
- (7) Павлюченко, там же стр.81
- (8) 『チェルヌイシェフスキー全集』第1巻、1939年、444ページ、513ページ。  
Чернышевский Н.Г. *Полн. соч.* Т.1 М., стр. 444, 513
- (9) ゼ・ア・パヴルチェンコ『ロシア解放運動のなかの女性』1988年、モスクワ、思索社、75ページ。  
З. А. Павлюченко, *Женщины в русском освободительном движении*, стр. 75, М., Мысль 1988
- (10) 『チェルヌイシェフスキー全集』(既出) 第14巻、420ページ。  
Чернышевский Н. Г. *Полн. соч.* Т.14 М., стр. 420
- (11) マリア・スピリドノヴァ著、出かず子訳『戦闘団の人びと』鹿砦社、1974年。

### 第3章 マルクシズムへの覚醒とベーベルの影響

18世紀末から20世紀初め、ロシアの女性達は結婚に際しては両親の同意と教会による承認が必要であった。離婚の時も教会の承諾が必要であった。更に移動の際には未婚の場合は父親の承諾、婚姻後は夫の承諾が必要であった。しかし、全く無権利状態かといえば、財産権、所有権は貴族から農民女性まで、中世時代のピョートル時代から認められていた。エヌ・シシュカリョバーによると7世紀から10世紀にかけては、女性の財産権、離婚の自由さえ認められていたそうである。結婚の際の婚資は自分の財産として認められ、又夫なきあとは夫の不動産の4分の1の所有をみとめられていた。故にその家にそれなりの功績のある女性は労働の対価として所有権を認められてきたので、堂々と自分の意見を夫に開陳することができたのである。このような基盤の上にロシア女性が自由と解放を唱えることが大っぴらにできるようになったのが欧米のフェミニズム思想、とりわけフランスのジョルジュ・サンドの自由な男装スタイルは女性に大きな影響を与えたからである。またそれと並んで、欧米の近代的思想の影響を受けたデカブリスト以来のロシアの革命的民主主義思想であった。ゲルツェン、ピーサレフ、チェルヌイシェフスキーなどは名だたる革命家が輩出した。とりわけ、ミハイル・ミハイロフは雑誌『ソヴレメンニク』の中で男女共学の必要性を説き、男性と同じく女性の勉学の権利を強く主張した。女性たちは外国留学するために親から権利を得る手段として、偽装結婚をし、勉学の自由を得た。このはしりとして有名なのはチェルヌイシェフスキーの『何をなすべきか』である。

ロシア女性が自由と解放を唱えることが大っぴらにできるようになったのは欧米のフェミニズム思想と並んで、欧米の近代的思想の影響を受けたデカブリスト以来のロシアの革命的民主主義思想であった。ゲルツェン、ピーサレフ、チェルヌイシェフスキーなど名だたる革命家が輩出した。

コロンタイはこの伝統的ロシアの革命的民主主義者たちの思想を基盤にしながら、マルクス思想の影響を受けたベーベルの女性解放思想（後述）からも多大な影響を受けた。

次にコロンタイが如何にフェミニズム運動からも大なる影響を受けたか、またその思想を咀嚼し、ボリシェヴィキの中に取り入れようとして行ったかをみていく。

#### ロシアのフェミニズムの運動

ロシアのフェミニズムの運動は19世紀後半に貴族階級の中にはじまり、性差別と階級的差別の二重の抑圧を受けていた労働者階級の女性の中にも広まっていた。女子工員のストライキや産休の要求、同一賃金の設定などの要求が女性から次々と出たが、革命運動の中では取組は弱かった。ナロードニキの革命的女性活動家のヴェーラ・ザスーリッチやその他の女性テロリスト達は社会主義革命が成就された暁には女性差別も解決されるのではないかと考えていた。ロシア社会民主党の間でも女性労働者の独自の要求を達成しようとする動きはみられず、1905年に高まった政治的高揚をいかに保ちそれをさらに革命へと盛り上げよう

かという願いに一身腐乱になり、女性の要求には注意は払われなかった。革命への労働者の高まりに震撼した当時のロシア政府はその高まりを抑え込もうとする意図で労使双方の代表からなるシドロフスキー委員会を立ち上げた。400 人の代表選出を決め、男女それぞれの選挙権、被選挙権を決めたがその中で選出された 5 人の女性は不適格という理由で選出されなかった。これに怒った女性達は別個に女性進歩党と女性同権同盟を立ち上げ氣勢をあげた。この組織には女性労働者のみならず、貴族女性、インテリ女性が参加した。1905 年 4 月サンクトペテルブルクで、イデオロギーや政治的信条を問われないフェミニスト女性達の集会が立ち上げられた。この集会では次の 4 つの分科会がたちあげられた。

- 1 ロシアの様々な領域における女性の活動の評価
- 2 女性の経済状況—各分野の労働条件、家事労働の評価、女性労働の保護
- 3 女性の市民的、政治的状況、男女同権の為の闘争手段
- 4 女子教育問題

この集会に初めてコロantaiは参加してみて、フェミニスト達が女性が抱えている問題を深く、広範にとらえ女性の間に男女差別の問題を具体的に解決しようとしているさまを観察することができた。それは女性の権利の獲得が超階級的運動からは決してうまれるものではなく、社会主義革命を通して初めて達成されるものであるという事を広範な女性に宣伝する必要性を感じ、この取り組みにおいてフェミニスト達の運動より格段に遅れている社会労働党の内部にいかに取り組みべきかという緊急性を認識した。当時のロシア人女性はたとえ家庭から解放されても、移動する場合には夫のパスポートで移動しなければならず、女性の人間としての権利は極めて狭小なものであった。この不平等は社会主義革命によって達成されるべきものであったが、党内ではその点について論議されてこなかった。

「女性解放におけるプロレタリア女性とフェミニスト」を執筆したコロantaiは 1907 年女性工場労働者の間に女性労働者クラブを立ち上げ、それらを基礎に女性労働者相互援助協会をたちあげた。1907 年 8 月、社会主義インターナショナル第 7 回がシュツットガルトで開催され、コロantaiは代表としてその会議に参加した。そこでは、欧米諸国で女性参政権獲得の運動が展開されていた大きな波を社会主義の側でもそれをどう組み込んでいくかという緊急課題が提議された。この中でドイツ社会民主党のクララ・ツェトキンが女性参政権の必要性を、声を大にして主張し、その意見が可決された。一方、フェミニスト達はロシアで女性の統一組織をつくるために 1908 年女性大会を開催する計画をたてていた。

コロantaiは超階級的な考え方には賛意をしめすことはできないが、政府も認める大会で社会主義の宣伝を兼ねた参加も有益と考えたが、党のペテルブルグ委員会は反対だった。

コロantaiは意に介さず、どんどん準備をすすめて、女性労働者クラブを基盤として、大会への代議員を選出させ、45 名からなるボリシェヴィキ、メンシェビキ、無党派の混成代表団が成立した。コロantaiはこの代表団の派遣の為の経費を全部請け負った。しかし、当のコロantaiは出席できなかった。「フィンランドと社会主義」という論文で 1905 年 12 月武装蜂起を呼びかけていたことで官憲の逮捕が読み取れていたもので逮捕以前に国外に逃

亡することになった。この時から8年の亡命生活が余儀なくつづけられるようになった。残念ながらこの大会ではフェミニスト達と労働者クラブの女性達との意見は不一致になり、労働者クラブの女性達は会場を後にした。女性の政治的平等、経済的条件の改善で意見は一致できる可能性もあったが、階級闘争による体制変革を通じての男女平等という旗は降ろすことができなかったのである。コロantaiはこの大会の報告で発表しようと思っていた『女性問題の社会的基礎』（1909年）でフェミニスト達の要求がどんなにラディカルなものにみえても、彼女たちが属しているその階級的立場から社会的、経済的構造の抜本的な改革のために闘うことはできないと きっぱり宣言しているのである。女性独自の問題を狭い枠の中に閉じ込めるのではなく、それを社会的・経済的観点から深く追求せねばならないとコロantaiはこの時心の中で深く決意したのである。

### マルクス主義の革命理論と女性解放

マルクスの革命理論を代表する『資本論』がロシアで1872年に初めて翻訳された。ロシアの革命の主流は当時ナロードニキ運動であり、革命理論家のプレハーノフも初めはナロードニキ革命論者のバクーニン派に属していた。しかし専制主義打倒の手段として個人的テロや政治的陰謀に加担する「人民の意志」派に飽き足らず、1880年パリに亡命。翌スイスで亡命生活を送りながら、ヨーロッパの社会主義者と知り合いマルクスの『共産党宣言』を翻訳、専制主義を打倒するためには労働者階級に依拠して革命を行う必要性を理解し、ナロードニキ派とはたもとをわかった。1883年、ジュネーブで労働解放団を結成し、アクセリロイド、ヴェーラ・ザスーリッチ等が加わった。プレハーノフは最新の統計などを使って、二つのナロードニキの考え、一つは彼らが革命の基盤としている農民共同体が、都市のブルジョアジーを擁護しつつ、自分たちも搾取階級に参入することを画策していること、もう一つは土地を奪われ、自分の労働力を市場に売ることを余儀なくされた階層が存在することを分析した。ナロードニキ達は資本主義を通らずともロシア独自の革命を起こすことができると固執したが、運動理論上それは否定された。当時彼の言う通り、農民階層はそれほど明確に分化していなかったが、遅ればせながら、ロシアの地にも遅れた工業が発達し、労働者階級がその先頭に立ち革命を主導しなければならない資本主義の到来を彼は声を大にして宣伝したのである。

1881年即位のアレクサンドル3世は先帝とは異なり、革命運動を抑え込み、ロシア人以外の民族のロシア化を強制し、とりわけユダヤ人には入学制限、職業制限を強制したので、彼らの間に帝政への反発が盛り上がり、多数が革命運動に参加した。アレクサンドル3世はロシアにおける工業化を強力に推進するためにセルゲイ・ヴィッテを蔵相に指名、1890年代の10年で工業成長率は8%を超え、都市人口は急速増加、1897年の帝国国勢調査では人口1億2千460万人のうち、都市住民は15%、農村人口は85%で、圧倒的に農民が多く、農閑期に都市に出稼ぎにくる季節労働者となり、皮肉にも革命運動を農村にもたらす役割を果たした。農村女性は家事だけではなく、労働力として重要な役割を担い、その

25%が季節労働者として都会に出かけ、雇用労働者として働いたのである。

都市では女性労働者が子連れで働いた場合でも保育室はなく、衛生状態は悪く、母子ともに過酷な日々を過ごすことが常であった。

コロンタイはこの伝統的ロシアの革命的民主主義者たちの思想を基盤にしながら、マルクス思想の多大な影響を受けたベーベルの女性解放思想からも大なる影響を受けた。

以下、コロンタイが如何にベーベルの影響を受けたか、その推移をみていくことにする。

今日、ベーベルとか女性の社会的解放とか、女性と社会主義について言及することはいささかアナクロニズムに陥ったような感があるが、それでも先人がなしたことは一つ一つ検証し、過去に起こった不明な点を解明することは意義を失わないことであろう。

ベーベルは1879年2月ライプツィヒで、『女性と社会主義』の初版をだした。折しも社会主義者鎮圧法施行下のもとであったから当時としては画期的なことであった。その後女性解放のバイブルとして多くの人々に読まれ、1900年にはベーベルはその著作に最後の手をいれ、1910年には第50版を重ねたのである。

この『女性と社会主義』のなかでベーベルは社会の完全なる変革と、社会主義的基盤上での建設によってはじめて女性の完全なる解放が可能である…と主張し、このことはその後多くの論争をひきおこしたのであった。この場合、女性の男女同権の要求を未来国家の建設の後で保証させるという誤った認識をこの言は意味していなかった。その証拠には1875年のゴータの統一大会で、綱領の要求として男女同一の選挙権を提議しているのである。ベーベルはプロレタリアートの責務として男女同権を義務づけたのであった。当時ドイツ社会民主党のなかの俗流日和見主義者たちは自分たちに都合のいいように誤認し、現実の女性の要求とその組織化を無視するような見解に走ったのであるが、ベーベルはむしろ女性の要求を正しく位置づけたとさえ言えるのである。ベーベルの見解を正当なものとして評価したのはまず、ドイツ社会民主党のなかではクララ・ツェトキンであった。当時ドイツ亡命中のコロンタイもこれに賛同したことは容易に察せられる。1908年12月のドイツ政治亡命を皮切りに1917年まで欧米での生活を余儀なくさせられたコロンタイはドイツ社会民主党の要請に応じてアジテーターとしてドイツの各地方を遊説して廻った。しかしコロンタイはロシアの党もドイツの党においても指導的役割を引き受けようとはしなかった。両方の党にたいしてその政策を完全には容認することができなかったからであった。コロンタイはその頃ひたすら願ったのは働く女性の奴隷化に反対し、女性の解放と男女平等化に心を砕くことであった。その頃ゴーリキーの斡旋で『女性問題の社会的基礎』が出版された。この著作はブルジョア女権主義者にたいするポレミックな性格を持つと同時に女性の奴隷的状况を改善するために党がもっと努力すべきことを要求し続けていた。この頑固な要求のために第一次世界大戦が始まる前にロシア社会民主党のメニシェヴィキもボリシェヴィキも女性問題を取りあげはじめたのであった。その頃コロンタイは異境の地にあっても祖国の女性労働者たちとは緊密に連絡を取りあい、1902年の第二回女性社会主義者国際会議に繊維労働組合から正式代表として派遣された。

1913 年ロシアの第三国会の社会民主党議員団が労働者のために社会保障案の作成に携わった時、コロンタイにも母性保護法案の作成を依頼してきた。この依頼により、コロンタイは大英博物館に通い、綿密な資料収集にあたった。この作業により、資本主義諸国における女性の生活と労働条件が母親を苦難な道におとしめ、子どもの高い死亡率を引き起こしていることが把握できたのであった。この資料の結果、かの有名な『女性と社会』という大著がうまれたわけである。そしてこの著作でもりこまれた根本的原則と諸要求は 1917 年の社会保障法として実現化されたのである。これらのコロンタイの活動からもわかることであるが、女性の同権を獲得するための要求を未来の国家の設立まで延期させると言う誤った見解とはコロンタイの見解がベーベルの場合とまったく同じようかけ離れていることは明白な事実であることが証明されるであろう。しかるに初期ソヴェート政権時代にみられた豊かな可能性を秘めた女性解放をめざす萌芽もさまざまな俗流的な解釈と曲解の為に摘みとられてしまったようである。

コロンタイのベーベルへの追悼文を読むと、ベーベルへの深い思い入れと同時に当時の新生ソヴェート政権においてコロンタイが彼の《未来図の描写》を一部実現させようとした意気込みを感じざるを得ない。

次に掲げるのはコロンタイが初期ソヴェート政権時代にベーベルの女性解放論をどのように位置づけ、評価していたかが如実に解る論文となっているので引用してみることにする。なおこの論文は本邦初訳であることは云うまでもない。

### 女性の権利と自由をめざす偉大な闘士

(アウグスト・ベーベル追悼) 1913 年

人の言葉が、特に生彩なく、力なく、不完全であると思われるような機会、事件が生じると、我々が受け入れる言葉では表現できないような大いなる悲嘆も起きることがある。まさにそのような感情が生じたのは、1913 年 8 月のアウグスト・ベーベルに関する訃報によるものであった。

深い悲しみが、大きなうねりとなり労働者世界に広がり、幾百万もの人々の心に響いた。しかし、悲嘆とともに、別の感情も大きくなり、沸き上がってきた、つまり誇らしい喜びの感情であるが、これは、悲しい事件が、全ての国と民族の労働者階級の代表をより緊密に結び付ける糸により、ベーベル自身の出身階層を統一する新しい源にかえられることである。ベーベルの死は、同じ旗のもとに立つ人々にとり大きな損失であるのみでなく、彼の逝去は、政治的大事件であり、それにたいしては全てのブルジョア世界が同情するのが自らの義務とみなした。社会と広範なジャーナリズムにおけるこのような生きた関心を、かきたてるのは普通、即位した人物、ポピュラーな詩人、高名な芸能人の死だけである。

だが、アウグスト・ベーベルは、国王でもなければ、詩人でもなく、芸能人でもなかったのである。彼は、プロレタリアートの息子にすぎず、自らは旋盤工であり、かつブルジョア世界が、憎しみをもちさげすみ、さげすみをもち憎む人々の指導者であった。

労働者党の指導者にたいする、その相いれない思想上の敵側からのこの度外れの関心は、何と説明されるのだろうか？ この場合に絶大な役割を演じたのは、ベーベル自身の水晶の如く純粋な、堂々とした高潔な人格であることを、おそらく何人も否定できないであろう。しかし、この事件が50年前に起きたとすると、そのような貴重な人格を有するほかならぬベーベルの死が、このような感情をもたらしたであろうか？

その尊敬は、誠実なものか、あるいは偽善のものか、ベーベルの思想上の敵たちが、彼の真新しい墓の前でぬかずきながら、どちらをあらわにしようとも、これはブルジョア世界の単にベーベルの人格に対するやむをえない譲歩であり、それなりの兆候であり、注意深く育て上げた運動の力と影響力増加の指標である<sup>(1)</sup>。

去ってしまった指導者に《最後の別れ》をしながら、ブルジョア世界が何とかしておおやけに認めようとすることは、ベーベルの苦労が無駄にならないということや、組織された労働運動とともに、その成長力が不安な敵意を起こさせるようなまじめな政治勢力、あるいは敵対者を、《古い世界》が考慮に入れざるを得ないことである。

しかし、労働者党の力と意義を高めるためにそのように多くの創作活動…を有していた人との死別は、運動の参加者にはとりわけ辛いことである。

もしベーベルの死が、全ての労働者階級にとりかけがえのない損失であるならば、もっとも搾取され、かつ困窮に陥っているその階級の部分である、婦人、女性労働者にとり損失の痛みは倍増される。女性労働者がその階級で失ったのは、指導者、偉大な敏腕家のみではなく、女性の全面的解放理念を目指す最も勇敢な戦士を失ってしまった。ベーベルは、女性社会運動の真の創始者であり、その運動の理論家である。彼の著書《女性と社会主義》は、これは文字通り《女性の福音書》であり、我々の目には成長し、強化し、発展する女性社会運動の建物の確固とした土台の役割を果たした。

今、34年前に（1879年に）発行されたこの書物をひもとく時、その中で結論づけられる思想と情勢が、我々にとって一般に認められた争う余地のない既知のことと思われるが、それは、その書物の意義と女性問題の歴史において果たしたような、革命の中でベーベルと同時代人たちの知性にもたらしたような、大きな役割を、我々が労して自らに説明できるのである。この偉大な書物の功績を評価することが我々にできるのは、たとえ大ざっぱでも、現在と過去にあるものを比較した後だけである。

現在、我々には、強固で、急速に人数が増加している形成された女性社会主義者組織があり、数万ではなく、数十万の女性労働者を引き入れている。女性社会主義運動は、《赤軍》全般に不可欠な補足的要員にすぎない。今日、この要員の利益と必要性をあえておおやけに疑う社会主義者はいない。女性の人権における自らの回復の階級解放を目指す共同闘争を勝ち取る女性労働者の要求は、全般的運動課題に数え上げられる。それと同時に、女性運動が広がる、つまりフェミニスト・ブルジョアおよびプロレタリアート・社会主義的運動の二つの互いに著しく異なる方向がすべてより明確に見える。現在では、労働運動に人員と精神的損害をおよぼし、《性による》分裂を運動にもたらすことで、これら二つの

流れが合流し、女性労働運動がフェミニズムの波の中で溶けてしまうような、如何なる危険もないし、起こり得ない。国民経済生活の激変の渦にさらに大多数の女性たちが巻き込まれるにつれ、対立する社会的両極端の女性代表者たちが相互利益の闘いの分野でぶつかりあうにつれて、全女性の事業、《姉妹のような感情》にたいする幻想が水蒸気のように吹き飛ばされてしまうのだ…。

女性の権利と利益を目指す闘争の分野での階級的区別がますますより明確に、より明瞭に浮かび上がってくる。

ベーベルが自らの本を書いていた 70 年代とは異なり、当時はまだ大きさも控えめなパンフレットほどのものであったが、それは分厚い本となり、51 版を重ね、全ての主要言語にて翻訳されることが必然的であった。つい最近まで女性労働運動は、一般に存在していなかった。女性たちは、少数の人々や、小グループにて労働者組織に加わり、その中で目立たない消極的な役割を演じた。パテルソンは、イギリスにおける脆弱でばらばらな女性労働組合を結集し、集中化しようと試みている。ドイツでは女性社会主義者たちが、60 年代末と 70 年代初めに最初的女性労働者組織を出現させようとしている<sup>(2)</sup>。

しかし、これらの試みは、警察の弾圧による危険にさらされ消滅しつつあるか、女性労働者たちの間に目覚めた抗議の意義を、その時期にはまだ考慮できなかった同志・男性側からの冷淡な無関心により凍結されるかである。

だが、ごく一部の人にとりブルジョア階級的女性収容所における事態がよくなった。その頃、フェミニスト運動は、はっきりした社会的組織としての性格をまだ帯びていなかった。国際女性会議もなければ、選挙権国民会議もなければ、女性大会もなければ、活気のあるデモンストレーションもなかった。女性解放理念そのものは、観念論的原則の形式で表現され、その実現の可能性を信じていたのは、特別な個人、すたれたリベラリズムの《偉大な伝統》の担い手のみであった。そして、純粹に経済分野、熟練した手作業と頭脳労働の市場においてのみ、有望な稼ぎへの道を自らの力でつけたが、その道は競争者・男性たちの広い肩でさえぎられるものであった。闘争は、ばらばらで個人主義的に行われ、それぞれの闘争が自分のことを目指し、《女性》のではなく、自らの新しい宿命を運命から取り戻すものであった。しかし、女性はその一步毎に、もう一方の性の代表である競争者・男性たちの抵抗に出くわすことになったので、女性たちはすべての《悪の根源》に気がついた。このことから、いまではブルジョア運動からも気の抜けているフェミニストの無邪気な《男嫌い》があったのだ。

周知の知的傾向として、フェミニズムが、イギリスやアメリカでより強固な基盤を 70 年代に作ることが既にでき、ナイチンゲール、ジョゼフィヌイ・ビョトレル、フレイ夫人のそれぞれの名前が、女性の社会活動の統一された新しい各分野をそれにて特徴づけ、D. S. ミルを支持する小グループが女性の政治的同権の旗を掲げることを決意したのに、当時、ベーベルが住み、活動していたドイツでは、女性のブルジョア運動がやっと見受けられただけであった。



その運動の輪郭がはっきりせず、かつ定まっていなければいけないほど、ルイス・オット・ペテルスとアウグスト・シュミットにとり、階層や階級の区別なく全女性の事業統一を宣言し、全ての女性を団結させることがより容易であった。

悪意に満ち彼等を威嚇する保守的思想の代表者たちに囲まれ、中傷、嘲笑や侮辱を浴びせられる最初の女性たち、つまり《女性の大義》、《全女性の利益》をめざす戦士たちは、団結し、自らの隊列を固め、抑圧され、統一された《女性の民族》として立ち上がる…一つの出口を見つけた。そして、あらゆる階層の目覚めつつある女性たちは、自己にとり最も近く、大事なスローガンが映えるその旗に自然に結集された。複雑で混乱した状況が生じた。一方では、民主主義の代表者たちにとっては自らの保護のもとに女性解放欲求を取り入れる必要があったが、他方では、自らには無縁である階層の女性の権利を支持して、あたかも労働者階級のように登場し、それでなくても不安定な階級的立場をさらに放棄した。ベーベルの著書は、社会的相互関係のこの迷宮から社会民主主義を脱けださせ、しかも階級の大義を損なわず、かつ女性解放の理念にすべてを奉仕させ、労働者階級が平然と行進できる道を示した。

ベーベルの著書の基本的な命題を思い出す前に、その当時、女性の平等と解放の問題に対する労働者の組織部分の関係がどのようなものであったのか、記憶を再現するのは有益なことである。

一般民主主義的理想の不可分として、理論的には女性の平等の原則を認めながら、大多数の社会主義者たちは、この原則の実現を無限のかなたに持って行ってしまった。政治的同権に関する話はなかった。しかし、女性労働の最も本質的な問題である産業への女性の参加については、まだ 60、70 年代の社会主義者たちには極めて混乱した認識があった。当時の一連の労働組織大会、つまりインターナショナルの各大会、労働団体、自主的教育団体等の全ドイツ同盟大会では、労働者により規定が採用されたが、それには産業から女性が完全に除外され、女性の職業的労働を禁止する要求が書かれていた<sup>(3)</sup>。

社会民主主義側からのそのような観点は、現在では有り得ないことだろう。しかし当時は、その観点が、女性の工場労働の増加により起こされた重苦しい現実から直接出現したのだ。この労働が、労働者の最後の寄る辺を奪い取り、最後の慰めである、家族の喜びも取り上げてしまった。自宅外的女性労働が、家庭を無くし、その最後の一かけらの暖かさと憩いを持ち去り、子供たちを不具にし、母胎の赤子を殺し、女性を老けさせ、やつれさせたのだ…。この新しい現象からの重荷が、最後の手に負えぬ困苦として、過ぎ去ったおなじみの家族的形態のなごりに激しくしがみつki、労働者住民に襲いかかった。女性が自宅外の仕事に去るという事実により、この事実の中に苦しく、いまわしくも、よき将来への避け難い段階としてあることを認めるために、過去の家族理念の崩壊によるすべての悲哀に耐えねばならなかった。

社会主義者達を支配したのは、女性市民としての女性の同権問題に関するより小さな不明確な点であった。1875 年のゴータ統一大会でさえも、党の政治的要求を決定する条項の

作成時に、そこに女性を含める問題が白熱した論議を呼び起こした。ガッセルマンは、双方の女性同権の問題における要求を、将来役立つものと現在受け入れ可能なものに区別する必要があることを証明しようと努めた。《女性の選挙権に関し、最初に必要なことは、何が現在の状況に適応し、何が将来役立つのか、区別できることである。言うまでもなく、人類の半数である女性の社会的権利の剥奪は、極めて不公正なことであり、社会が正さねばならないことである。しかし、今日、女性は一般的に男性から著しく取り残されており、それはある程度彼女が受けている劣悪な教育によるものである。》従って、ガッセルマンの考えによれば、女性に政治的同権を与えるのはまだその時機でないのである。

ベーベルは、すぐさまこの間違った観点に反対し、両性なる者たちに対する選挙権拡大の要求を綱領に入れることを大会で提案した。ベーベルの提案は通らなかったが、それでも彼には譲歩がなされ、単に男性なる者たちと表現した以前の文案箇所に、ゴータ綱領には、女性をも意味する《それぞれの市民》の語句が入れられたのである。

そのようなまだ漠然とした思想的雰囲気のもとでベーベルの書も生まれたのである。

問題の理論家、社会主義者に困難な課題が控えていた。一面では、女性をあらゆる隷属から解放する原則を労働民主主義の保護のもとにし、生まれた社会経済的關係において女性の権利を、彼女の同権を復帰へと指し示すことが必要であった。他の面では、女性運動そのものに明快さを加え、あたかも階級的利益の上に立つような全女性の事業に関する労働者階級にとり有害な幻想を粉碎することが必要であった。ベーベルの著書により、この二重の課題が解決できたのである。

彼の最初の配慮は、我々の時代における女性と全社会的運動の間に存在する密接な結びつきを解明し、決定することであった。エンゲルスとマルクスの命題を用いて彼は、経済の様々な段階における生産関係と社会における女性の社会的地位との緊密な関連を明らかにした。しかし、ベーベルは過去に留まらなかっただけではなく、彼等と将来を結び付けることができたし、過去に則り女性問題と女性運動の運命の今後の発展傾向を生き生きとした筆致で書き上げたのである。

自分たちにかせられた無権利のくびきを自らかなぐり捨てようとする女性たちに唸り、悪意をいだき身構えるブルジョア社会に向けて、バーホヘンの母性権利理論の支持者である彼が投げつけたのは、この無権利が一度でも神により定められたものでまったくなく、昔の社会的集団・氏族において主導権が女性・母親に属していた時には、何千年もの長きに渡り異なった関係が支配していたこと、女性の無権利が一時的な歴史的カテゴリーにすぎないということである。これは重要な命題であり、現代の女性の隷属を根底から揺るがしたのである。史的唯物論の理解に基づきベーベルが自らの書により示そうと努めたのは、社会的集団の中で女性が巡り会う役割により女性の地位が変化することである。女性が直接消費のためではなく、再生産または交換のために参加するところでは、女性の地位は別であり、彼女の労働は、直接消費材の生産に彼女がたずさわるところ、彼女の労働が家事に限られるところよりも、さらに高く評価されるのである。現在、女性の労働は国民

経済で重大、かつ多大な役割をはたしており、それ故、女性たちには喪失した自らの自由の回復を要求する権利があるのである。しかし、自らの自由を回復し、それを目指し闘う女性の権利を認め、ベーベルが自らの書により強調するのは、その解放が現代の社会的労働制度の枠組みの中では達成できないことである。女性解放は、社会主義でのみ、かつ社会主義を介してのみ可能である。

興味深いことに、母性の権利問題に関するベーベルの主たる反対者の一人は、妻であるマリアンナ・ベーベルである。ドイツの公の学問分野で崇拝されている自身の堂々たる著書『母権と婚姻』の中で、マリアンナ・ベーベルは、母性の権利がどこでも見られる現象であったことは決してなく、また父権制に先行した必須の歴史的段階ではないと断言している。母性の権利は、まったく例外的な状況でのみ、農耕文化の比較的低い段階で、個々の農耕種族、好戦的な民族等により取り囲まれていない種族に存在したのであった。一連の理由としてベーベル婦人により証明されることは、母性の権利を無条件で一般化してはならず、さらに多くの、おびただしい量のバーホヘンの時代から蓄積された新しい社会主義的資料は、母性の権利が、ほとんど決まった経済組織だけに該当し、決して全ての民族が必ずこの段階を経過したのではないという命題の正しさを認めさせている。自らの最後の訂正された50版で、ベーベルは、この方向で若干の修正を加え、彼の以前の断固たる主張を和らげたのである。それにもかかわらず、マリアンナ・ベーベル等の科学アカデミー正会員、学者たちの如何なる反論も、社会における女性の地位と国民経済のその役割との間に存在する争う余地のない関係に対するベーベルの基本的立場を動揺するものではないのである。

私的所有の確立、交換経済の実施、他人の労働の搾取に基づく生産システムの導入とともに、ひとたび女性の抑圧が実社会に起こると、その抑圧が姿を消すことができるのは、これら三つの主要な現象の廃止によってのみである。もし古い世界がそのまま残るのであれば、権利における男性との如何なる上っ面で形式的な女性の平等は、政治的であれ、職業労働的であれ、女性を社会的、経済的奴隷制度から解放しないのである。それ故、女性運動が実際に全面的な女性解放の課題追求を望むのであれば、女性と労働者の運動の最終目的は一致するのである。

《女性問題は、我々にとり社会問題の一面にしかすぎない…とベーベルは述べており、この問題は、従って社会的対立を完全になくし、その対立から発生するわざわいを除去することでのみ最終的な解決を見いだすことができる。》これは、自らの解放を目指す女性の闘争に対する社会民主主義の特別な関係を定義した命題の一つである。この命題によりベーベルは、現代階級社会の基盤を乱さず、同権と特権を男性とともに勝ちとることを予見していたフェミニストたちの幻想を打ち砕いた<sup>(4)</sup>。

しかし、これらの命題とともにベーベルは、他の命題も提起した。ベーベルは、女性の無権利と抑圧の二重の特徴を指摘した最初の人であった。《女であることでその多くが、二重の関係で苦しんでいる。第一に、女であることは、男性との社会的および公共的關係

により苦しむことであり、この関係は変わるが、法の前と権利において形式的な同権では取り除けない。第二に、女であることは、女性が、一般的にはプロレタリアート女性がりわけ、プロレタリアート男性と同じように、存在している経済的關係で苦しむのである》<sup>(5)</sup>。

女性、とりわけ女性労働者が存在している関係と抑圧のこの二重の特徴は、女性労働運動の二重課題をつくるのである。1) 無権利と抑圧される階級の女性代表者として、階級の同志と並んで自己の解放を目指す闘争。2) 女の性の代表者として、女性にのしかかっている特殊な社会的抑圧から自己の解放を目指す闘争。この二重課題は、女性の社会運動の基礎をなし、党が明確な階級的立場を捨てずに、女性解放問題を社会主義綱領に入れることができた。

余すことなく自らの著書で、ブルジョアスタイルのフェミニズムへの熱中から女性達を未然に防ぎ、繰り返し、歴史的に、かつ現実より手にいれた実際の資料を用い、女性の無権利と抑圧の根本が、経済、現存の生産関係にあることを示しながら、ベーベルは、女性の立場が、本来の階級の枠内でもこの同じ階級の男性の立場とは同じでないことに、常に注意を促したのである。《女性と労働者の立場の類似点は多くあるが、ある一つの点では女性は男性の先を行っている、つまり、女性は、奴隷制度におかれた最初の人間的生き物である。奴隷が存在する以前に女性は奴隷とされてしまった。》<sup>(6)</sup>。このことから、自己の要求を階級的同志に注意を促し、党を女性の利益を目指す闘争に参加させる、女性の社会的運動を引き出す特別な課題が生じるのである。

ベーベルの著書は、現在でも、女性問題に関する社会民主主義の基本原則策定の理念においてあらゆる厳しい評価に耐える、偉大な役割を果たした。

しかし、この問題の個々の部分に関しては、ベーベルの著書が、特に、性道徳からブルジョアのかびを除く分野で、傑出した教育的意義をもたらした。ベーベルを外にして、女であることの代表者としての、女性の解放要求を目指す旗を、誰が掲げ、持ったのであろうか？ 《両性の社会的独立と同権の地位なくして、人類の解放はない》<sup>(7)</sup>。現代的道徳のあらゆる猫かぶり、全ての君子ぶり、いっさいの表裏性を、仮借なくベーベルは自らの著書で暴き出した。結婚と売春は、同じ一つのメダルの二つの面にすぎないが、女性の体を商売とする問題に光をあてたそれぞれの頁は、ブルジョアの表裏性と君子ぶりを摘発する源として長きに渡り存在するであろう、とベーベルは明らかにした。主として《打算》あるいは《理性》に基づく現代の破棄できない結婚とは一体何であるのかと示し、ベーベルは、《二重の道徳性》の打倒および心の魅力に基づく自由な結合に対する自らの支持者ぶりを大胆に言明した<sup>(8)</sup>。

現代社会により用いられる《二重の道徳性》に関し仮借のない皮肉で貫かれている女性の性の解放問題に捧げた、ベーベルの著書の各頁は、表現力と思考の見事さの点で最も鮮明である。同じ様なこれらの頁のために、女性労働者だけではなく、国民の他の階級や階層の女性たちも、自らの心の中にベーベルの永久の記念碑を建てるべきであろう…

アウグスト・ベーベルは、理論分野における単なる女性の守護者ではなく、彼は自己の信念を人生経験に実施したのである。上述したように、彼の第一の命題が、ゴータ統一大会にて党綱領に女性の政治的権利能力の要求を加えるイニシアチブの拠り所になっていた。ベーベルは、1876年にライプツィヒにて女性政治大会をドイツで初めて開催した人であった。大会が取り上げた問題は、《現代国家における女性の地位および女性の社会主義との関係》であり、大会は女性たちを当時、目前に迫った選挙キャンペーンに引き入れるのに役だった。ベーベルは、自己の回顧録に、大会は大成功であり、ホールは満員で、かつ女性たちは提起された問題に自分たちの関心を持ち彼女たちが目覚め社会活動を開始していることを述べている<sup>(9)</sup>。

ベーベルは、1895～1896年に、選挙権を女性に普及することをドイツ国会に提案した最初の人でもあった。ここでは、ベーベルの声が、女性の労働、政治的またはほかの利益のために演壇から高められた事例を列举することはできない。このことは、ドイツと国際的社会民主主義の全ての歴史を繰り返すことを意味するであろう。しかし、ベーベルが常に女性労働の幅広い保護と母性の保障の支持者であったことを、指摘しなければならない。1897年、チューリッヒで行われた女性労働の保護に関する大会で、カールトン・ヴィアルとの論争においてベーベルがとった立場が、産業から女性たちを除外する方法にてのみ、女性労働の重大な結果と闘うことが、あたかも可能であるというような、古くさい時代遅れになった幻想に終止符を打ち、1899年、ハンノーバーにおける大会で女性労働の保護分野での社会主義的要求の作成時に指導の絆となったのである。

女性たちがそれぞれ闘いの道に入ろうとする試みに、ベーベルがいかに暖かく応えたかについては、ロシアの女性労働者には生き生きとした例があり、最初の女性の日に向けロシアに送り届けた彼の心のこもった文章がそれぞれの記憶にある。女性たち、特に労働者階級の女性たちは、ベーベルという、偉大な教師のみならず、彼等の解放を目指す戦士、彼等の利益の誠実な守護者、真の友人も失ってしまった<sup>(10)</sup>。

アウグスト・ベーベル『女性と社会主義』、ペトログラード、1918年、初版、1913年

## 使用文献

Коллонтай А. М. *Избранные статьи и речи*, М., Политиздат, 1972 стр. 430, На обороте тит. л. сост., И. И. Дажина и др.

## 註

- (1) ベーベルは、彼個人または彼の功績を賛美することを好まなかった。ジンゲルが亡くなった直後、私は彼から、リープクネヒト、ジンゲル、アウアーおよびベーベル自身のような《古参》の大立物がどのように形成されたのか、説明を聞くこととなった。このような個人たちが形成できたのは、ベーベルの考えによると、運動が始められたばかりの時機であり、党はいまだ弱体で、少人数であり、その当時は活動

の範囲がはてしなく、人の中で眠っている才能が存在していたのである。その当時、党内でいま実際に行われている分業、機能別専門化はまだ存在せず、活動的な党员それぞれは、理論家であり、実践家であり、政治家であり、かつ組織者であることが必須であった。《その当時は、我々それぞれが万能選手でなければならなかったと》ベーベルは語った。それにもかかわらず《好条件》だけでベーベルが生まれたのではない。意義があるのは、素晴らしい、崇高な人材であった。

- (2) E. イフレエル『ドイツ婦人労働者の組織化、その成立と発展』ベルリン、1893 年 (E. IHRER, Die Organisationen der Arbeiterinnen Deutschlands ihre Entstehung und Entwicklung. Berlin, 1893&)
- (3) オットローズ、『既婚女性の工場での仕事に関して』、4 章、シュットガルト 1910 年および ア・エム・コロantai、『女性問題の社会的基礎』、“ズナーニエ” 出版、1909 年 “結婚と家族問題” 参照。
- (4) これ以降は、アウグスト・ベーベルの著書の引用と照会である。『女性と社会主義』、ペトログラード、1918、17 ページ
- (5) アウグスト・ベーベル、『女性と社会主義』、ペトログラード、1918 年、19 ページ
- (6) 同上 アウグスト・ベーベル、『女性と社会主義』20 ページ
- (7) アウグスト・ベーベル、『女性と社会主義』20 ページ
- (8) アウグスト・ベーベル参照。私の生活から（回顧録）、第二部、二版、モスクワ、1912 年 175 ページ
- (9) 初版、1913 年
- (10) アウグスト・ベーベル『女性と社会主義』（ペトログラード、1918 年）

第 1 回インターナショナル大会にて、いかにマルクスがクレリとの論争で同じ程度のすべての反動性を証明しても、広範囲におけるこの観点は容易にすたれなかった。立法による女性労働の保護に関し、当時、社会主義者たちは、女性の職業的労働の完全禁止への移行段階としての見地に立っていた。女性労働を規定する法案をドイツ国会で説明したモッテラーは、既に 1878 年に次のように語った。《我々は、天性により女性に割り当てられた活動範囲外の女性の職業労働に対する基本的な反対者である。我々が願うのは、女性が自らの真の使命に戻ることであり、それ故、資本主義的搾取による肉体的、精神的抑圧からの女性解放を望むのである。》、（ドイツ帝国議会の交渉に関する速記による報告。1878 年 5 月 8 日）

## 第二部 コロンタイの母性論

### 第4章 誰に戦争が必要なのか<sup>(1)</sup>

コロンタイの『誰に戦争は必要なのか?』は小論文ではあるが、1915年に反戦論文として発表されるやいなや、内外で大きな反響が湧き、数百万部の売れ行きをあげ、数ヶ国語に翻訳された。内容的にはロシアの十月革命以前に書かれたもので、ロシア革命後のソヴェート政権が崩壊した現在の歴史的現実からみるとアナクロニズムに陥る可能性もあるが、1915年という時代的制約の下で執筆されながら、なお、今日的な問題性を包含している点も些かあるのであえてここにとりあげた。『赤い恋』などの作者として知られているコロンタイは我国においては自由恋愛の唱道者として常に偏見と好奇の眼にさらされて来たが、コロンタイ自身の本領的才能は社会科学系の数々の論文や大著に余すことなく発揮されている。ここに掲げた小論文はコロンタイが1908年12月ドイツへ政治亡命してから1917年のツァーリズム崩壊まで主としてヨーロッパに滞在していた頃執筆されたものである。ドイツ亡命後は、コロンタイはドイツ社会民主党に入党し、党の要請でアジテーターとしてヨーロッパ各地を点々とした。この頃にはすでにプロの演説家として大きな名声を博していた。コロンタイの弁舌のたくみさはトロツキイと並び称せられ、世界一流の雄弁家に数えられていた。ベルギー、スウェーデン、イギリス、スイスの各国から招かれ、アジ演説を行い、生き生きとした政治亡命の日々をすごした。しかしながら、第一次大戦が勃発してから、社民党員たちは愛国主義から戦争肯定に走ったが、コロンタイは決して戦争を肯定することはできなかったのであった。これと同意見をもっていたのは、カール・リープクネヒトとその妻ゾフィー・リープクネヒトたちで、当初、戦争反対を唱えることは社会主義者たちの義務であると強く主張していた。しかしドイツ社民党が戦時予算に反対投票を拒否したことはコロンタイを大いに落胆させ、ドイツを去らせる原因となったのである。1915年にはボリシェヴィキに参加し、この論文を執筆するに至ったのである。論文の題名は十九世紀の革命的知識人で、かつ国民詩人として知られたネクラソフの専制政治を激しく非難した『誰にロシアは住みよいか?』の題名をあえて模倣させている。原文のロシア語は他の美学論文、社会科学論文とくらべると文章は簡潔にまとめられ、力強く歯切れのよい論理性と、昂揚したパトスが横溢しており、読むものの心をとらえずにはおかない。なお、当論文は本邦初訳であることはいうまでもない。

#### 誰に戦争が必要なのか?

1915年

英 雄

戦争が未だ終わらず、またその終わりも見えないが、すでに世界でどれほどの手がなく、足がなく、目が見えず、耳が聴こえなく、障害をかかえる人々が生じていることか……。流血の世界大戦に去ったのは、いまだ若く、強く、元気な者達であった。前途にはすべての

人生があつたのに。だが、数ヶ月、数週間後にはすでに、数日後にでさえ起こり得ることは、彼らが半死半生、不具者となって医院に戻されること……。

それゆえ<英雄>——と言っているのは、ヨーロッパ戦争をもくろんだ連中、人民に人民を、ある国の労働者を他の国の労働者の友にけしかけるやからである。だから十字勲章を得た！ 勲章をつけて歩こう！ 名誉を利用しよう！

しかし実生活ではすべてが違うのだ。<英雄>が、自分の祖国、故郷の村や町に戻り、自らの目で信じられないのは、彼を待っているのが<名誉>や喜びどころか新しい嘆き、苦悩、失望であることだ。田舎は荒廃し、飢餓の状態である。田舎者達を戦争に追いやり、家畜を奪い……支払わなくてはならない租税があっても働き手はいない。百姓女達は足元からつぶされた。痩せこけ、へとへとになっていた。泣きやつれていたのだ。村にうろつくのは障害者・英雄達。十字勲章を一つ下げている者もあれば、十字勲章を二つぶら下げている者もいる。名誉と云えば、おのれの家族にでさえ、穀つぶし、他人の飯食らい、となじられるのみ。飯は、頭数にたいしてきまっているのだ！

もし村ではなく故郷の町に戻ったとしても、<英雄>にとってより快適ではない。たぶん、<名誉>をもって迎えるだろう、嘆きと喜びから母親は泣き、彼女の<雄々しきますらお>は一応生きのびたのだから、その年老い、母親似の瞳をじかに見ただろう。女房は微笑みをうかべ……日々、世話をするだろう。しかし、そこでは……。

労働者達のもとでは、時間、つまり暇が、障害者を面倒みるためにあるのだろうか？ それぞれに自分の仕事があり、自己の悩みも抱えているのだ。まさに苦難の時代だ！ 生活費は一日だけのものでなく、高騰しつつある。戦争だ！……伝染病の流行や病原菌は戦争につきもので、若い連中は病気にかかっている。女房は苦悩し、もがいている。彼女は自分のためと一家の柱のために働かなければならないのに。

<英雄>へのツァーリ（皇帝）の年金は？

沢山なのかその年金は？ まさか、残った足一本に片方の長靴の分で十分だとは！……

将校、障害者になった將軍連中は、もちろん<官位>に従って扶助料がもらえるが、以前は労働者、農民、職人であつた平（ひら）の兵士のことを誰が心配するのか？ 誰が彼の運命を擁護してくれるのか？ 国家における権力は、人民の手中にあるのではなく、地主、工場主、旦那達および主人どもの手に握られているのだから。国有財産を管理しているのは、戦争で死んでいく数十万、数百万の<英雄・兵士>ではなく、紳士連中つまり地主、工場主、官吏であるツァーリの手先どもである。

記憶がいまだ薄れず、戦場での砲声がやまない最初の頃は、<英雄・兵士>のことを憶えているであろう。彼らには、援助としてただ同然の贈り物が、さまざまな団体、慈善機関や<赤十字>から届けられる……しかし一年を過ぎ、また一年経つ。<平和な>時期が始まる。民衆は以前のように仕事をし、あくせくした生活をする。その時、<英雄>に何が起きるのだろうか？



障害者になった陸軍大佐や將軍連中は自分の自動車を乗りまわし、いまだ戦争にたいしては自分のことを心配し、汚い金を掻き集め、自分のふところに兵隊食糧を詰め込んでいた……障害者で十字勲章を付けた＜英雄・兵士＞は？ 彼らの運命はどうなるのか？ まさか教会入口の階段に行き、貧しき人々とともに乞食をするのか？

英雄である祖国の救済者の運命は、辛く、悲しく、無権利になるであろうし、たとえ彼が十個の十字勲章をつけていたとしても……ツァーリの政府は彼のことを考えたり、心配したりはしないのだ……障害者達のこと、紳士・地主、工場主、旦那連中の心は痛まないのだ……彼に何を？ 自分の兄弟でない者が心を痛め、あっちこっちと放浪し、自分の運命を呪うのである……＜旦那＞ではない！ 田舎っぺだ！＜田舎っぺ＞、労働者、農民、職人は、＜紳士方＞に奉仕し、彼らのために血を流し、かつ、褒美として飢餓により垣根のそばで死ぬために、この世に生をなした……。

民衆自身が＜英雄達＞をかばわず、民衆が権力を手に入れず、民衆自身が処罰の取りしきりを始めない間は、障害者・英雄に自己の生活の向上はありえない。

### 何のために闘ったのか？

どんな兵士にでも、ロシア人でも、ドイツ人でも、何のために闘ったのかと、たずねてごらんなさい。互いの隣国の兄弟、労働者や農民の血が何のために流されたのか？ 何のために人々は不具となったのか？ 彼らはいわない！ いわない、答えない、それは彼ら自身がよく知らないからなのだ。

ドイツ人達がセルビア人を擁護したのでもなく、ロシアに攻撃したのでもない。ときおり土地のことを口にしていたのだ。最初、ロシアの農民・兵士に考えられたことは、「ドイツ人達の土地を取り上げに行こう」であった。

しかしすぐに分かったのは、「そこでの事が土地にあるのではない！……」ことだ。それなら何に？ このことを理解している者は少なく、また把握している者も少ないのだ。何のために人々を切り殺し、刺し殺し、障害者になっているか、自分自身がよく知らないで＜当てずっぽうに＞喧嘩しあっているのはロシア人達だけではないであろう？ 同じように、戦争の真の理由を、ドイツ、イギリス、フランスの兵士達も知らないのだ。誰にでもたずねてごらんなさい、それぞれが戦争の異なった理由をかかげるのだから。

ドイツの民衆にはこのように話した。「ロシアが我々を攻撃した。ロシアのコサック達がベルリンに進んで行く。我らが祖国を守らなければならない。一丸となって役人の専横、横暴とツァーリの手先どもの違法行為からロシアを解放しに行こう。ロシア民衆の＜自由＞のために命を捧げに行こう！ ロシアの民衆自身は弱い、彼らでは、自分達の＜内部の敵＞、金に弱い大臣達、貪欲な抑圧者・地主に打ち勝てない。彼らを助けようではないか！ ロシアの民衆のために、民衆の意志、権利と自由への道を開こう。」

自分の指令部を持つドイツ皇帝（カイザー）、ドイツの地主や工場主達は、このように甘美にドイツの民衆に歌った。民衆は究明せず、信じてしまった。百万単位で発行される

資本家達の新聞は、戦争に関する偽りを拡散し、各政府は戦時検閲を遂行し、一言の真実さえ印刷することを許さず、労働者階級の優れた友を牢獄にぶち込んだのだ。＜土地＞のためにガリチヤに進行したことを納得させた時、ロシアの兵士達に一杯くわされたように、民衆をだましたのだ。

フランスでは、政府、将軍、大臣、銀行家と工場主達は民衆のために戦争のほかの理由を見つけだした。1870年にドイツ人により征服されたアルザスおよびロレーヌを、彼らから奪い戻す時期が到来した。「栄えあるフランス共和国の諸君！ 諸君は自由な国に住んでおり、諸君は全ての政治的権利を自己の手に獲得した。だが近くで、隣国のドイツでは、人民はドイツ皇帝の圧制の下で苦しんでいるのだ！ ドイツ人民を救おうではないか！ ドイツからドイツ皇帝を追い出し、ドイツ人のために共和国を設立するまで闘おうではないか！」。

こうして崇高なるフランスはドイツ人民の＜解放＞と、ドイツ皇帝の始末を決定した。

事は良好だ！ どの人民にとりドイツ皇帝やツァーリが必要なのだろうか？ しかしちょっとご覧なさいよ、なんだが奇妙に感じられるのですよ、それぞれの人民は平和に暮らしていたし、ドイツ皇帝はツァーリと親交を結び、互いに行き来していたのですから。様々な国の資本家達は力を合わせ工場や貿易会社を設立し、力を合わせアジアおよびアフリカの植民地を強奪し、大砲と戦艦の建造でふところを肥やした。そして突然様々な国のすべてのツァーリとすべての資本家を、みせかけの気高い情熱が虜にするのだ。隣国を＜解放＞しに行こうではないか！ 隣人のところに、権利、正義、平等と安泰を植え付けよう！

ドイツ人はツァーリの専横からロシアを救うために、フランス人はドイツ皇帝の権力からドイツ人達を解放するために出発したのだ。

しかしじっと見れば、これまでのところドイツ皇帝とツァーリがすべて無傷で無事であり、彼らの権力が揺らいでないことを知るに違いない。資本家は戦争でふところを肥やし、軍隊への納入により1ルーブル当たり20～40コペイカずつくもうけ、しかもこのような納入は数億、数十億ルーブルの額である。ところが、数十万、数百万の市民そのものは、突然＜偉大なる列強＞が市民のためとひと肌ぬいだが、自分達や他人の土地に自らの骨をまき散らしたのだった。他民族の＜解放＞が戦争の理由なのか？ 誰がまだこの神話を信じるのか？

他にも例をあげてみよう。イギリス人は、一方ではベルギーの味方となり、他方ではドイツ＜軍閥＞——軍国主義を撲滅するために、その後にやっと戦争に巻き込まれたかのようにふるまった。俗にはそのように言われている。しかし実際にはイギリス王室の権力はどのように行動するのか？ 第一にイギリスであり、彼らだけがドイツ人から植民地や土地を取り上げることができる。そしてもちろん、住民には、誰の支配権の下に残りたいか、ドイツの下か、あるいは我々の下か、問い合わされも、聞かれもしない。ベルギーはベルギーによるべきであるが、さしあたって自分自身に他の土地と人民を獲得する必要があるのだ。何のために彼らはドイツ人の下に？！

軍閥との闘いにおいても同じことである。イギリス人は＜ドイツ軍閥＞が好きではなく、プロシヤ人を罵り、腹を立てるが、ドイツ人は自分達の市民が持つ自由な感情を殺してしまい、人々を調教された従順な家畜の群れに変えてしまった。

激しく批判している。多くのことは正しい。しかし口先と実際とは違うと言うことになるだけだ。実際イギリス政府は＜ドイツ人・プロシヤ人＞を罵るけれども、彼らのところで教えよう、自分のところで《ドイツ軍閥》を取り入れようとする。戦争初期からイギリスでは人民と政府の間で闘いが行われ、イギリス政府は、自国にまさにその軍閥を導入することを決定し、そのためドイツとの戦争の道をめざし、今までイギリスにいたような傭兵隊・義勇兵部隊に代えすべての人の義務である軍閥の導入に努力している。

現在、イギリスの百万長者や収奪者は、すでに抵抗を打ち負かし、強制的な兵役の義務の導入開始に成功した。

さらに虚偽があり、イギリス政府は、他国を＜軍閥＞の悪事から解放することを決めたが、自国の人民に対し同じ悪事を押しつけることをしたのだ！ しかしそのほかにイギリス政府にとってドイツの例が好みに合ったし、他の諸国に続き各工場にも＜軍事機構＞の導入を決定し、労働者を召集し、彼らを軍当局に従わせ、再び彼らの持っているストライキや自己の利益保護に関する権利を剥奪し、国家のために奴隷化を決定した……そしてこの正真正銘の＜軍事奴隷制＞がイギリスの他、フランス、ドイツやロシアにおいて、すべての戦争が行われている国々で導入された。銭のために働け、あらゆる圧迫や、笑を我慢しろと、しかし前線へ、＜敵＞の弾丸の下へではなかった。

断固として、勇敢にイギリスの労働者は、この新しい不正に反対し、労働者に対する資本家のこの新しい攻勢に反対し、新しい奴隷制にも反対して闘い、自己の権利の擁護につとめている。しかしイギリス政府はひるまない……ドイツの例が気に入る、＜ロシア軍閥＞が好みに合ったのだ！

検証すべきことは、つまり、本当のその理由、隣の強国と戦争になったその＜悪事＞、この＜悪事＞を自分のもつに導入し、補強しているのだ！……

ドイツ人はロシアの民衆を＜解放＞するために進行したが、自分のところでは、戦争中ツァーリの専制を巧みに行ったのだ！……フランス人はドイツ人の＜解放＞のために剣を抜いたが、その代わりフランス人が長年知らなかった弾圧を考えだしたのだ！……

もっと慎重に周りをじっと注意して見るべきであり、そうすると明白なことは、その理由で強国が互いに戦争でぶつかり合ったのでもなく、それで隣国と戦争になったのではなく、民衆に何を納得させようとしているのか。戦争には他の原因があり、他の目的と根拠があるのだ。

### 誰が戦争の責任者か？

ある人々は言う、戦争の原因について私たちは、多分、知らない。しかしその責任者は誰か、これは明白ではないか！ そして責任者の処罰が必要である。

しかし誰がいったい責任者なのか？

ロシア人にたずねれば、彼は「ドイツだ！ ドイツが最初に宣戦を布告したのだから張本人だ。」と言う。ドイツ人にたずねれば、彼は「それは間違っている！ 嘘だ！ 我々、ドイツ人は、戦争を望んでいなかったし、交渉をのぼしていたのだ。しかしロシア政府が最初に動員を布告したのだ。従って、張本人はロシアだ！」と言う。「間違いだ」とロシアの＜同盟＞が叫ぶ。「ロシア政府が動員を布告したのは、最後通告およびオーストリア政府によりセルビアに伝えられた要求に対するものである。張本人はオーストリアだ。」

しかしオーストリアは、ロシアとロシアの陰に立つイギリスのせいになっている。だからこれら全ての、白、赤、青、灰、黄色の戦争に関する政府発行書を手に取り読んでご覧なさい、そこには手紙、電信、政府の＜ノート＞（要求）が集められておりますから。10年このかた現在の列強が互いにあらゆる手段で、中国、ペルシャ、トルコ、アフリカの各地などを強奪するために競争していたことを思い出せば、戦争前、長き年月すべての国の政府が互いに悪知恵をしぼり、外交交渉を行っていたが、戦争の準備を密かにしていたことが、皆さんに明白になるのです。＜大の＞親友を装っていたが、自身が心がけていたことは唯一、より抜け目なく他の強国をだますことであり、イギリス人にドイツ人を、ドイツ人にロシア人を、ロシア人にオーストリア人……をけしかけるのである。そして、それとともにそれぞれの政府は自己の人民をだましたのである。

何年にもわたり戦争の準備をし、非常に多額の人民の金をこの準備に消費した。すべての資本主義国における人民の金はどこにいったのか？ 学校へ？ 病院へ？ 労働者の保険に？ 無産の民のための安い住宅に？ 畑や道の改善のためか？ 人民のすべての様々な要求のためか？ 全然そのようなことはなかったのだ！

人民の金は戦費や流血の結末の準備に消えてしまったのだ。

国有財産は空になり、税金、租税は増加した。軍需のためにはどんなことも辞さなかった。流血の武力衝突に同様に準備体制をとったのは、ドイツ、ロシア、イギリスおよびベルギーの各政府であった。しかし現在、孤児のふりをしているのだ！

民衆、常識のある働く民衆は、本当によく知っているのだ。人民の金がどこにいったか、租税や税金があつめられ、何のためにツァーリやドイツ皇帝、イギリスやフランスの資本家に軍艦や機関銃をつくったのか知っているのだ……我々のところ、ロシアで、何が行われているか、さらに汚れた金の半分が＜建設者＞のふところに張り付いていることを知っている……

誰が戦争の準備をしたのかを、なぜ今、突然忘れるのか？ 戦争責任は、ドイツの労働者、農民にあり、自分達固有の、役に立たない、打算的な政府でないと、なぜ考えるのか？ 違う、もし責任のある者を探すのであれば、率直かつ正直にこう言うべきだ、「現代の戦争では、すべて闘っている強国の各政府は、同様に責任がある。戦争責任者は、資本家、銀行家、地主達であり、連中のパトロンや友人達であるツァーリ、国王、ドイツ皇帝で大臣や外交官も含まれる。」

彼らすべては、共通の強盗同様な悪党集団である。彼らが心配しているのは民衆ではなく、自分達の利益である。戦争が必要なのは民衆ではなく、連中のふところなのだ。このことは、彼らが災いの話をしたために自らの＜外国の政策＞によりわが身に流血の不幸を呼び招いたのであった。しかし人民には、「行って、死ね！」であった。わが身に不幸を呼び招き、自らが裏切った＜祖国を救え＞である。＜祖国の栄光のために＞死ね、すべての不正、侮辱、屈辱を忘れろ……政府の政策が善行をもたらさないと、戦争前夜に君が既に分かったことを忘れろ。将校が一兵卒の＜横っ面をはった＞時、たった昨日おまえが憤慨したこと、自国の民衆の無権利を呪ったことを絶対に思い起こすな……今は戦争だ、今、国は＜一体＞でなければならない！……屈辱や迫害、主人の鉄面皮や強欲について記憶反対！ 戦争なんだ！ 工場主・搾取者達は君の＜兄弟＞だ、君と同じ困窮者であるドイツの労働者は君の＜不具戴天＞だと、もし君に言ったとしたら、昨日ならにやりと笑ったであろう。昨日ならまだ君は、地主、工場主、金持ち・主人達の利益のために自分の命を提供するよう君にすすめることを考えついた＜助言者＞に、「とっとと失せろ」と言ったであろう。しかし今日は戦争だ、そうすると君は、君自身と同様、運命に見放された労働者、農民である＜敵＞を切り裂き、不具にし、殺すだろう……君達の共通の敵——百万長者のために、君は自らの命を捧げ、他国の同志の生命を滅ぼす。それが世界戦争の真の責任者の意志であり、資本家階級の政府、資本のご機嫌取りとその友人達の意志なのだ！

### 危機に瀕する祖国！

しかし如何にしたらよいのか？ 祖国が攻撃された場合、祖国が危機に瀕している時、闘わないことはできないであろう？

＜祖国のために＞命を捧げようと集まった人自身にたずねてみることにし、真面目に良心に従ってきく、「いったいそのような祖国が労働者やすべての無産の民にあるだろうか？」。それはあるのだろうか？ あればよいのだが、果たして、＜亡命者＞、無産者、失業者が、ひょっとしたら＜見知らぬ国＞が母国より優しい継母になってくれるだろうと、生地をあとにし、信じ、期待しながら、毎年あらゆる国から見知らぬ土地に、引きずられて行ったのだろうか？ 本当に我々のロシアでは、数十万の腹をすかせ、無一文の貧しい＜移民＞がいるのだろうか？

祖国があるのは、将軍、地主、商人、工場主達やはちきれそうにいっぱい詰まっている財布をふところに抱えている連中なのだ。彼らや富者、金持ちに＜祖国＞は数々の権利および特権を与え、連中のことを国家権力は心配している。

しかし、いったい何を＜祖国＞は労働者に与えるだろうか？ ロシアの労働者にか、ドイツの労働者にか、フランスの労働者にか？ 日々の糧のために闘い、貧困と無権利との闘い、主人、地主、家主達の迫害、侮辱、苦悩、病気、屈辱……牢獄へぶち込まれるのも頻繁だ！ ロシアでは懲役、流刑等が行われている……まさに、これこそが現在の祖国が

なす、自分の息子達、ロシアの富を自らの手で創造している者達、命を捧げ自ら戦争の栄光を買った者達への恵みなのだ……

無産者達にとって祖国は、母ではないが、継母だ……そしてそれにもかかわらず、大勢が言う、「祖国が、祖国の土地を自らの労働の汗にて潤す我々を——その誠実な息子達を甘やかさないでほしい、我らは我らの土地を愛す！ 我らは、自らの民衆を、敵・異国人達の侵入から守り、敵・異教徒から我らが父達の信仰を救おう！」

しかし、いったい現代の戦争が、ヨーロッパ列強の戦争が、敵・異教徒達の間で行われているのだろうか？ 様々な民族間で？ もっと近づいて監視してご覧なさい。誰が互いに戦っているのか、正教徒がカトリック教徒と、カトリック教徒がルーテル派信徒とか？ クリスチャンがイスラム教徒とか？ そうではない！ この戦争では全てが入り混じっているのだ。正教徒のロシア人は、正教徒のブルガリア人とオーストリア人を撃ち、カトリック・フランス人はカトリック・ドイツ人を殺す。イスラム教徒はクリスチャンがイスラム教徒をねらうのを助け、ユダヤはユダヤを、ポーランド人はポーランド人を殺すのだ……

戦争が行われるのは、宗教の異なる人々の間でもなく、習慣、言語や風習の異なる民族の間でもなく、**国家間**であり、資本主義列強間なのだ。そのような列強それぞれが飲み込んだのは一民族だけではなく、奪ったのも隣人の土地ひとかけらだけではないのだ……そのような民族や人民をロシアでよく見かけるでしょうに！

オーストリアでも同様である。ドイツも遅れなかったし、必要なときにポーランドの一部を奪い、デンマーク人のホルシュタインを取り上げ、フランスのアルザスを奪回した。ところで、＜海の主権者＞——イギリスは？ イギリスは、自らの帝國的支配の下で、いったい誰かを引っ張って行かなかったことがあったか、インド人を、黒人を、オーストラリア人を、島の先住民達を……

列強は自分自身を＜境界線＞で囲み、その範囲にまさに様々な種族や民族を追い込み、そして「**ほれ、お前達の祖国だ！**」と表明した。平和時には、「我々の法律に従ってくださいよ」、しかし戦争がくると、「皆さんの義務は、我々が皆さんに押しつけた祖国のために死ぬことだ！……」

互いに争う＜偉大な列強＞は、幾つもの民族や国民を抑圧している。ロシアは、ユダヤ人、ウクライナ人、ポーランド人、フィンランド人と多くのその他の人々を、抑圧し、ドイツは、ポーランド人、オランダ人等、イギリスとフランスは、植民地で何千万、何億万人も抑圧している。戦争が行われるのは、人民の自由のためではなく、自国語の自由と権利のためでもなく、労働者階級にとって有益な統一した諸制度のためでもない。否、戦争が行われるのは、列強が如何に沢山の他民族を抑圧するか、その＜権利＞のためなのだ。戦争を行うのは、略奪者達が獲物を分配するためである。

野蛮な光景が起こる——列強の指令により、単一民族、単一言語、単一宗教の人々が互いに殺し合い、不具にし合い、畑を踏みつぶす……ロシアの農民・ウクライナ人は、オーストラリアからの農民・ウクライナ人の額にねらいをつけ、ロシア領ポーランドからの労

働者は、ドイツからの労働者ポーランド人に機関銃を向ける……45 年前アルザス人達は、  
＜麗しきフランス＞の栄光のために死んだ。今、彼らはドイツの鷲軍旗の下に＜自己の祖国＞を守っている。ところが誰が知っているのか？ もしく同盟＞に勝利がもたらされていたとしたら、次の戦争でアルザス人がフランスの＜祖国＞のために、再び死ぬことはなかったのに！……

またイギリスやフランスが自分達の植民地から何回にも分けて連れてきた、アフリカ人、インド人の全ての兵隊達に、もし思いを起こせば、どのような＜祖国＞のために彼らは死ぬのであろうか？ かれらの祖国は、ヨーロッパから遠い遠い国なのだ。そして何が彼らの＜祖国＞に残ったのだろうか、ヨーロッパ人がそこに侵入し、＜列強＞が自らのために彼らを炎と剣で征服した後には？ 彼らには＜祖国＞以上のものはないが、民衆を抑圧しているブルジョアジーの栄光のために死ななければならないのだ。

しかし、資本主義国家により侵略され、戦った民族だけが祖国がないのではなく、ロシア、ドイツ、イギリスの大地の＜誠実な息子達＞にも祖国がなく、それはこの息子達がただ単に人民の子供達だからなのだ。もし何千万人が雇われた奴隷で、昼夜を問わず資本家集団のために働いているとすれば、祖国のためとは何なのか？ もしこれらの何千万人も労働者が、自らの鎖以外に失う物がないとすれば、祖国のためとは何なのか？ もし自らの国政の管理、法律の発布、国民経済の監督、国有財産の管理を行うのが人民ではなく、旦那連中や金持・搾取者集団ならば、祖国のためとは何なのか？

祖国を守り、そのために死ぬ前に、自らのために、人民のために自分の国を、母なる祖国を勝ち取ることが間違いだろうか？ 外部の敵・ドイツ人に向かって行く代わりに、内部の敵を片づける、つまりロシア人民の全ての弾圧者と抑圧者、自らの有害で利己的な政策により人民を流血の虐殺に陥れた者どもを追い出すことがさらに利口ではないのだろうか？ もしドイツ人民が、ロシアを＜ツァーリズム＞から＜解放＞するために前進する代わりに、自分流に自分達のドイツ皇帝や自己の資本家および地主に報復したら、それはもっと利口ではないだろうか？

自分達の大砲をドイツ人民に向ける代わりに、フランス人のために自分達の最も身近な敵を祖国から＜一掃＞することはより利口ではないのだろうか？

＜祖国＞を守りながら、労働者や農民が母国語を他国の抑圧から守り、自らの自由を農奴制擁護地主やツァーリから守った時代があった。しかし現在では、資本家階級は、最も自由な国々においてさえ自分達の手にて全ての富と全ての権力を獲得したが、ロシアでは貴族達——地主・農奴制擁護地主どもが資本家と一緒に人民を抑圧している。今や全世界の資本家達は、様々な国の労働者を搾取、抑圧する各同盟に結集している。

資本家は、全世界の労働者に対する自分達の権力を強化しようと、ある国の労働者を他の国の労働者に扇動している。資本家が戦争を行うのは、獲物の配分と労働者を分裂させるやり方で労働者を弱めるのが目的である。それ故、現在行われている戦争では、自由および祖国の擁護とのたまう連中が嘘をついているのだ。自由と権力を擁護し、この戦争に

おける労働者階級の大義を守るためには、唯一の道があるだけであり、それは、あらゆる国の労働者間の合意と資本家に対する労働者の統一闘争、社会主義社会を獲得する闘いである。

### もし我らを打ち破れば、悪化する

ぼろもうけに関する大業が行われている時、全ての国、全ての種族と民族の資本家達は、＜親しい兄弟＞となり、皆瓜二つである。そして労働者達は平穏な時にはこのことをよく理解している。ほかのことも彼らは知っている、つまり労働者の利益、労働者の大義に対する＜敵＞は、隣の他国の労働者ではなく、境界のこちら側あるいはあちら側にいる経営者・資本家連中である。何故、ツァーリあるいはドイツ皇帝の旗のもとに民衆を召集する時、政府が戦争を企てる時、労働者は全てを忘れなければならないのか、生活を通じての経験は何を彼に教えたのだろうか？ 祖国の企業主、商人階級、工場主達のふところの利益が、無権利で極度に困窮しているプロレタリアート、ドイツ人達やオーストリア人達に共通する労働者の大義よりも貴重であるか、それに近いかということについて、言葉に照らし合わせてみる必要がある。

### 戦争の原因

しかし戦争は、忌まわしく、卑劣な行動であり、誰が戦争を擁護しようとするのか！ もし戦争が始まり、もしここにその戦争が居合わせているとしたら、どうして戦わずにおれようか？

まさに、肝心なのはこの点で答をさがすことである。何故戦争になったのか？ 何により戦争は起こされたのか？ どんな原因で？

様々な原因が戦争にはある。土地のために争い、自分達の地方の自由のために争ったことが以前あった。しかし現在の戦争には、その戦争を生んだのが資本主義であるという、自己の原因がある。資本主義的経済とは、資本、工場、土地が、国内において比較的小集団の間で分配されているが、他の人々にあるのは、自らを養うための労働する手のみであり、その手も彼らは主人達に、つまり資本家、工場主、小地主連中に売っているような経済なのである。

全ての国で資本主義経済が発展するにつれて、資本にとって自国内では窮屈になってくる。より多くの利益、利息を得るためには、資本のために商品販売の市場が成長し、拡大することが不可欠であり、新しい場所、国、植民地が必要で、そこへは資本家が自分のため込んだ資本を儲かるように出すことができ、かつ、そこから工場主達が＜原料＞、金属、鉱石、綿花等の商品加工用材料が入手できることが必要である。

現在互いに争っている巨大な資本主義列強は、全て同じように世界的な貿易市場や植民地を必要としている。そしてそれぞれの列強は、如何に構わず植民地と他の国々の市場を征服するか、弱小および従属国家における外交的なペテンか、政府と資本家達のあらゆる可能な買収を用いるか、あるいは武力にて行うかということのみを考えている。



列強の植民地および世界市場に対する支配権がもとで、現在の巨大な国家間で紛争が燃え上がる。それぞれの列強は貿易市場における独占権（つまり一支配）を持ちたがり、全ての利益を独り占めしたがつている。はじめ、列強は＜外交交渉＞により紛争解決をはかろうとし、この時それぞれが他の列強を騙し、裏をかこうと努力する。平和時には、外交官の交渉は決して中止されない。しかしこのことについては人民に知らされない。資本主義国家間の紛争は、人民のためではなく、資本家の利益のために行われる。それは、資本家・私有財産所有者である彼らが、国家をいわゆる植民地と＜帝国主義的＞政策の道に押しやるのである。戦争になるか否かは、彼らが決める。それでは、人民は何を？ このことだけは知っておけ、「御旗のもとに招いていることは、死ね！……」なのだ。

外交官達がお互い話し合いに成功しない場合、今では戦争をしかけると脅す。

外交官達の肩の陰には常に鉄砲が備えられているので、国家間には確固とした平和はなく、あるのは唯＜武装された平和＞であり、つまりその平和な時期にそれぞれの国家が戦争に向け強力に準備しているのだ……

外交官達の交渉については、労働者も、全ての人民も何も知らない。これらの交渉は＜秘密＞に行われる。しかし資本家、銀行家、地主連中は、つまり彼らのために＜戦争政策＞が行われるので、どのように外交官の仕事が進んでいるか常に知っている。そしてほんの少し気づくことは、自分達の祖国の外交官達が、ふところの利益を守り抜くことができなかったこと、他の列強の資本家達の利益が交渉において勝っていることであり、すぐさま戦争を起こそうとしており、「警戒！ 祖国は危機にあり！ 兄弟・労働者諸君、全ての恨みを忘れよう、過去のことは忘れよう！ 統一祖国を救おう！……我ら祖国の栄光のために命を捧げよう！」とのたまう。

政府は資本家達の非難に耳を傾けるが、聞かないわけにはいかない、それは政府自体が資本家や地主からなっており、政府は彼らに奉仕しており、彼らの利益と強奪を保護しているからである……政府は資本の望みどおりに隣人を＜挑発＞し始め、外交官達の交渉は＜先鋭化＞している……戦争がそこまで迫っているのが見えるのだ！……

しかし民衆には真実を語らず、我々の工場経営者や工場主、我々の銀行家と商人は、より多くの利益を得ることを望んでおり、我々のいずれかの植民地、どこかの国を略奪する＜権利＞を我々の資本家達のために強化できる様、殴り合うのである。これは＜具合の悪い＞ことである。民衆はそのために命を落としには行かない。だから祖国が危機にあると叫ぶのだ！ ツァーリズムあるいはドイツ皇帝主義から隣国の人民を解放するために行うという寓話を考えだすのだ！……。

資本家、地主、銀行家どもは自分達の書斎に腰をおろし、三倍もの利益を軍隊への納入から自分のふところにしまい込み、戦争の結末を待っているのだ。その一方で民衆は戦い、民衆は滅亡に瀕しており、民衆は自己の命を犠牲にしているのである。そして何のために？ 彼らの祖国の搾取者、主人達、工場経営者地主や工場主の紳士諸氏が、さらによく、幸福で、裕福で、豪華に生きられる様にと……。

民衆は信じやすい！……知識に乏しい。自分個人の利益の意味をまだ理解していない。しかし資本家と政府の召使達は、それを利用しているのだ。

この様に、戦争の原因は、世界市場における民族資本の闘争なのである。ロシアの資本は、ドイツの資本とはほかならぬロシアで戦っており、オーストリア資本とはバルカンで戦っているが、イギリスやフランス資本は、ドイツ資本とアフリカ、アジアで小国家のそれぞれの市場で戦っている。それぞれの資本は衝突し合い、争い、互いに追い出そうと躍起になっている。それぞれが単独で君臨し、自己のもとに＜独占権＞を維持したがっており、商品生産では労働者から、商品販売では購入者から、とことん搾取することを願っている。

資本主義の発達が早ければ早いほど、この戦いに参加する国家が多ければ多いほど、その戦いは先鋭化する。そして戦いはより避けられないものとなる。

現代の戦争が最後のものであることで、自分自身を慰めるべきではない。手中に国家権力を遮っている資本家・地主達が存在する間は、戦争は続くのである。現代の戦争と同じように、その様な戦争の目的はただ一つ、＜祖国＞の工場主や商人達にさらに素晴らしい儲けを確保するためである。この目的に血を流す価値があるだろうか？ そのために仲間である他国の労働者を殺し、都市を破壊し、農民達の平穏な村落が零落している時、労働者達が利口に行動しているのだろうか？……はたして労働者は、戦争のために、おのれの私的搾取者や弾圧者・主人達の儲けや利益のため自己の命を自主的に捧げるほど、彼らを＜好きに＞なれるのであろうか？

### 何をなすべきか？

戦争の真の原因、その目的を理解すべきであり、「今、何をなすべきか？」という他の問題がもちあがってくる。今、流血の虐殺をどのようにやめるのか？ 将来どのように民衆を、新しい衝突やいがみ合い、新たな戦争から解放するのか？

これらの問題の解答を見つける前に、自分自身に一つだけ分からせる必要がある、それは、資本主義が存在する限り、土地、製造所、工場等に対する私有制が続く限り、市民が、持つ者と持たざる者に、国家における権力を握っている資本家に、無権限な雇用労働者に分けられる限り、資本家が世界市場における自己の利益のために互いに戦う限り、それぞれの戦争は不可避であるということなのだ。

戦争が止められるのは、資本家の権力が破れた時、民衆に害を与え、民衆を流血の武力衝突の道に追いやる可能性が所有者・搾取者から奪い取られた時だけである。戦争を生み出すのは、不公平で、不正な資本主義社会制度である。戦争を止めるためには、社会制度を変革することが必要である。戦争を止めるには、資本家紳士連中からすべて製造所、すべての工場を取り上げる必要があり、地主からは土地を、私的所有者からは炭坑と鉱山を、資本家らは銀行を奪い取る必要があり、かつそのすべての財産を全人民的所有に変える必要がある。

戦争を止めるためには、民衆、労働者階級が、新しい、より公正な社会主義世界を獲得する必要がある。

民衆自らすべての国民的財産を手に入れ、国民経済国有財産を自ら管理し、すべての市民の需要と欲求のことを自ら考え、生まれ故郷の繁栄のため努力し、民族相互の兄弟的同盟の獲得に努める時、戦争はもはや起こらないであろう。その時は、隣人・人民は互いに零落することではなく、＜侵略的政策＞を遂行する意味がなくなり、自由な勤労人民の平和な国は、常に互いの話し合いにより合意ができるのだ！ その時は、戦争の主な責任者 - 戦争の後には自分のふところをはちきれんばかりに満ちし、数百万の人々を破滅させた資本家の徒党は、それ以上は生じないであろう！……これは、労働者にとり重要な課題である。

しかし、問題は残るし、他の身近な焦眉の課題が残るのだ、つまり、いかに現在の兄弟殺し戦争を止めるか？ 何をなすべきか？ どうしようか？

答えはある。そして、特に重要なことは、答は一つであり、かつそれは万国の労働者に対するものである。その曰く、政府が他の国の兄弟に兄弟を、労働者の同志に労働者の同志を派遣すれば、世界のすべての労働者にとり共通なものとして敵は残り、ロシア、ドイツ、フランス、イギリスのそれぞれの労働者の利益は一つで、かつ同じものとなる。

平和を勝ち取るためには、第一に戦争責任者達に答えるよう要求する必要がある。一体だれが、ツァーリやドイツ皇帝ではないのか、彼らの外交官と大臣なのか、これらすべて従順な資本の御機嫌取り達か、誰か、彼らではないのか、流血の災難の責任者は？

彼らに答えさせよう！

無能な政府、金持ち・豪商の庇護者を追放せよ！

ツァーリ、国王、皇帝、ドイツ皇帝を倒せ！ 彼らの大臣、憲兵、賄賂役人を打倒せよ！

国家における権力は人民のものであるべきだ！

平和を望む者や犯罪的戦争に飽食させられた者は、人民の外部ではなく内部の敵と戦う兵士の隊列に加わるべきだ。その者は自分自身にこう言うべきだ、「クレストヴニツ家、グチコフ家、モロゾフ家、プリシュケヴィッチ家の紳士諸氏と連中すべての仲間達の栄光のために死ぬより、我が民衆の自由のため、労働者階級の権利のため、労働者の事業の勝利のために我が命を捧げん！……」と。

ロシア人やドイツ人、他のすべての闘っている国々の労働者が自分にその様に言い聞かせれば、世界には流血が続けられる力がもはやなくなり、ひとりで平和はやってくるのだ。

唯一必要なことは、それぞれの兵士が戦場にて、労働者各人が作業場にて自分自身に明らかにすべきことは、「我が敵は、自国で我が家にいる自分のような権利を奪われた者ではないこと。資本により誰が抑圧されているか、誰の命が、切実な糧を得るための闘いであるのかを。

我が敵は、自分自身の国の中に存在する。そしてこの敵は、あらゆる労働者の共通の敵なのだ。この敵は、貪欲で、裏切りで、階級的な政府である。この敵は、労働者階級の無権利である。労働者同志、敵軍の兵卒よ！　今や我は知る、「君は、我が敵対者にあらず！　手をさしのべよ、同志！　君を含め我ら双方は、虚偽と弾圧の犠牲者なのだ。我らの共通な主敵は、背後にあり、我らの小銃と機関銃の銃口を、我らの真の、我らの共通な敵の方に向けよう……」。

そして、我らの勇敢な司令官、元帥や将軍がすべて我らからあわてて逃げるだろう！…  
…。

戦いに行こう、それぞれが自分の国、我らの抑圧者に向かって、祖国から人民の真の敵、ツァーリ、国王、皇帝を一掃しよう！

我らの手に権力が握られたその時、我らが自らの平和条約を、負けた資本家の頭上で結ぶのだ……。

その様な道がまさに、人民の**確固とした平和**を目指し、労働者の事業の勝利のため、資本主義社会を公平で、より優れた**すべての国の労働者の社会主義的兄弟関係**の世界にかえるために闘うことを望む者がとるところなのだ。

この道に呼んでいるのは、同志諸君なのだ、ロシア、ドイツ、イギリス、フランス、イタリア、ブルガリアと他の諸国家の組織された自覚のある労働者・社会主義者達、社会主義者で労働者の事業に忠実で、偉大な労働者の誓い——「**万国の労働者、団結せよ！**」を忘れなかった社会主義者達なのだ。

革命的労働者組織の赤旗の下へ急げ！

大義のために、同志諸君、事業のために！

資本の名誉のための犠牲はもうたくさんだ！

我らの共通の敵は、背後にあり！　戦争責任者を打倒せよ！　資本家とツァーリどもを打倒せよ！　我らが祖国の解放と確固たる平和のために戦いに行こう！

**間近い待望の社会主義革命万歳！各人民の社会主義的兄弟関係の勝利万歳！**

## 註

- (1) A. K. 『誰に戦争が必要なのか？』ソビエト全ロシア中央執行委員会出版、  
1916

A. K. *Кому нужна война?* Издательство Всероссийского Центрального  
Исполнительного Комитета Советов 1916

## 第5章 母性原理

コロнтаイの母性論について書かれた著述としてはあの名著である『社会と母性』が思い浮かぶ。しかし、この名著が出版される2年ほど前（1914年）、形式は異なるが、内容的にはいわば『社会と母性』のダイジェスト版ともいえる母性論——『母親労働者』<sup>(1)</sup>が執筆されており、14の章に分かれ、物語風にきわめて分かりやすく書かれている。筆者の類推であるが、おそらく職場のサークルとか、労働者の集会での教宣用に執筆されたものかも知れない。この著作はコロнтаイの母性論のエッセンスともいわれるべきもので、各章の見出しの幾つかは後年出版された『社会と母性』に対応している。初めの部分にマーシェニカという同一の名前の女性を幾人か登場させ、それぞれの場合をオムニバス風にとりあげ、1910年代の女性労働者の生活ぶりをリアルに描いている。この著作は旧レーニン図書館のリストには存在せず、1991年ソ連崩壊直前に筆者が西側で手に入れた貴重な資料である。後述する『社会と母性』をより深く理解するためにも参考となるのでここで引用する。なお1914年にはこの『母親労働者』のほかに既出のもう一つ別の論文である『誰にとって戦争は必要か？』を刊行している。この二つの論文はそれぞれが生と死をあらわし、際だったコントラストをなしているが、内容的には表裏一体である。つまり『母親労働者』では、母性の意義とその擁護を訴え、母性を守ることが女性の人生にとっても最大限の充実感を与えてくれる一要素であることを主張しそれによって育まれた母性文化は究極の破局に向かう「力の文明」を母性文明に立脚した「和の文明」への転換には不可欠でありそこに歴史的意義をみとめることができる。『誰にとって戦争は必要か？』では、その母性を破壊するものは、女性労働の共通の敵である搾取する権力者であり、その権力者が、いたずらに各国の労働者を戦地に誘い、労働者自身を戦争に巻き込み、お互いをたたかわせようとするものと同一であるという事実を鋭く暴露しているのである。このことからわかるように『誰にとって戦争は必要か？』はいわば形を変えたもう一つの母性論といっても過言ではない。

ここでは貴重な論文として資料的価値大であるのであえて抱き合わせで掲載しておく。

### 母親労働者<sup>(1)</sup>

#### (1) 工場長の妻であるマーシェニカ

マーシェニカは妊娠している。当の工場長の家ではお祭気分の物々しい気分が漂っていた。もちろんマーシェニカは夫に後継者を贈ろうとしているのだ。労働者の手によって創られた富を伝えるのはもう沢山なのだが……。

医者はいへんマーシェニカを大切にした。マーシェニカを疲れさせないようにし、重いものを持ち上げさせないようにした。彼女の好みにあったものを食べさせるようにした。果物がほしいのなら、さあ、お食べなさい。新鮮なイクラがほしいなら、それを食べさせなさい、と。

大切なことは、マーシェニカが心配したり苦しまないことなのだ。

そうすれば子どもは丈夫で健康で、一族は安泰で、マーシェニカは自分の健康をたもつことができるのだ。

財布に金貨やお札が詰まっている工場長の家庭では、そういうふうになれ、妊婦をそのように扱っていた。

そしてマーシェニカ奥様は大事にされた。

マーシェニカ、疲れてはいけませんよ！ 「マーシェニカ、ソファをうごかしてはいけませんよ」などと、マーシェニカ奥様はまわりのものから言われたりする。

妊婦は我々にとって神聖なものだーとブルジョア陣営のパリサイ人の偽善者たちは確信している。昔の人々はそういうふうに使っていたのだろうか？

## (2) 洗濯女のマーシェニカ

工場長夫人が住んでいる同じ家の三階の小部屋の更紗のカーテンの向こうには洗濯女で日雇い労働者である別のマーシェニカが身を寄せていた。マーシェニカは八カ月の身重であった。しかし彼女がもし、「マーシェニカ、おまえは重いものをもつ必要はないよ。おまえは赤ん坊や自分のためや、人類のために自分を大切にしなければダメだよ。おまえは身重だ、つまりおまえは世間の眼からみたら神聖なのだ」ということをきかされたら、どんなに驚いて大きな眼を見張るだろうか。

マーシェニカはそういう人を異常者か、悪い冗談を言う人だと思うだろう。いったい労働者階級の女がもし妊娠したら〈神聖〉なものなのか？ いったいどこでこんなことが見られるのか？ 洗濯女のマーシェニカはそこで主人から二着の毛皮の外套を預かり、引きずっていく。貧しさが押し寄せてきているのに出口はまったくなく、無理に稼ぎにでていくありさまが人々の眼にもうつるが、そういうありさまを、工場主や主人たちに自分たちの労働力を売ることを余儀なくされている他の数十万の無産階級の女たちとともに、彼女は納得できるのであろうか……。

妊娠中大切なことは安らかな眠り、質のよい食べ物、清らかな空気とほどほどの運動だと医者は教えている。そして資本の奴隷である数十万の雇われ労働者とともに、そう言っているものの顔を見てもう一度笑ってしまうのだ。ほどほどの運動だって？ 清らかな空気だって？ 健康、ご馳走だって？ 安らかな眠りだって？ 工場の持ち主の奥さんたちや、マーシェニカ奥様だけにふさわしいこれらの恵みを労働者階級の女たちのうちのいったい誰が知っているというのか？

夜のとばりが朝焼けと闘っていて、マーシェニカ奥様はまだ甘い夢を見ている早朝、洗濯女のマーシェニカはせまいベッドから起きて、じめじめした暗い洗濯室に行った。そこでは両足は湿った床でふやけ、昨日の溜まり水はまだ乾かず、汚れた下着のすえたような臭いが顔を直撃した……。

洗濯女マーシェニカは飽き飽きとした洗濯室にいやいやのろのろと歩いていく。彼女の背後では貧困が彼女をせきたてていた。マーシェニカの夫は労働者であった。給金が少なかった

たので、二人では食べていけなかった。そこでマーシェニカは黙って、歯を食いしばってお産の瀬戸際まで洗濯桶の前に立ち尽くしてがんばっているのだ……。

マーシェニカの健康は工場の旦那たちが労働者の女たちについてよく言いたがっているように、鉄のようではなかった。洗濯桶の前での長く立ったままの姿勢のため、マーシェニカの足は膨らんだ血管が浮き上がり、歩き方はのろのろして鈍くなっていた……。マーシェニカの眼の下の皮膚はたるみ、両手はむくみ、夜はとうにぐっすり眠れなくなっていた……。マーシェニカがぬれた下着の入った重い籠を運ぶたびに、たおれないように壁にもたれかかった。彼女の頭はぐらぐらし、眼のなかは真っ暗になってしまうのだ。……何回かマーシェニカの背骨はずきずき痛み、両足は、まるで鉛を流し込んだように動かなかった……。休憩のため、しばらく横になったほうがいいのだが……しかしこれが雇われ労働者にとって〈許されるのであろうか〉？ そんな〈思いやり〉なんぞとんでもない！ 奥様なんかじゃないんだから！

ただマーシェニカは黙って自分の辛い生活にたえなければならない。

〈神聖〉なのはあの身ごもっている女だけなのだ。その女の背中には貧乏がせきたてているなんて厳しいことはないのだ。

### (3) 小間使いのマーシャ

奥様のマーシェニカは家に村から連れてきた〈小間使い〉を雇っていた。

マーシェニカ奥様はこの小娘の騒々しい笑い声や、お下げ髪が膝より短かくて、翼の軽い小鳥のように一人一人に気に入るように家のなかを飛び回るのを嫌がっていた。素敵な少女だった！ 給料は月3ルーブルであつたが、仕事は3人分の仕事をした。奥様は褒めなかった。

工場長の〈旦那〉は彼女をじろじろ眺め回した。今までよりますます注意深くながめるようになってきた。経験のない田舎娘は不幸を予測できなかった。旦那はますます優しくなった。医者〈奥様〉を心配させることを禁じた。安静を処方した。赤ん坊を安らかに産み落とすほうがいい——その方が赤ん坊には害がないのだ。一方小間使いは旦那の凝視で畏にかかったようになってしまった。この小間使いもマーシャという名であつた……騙すのは簡単であつた！……少女は馬鹿で、ものを知らなかった。びっくりさせることは容易であつた。恐怖から全てが始まっていった。

そしてマーシャは身ごもった。笑いはなくなり、すっかりやつれた。辛い心配ごとで昼となく夜となく心を痛めた。

奥様のマーシェニカに知られてしまった。スキャンダルがおきた。小間使いのマーシャは門の外に24時間追い出されてしまった。

町中を歩き回った。——友だちもなく、自分の居場所もなかった。こんな彼女を誰が自分の家に連れていくだろうか？

マーシャは家もなく、パンもなく、手助けもなくただ歩き回るだけであつた。川を渡って歩き回った。暗い川を見ると、顔を背け、現実を見ないようにした。不気味であつた……冷た

い、黒ぐろとした、川の深さは人を引きずり込むようで心を不安にした……。

#### (4) 染色女工のマーシャ

工場の染色部門でハプニングがあった。意識を失った女工が運び出されたのだ。彼女に何が起こったのか？ 蒸気で中毒したのか？ 有毒ガスが流れなかったのだろうか？ 新米でもないのに！ そろそろ工場の悪条件に慣れてもよいのに……。

ーみんなくだらんことだーと医者はいった。ーわからないんですか？ 妊娠しているんだ！ 妊婦にはいつだってあらゆる気まぐれが起こりうるのだ。妊娠したからといって大目にみたらいかん。

彼女はまるで酔っぱらいのようにふらふらと歩いて工房の自分の場所に戻った。足がむくんでいうことをきかなかったのだ……冗談じゃないのだろうか？ 職場で毎日十時間も働いているなんて。有毒な蒸気のなかで、毒性のあるガスや煙のなかでそんなに働いているなんて。家に帰れば帰ったで、お母さん女工には休息があるのだろうか。家には子どもたちがおり、眼の见えないお婆さんが食事もしないで座って待っており、疲れた夫が工場から腹をすかせて足を引きずってもどってくる。みんなに腹一杯食べさせ、みんなのことを心配しなければならない。暁とともに真っ先に起きて立ち働き、最後に床につくまで働きづめ。……そこでまた残業が割り当てられた。工場の仕事はてきぱきとしなければならない。工場主は儲けを少しずつ貪欲にかき集めた。超過勤務時間に対しては1カペイカずつ割り増しされた。もし賛成できないなら、門の外に出ていけだった。幸い、失業者はこの世にたくさんいた。染色女工は工場長に休暇を頼み込んだ。

もうじきお産です。準備があります。子どもはまだ小さいし、家事は老婆の手にあります。とんでもない、と聞き入れようとしなかった。

一人一人の妊娠している女に休暇をやるくらいなら、工場を閉鎖した方が簡単だ。もし夫と寝なければ、みごもることもないだろう……。

人前で彼女は侮辱され、罵られた。

染色女工のマーシャは職場で最後の時間まで辛い思いをしなければならなかった。

ブルジョア社会の母性とはこのように思われているのだ。

#### (5) 出産

奥様のマーシェニカの出産は事件であった。休日であろうが、なかろうが、家中大騒ぎであった。医者や、産婆や付き添い看護婦でごった返していた。

赤ん坊は清潔で、柔らかいベッドで寝ていた。テーブルには花が飾ってあった。夫は手に接吻し、郵便配達人は手紙や電報をもってきた。司祭は感謝の祈りをした。

子どもはじょうぶで、体格もがっちりした子として生まれた。当然のことである。奥様のマーシェニカがいかに大切にされ、よく世話されたことか！

小間使いのマーシェニカもまたお産をする。更紗のカーテンの向こう側の片隅で、他の人々でごたごたしている部屋でお産をするのだ。



マーシェニカは辛かった。うめき声を枕でかき消そうとした。隣人はみんな労働者、彼らの眠りや最後の休息をとりあげることはよくないことだ。朝方になって、産婆がやってきた。赤ん坊を洗って、こざっぱりさせ、別の妊産婦の所へいった。マーシェニカは今や一人で部屋のなかに横たわっている。子どもを見つめている。なんとひ弱そうで、痩せこけて、しわだらけなんだろうか……彼の両目はまるで母親をとがめているようであった。そして悲しげに質問しているようであった。〈どうしてぼくを生んでしまったの？〉

マーシェニカは彼を見て、静かに聞こえないように泣いた……。

小間使いのマーシェニカは人気のない町外れの塙の下で子を生んだ。産院にいった頼んだが、はっきり断られた。別の産院にいったドアをたたいたが、聞き入れてもらえず、何かの書類を求められた。産んで立ち去った。ふらふらしながら歩いていった。ネッカチーフのなかに赤ん坊をくるんだ。どこへ？ いくべき所はなかった。黒々ぐろとした川が思い出された。川の深みは人を引きつけるような不気味な感じであった。朝になって巡査は水死人を引きずっていった。ブルジョア社会の〈母〉はこのように扱われている。

染色女工のマーシェニカの赤ん坊は死産であった。産まれてこなかったのだ。母胎の呼吸によって、まだ体内にいるときに蒸気によって中毒になっていた。お産は重かった。染色女工のマーシェニカ自身もかろうじてこの世に戻ってきたほどであった。

ところがつぎの日の夕方にはもう床から離れていた。身づくろいをし、掃除をし、料理をした。誰がいったい染色女工のマーシェニカにかかわって家をかたづけ、家事をするのか？ 子どもを誰が食べさせるのか？ 医者が命じたように奥様のマーシェニカが九日間もベッドのなかで体を休めたのはよいことだ。その時彼女の廻りの召使いはダンスを踊った……一体なぜ染色女工のマーシェニカが産後のひだちがよくなく、労働で重い婦人病にかかり、体を壊さなければならなかったのでしょうか？

誰が妊婦の労働者を大切にしてくれるのか？ 誰が彼女の肩から疲れて手に負えぬ重荷をとりはらってくれるのか？

〈神聖なる母性〉とは奥様のマーシェニカにだけ存在するのだ。

## (6) 母性の十字架

奥様のマーシェニカにとって、母性は喜びとお祭であった。

工場主の跡継ぎは乳母の世話や医師の監督の下に、明るい、清潔な子ども部屋ですくすくと育っていく。

もしもマーシェニカ自身のお乳が足りないときや、容姿を損なうことを嫌がるのなら、乳母を見つけるだろう。

奥様のマーシェニカは子どもと気晴らしをしたり、お客にいたり、店や劇場を廻ったり、ダンス・パーティにいたりする……子どもをみてる人がいるからできるのだ……

奥様のマーシェニカにとって、母性はお祭であり、気晴らしである。

染色女工や、織物工、洗濯女やゴム製造工などの労働者のマーシェニカ、数十万の労働者階

級の母親にとって、母性は十字架なのである。

工場のサイレンがなり、人々を仕事に招いている。しかし子どもは泣き叫んでいる。赤ん坊を投げ出すことができるであろうか？ 誰にあずけたらよいのだろうか？ 母親の労働者は乳を哺乳瓶に注ぎ、赤ん坊を老母や自分の年のいかない娘にあずける。職場に出かけようとするが、赤ん坊に対する心配ごとが心を苦しめる。年のいかない娘は進んでめんどろをみようとするが、実際お粥をやることも知らず、パンを口のなかに押しあてただけなのだ。奥様のマーシェニカの赤ん坊は日毎にすくすくと育っていく。まるで真っ白な砂糖や、真っ赤な林檎のように健康なのだ。

工場の労働者や、洗濯女や、手工業者の子どもは日毎に痩せ細っていく。赤ん坊は毎晩足をばたばたさせ、もがき、泣く。医者がやってきて、罵る。

どうして乳をあたえないのか？ どうしてくだらぬ育て方をするのか？ もし子どもが死んだら自分が悪いんだ。

十数万の母親労働者は自己弁護をしない。うなだれて立ったまま、密かに涙をぬぐう。まさか洗いざらい医者に言うであろうか？ 医者はみんな分かり、信じるであろうか？

#### (7) 大量に死ぬ

そして赤ん坊は死ぬ—雇用されている男女の労働者の子どもは大量に死ぬ……。

数百万の子どもの墓がある！

数百万の嘆きの母がいる！

死の鎌はまだ日の浅い春の花である子どもの命を摘みにでかけて、いったい誰の子どもの命を集めようとしているのであろうか？

金持ちの街区ではもちろん死の命の摘みとりを最小限にくい止める。

赤ん坊が温もりのなかで育ち、口にはいるものが母や雇った乳母の乳であれば元気にすくすく育つ。

王侯貴族の家庭では 100 人の新生児のなかで 6 人から 7 人の赤ん坊が死ぬ。労働者の家庭では 30 人から 45 人の新生児が死ぬ。

資本家が経営に当たり、労働者が労働力を売っているあらゆる国家では、多くの赤ん坊が死ぬ。

しかし最も大量に赤ん坊が死ぬのはロシアである。100 人の新生児のうちで生存者はつぎのとおりである。

ノルウェー	93 人
スイス	89 人
イギリスとフィンランド	88 人
フランス	86 人
オーストリーとドイツ	80 人
ロシア	72 人

ロシアではとりわけ工場や重工業の工場があるところでは 100 人につき 54 人も死んでいる場所や郡がある。大都市の町でお金持ちが住んでいるところでは 100 人の新生児のうちで 8 人から九人が死んでいるが、労働者街では 30 人から 31 人が死んでいる。どうしてプロレタリアートの子どもが大量に死ぬのか？

子どもが健康で強く、元気に育つには、新鮮な空気や、温もり、太陽、清潔さ、丁寧で細心の世話が必要である。子どもには母親の乳が必要である。それは子どもには欠くことができないもので、それを飲むことで丈夫になり、成長する。

労働者の家庭のなかで、いったい誰のところに今挙げたようなこと全てがあるであろうか？

労働者街においてみさかいのない死が強固に巣くうのは、ここでは貧しさに比例して人口の密集と湿気が支配しており、地下には太陽光線が射さず、狭いところは通常不潔で、労働者階級の母親が自分の神聖な義務を遂行できないし、赤ん坊について配慮することができないからである。

科学の検証によると、最も恐ろしい子どもの敵は〈人工授乳〉や母乳の欠乏なのである。牛乳で育てられた子どもは母乳を飲む子より、5 倍も多く死ぬ。もしも子どもが牛乳を飲まず、あらゆる他の食料を口にしていたら、15 倍多く死ぬ。

女性労働者は、工場や工房で働きながらどこで授乳することができるのであろうか？

牛乳を買うお金が十分にあればまだいいだろう。それももしなければ……実際商人はいったいどんな乳を母親労働者に売りつけるのか——水で粉末を薄めたりしたもの売りつけたりすることがある！……

こんな訳で、100 人の瀕死の赤ん坊のうちなんと 60 人もが消化不良で死んでしまう！別の原因で何人かがまた死んでしまうことになる。それは医者がいうように〈生存不可能〉ということである。それは死産だったり、重労働による早産だったり、胎内で子どもに害を与えていたり、工場のガスで中毒させていたりすることである……。

実際問題として労働者階級の女性が自分の母親としての義務を遂行できるのであろうか？

## (8) 被雇用労働と母性

女が家事とか家庭での手仕事しか知らなかった時代があったことはそれほど遠くない時代で、我々の祖母もまだ記憶している。

当時無産階級の女たちは仕事をせずに座っていた試しがなかった。料理をしたり、洗濯をしたり、織物をしたり、リネンを晒したり、菜園や畑で働いたりする家庭の仕事は重労働であった。しかし仕事は女性をゆりかごから引き離したり、厚い工場の壁によって女性を子どもから引き離したりしなかった……たとえその女性が貧乏であろうとも、自分の腕のなかで子どもを眠らせることができた。しかし時代は変わってしまった。

重工業の工場や軽工業の工場が発達して、工房が開かれた。貧困は女性を家から追い出した。工場はその鉄の爪で女性を誘い込んだ。しかし女性の後ろで門がボタンと閉まれば、女性には母性よ、さようならと言わなければならなかった。雇用労働は過去と未来の女性をどのようにわけなのか？ 経営者のための仕事は女性をどのように歪めてしまうのか！ もしも毎日ミシンを踏んでいるとするなら、その女性は重い子宮の病にかかるであろう。もしも彼女が繊維あるいは紡績工場やゴム製造や陶器工場やマッチ工場や化学工場にいくとするなら、有害な水蒸気や毒性のある物質との接触は母体のみならず、みごもった子どもまで中毒させる。もしも鉛や水銀関係の仕事をするなら、彼女は不妊になるか、死産をしたりする。もしも女性がタバコ工場でニコチンを吸ったら、彼女は子どもをダメにするか、自分の母乳で子どもを中毒させてしまう。彼女は手に負えないような重荷を引きずり、みごもったまま機械やスタンドの後ろに一昼夜の半分も立ち尽くしたり、女中になって奥様の命令に従って小走りに階段を上ったり、降ったりして、子どもを殺したり、子供に障害を与えたりする。今雇用された女性労働者ならこのようなおそろべき有害な仕事をするところがありうるし、妊娠中の女性にも授乳中の女性にもこのような手仕事があるのだ。女性労働者がこのような条件の下に生活している雇用労働は母性の墓場といえる。

#### (9) 出口はどこにあるのか？

女性労働者にとって赤ん坊が障害をもって生まれたり、未熟児出産だったり、大量に死産したりしたら、子どもを胎内ではぐくむことを恐れないであろうか？ 女性労働者は〈放任〉という名の下に、もし子どもを小さいときから投げ出さねばならなければ、あらゆる母性の苦しみを耐えるに値するであろうか？ もしも女性労働者にとって、好きなように子どもを育てたり、子どものことを心配したり、親として一人の人間を創造する義務を果たす可能性がなければ、苦しみに耐えるに値するであろうか？ 母性を拒絶することは心が広くないのではないか？

多くの女性労働者が妊娠を用心しはじめている。

母性の十字架を背負うことは手に負えない事柄である。

しかし出口はあるのか？ 労働者階級の女性はこの最後の喜びを失わなければならないのであろうか？ あまつさえ彼女たちは自分たちの生活に不満をもっており、工場は彼女たちから力を奪いとっているのに、彼女たちは母の喜びを得る権利さえ拒否し、あらゆる母性の幸せを奥様のマーシェニカにだけ譲らねばならないのであろうか？

闘わずして引き下がるのであろうか？……自然によって動物にあたえられる最後の贈り物を受ける権利を固く守ろうとつとめないのだろうか？

はたして別の出口がないのであろうか？

もちろん存在する！

ただ一人一人の労働者にはまだそれが解っていない。

(10) それをどう可能にするか？

奥様のマーシェニカや洗濯女のマーシェニカがいない社会や人民、国家を想定してみよう。寄食者もいないが、しかし雇われ労働者もいない。全ての人が同じように勤労し、これにより、国家は人々のことを配慮し、彼らの生活を楽しみしてくれる。

正確に言えば、親密な大家族がより弱い女、子どもを世話してくれるように、今奥様のマーシェニカの親戚が彼らの世話をしてくれるのだ。

マーシェニカ（奥様のマーシェニカでなく、女性労働者でもなく、ただ単純に公民の意味）が、妊娠したとき彼女に子どもができるということで不安になる必要がない。社会は大きな、親密なる国家で、あらゆることについて配慮してくれる。

マーシェニカの世話のためには、妊産婦用のホームが立つだろう。それは庭園や花に囲まれ、そこでは一人一人の妊産婦や授乳者が嬉々として健康的に快適に過ごすように工夫されている……この家族社会に対する医者や助産師の配慮は母子の健康を維持することのみならず、産みの苦しみを女性から軽減することに向けられている。

科学は前進し、ここでも科学は役に立っている。子どもが強健になれば、母親は自分に戻り、通常の生活に戻り、再び大きな家族—社会のための仕事の一部を背負うことになるであろう。

しかも母親は子どものために苦しむ必要がない。社会はここでも援助を保障してくれる。幼稚園でも、子どもセンターでも、託児所でも、学校でも、経験のある保母の監督の下に子どもは成長するであろう。もし母親が望むなら、子どもはいつも親と一緒にいられるであろう。もしそうする暇がなければ、子どもを信頼できる人にあずけることができるのを母親は知っている。

母性の十字架はもうこれ以上ないだろう。一人一人の女性には奥様のマーシェニカだけがうけていた喜びや、大きな母性の幸福のみが残るであろう。

しかしこのような社会はおとぎ話ではないのだろうか？ そうだろうか？

国民経済や、社会国家の歴史に関する科学は、そのような社会があるべきであるし、到来するであろうことや、たとえ豊かな資本家や、工場主や、地主や、財産家たちが生きながらえようと〈おとぎ話〉は実現され、本物になるであろうということを明らかにしている。この実現のためにすでに全世界で労働者階級は闘っているのである。そしてもしもまだ社会が一つの親密な家族にはほど遠いとしても、そしてまだ多くの闘いや、犠牲があるとしても、すでに今他の諸国では多くの労働者がこれを達成しつつあるのである。労働者や、女性労働者は法律やあらゆる手段によっても母性の十字架を軽減するように試みている。

(11) 法律は何をすることができるか？

あらゆる国家において第一に労働者と女性労働者がなし、獲得し得ることは母親労働者を擁護することである。貧困や保障がないことは女性を雇われ労働に駆り立て、一年ごとに雇われ労働の女性の数が増える以上、雇われ労働が母性の墓場にならないように最大限努力しなければならない。

法律が関与して、法律が母性と仕事を統一させるために女性を援助しなければならない。万国の男女の労働者は女性のための夜間勤務とあらゆる雇われ労働者を対象とする未成年者の8時間労働の完全なる禁止および、16歳以下の子どもの雇用の禁止を要求し、16歳以上の未成年者の半日間の労働の許可を要求する。この要求はまさに未来の母親にとっては大切なことである。16歳から18歳は女性の一生においては決定的な年頃である。この頃に女性は女性として形成され、強健になり、発達するのである。この頃にもし力を消耗させるならば、健康な母性にとっては永遠に害を与えられるであろう。

法律は工場におけるあらゆる勤労の条件と状態が女性の健康に害を与えないように厳しく取り決めておかなければならない。商品の有害な製造方法は無害な方法に代えるか、完全に禁止するかしなければならない。重労働（重いものを運ぶことや、足で動かす工作機械）は機械によって軽減されねばならない。工場は清潔を保ち、そのなかでは耐えがたい暑さや、厳しい寒さは避け、水洗便所や洗面所、食事のための食堂は清潔であらねばならない。これらのものは全てモデルとして人にみせるべき工場ではもつことができるし、すでに導入されている。が、しかし工場主はけちるのである。あらゆる〈死せる〉機械設備や改良機械は値が高い。一方人間の命はあまりにも値が安い……。

可能でありさえすればどこにでも女性のための座席をもうけることを法律が命ずることは同様にきわめて重要である。そして同様にこの法律が破られたとき工場主から雀の涙の罰金を受けるのではなく、工場主にそれ相応の額を割り当てることも重要である。この法律が施行されるためにはその要件の監視が、工場の検察員のみならず労働者から選ばれたものに一任されねばならない。

## （12）母性の保護

法律はそのうえさらに母親も保護しなければならない。

今ロシア法にしたがえば第126条の産業に関する規約では大軽工業や大重工業の工場では労働者は出産時には4週間の休暇の権利をもっている。もちろんこれは少ない。

たとえばドイツ、フランス、スイスでは産婦は産前産後8週間の休暇の権利をその職場の地位を失うことなくもっている。

しかしこれでも十分ではない。

労働党は産前八週間前の仕事をやめることと、産後八週間の仕事を禁止する権利を要求している。その場合全部で休暇は16週間になる。

さらに法律は各々の授乳する母親が子どもの授乳のために一日の勤労のなかで小休憩が与えられるように命じなければならない。そのような要求はすでにイタリアとスペインの法律のなかに存在する。

さらに法律は工場付属の託児所や子どもの授乳のための暖かいスペースの設立を要求している。

### (13) 母性の保険

しかしながら法律が母親労働者を保護したり、彼女に仕事を禁止したりするようなことは少ない。この時期には社会や国家が女性を保障するようにしなければならない。

もしも女性や子どもにとって養育のために単に16週間の休暇だけの獲得を求められるのなら、〈休暇〉はすばらしいものになるかもしれない！

しかしこれは女性を確実な死におとし入れることになるであろう。

女性労働者の勤労の保護とならんで国家の負担での母性の保障が実施されなければならない。

このような母性の保障と保険はすでにつきのような14カ国で実施されている。即ち、ドイツ、オーストリー、ハンガリー、ルクセンブルグ、イギリス、イタリア、フランス、オーストラリア、ノルウェー、セルビア、ルーマニア、ボスニア・ヘルツェゴビナ、ロシアなどである。11の諸国では我々ロシアと同じく、女性労働者は社会保険局で保険がかけられており、毎週払込をせねばならない。これに対して出産の時には保険局から補助金が支払われる（額は国によって様々であるが給与の満額より少ない）。そして医者と産婆の援助も得られる。

イタリアでは女性労働者は特別な女性保険局で保険がかけられている。そこでは女性労働者と企業主が支払をし、国家も同様に追加払いをする。それでもこの場合保険の重荷を背負っているのは女性労働者なのである。フランスやオーストラリアでは一銭も女性労働者は支払っていない。これらの国では各々の貧しい母親は婚姻していようが婚姻外であろうが国家から援助をうけている。フランスでは8週間支払いをうけ（日に20カペイカから50カペイカを受け、日によってはそれ以上うける）、それ以外に医者と産婆の援助がある。一方オーストラリアでは50ルーブルの一時金が支払われる。さらにフランスでは産婦のところに〈主婦の代行者〉がくるように企画されている。これは通常隣人のうちの一人で、産婦と赤ん坊をどのように世話するかなどの無料コースを終えた人が当たる。彼女は毎日やってきて、産婦が就寝を命ぜられている間は家の片づけをしたり、食事の支度をしたり、赤ん坊の世話をしたりし、これに対して保険局は支払をする。

フランスやスイス、ドイツやルーマニアでは授乳中の母も社会保険局から金銭的援助をうけることができる。

こうして母親保障のための第一歩が踏み出されている。

### (14) 労働者は何を要求するか？

しかしこれはまだ端緒についたばかりである。労働者階級はあらゆる母性の重荷が女性の肩からとれ、社会に移されるように、法と国家が最大の心配ごとである物質的、金銭的なことを軽減するように努めている。

しかしながら労働者階級は母親と子どもに対する完全なる配慮は新しい社会のみが――〈親密なる大家族〉のみがすることができることも知っている。このことについてはすでに

さきに述べていることであるが、今やすでに母親と子どもの負担の軽減は達成されつつある。多くのことがすでに達成されたが、ただもっと闘わねばならないし、友好的にもっと多くのことを達成しなければならない。

万国の労働党は母性の保険が家政婦であろうが、労働者であろうが、手工業者であろうが、日雇い農婦であろうが、とにかく誰であろうとあらゆる女性のために存在するように要求している。

援助金は産前産後、都合16週間の間支給されなければならないが、もしも母親が十分に回復していないか、赤ん坊がまだしっかりしていないと医者が認定する場合はもっと継続されるのである。

援助金は赤ん坊が死んだり、あるいは早産だったりする場合でも、母親に回復のチャンスを与えるために支給される。

援助金は労働者の賃金の1.5倍でなければならない、がもしも雇用されていない女性に支給される場合には、女性がしかるべきポストでいくら受け取るかその平均賃金を採用し、おなじくその1.5倍に増額されなければならない。

援助金はいかなる条件の下でも大都市では日に一ルーブルを下回ってはならない。そして農村の小規模な町では日に75カペイカを下回ってはならない。さもないと低い賃金の場合、たとえば日に30カペイカの場合受け取るのは全部で45カペイカである（賃金の一・五倍になる）。しかしはたして日に45カペイカで母親と赤ん坊は生きていけるのであろうか？授乳中の母親も9カ月を下回らない全授乳期間保険局から援助金をうけなければならない。授乳者の受け取る援助金の額はすくなくとも賃金の半分以上にならなければならない。

援助金はずぎの二つの期間に支給されなければならない。即ち産前産後に直接母親の手にわたるか、母親が援助金を受け取ることを信託した人に渡されるかである。

援助金の権利はロシアで現行の法律がどうであれ、たとえば援助金をうけるのに3カ月は保険局のメンバーになっている義務があるが、女性には無条件で承認されなければならない。

産婦には医者や産婆の無料の援助や、赤ん坊の無料の世話が保障されねばならない。さらにフランスや一部すでにドイツやイギリスで施行されているように〈家事代行〉の援助が保障されねばならない。法がいかに守られているか、産婦がすべてをうけとっているか、どんな法的権利をもっているかということがらを監督するのは全労働者から選ばれた人によってなされねばならない。

法にしたがえば産婦と授乳中の母親は都市の保険局と自治体のお金で、無料のミルクを配給される権利をもち、もし必要なら新生児のために完全な割り増し金を貰う権利をもっている。

労働党は同様に都市や地方自治体、保険局が工場主や、都市、地方自治体のお金で子どものための託児所をもうけるように要求している。託児所はめいめいの授乳する母親が法律によって定められている休憩中に簡単に訪れ、子どもに授乳できるように配置されなければならない。



託児所の仕事は慈善事業家の貴婦人のみならず、母親労働者自身も運営しなければならない。

以下のようなものは十分に必要である。

(1) 妊産婦用の会館。

(2) すでにフランスやドイツ、ハンガリーにあるような独り者や、失業者、妊産婦、授乳中の母親のための避難所。

(3) 医者が見守り、忠告をし、授乳中の母親に子どもの世話の仕方を指示するような特別の医者付き無料の会館。

(4) イギリスの〈女性労働者連盟〉が用意しているような病気の子どものための病院。

(5) 母親が仕事中に2～5歳児の子どもを預けることのできる幼稚園。現在母親は仕事から疲れてへとへとになって戻り、彼女には休息と安らぎが必要であるが、子どもの方は腹をすかし、汚い顔をし、不潔なままになっており……すぐに家事にとりかかることになる。それに引き替え、母親が幼稚園に子どもを引き取りにいく方がはるかによい。子どもたちは食事を与えられ、顔を洗って貰い、嬉々としており、面白いニュースで一杯だ……母親とおしゃべりしながら家路につく。年長のものはさらに母親が家事をするのを手助けする。彼らは幼稚園でこのことをおぼえ、新しい知識を誇りに思っている。

(6) さらに都市は母親や若い娘たちに子どもの世話の仕方の無料のコースをもうけねばならない。

(7) フランスで実施されているように妊婦や授乳中の女性労働者のための無料の昼食や朝食を準備しなければならない。

国家が国民のことを配慮するように国家や社会に要求する権利が各々の社会の構成員すなわち、男女国民にはある。国家が万人の福祉を配慮せずして、人々は何を基礎にして国家を形成するのであろうか？ 今日この地球上ではどこにもそのような国家はないのだ。権力は富めるものや、資産家の手の中にあるのである。しかし万国の男女労働者は社会や国家が実際より大きな、親密な家庭になり、そこでは全ての子どもが平等であり、あらゆる家族を平等に配慮するような国家を達成するように努めている。その時母親の運命は別のものになり、そして死の鉈は新生児の著しい死の収穫の刈り取りをやめることになるであろう。

各々の女性労働者は何をするべきか？

これらの諸要求をどのように達成するべきか？ このためになにをするべきか？

各々の労働者階級の女性や、この小さい本を読んでいるめいめいが、脇の方で無関心になっているのではなく、これらの諸要求のために闘い、古い世界のなかから新しい、良き未来を勝ち取り、その世界ではもはや苦い母の涙はなく、母性の十字架が女性としてのより良き喜びと誇りによって代わるような労働者階級の運動を支持すべきである。

ただひたすら自分に言い聞かせなければならない。〈統一こそ力〉という言葉。我々女性労働者が労働者階級の運動に加われば加わるほど、我々の力はますます大きくなり、希望し

たものをよりはやくかち取ることができるのだ……

我々の幸福、人生、未来、子どもについて述べた次第である。この項完結

#### 註

- (1) 全ロシア中央委員会発行の1918年モスクワ版による。元の版は1914年のサンクト・ペテルブルグ版である。

Работница-Мать, Изд. Всероссийского Центрального Комитета Советов Р.,  
С, Кр. и Казач. депутатов, М., 1918

## 第6章 母性論の集約『社会と母性』<sup>(1)</sup>

1913年、すでに述べたようにコロンタイはロシア第三国会の議員団の要請を受けて、世界各国の母子保護の実状を調べるため英国の大英博物館に赴いた。

この時の成果が1916年に出版された大著『社会と母性』に結実されたのである。

1922年にはこの本は再版されている。最初に出版された第一版の序文でコロンタイは本来なら、第一巻は1914年の国際女性社会主義大会に寄せて発刊されねばならなかった、と記している。ところが、1914年の7月に第一次世界大戦が勃発し、出版を一年間遅らざるを得なかったのである。しかし各強国の流血を目の当たりにしてかえって母性の問題が鮮やかに浮かび上がり、母性についての究明こそがもっとも緊急性を要していると考えた。なぜなら戦争による大幅な人口の減少は母性保護と幼児保護をもっともアクチュアルな問題としたからである。参戦国であったドイツでは母性の国家的保障は特別政令により拡充されており、フランスやイギリスでは、特別措置が補足された。戦争児童（war babies）の出現により子どもの世話を完全に両親から社会的集団に移さざるを得なくなった。そして皮肉なことに国家権力の発動のためできるだけ多くの人口を確保しようとして、ブルジョア社会における合法的な結婚による母と内縁の母とを区別する理由も西ヨーロッパではなくなったのである。戦争による人命の無分別な撲滅により、出産行為が私的家族の行為から社会的重要性をもつものに変えられてきたのである。ここでコロンタイはかねてより重要視してきた母性の問題が客観的な情勢の変化により脚光を浴びざるを得ない皮肉を指摘している。

第二版の序文はソヴェート時代の1920年に執筆された。この序文ではコロンタイは第一次大戦を歴史的に俯瞰してみせ、ブルジョアジーの跡を追い、党全体が戦争肯定に走ったドイツ社会民主党に触れ、ごく一部のロシアとドイツの同志たちが勇気をもって戦争に反対していた事実を述べている。事実1912年に出版された『ヨーロッパの労働者に関して』の刊行をめぐって、ドイツ社会民主党のリーダーたちと気まずい関係になった時期もあったようである。この著作ではコロンタイはかれらの日和見主義と社会民主党の官僚主義、そのなかの幾人かのリーダーたちの尊大な態度や、自信過剰を嘲笑している。更にコロンタイの回想によれば、カウツキーからは厳しい非難が添えられた手紙を受け取り、個人的関係は遮断された。様々なドイツの友人から冷たい手紙が送り届けられ、コロンタイのドイツ民主主義に対する品のない行為が述べられていた。ドイツ党は飼い犬に手を咬まれた、コロンタイを党に受け入れ、同志のように活動させた、党生活の内輪の生活すべてをのぞき込むことを許したのに、党に対してコロンタイが裏切るようなことをしてそれに報いたと喧々諤々であった。唯一の友人、カール・リープクネヒト一人が上層部の先入観、上層部の批判をものともせず、ドイツ社会民主党の上層部に出向いてくれたが、具体的対策がとれなかったのか、偏見は残ったままになったとある。

コロンタイからはたくさんのドイツ人の友人が離れていった。1912年コロンタイは極度に精神的に疲労し、カール・リープクネヒトの忠告によりベルリン近郊の小村に赴いてい

る。

このようなあらゆるものが戦争に駆り立てられて行った時代、人命に対する犯罪的な浪費がなされている時に、何がもっとも大切なものであるかをコロンタイは訴えかけている。「母と幼児を保護することは、つまり生きることが喜べるような条件をつくることであった」と述べ、このことをさらに換言すれば、「戦争の第一原因である資本主義を打倒することであった」と言い切っている。

資本主義打倒のためにも勤労国家の生産力再生を緊急に守らなければならない、そのためには母子保護を基本的課題にし、それを中心に生産力の再生と労働力の合理的利用をめざさなければならないとし、その解決のための現実的措置が目下の緊急課題であるとしている。また資本主義から共産主義への過渡期の時代には「ブルジョア国家が母性の保障の分野でおこなったことを知り、ブルジョア国家の措置の欠点がどこにあり、どのような結果をもたらすか、ということを認識すれば、ソヴェート・ロシアの警告になり、勤労者共和国による方策を策定するときどのような方策でなければならないか、いかに数百万もの多くの幼児の生命と健康を救うことができるか、かつ同時に消耗と無駄から数百万の母親、女性労働者や農婦の貴重な労働力を確保するための方針と手段の選択を容易にすることができる」としている。ここにこそコロンタイが各国の母性保護の状況を詳細に研究した意義があるといえる。コロンタイは職業労働と母性の結合はソヴェート・ロシアでは女性にとりまだ苦しい葛藤を生み出していることを率直に認めながらも、母性問題の解決こそが共産主義への早急な実現をめざす闘いであると宣言しているのである。そして貪欲な資本が人類の柔らかき萌芽である幼児たちを仮借なく撲滅しているが、これに終止符をうつのは共産主義のみであると述べてこの第二版の序文を終えている。

### 『社会と母性』の構成とその思想

コロンタイの『社会と母性』はサブタイトルが母性の国家的保障となっており、全体は7章にわかれ、第一章の国家的母性保障と産む理由、第二章の出生率の減少と子どもの死亡率、第三章の子どもの死亡率に与える労働者階級の生活条件の影響、第四章の職業と母性、第五章の子どもの死亡率に与える女性労働の影響、第六章の母性の法的保障、第七章の母性保障のタイプと形式から成り立っている。なおコロンタイのこの著作に先行するもう一つの『社会と母性』論とも言うべき母性論――『母親労働者』が存在していて、内容的にはこの『社会と母性』を構成する骨子が述べられており、その全文はすでにとりあげ詳述した。ここではそれと内容的に重複をさけるためにオリジナルな点だけを指摘することにする。

本論では巨大な資本主義体制の下では母性問題を考慮することは何にもまして緊急性があるとし、女性労働者が抱えている課題は多岐にわたって存在すると指摘している。その課題の第一は母親自身による新生児のための授乳、第二には働く女性が心おきなく赤ん坊を預けられる保育所、幼稚園、託児所のネット・ワーク化、第三には母性にとって有害な労働を

禁止することであり、第四には妊娠・出産期間に母子が十分な扶養手当を保障されることである。これらの課題の解決は単に女性のみならず、男性労働者にも密接に関係し、両性にとって利害関係があるとコロンタイは述べている。本論で特徴的なのは単に肉体労働者のみならず、知的労働に携わっている女性労働者にも言及されていることである。

とりわけ第四章の職業と母性では、知的労働に携わっているすべての女性には母性と才能、やりたい仕事と育児との間における耐えがたい選択の葛藤がおきているとし、「(母性と職業を遂行する上で)ブルジョア・資本主義的生活様式での兼任は殆ど不可能であり、希な例外として、仕事、或いは幼児を犠牲にしないで両方の義務に自己の力を分割できる。この結果、どのくらいの人生ドラマが生まれ、この抗争解決のむなしい試みにどのくらい女性の精神的力が無駄にされることか……！」とコロンタイは嘆息させている。「資本主義は、女性にとり職業と母性の両立を困難にしているだけではなく、女性に対し、自主的に母性を拒否するか、或いは母親または幼児にとってさけがたいリスクをになうか、厳しい選択を迫るのである」<sup>(1)</sup>とコロンタイは結んでいる。

第五章の子どもの死亡率に与える女性労働の影響では、子どもの死亡率の原因は第一に 貧しい住民の一般的な不利な生活条件が背景にある。第二には 近代的搾取の完璧な構造を有する工業への女性の参加によるとしている。ここでコロンタイは幼児死亡率に関する詳細なデータを記載している。この章ではこの子どもの死亡率のほかに、幼児の生命に与える生産技術・化学過程の影響、産業毒物と女性にとり危険な作業方法、人工授乳の害についてとりあげ、ヨーロッパの詳細な統計を掲載しており、最後に子どもの浮浪化問題もとりあげている。

第六章の母性の法的保障は、一般的労働保障に関する状況、女性、母親労働者の保障、歴史的調査資料の三つの項目にわかれている。

一般的労働保障の第一項では、コロンタイは「母性保護と労働を規定する一般的立法の間には、もっとも密接で切り離すことのできない関係がある」<sup>(2)</sup>と述べ、未成年者の労働就業の問題をとりあげ、一般的労働保障の規定が完備されていれば、それは母性を保護することとも関連があることを、実例をあげて訴えている。例えば、未成年者の労働規定システムを完備させることは母性の正常な発達を促すのに必要なことであるとし、どのシステムも12歳から14歳ぐらいの低年齢で子どもを働かすことを許可しているが、とりわけ未成年の少女の場合、14歳から18歳にかけての性的成熟が始まるこの時期には慎重な配慮が必要であることは医学的に証明されていると主張している。

コロンタイの見解によると、女性労働を規定するあらゆる国の保護立法を検討してみて、労働による有害な影響から女性を守り、幼児に健康を保障することができるレベルにある資本主義国は世界に一国もないという。

第二の項では、母性保護に関しては比較的進んだ社会的法令のあるブルジョア諸国でさえ、母性保護はすべていまだ萌芽状態にあるとし、これらの国では第一の欠点として母性保護は

一般的労働と同様に法律の効力がおよぶ範囲が制限されており、巨大工業における女性労働者にのみ適用されているとしている。この項ではヨーロッパにおける各国の法令決定時期のデータが記載されている。また二番目の欠点としては出産時の規定休暇期間が短いことがあげられる。オーストリー、イギリス、ハンガリー、ベルギー、オランダ、ルーマニアでは、4週間の仕事の中断が認められているが、デンマーク、スウェーデン、ブルガリア、イタリアでは医学的証明書の提出により4週間を3週間に短縮できる。ノルウェーでは1892年に出産のために6週間仕事を中断できるが、法律では女性労働者が医師の証明書を提出し、6週間の期間が終了する前に仕事に復帰しても健康に影響がなければその期間を短縮できる。スウェーデンもこれとほぼ同じである。ロシアでは1912年迄この件に関する法律は皆無であった。女性労働者が生産現場の機械の傍らで出産したり、産後2日後とか5日後とかに職場に戻ったりすることも希ではなかった。かつてのロシアと同様に多くの国が保護を認めるのは妊産婦であり、妊婦ではない。妊婦の保護はまったくないか、便宜的なものである。つまり法律は出産までの一定期間仕事から去る権利を与えているにすぎない。ソヴェート・ロシアをのぞき、妊婦の労働厳禁はどこにもない。コロンタイは結論としては資本主義諸国における現在の政令は甚だしく不完全なものであると分析している。

つぎに第三項目の歴史的調査資料では母子保護立法に関する歴史的考察が加えられている。

母性と幼児を守るための保護立法導入の歴史は、はっきり三つの時期にわけられる。第一の時期は1870年代、第二はベルリンで開催された労働保障に関する国際会議の召集時期、即ち、1890年代の初め迄、第三は20世紀の初頭の1910年迄である<sup>(3)</sup>。第一の時期には急速な工業化と幼児の死亡率の増加は比例している。巨大な資本家たちの収入が増加すればするほど、子どもの命が容赦なく刈りとられる。

スイスは女性労働者および母親を立法により保護した最初の国である。70年代の末、連邦会議は断固とした対策を採用し、女性労働者を保護し、誕生する若い世代を救うことを決定した。妊産婦のために8週間仕事を中断できる法律の制定が提案され、1877年3月23日に承認、翌年の1月より効力を発生した。スイスを模倣した最初の国はドイツであった。コロンタイはさらにドイツでの高い幼児の死亡率に触れ、ドイツ社会民主党員たちの保護規定に関する不十分な対応や譲歩について詳しく論述している。

そしてついに帝政ロシアですら、1912年に病気になった場合の保険法を国会に提出し、妊産婦、女性労働者に対する保護立法に関する条文126（第一項）に特別な補足を加えざるを得なかった。この条文に従い、工場検査の分野で働いている妊産婦の労働者は、四週間仕事から解放された。これは革命前のロシア法において母親としての労働者を保護すべき最初にして唯一の政令であった<sup>(4)</sup>。

コロンタイは最後に、すべてのブルジョア・資本主義国における母性保護に関する現行法規を総括すれば本来その使命を全うしているような法律は一つもないと言い切っている。従って、現行法規に不満足であれば、新しい法規の策定を要求せざるを得ないのである。コロ

ンタイはこの項の最後に母子保護に関する法規の策定をつぎのようにまとめた<sup>(5)</sup>。

- (1) 性的に成熟する以前に、つまり 16 歳以下で (国および気候により左右される) 少女・未成年者が工業労働へ参加することを許可しない。
- (2) 未成年・未婚女性 (16 ~ 20 歳) の労働には、特別な法規制がされること。
- (3) 成人女子労働者の労働日は、あらゆる種類の労働において 8 時間制が標準となること (この標準からの逸脱が許されるのは、農業女子労働者にたいする厳しく定められた範囲内においてのみである)。夜間労働と時間外残業は、当然完全に禁止されねばならない。祝祭日前の休息を定め、家族のある女性労働者のための昼食時間を規定すること。
- (4) 極めて重要なことは、生産の技術・化学プロセスを規定し、かつ女性にとりより害が少ない作業方法を定める法律の部分より詳細に立案することである。立法のこの部分の基本は、その生産部門から女性を除外するよりは、むしろ労働過程をできる限り無害にすることが原則である。
- (5) 現今の技術状況によりある作業が無害化されず、将来の世代を生み出す女性に危険をもたらすいかなる場合にも、法律は女性をその仕事に従事させることを禁じなければならない。しかし、このような場合の含めるべき条件は、有害で危険な作業が近代化された労働方式に変更されれば、その仕事への女性の再雇用が許可されることである。この種の条件が企業家たちにとって刺激となり、彼らに技術改善を導入させ、労働過程を充実させるであろうし、それにより男女労働者の利益となるであろう。ところが実際は、その生産分野からの女性のあからさまな除外が、時代遅れとなった技術を事なかれ主義的に維持、促進してしまうのである。
- (6) 労働者の利益にとって極めて本質的なことは、工場の保険衛生整備を扱う法規の部分に、詳細に立案されることである。洗面台、水洗便所、更衣室等の設備に関する問題に特別の配慮がなされなければならない。
- (7) 規定には、月経期に 2, 3 日間仕事から離れる任意の権利を女性に与える項目を必ず含めなければならない。
- (8) 工場の女性監督が存在する所ではその数を増加し、未だ存在しない各国では女性による検査を促進させ、工場検査の組織化に注意を払うことも重要である。検査には、女性労働者層から直接選出された助手が加えられねばならない。

以上の諸要求が実現可能となるのは、もっとも利害関係のある組織化された労働者階級が出現するときだけであろうとこの項を結んでいる。

終章では、第六章で述べた母性の保護の立法化の要求は母性を守る課題の一面にすぎないこと、妊産婦を、然るべき物質的保障なしで法律に定められた一定期間義務的に解放することは実生活上ナンセンスであるとコロンタイは主張する。つまり仕事から義務的に解放され

る期間に妊産婦に対してなんら金銭的保障がなければ仕事の義務的休暇は守られないか、女性労働者は町工場を後にして、さらに厳しい一時的仕事を探すであろうというのである。母性は重要な社会的機能であり、単なる個人的、家族的機能ではないのであり、母性の重荷はそれぞれの女性に対し、社会的集団を介して軽減されるべきである。このことから賃金からの天引きのない国家による義務的一時手当の支給を保障するシステムへの転換をはかるべきであると結論づけている<sup>(6)</sup>。そして母性を社会的機能と認めさせることのみが母性保護と保障のシステムを遂行させる唯一の可能性なのであるとしているのである。

#### 註

- (1) コロンタイ『社会と母性』1921年、国営出版社、113～114頁。この著が初めて刊行されたのは1916年にさかのぼる。1921年版では第一部のみ筆者は手元に所有。第二部も存在し、そこには詳細な統計資料も掲載されている。

Общество и Материнство, Госиздат. 1921

- (2) Там же стр. 189  
(3) Там же стр. 225  
(4) Там же стр. 239  
(5) Там же стр. 241-242  
(6) Там же стр. 260



## 第7章 初期ソヴェート政権における母性と子供をまもる政策策定

話は前後するが、1899年チューリヒをあとにしたコロンタイはチューリヒ大学のハインリッヒ・ハークナー教授の紹介でイギリスのウェッブ夫妻を訪ねるが、改良主義的な見解に飽きたらず、一人イギリスを見て廻ることによって労働運動の実状に触れ、イギリスにおける階級分化の激化を目のあたりにした。イギリスの協同組合のなかの女性ギルド、労働組合、労働者クラブ等を観察し、改良主義が労働者の状態を決して改善するものではないこと、革命的な階級闘争が必要であることを実感した。コロンタイのこの確信をさらに強固なものにしたのはチューリヒにおけるローザ・ルクセンブルグとの出会いであった。これまでもローザが書いた『社会革命か社会改革か』を読み感銘をうけていたコロンタイは、ローザのベルンシュタイン派との徹底的な闘いぶりを実際に見てきわめて勇気づけられた。ローザのコロンタイに対する気取らぬ態度やこの小柄な女性がもつ知力、優しい心根、勇気にコロンタイはことごとく共感をもたざるを得なかった。

この改良主義に対する闘いと同時に関心をもっていたのは教育の問題であった。彼女は幼児の人格形成でもっとも重要なのは周囲の環境、国家の制度、社会的条件であると考え、この核心をもっともよくつたえているのは革命的民主主義者のドブロリユーボフであると確信していた。この考えを基に書いたのが前出の「ドブロリユーボフの教育思想の大綱」という大論文であった。彼女はドブロリユーボフの論文を系統的に紹介したうえ、彼を人道主義的なもっとも良心のある思想家と定義した。教育問題のほかに興味をもっていたもののひとつはフィンランド問題であった。それは直接には祖父の荘園がフィンランドにあったこと、自分もそこに行ったことがあったことが関心をもつきっかけであった。

1903年にコロンタイは『フィンランド労働者の生活』を3年がかりのデータ収集の後発表した。この著作では、労働者階級の賃金、労働条件、労働時間、住宅等がつぶさに調べられており、労働運動の発生 of 必然性が説得力ある筆致で書かれている。この頃ロシアの地ではボリシェビキとメンシェビキの闘争がますます先鋭的になっていた。コロンタイは最初ボリシェビキにもメンシェビキにも加担しなかったが、1905年の第一次革命の嵐が近づき、コロンタイはボリシェビキの隊列に参加することに意を決した。1905年ロシアの地で空前の革命的気分が漲っていた頃、コロンタイはアジテーターとして数万人の聴衆を前にしてゼネストへの呼びかけに熱弁をふるった。

1906年にはフィンランドの自由と独立を侵し、フィンランドをロシアのなかの一つの州としたツァーリ政府に対する激しい怒りと抗議をもって書かれた『フィンランドと社会主義』が出版された。この論文でコロンタイは両国労働者の真の解放のためにフィンランドの労働者とロシアの労働者との統一的行動を呼びかけた。同年9月にはドイツのマンハイムに赴き、ドイツ社会民主党の大会と一緒に開かれた女性社会主義者会議に出席した。そこでアウグスト・ベーベル、クララ・ツェトキンなどと知り合いになった。

当時ロシアでは女性の運命は他の国にくらべてみてもことのほか悲惨であった。既婚女性

は財産管理権をもっていたが、住所の選択については、妻は夫に従わなければならなかった。既婚女性は、夫のパスポートのなかには書きくわえられるだけで、自分のパスポートをもつことは許されなかった。ある地位を引き受けたり、職業についたり、営業をする場合は夫の承諾が必要であった。

女性は長い間男性が不完全ながらもっていた政治的権利をもっていなかった。高等教育を受ける権利ももっていなかった。結婚、離婚、親権等の諸権利が男性の側にのみ与えられていた。とりわけ悲惨であったのはロシアの女性労働者であった。男性と同一のきつい仕事をやっても賃金は男性の半分であった。労働保護と母性保護は立法化されていなかった。子どもの死亡率は他の資本主義国に比べてみても格段に高かった。女性労働者の賃金が安ければ安いほど、売春婦の数も多くなった。これは女性を圧迫している不幸な社会状況が多く、売春婦を生み出す主要な原因になっていることを物語っている。コロンタイはこの状況を考えるにつけ、女性の完全なそして全面的な解放を勝ち取るための闘いの必要性をしみじみと感じたのである。「女性および女性の生き方は全生涯私の心をとらえてきた。彼女たちの境遇は私を社会主義へと駆り立てていった」<sup>(1)</sup>。とコロンタイは自分のことを語っている。こうしてコロンタイは自分の全生涯を女性の解放と自立のために捧げる決意をしたのである。

### 大臣（人民委員）としての仕事

1917年10月25日21時40分、巡洋艦「オーロラ」がペトログラードにある冬宮攻撃開始の合図をするため空砲を発射した。この空砲の合図によって、新生ロシアが誕生した。22時40分第二回ロシア・ソヴェート大会が開かれた。翌26日早朝ソヴェート権力の成立についてのレーニンの起草文が読み上げられた。大会終了の二日後コロンタイは国家保護人民委員（当時社会保障の意味で国家保護という言葉が使われた。人民委員は今日でいう大臣の意味）に任命された。

コロンタイの署名入りで1917年12月31日に国家保護人民委員部のなかに母子保護課の設置が公布された。この保護課で母性の保護と国家による幼児の保護が審議され、その実施を任務とすることが決定された。この決定は世界史上初めて、母子保護は個人的なものではなく、国家の義務であり、政府が保障すべきものであるという画期的な宣言であった。革命前に慈善団体が経営していたごく少数の孤児院、託児所、相談所、養育院等が国家保護人民委員部の管轄下に置かれた。「ロシアでは毎年200万もの小さな生命が国民の無知や、階級国家の無関心さと冷淡さのためにかき消されている」とコロンタイは乳幼児の保護を訴え、1918年12月31日一大キャンペーンが繰り広げられた。この呼びかけに応じて、託児所や、養育院を設立するための場所探しや、家具を手に入れる運動が始まった。母子保護のための宮殿を設立する仕事にもとりかかった。母子保護委員会の計画により、宮殿には母性保護のための博物館の設立、モデル乳児院、相談所、乳児用乳製品供給施設等が設けられることになった。逃亡した貴族の館が接収され児童用の施設に改造された。児童施設が無料で修理、清掃され、貴族の館の窓用のカーテンが子ども服にかえられた。こうして国民の創意工夫で

あらゆるものが作り替えられるようになった。後年これらのことを回想して、コロンタイは「十分に眠った日はたまにしかなかった。食べ物も不足していたが、みんな情熱をもって働き、一日たりとも早く新しい生活をつくりあげようと頑張った」と語っている。

コロンタイは人民委員の地位にあるとき、努めて女性が男性と同等の権利がもてるような法制化に心を砕いた。その具体例として 1917 年 12 月 9 日付の離婚に関する法令、夫婦の完全な市民的、モラル的平等を保障した結婚についての 12 月 20 日付の法令、庶子と嫡子との同権を保障した同じく 12 月 20 日の法令、女性の産前産後の有給休暇についての規定、若い母親への手当支給についての規定等が続々と制定された。女性解放に導くこれらの法令の政策化はコロンタイにとっては大きな喜びであった。「私のエネルギー、私の思想、私の闘い、私の生涯のすべてが例えささやかなものでも、幾分たりともこのことに役立ったと思う。私たちの世代は自分たちの手によって道を切り開いたのだ」とコロンタイはメモに書き付けている。

1918 年秋、コロンタイはモスクワ近郊の織物工場を訪問した折り、自覚的織物女工の機運を鋭く見分け、女性のための大会を組織する時期が到来していることを悟った。コロンタイは工場見学のあと、すぐレーニンを訪問し、女性労働者たちの機運について報告した。レーニンはコロンタイにつぎのような忠告をした。即ち、

- 第一番目に女性に対して責任がもてるような組織を党内に作ること、
- 二番目に女性たちに自分たちの権利を行使することを教育すること、
- 三番目に女性たちのなかの文盲をなくし、彼女たちに課題と知識をあたえること、
- 四番目に児童施設を作ることにより母親の負担を軽くすること等の諸点であった。

1918 年 11 月 16 日から 21 日にかけてコロンタイの奔走によりモスクワで第一回全ロシア女性労働者・農婦大会が開かれた。この大会はコロンタイの言葉を借りれば、「ロシアの覚醒しつつあった女性大衆にとって灯台のような役割を果たした」のであった。革命直後の経済的混乱と飢饉のなかで大会が召集されたにもかかわらず、予定人数をはるかに越えて 1147 名もの参加者があり、多くの女性労働者に深い感銘をあたえた。とりわけ大会の最終日のコロンタイの閉会の辞「女はなにもできないというおとぎ話は終わったのです。私たちのこの会議のあとでは、バーバ（元々は無学の既婚の農婦の意味だが、貧しい無学な女にたいする蔑称として使われる）という言葉はなくなるのです」は後世の歴史に残る言葉として有名になった。

この大会における要請により女性対策専門の機関が作られるようになった。それがロシア共産党中央委員会に対女性アジ・プロ委員会が設けられるきっかけになった。この委員会のメンバーには、イネッサ・アルマンド、コロンタイ、ヴェ・ア・モイロワ等が任命された。1919 年委員会は改組され党の女性部になった。イネッサが初代の部長になったが、悲運にも 1920 年急死したことによりコロンタイがこれに代わった。

この頃コロンタイは女性労働者と農婦の生活条件が微妙に変化しつつあることを感知し

ていた。しかし法律上の平等は生活面での男女の平等を必ずしも意味するものではないことをコロンタイは十分に知っていた。女性の真の解放を得るためには家庭経済の社会経済への大規模な転換をはからなければならないとコロンタイは確信していた。単に表面的な言葉ではなく、女性たちを実際にソヴェート建設に引っ張りこむことが女性の意識を変えるためのもっともよい手段であると考えていた。ひとつの行き届いた設備の託児所をつくることは20回の宣伝演説よりも効果があると彼女は考えていた。女性労働者は生活施設の管理と運営ができるように教育されなければならないと切実に考えていた。

女性労働者と農婦はようやく生活諸施設の組織と管理運営を覚えはじめた。工場、農村、家庭のなかから女性代表者が選出されるようになった。彼女たちは党と勤労女性を結ぶ代表者会議に統一された。代表者会議が女性を教育するいわば学校のようなものになった。コロンタイは党中央委員会の女性部で情熱的に活動した。彼女は県と郡の党組織にもそれぞれ女性部を設け、工場、村に女性のための組織者を置き、あらゆるところで女性の利益を守る活動が積極的におこなわれるように奔走した。この結果女性に関することで見落とすことは何もないようにすらなった。

中央に設けられた女性部も県や郡に設けられた女性部も一般の党活動から切り離された特別組織ではなかったにもかかわらず、女性部を独立した独走組織であるかのように揶揄する輩もあり、コロンタイの気持ちを逆なでするような意見も出された。コロンタイはこれらの意見に対して1921年に開かれた第二回国際女性共産党員会議において、明確な反論を公にしている。即ち、女性に対しては特別な配慮が必要であること、にもかかわらずこの問題に対して十分に分析していない幾人かの同志は、コロンタイらをブルジョア的女権拡張主義者と言って非難していること、しかし本当は彼等の活動はその否定になっていること、なぜならそれは労働運動の分裂を志向しているが、自分たちは女性労働者と農婦をプロレタリアの一般運動に引き入れようとしているからだと堂々と主張した。

女性部はその後活動が継続され、その組織はますます拡大していった。ロシアの女性問題研究家のア・エム・イトキナによれば、「女性部が解消され出したのは1929年末で、当時すでに女性大衆の意識が格段に上昇し、女性部なしにやっていける状況になった」としているが、思うにこのような楽観的な見解こそがその後のロシアにおける女性解放の速度を遅らしめた原因になっているのではなかろうか。1929年といえば、レーニンはすでに亡く、スターリンの専制恐怖政治が緒についたばかりの頃であり、女性の解放どころか、逆に女性をいかに家庭に縛り付け、生産単位の一分子とするかに腐心していた時期であった。幸か不幸かこの頃コロンタイは外交官として海外に赴任しており、国内政治に口出しすることはすでに不可能となっていた。

### コロンタイの女性解放論

コロンタイ登場以前のまとまった女性解放論としてまずその筆頭にあげることができるのは、バーベルの『婦人論』（1879年）であろう。バーベルの死後1年で第一次世界大

戦が始まりその5年後にはロシア革命が勃発したため、彼は実際にはロシア革命の成就やその後の戦時共産主義時代からネップにかけてのあの複雑で紆余曲折に富んだソヴェート時代の史実を眼にすることができなかった。またそれによって自己の著書を補うことも不可能であった。この意味でコロンタイの著作『経済の発展における女性の状況』<sup>(2)</sup>はベーベルの『婦人論』を補足し、発展させたといってもおおげさではなかろう。この著作にはコロンタイの女性解放論の核心が書かれており、そのなかで一貫として書かれているテーゼは女性の地位は、いつの時代でも、いかなる社会でも、女性が経済において担う役割によって決定される というものであった。この著作は、コロンタイがロシア社会民主党の女性部長時代にモスクワのスヴェルドロフ大学でおこなった講義に若干手を加えて刊行されたものである。内容的にはつぎの14の講義にわかれている。

- (1) 原始共産主義時代における女性の地位と役割。
- (2) 閉鎖・自然経済下における女性。
- (3) 封鎖・自然経済のもとにおける女性。
- (4) 手工業、職人的生産、および共同体農業における女性の労働。
- (5) 商業資本の発展期およびマニファクチュア初期における女性の地位。
- (6) 大資本主義生産の発展と女性労働。
- (7) 女性問題の原因。
- (8) 女権拡張運動と女性労働者の階級闘争参加。
- (9) 世界大戦と女性労働。
- (10) 戦時共産主義時代における労働の組織。
- (11) 戦時共産主義時代における女性の労働条件とその保護。
- (12) 生活革命。
- (13) 道徳革命。
- (14) 女性問題の展望。

このうち(1)から(7)まではベーベルの『婦人論』の骨子と大体類似している。その内容としては、過去数千年来の人類社会の歴史的ならびに社会的構造の分析、とりわけ女性の奴隷化は女性が社会のための生産労働の分担を止めた結果として起こったことの確認、私有財産制の形態をとりだしてからの女性の経済的依存に起因する男性支配の構造的分析がおこなわれている。またこの資本主義体制の下では、ベーベルが言っているようにすべての男性が自分の優位を当然だと思い、女性の大部分もこのことをしかたないことだと諦めていること、まさにこの考えのなかに女性のおかれている状態のすべてが反映されていること等が指摘され、真の女性解放は社会制度の改革を経ずしては不可能であること等マルクス主義的女性解放論に立脚した論が展開されている。

(8)から(14)までにはその後の歴史的展開による新しい史実を背景としたコロンタイの分析と創造的提言が述べられている。

(8)の項目ではまずブルジョア女権擁護運動の特徴とその限界について述べられている。

コロンタイはこれらの女権論者を特徴づけて、第一に19世紀全般を通じて彼女たちは生活の全領域において資本主義の枠内で男性と同等の権利を要求しており、新しい社会制度については一度も考えたことがない、と指摘し、また第二には彼女たちが全女性の代表者として階級的矛盾を超越していると錯覚していると述べている。また第三には女権論者は、女性が生産労働をもたらすのみならず、社会に健康な子孫を与えることを要求していることをまったく考えておらず、母性の擁護、母としての女性の利益の擁護は女権論者のプログラムには入っていないと主張している。この女権論者たちの思考傾向に対して、コロンタイはつぎのような問題を投げかけている。即ち、女性の純粋な肉体的特性とその社会的任務である分娩は女性があらゆる面で男性と同等の権利を獲得した場合でも依然として残るということは記憶しておかなければならない。女性が市民であり、また労働者であるばかりか、新しい生命の担い手であることこそ女性をして男性とは違った条件の上に立たせているのである。それゆえ新しい社会を望む女性労働者はこの地点から出発しなければならない。

資本主義経済の発達とともに大工場生産の近代的組織はもはや女性の労働なしには存在できなくなった。しかし一方では強固な私有財産制に基づくブルジョア制度は家族制度を必要とする。女性労働が増大し、一般的になり、女性の経済的自立と夫からの非束縛性がうちたてられると、家庭はそれまでの強固さを失って崩壊し、没落するとコロンタイは予測している。このコロンタイの指摘は現代にも通ずるところがあり、なかなか鋭い指摘といえるのではなからうか。この資本主義経済の実態とは裏腹にこれに追いついていけないのが男性と同等とはいえない立法面での権利の諸関係である。結婚における男女の平等な権利、相続権、選挙権獲得闘争等は19世紀の60年代以来ブルジョア女権運動の焦眉の的となった。女権論者たちは声高に同権思想のみを主張したが、コロンタイはこの考えには組みしえなかった。何故なら単純な同権志向のみでは女性の地位の改善はおぼつかないと考えていたからにはほかならない。男女同権を求めるのと同時に母性に対して、国家は特別な配慮をするように要求すべきであるというのがコロンタイの結論なのである。

さらにコロンタイはベーベルについて触れ、ベーベルの『婦人論』はいわば「働く女性の聖書」であると絶賛し、この著書によって女性の隷属の根源と理由が明快になり、女性の無権利状態がなぜ生じたかが明らかにされ、ブルジョア社会の性道徳と結婚問題とにおけるあらゆる虚偽と偽善のヴェールが剥がされたと述べている。「ベーベルの著作が出現して以来売淫問題はまったく別の光の下におかれ、この問題は社会の階級的組織と資本による労働の搾取とに関係ある現象であることが明らかになった」<sup>(3)</sup>。そしてベーベルの最大の功績は「彼が女性解放問題に関して労働者の二重の任務を明確に公式化したことである」<sup>(4)</sup>。即ち、闘争の統一と、母性機能を源として発生する女性に関しての特別な階級的課題に対する明確な認識をもつという任務であるとコロンタイは述べている。

(9) においてコロンタイはロシア革命の前段階としての第一次世界大戦時におかれた女性の地位と状況について触れ、戦時中の国民経済に女性が引き入れられたことの功罪について説明している。戦時中男性労働者の不足と女性労働者の賃金の低廉を理由に女性労働者は大

量に生産現場に動員された。これは女性が余り組織化されておらず、意識が低く、自己の階級的利益を余り主張しないことから企業主には都合がよかったからであろうとコロンタイは分析している。女性が生産現場にひきいられること自体は有害なことではなく、むしろ将来の女性解放の土台を強固なものにする可能性を秘めているが、問題は女性の労働そのものではなく、搾取のされかたにあるとコロンタイは指摘している。ブルジョア社会は女性労働者の生活負担を軽減したりすることはなかったので、戦時中の女性労働者の生活はますます逼迫したものになり、彼女たちは当然のことながら不穏分子に変化していったのであった。たとえば1915年の4月暴動の主謀者は兵士の妻たちであった。女工たちもきわめて積極的なストライキ参加者たちであった。しかし1918年から1919年にかけて交戦国が深刻な不況に直面すると、女性労働者の解雇が相次いでおこなわれ、女性失業者の数が急激に増大した。このように生産力の一時的勃興と停滞は女性労働者の生産現場への誘引と解雇を引き起こすことになり、女性労働問題をより複雑なものにしてしまうのである。企業主は自らの政治的思惑から企業内に労働者をのこそうと努めるが、この政治的胸算用の第一の犠牲になるのは女性労働者なのである。コロンタイは最後に「資本主義が存在する限り、労働と資本の相互関係問題の有機的な一部分をなしている女性問題を総じて解決することは難しい。ブルジョア資本主義諸国における勤労階級の女性にとっては資本の力が労働を支配し、私有財産制が生産、分配、消費の合理的調整を妨げている限り、女性労働者たちの境遇の改善を期待する根拠は存在しない」と結論づけている。

(10)、(11) では戦時共産主義時代における女性の労働条件の改善と母子保護について具体的な政策が施行されたことが述べられている。

(10) においては戦時共産主義時代に新たに設けられた義務労働制について言及された。社会的富の増大をはかるためには労働能率を高めなければならない。そのためには生きた労働力の計算とその正しい配置を考慮しなければならない。この計算と配置がもっとも簡便な義務労働制という形式をとったのである。

労働能力のある男女に均等に適用された義務労働制は国民経済における女性の役割を根本的に変革させた。個別的な家庭消費のもとで非生産的に消費されていた女性の膨大なエネルギーは社会的な消費組合の下に一気に開放された。ソヴェート食堂、託児所、コンミュン等の設置は女性の肩から非生産的労働を取り除いた。家事労働から解放された女性の力はいっしょにもっとも有益なものとして社会的経済に組み込まれた。義務労働制は私生活の根本的改造と共産主義の原則に基づく生活条件の組織化という問題に結びついたのである。

義務労働制によって必然的に引き起こされた生活改革の萌芽は女性の地位に人類史上でもっとも偉大な変化をもたらした。義務労働制は農村に住む女性にも適用された。農婦を家から誘い、公認された社会的な生産労働につかせることによって彼女たちは新しい条件の上に立った。

都市においてもすべての女性に義務労働制が適用された。この時代には女性労働者の健康と労働を十分に守り過渡的な時代における個々人の特殊性を考慮した多くの法令が出され

た。例えば義務労働には男性は16歳から50歳迄かり出されたが、女性は40歳までであった。すべての妊婦と、8歳以下の子どもをもつ母親は子どもの世話をする者がいない場合義務労働制は適用されなかった。出産後子どもが死亡した場合でも分娩の日から8週間までは、義務労働制を免除された。自分を入れて5人以上の家族の世話をする必要のある女性も義務労働制を免れた。30パーセントの労働能力を失った女性も同様に免除された。概して女性は比較的軽い仕事につかされた。そして女性を生産に誘引することにより、女性解放の道を開かせたのであると最後に誇らかに記されている。

(11) の労働条件とその保護では、両性の成年に達した男女の労働者に獲得された基本的なものは8時間労働制であった。夜勤は男性の場合は1週7時間以内、女性の夜勤はまったく禁止された。1919年10月4日付の労働人民部の特別規定により、当該地方の労働委員部、労働組合、労働監督委員会の承認を経て女性の夜勤が許可されるようになった。しかし、1920年10月の規定により、妊婦と乳児をもつ女性の夜勤は禁止された。とりわけ、ソヴェート法は母性保護の見地から女性の夜勤、時間外労働、地下労働を禁止した。また保健上有害な生産労働や、運搬の仕事を制限する（重量制限10フント仕事—14.1キログラム以下）規定も定められた。

しかしコロンタイは全般的な内戦時代において、労働力の不足と現在の労働力を最大限に利用するという観点からこれらの法令がかならずしも遵守されなかったと正直に述べている。それにもかかわらず、ソヴェート政府は労働保護の分野で、とりわけ母性保護の分野では世界に誇れる社会主義的立法の一分野をもっていたと評価している。そしてこの母性保護策の基礎として、十月革命直後に開催されたロシア第一回女性労働者会議で各項目が詳細に審議されたと記されている。この母性保護のための法令の策定にコロンタイが中心的に携わったことはいうまでもない。以下この項ではその具体的な保護策の数かずが紹介されている。

ロシアにおける母性保護の基礎には新しいつぎのような原則が打ち立てられている。国家による保障は例外なく全部の市民が受けられるというものではない。他人の労働を搾取していない勤労階級の女性のみがその対象になる。肉体労働に従事するあらゆる女性は分娩期の前後16週間にわたって国家から生活を保障され、他の労働に従事するものは12週間にわたる休暇と手当をもらう。この手当は賃金の全額分に相当する。1920年11月の労働人民委員部の法令により頭脳労働者で特に疲労を覚えさせる条件の労働に携わっている者（たとえば、電話交換手、電信従事者、タイピスト、女医等）は分娩の前後16週間の休暇が受けられる。休暇中（1920年11月法令）妊婦と産婦は彼女たちが権利としてもっている全給与を受けることができる。乳児をもつ母親はその授乳期間中当該地方の最低賃金額の半額以上を支給される。これでは不十分で、各々の母親は乳児の世話料として現物支給を受ける権利をもっている。ソヴェート・ロシアは備蓄が十分ではなかったにもかかわらず、第一に母親と乳児を保障したのである。規定により各々の母親は乳児に対する支給品として15アルシン（元ロシアの単位。1アルシンは約71センチ）の織物を受ける権利がある。しかし、後年母性保護部はこの支給を既製品で支給するようになった。



乳児をもつ母親は自宅から2露里（ロシアの旧単位。一露里は1.067キロメートル）以上離れた場所で就業しないことを要請された。ソヴェート・ロシアでは統一の勤労者用配給食料の割当が施行された。即ち、国家の全貯蔵品が算出され、全勤労者の間で設けられた一定の基準に従って分配された。妊婦と授乳中の母親は特別のカテゴリーにわけられた。妊娠の後半期以後から乳児に授乳している期間、母親は勤労者用の配給食料の割当以外に小麦、ひき割り穀類、バター、砂糖等の付加栄養物を受けた。乳児にはその上石鹼と灯油が与えられた。電車や汽車に乗るとき、また許可証や身分証明書を受けるとき、妊婦は全露中央執行委員と同等の権利をもち、順番を待たずに乗車し、証書を受ける資格を得ていた。これらのことは世界のどこの国にも見られないことである。母性扶助に対する国家の支出は数十億ルーブルに達した。1920年度中にその扶助料は340億ルーブルに達している（同志レベヂェフは的確にもつぎのように指摘している。「母性の保護事業に国家の財政が配分されるようにすることは共産主義の未来の建設者としての新しい世代を保護する事業に衷心より関心を抱いている階級のみが決定することができるのである」。

母性の保護と保障はロシア革命のもっとも大きな社会的勝利であり、疑いもなく、女性に集団労働と、自分の本来の使命である母性との統合を容易なものにした。そしてこの項では最後にコロンタイは当然のことながら男女に同一労働同一賃金を実施されていることもつけ加えている<sup>(5)</sup>。

(12) の生活革命では、革命後の新しい経済システムとともに当然生活もそれにふさわしく新しい原理の下に構築されねばならないことをコロンタイは提唱している。とりわけ、家事と母性保護と育児の社会化は女性の解放と同時に国家にとっても大なる利益をもたらすと主張している。

第一に家事の社会化に関しては、コロンタイは公共食堂と共同住宅の設置と数を増やすことを提言している。コロンタイは、勤労国家で独立した人格をもち市民として承認されている女性が夫に好感をもたれるがために一体誰が何時間も台所に立って時間を費やすことを好むであろうかと疑問を投げかけている。コロンタイはつぎのように呼びかけている。「男に、女が如何に上手にパン生地をこねるかのためではなく、女のなかに魅力的なものがあり、女のなかに個性や、人間的な〈我〉があるために女を愛し、尊敬させるようにさせなさい！」「結婚を台所から分離させよ！」ときっぱり言い切っている。そしてこのことは「女性の歴史的な運命においては、すくなくとも宗教を国家から分離するより以上に重要な大改革である」<sup>(6)</sup>。と歴史上未曾有の大胆な発言をしている。共同住宅に関してはコロンタイによると、戦時共産時代にはかなり普及していた。

そこでは湯沸かし器や共同台所、共同洗濯所が設けられ、燃料、電灯も保障され、掃除は専任の掃除婦にまかされている。また場合によっては託児所や幼稚園もある。これらの諸設備が完備していれば、女性の精力は蓄えられる。女性たちは願っている――とコロンタイは記している。――このような家が多くできて、女性の力を消耗させるようなあらゆる無益な家事を一掃することを。共同住宅は都市経済や住宅問題を合理的に解決するのみならず、女性の

生活から煩雑さを取り除き、家庭と労働の両立を女性に保障するものであったのである。

第二の母性保護の社会化という点では、生産力の発展と生産の復興という見地から母性保護が重要であるという認識に立っている。それは一つにはできるだけ多くの労働力を非生産的な労働から解放することである。またもう一つには未来における労働力の確保である。この新しい原理に立てば、子どもたちへの配慮は個人的、家族的な問題ではなく、社会的、国家的問題である。また母性が保護されるということは、単に女性自身の問題であるばかりではない。それ以上に国民経済の任務からも重要であることは明白である。このように母性は新しい観点からみられるようになり、母性が社会的任務であるという認識がもたれるようになった。ソヴェート権力は、母性の重荷を女性の肩から取り除き、それを国家に転嫁するように様々な方策を講じている。幼児についての配慮と保護、物質的な援助、社会教育的な設備などこれら一切を母性と幼児保護部と教育人民委員部の社会教育課が負っていた。母親から母性という十字架を取り除いて、母親と子どもとの共同生活が産むほほえみと喜びだけを残すことがソヴェート権力の母性問題解決の原則である<sup>(7)</sup>。

労農政権下では妊婦や、乳児をもつ母のために設けられた診療所の網は全共和国に広まっている。帝政ロシアでは診療所は全部で六つしかなかったが、現在、診療所は乳児院と同様何千もの数にのぼっている。重要なことは子どものめんどろをみるという肉体労働を母親から軽減することである。ここでコロンタイは母性に対する考え方を述べている。即ち、母性たることは子どものおむつをかえたり、子どもに湯をつかわせたり、子どものゆりかごの側に縛り付けられたりすることではない。母性の社会的義務とはまずもっともよい状態で子どもを産むことによって集団に奉仕しているのだという自覚をもつことである。そして第二には自分の乳で乳児を養うことである。そのことによって女性は労働国家の一員たる権利をもち、乳児に対する社会的な義務が遂行されるのである。それ以外の成長していく子どもへの配慮は集団の手に移すことができる。もちろん母性の本能は強い。それを退化させる必要はない。しかし、なぜその本能を自分の子どもに対してだけの狭い愛や、配慮に限定してしまうのか？ なぜこの価値ある本能により高い段階まで素晴らしい芽生えを発達させ、自分の子ではなくて、他の寄る辺なき子どものことを思いやり、その子らに優しい愛撫と愛を与えようとはしないのであろうか？ このようにコロンタイは自分の子どもだけに限定された利己的な狭い愛をもつのではなく、母たることは単に個人的なことではなく、社会的な義務をも兼ね備えていることを明らかにしている。

労農国は具体的な方策として母親から過重な負担を取り除き、女性を保護する目的で革命の最初の年に「母の家」を建設した。母の家は出産前や出産後の最初の月に煩わしい家庭や家族から一時離れて、最初のもっとも責任ある日々を子どもに注意を傾けることができるように配慮されている。月日が経てば、母の眼は重要ではなくなるが、最初の週間に母と乳児の間にはまだ生理的な結合のようなものが残っており、このようなとき母から子どもを引き離すことは合理的ではない。

その他、育児の社会化のために企業や官庁に属する託児所や、町立の託児所、市立の託児

所などが設立されている。これらの施設が労働女性の負担をきわめて軽減したことはいうまでもないことであるが、まだまだ十分とはいえない。このほか3歳までの孤児や、捨て子を収容する子どもの家、3歳から7歳までの幼稚園、学齢に達するまでの子どもの遊び場、子どもの共産の家、子どもの労働の家、小学生や学齢前の児童のための無料食堂などが次々と建設された。最後の結びとしてコロンタイは家事が資本主義的経済を補っていること、私有財産が強固な閉鎖的な家族形態をなしているブルジョア社会では女性のための出口はないこと、抜本的な生活の改革こそが両性間の相互関係に根本的な変化をもたらすということを主張している。

(13) の道徳革命では、新しい生産条件と経済上の新しい組織は当然のことながら新しい生活と道徳律を産むと述べられている。プロレタリア独裁のもとでは道徳律は集団の利益から直接派生する。両性関係における道徳律の変化はもっとも顕著なものである。第一次大戦時、女性による労働の増大は女性の経済的独立を築き上げた。また結婚外の出産が増大することにより、過渡期におけるブルジョア道徳のあらゆる規範はたちどころに消滅していった。ソヴェート共和国では革命後の最初の月に教会結婚が廃止され、法律上の子どもと私生児との区別はとりはらわれた。共産制度と義務労働制により、結婚生活からあらゆる物質的打算がなくなった。これまで女性に一方的に求められた貞操や処女性は私有財産の上に作られた社会には必要であった。それは子どもの出生の合法性を決定するのに必要であったからである。私有財産をもつものは血縁の相続者に財産を相続させることを願った。私生児を承認する場合は、蓄積された財産が分散する可能性があったので、ブルジョア社会ではタブーとされた。

革命後に起こった家族婚姻関係の変化とともに売淫に対する考え方も変わった。売淫は女性が男性から経済的に束縛されたことの結果である。自分の労働で自分を養う可能性がなかったことからおきていることである。戦時共産時代には女性が家庭外で一定の仕事を必ずもつようになってから、職業的売淫は急速に姿を消すようになった。ソヴェート権力は売淫に対しては全く新しい見解を示した。売淫が追及されたのは売春婦が売淫をおこなっているからではなく、その人間が働かないこと、生産労働に従事しないことからであった。

総じて労働国家では、女性が職業的な売春婦であるか、または自分の有意義な労働によらず、生活を保障された法律上の夫に自分を売って生活している法律上の妻であるかには差異を認めなかった。義務労働に従事しない、労働の逃避者である一切の女性は売春婦であるという理由で義務労働を強制されたのである。現実にはネップ時代に党の活動家として名が知られていた夫が自分の留守中に身を売ることしか生きていけない女を連れ込んでいた場面を設定したコロンタイの小説「姉妹」(1923年)<sup>(8)</sup>(杉山秀子編訳『20世紀ロシア文学アンソロジー』、2002年新樹社、216～236ページ)には「一体どうやってこんな出口のない状態の女を手玉にとることができるのか？彼は意識の高い要職にある労働者ではないか！職のない同志をたすけるかわりに彼はその人間を買うなんて！自分の快樂のためにその肉体を買うなんて！これは余りにも生々しいことだったので私はすぐさま自分に言い聞かせ

ました。このような人間とは断じて暮らせないと！」<sup>(9)</sup>と記されている。革命間もない時代の貧困と混乱の狭間でコロンタイは悲憤やるかたない思いを綴っているのだ。事実、乳児をかかえた女性は一般的に解雇されやすく、男女差別は禁ずる必要があると 1922 年 2 月に法令まで出されるが現実にはまもられなかったようである。女性の失業による売春婦への転落は当時凄まじいものであったようだ。ネップ政権は見るに見かねて 1922 年 12 月、解雇に関する男女差別禁止法令の遵守、女性労働者の為の職業訓練に重点をおいた諸対策を特別に指示した<sup>(10)</sup>。

「我々は売春婦と自分の夫に扶養されて生きている法律上の妻との間に、彼女の夫が誰でもあっても、たとえ、それが〈人民委員〉であろうとも、差別を設けなかった」<sup>(11)</sup>とコロンタイもつけ加えている。

最後にコロンタイは「家族は進化を経験し、家族的な結束が弱まり、母性は社会的な機能に変化しつつある」と述べてこの項を結んでいる。

終章の女性問題の展望ではコロンタイはいたずらにブルジョア的女権論に立って女性同権主義を唱導するべきでないこと、むしろ、女性の肉体的精神的な特質、両性間の差異や、それらの長所を考慮しながら、その特性に従って、それぞれの異なる仕事を遂行すべきことを主張している。男性と同一の種類の労働でなくて、母性をもっている女性の利益を保ちながら、女性の力を有効に使うことこそがこれから注目されるべき点なのである。このことを換言すれば、女性是国家に対して、男性と等しく働き、また国家に新しい成員を与えるという二重の意味での義務を課せられているのだから、国家の方も当然女性に対して（男女平等という見地からも）特別の配慮を与えることを義務としなければいけないとコロンタイは主張しているのである。もちろんこのコロンタイの見解の大前提になるのは男女同権が保障されていることであるのはいうまでもない。

## 註

- (1) *Революционер, трибун, дипломат, Очерк жизни Александры Михайловны Коллонтай*, Иткина А. М., М., Политиздат, 1964
- (2) 『経済の発展における女性の状況』国営出版社、モスクワ、1922 年。  
*Положение Женщины 1922 в эволюции экономики*, Госиздат., М.
- (3) Там же стр. 125
- (4) Там же стр. 163
- (5) Там же стр. 125
- (6) Там же стр. 168
- (7) Там же стр. 172
- (8) 『20 世紀ロシア文学アンソロジー』杉山秀子編訳 2002 年新樹社 216-236 ページ。
- (9) Там же стр. 228
- (10) СУ РСФСР, 1922, Номер 18, стр. 203
- (11) *Положение Женщины 1922 в эволюции экономики*, Госиздат., М.  
Там же стр. 172

### 第三部 コロンタイの恋愛観

#### 第8章『赤い恋』<sup>(1)</sup>にみられる衝撃的ネップ批判

コロンタイは職業的革命家であり一時大臣まで務めたが、多彩な彼女には社会科学関係の著作のほかに生涯に4作の小説がある。

いずれもロシア伝統のリアリズム文学の影響を色濃く受けた緻密な描写と鋭い社会的抗議が込められた作品としていまだに人口に膾炙されている。そのうちの一つとして世界的にセンセーショナルを巻き起こした英語でレッド・ラブとして一世を風靡した有名な小説に以下触れてみる。

『ヴァシリーサ・マルイギナ』は1923年『働き蜂の恋』のなかの一作として書かれた小説である。そもそもこの『働き蜂の恋』は1923年『感情革命と習慣革命』の一卷としてソ連国立出版所から刊行された。1927年に日本ではじめてこの小説は『赤い恋』として翻訳されたが、この『赤い恋』という題名は英訳の『レッド・ラブ』を借用したものである。邦訳が刊行されるやいなや、赤い国における（愛情の共産化）などと内容が極度に歪曲され、センセーショナルに紹介された。性欲は一杯の水を飲み干すが如きという論理をこの本があたかも推奨しているかのように故意に解釈され、当時、反共宣伝の一部として大いに利用されたのであった。しかし、実際、この作品が、性的欲望は一杯の水を飲み干すように簡単にかたづけければよいという考えに貫かれていたのかどうか、作品に即して検証してみる必要がある。

主人公のヴァシリーサ・マルイギナは、いわばコロンタイの分身ともいえる人物として描かれている。この小説は夫との別れのあと、1917年から愛しつづけた年下の革命家ドウィベンコとの愛の生活と別離を下敷きにして書かれたのであった。もともとコロンタイはサント・ペテルブルグの将軍の娘として生まれ、開放的で自由闊達な家庭の雰囲気の中で何不自由なく過保護に育った。21歳でポーランド人のウラジーミル・コロンタイと結婚し一子をもうけるが、この結婚生活は三年で終わっている。1989年、26歳の時、コロンタイは家族をふり捨ててマルクス経済学研究のためスイスに旅立った。コロンタイはスイスを中心にヨーロッパの革命思想家たちと交わり、ヨーロッパ仕立ての革命理論を身につけ、90年代後半にロシアで盛んであったナロードニキ的なテロリズムと手を切った。1905年の第一次革命が起こったときは、雄弁な革命家として運動に参加し、私的所有を廃止した共産主義こそ女性の真の解放を約束する社会であることを唱導し、ロシアで初めて社会主義的女性論を展開した。1909年には『女性問題の社会的基礎』を執筆し、体制変革なしには真の女性の解放はあり得ぬことをその著で明らかにした。こうしてロシアの地で初めて、ナロードニキ的な女性革命家でもなく、またヨーロッパのブルジョア的女権拡張論者でもない、新しいタイプの女性革命家が誕生したのである。後に始まったドウィベンコとの共同生活は当時としては大胆かつ挑戦的なものであり、革命家のなかにもその華やかな男性関係に

眉をひそめる者もいた。しかしヨーロッパ仕込みの合理主義的な思考法と子ども時代から身につけた自由主義的な生き方のせいか、二人の愛人関係を通常の男がやっているようにこそそと隠してなどしないで堂々とつづけたのであった。この小説のなかでも自分のリアルな恋愛体験にもとづく愛の葛藤が綿々と克明に描かれている。

ヴァシリーサ・マルイギナは28歳のメリヤス工場の女工である。彼女は都会育ちの女によくあるように、やせて腺病質な体つきをしている。ヴァシリーサは情熱的で才気煥発なところがあり、戦争が始まるやいなや「ボリシェビキ」になり、メンシェビキや社会革命党員たちの言を次々と論破した。彼女の夫であり、同志のウラジーミルは、アメリカ帰りの〈アナキスト〉と人々に言われていたが、このことをヴァシリーサは百も承知であった。事実、ウラジーミルは実務的な能力には非凡なところがあつたが、規律性がなく、決議を無視し、何でも主観的にやってしまう欠点をもっていた。彼は少年の頃アメリカに渡り、そこで職業を転々としながら簿記学校にも通い、金持ちの綿花商人に雇われ、自動車の運転手の職にありついた。商人は彼のことを〈アナキスト〉だと承知しながら、尊敬してくれた。そんな彼であってもヴァシリーサの彼への愛は決して変わらなかった。

二人はすでに七カ月も別居生活を余儀なくさせられている。ヴァシリーサは一般的な党務のほかに「コンミュンの家」の組織づくりもはじめていた。今迄のように皆がバラバラにやっていた単なる「共同住宅」ではなく、「共産主義」的な精神が吹きこまれたものをめざしていた。共同の炊事場、洗濯所、共通の食堂などを設け、皆が集団のために働くという構想をかかげていた。しかし最初の頃は毎日、いさかいと不和の日々がつづいた。ヴァシリーサは毎日役所をあちこちかけずり廻って交渉し、「コンミュンの家」をなんとか軌道にのせようと努力する。

会計報告を役所に提出し、修理補助金も貸しつけられるようになったが、「独立採算制」もとらなければならなかった。彼女の夫のヴァロージャ（ウラジーミルの愛称）にはいかに「コンミュンの家」を維持することが大変か何もかも打ちあけたかったが、夫は夫で重要な任務を抱えて他の場所で頑張っていた。それは彼がかつて勤めたことのある某商会の貿易の仕事であった。その企業を復活させ、調整するという責任ある立場に彼は立たされており、その仕事から手を放す余裕は全くなかったのである。彼女は「コンミュンの家」の仕事でヘトヘトになっていた。初期ソヴェート社会においては家事、育児の社会化は喫緊のことからであった。それは革命的イデオロギーによって推し進められたというより、それはむしろ革命直後の社会的、経済的混乱を避けるための苦肉の手段を見つけることが肝要であった。食生活の社会化は戦時共産主義の物資の不足から必要とされていた。当時極端な話、「コンミュンの10人のメンバーが一片のパンを喜んでわけあたえ、一つのスプーンを5～6人で順番に使うなどの生活を余儀なくされており」、コンミュンの家をつくることは必須なことであった。そうこうしているうちに、夫から窮地に立たされているという手紙を受けとり、夫の任地に出発する決心をする。二人の別居理由は互いに相手の仕事の邪魔をせず、仕事に身も心も献げるというためであったのに。

こうして「コンミュンの家」の生みの母であるヴァシリーサは未練を残しながら「コンミュンの家」を去る。

やがてヴァシリーサ・マルイギナは「女たち」の味方として女性の経済的自立と政治的自由の獲得、女性労働者の母性の保護をめざし、彼女らの権利を守る代弁者をして日夜励むようになる。彼女はケレンスキー時代（1917年7月から十月革命に至るソヴェート政権誕生まで）には市議員選挙の候補者に選ばれるなど、メリヤス工場の女工たちの大きな支持を受ける。彼女自身、子ども時代から工場で働いていたので、彼女等の言い分も分かるし、要求もよく分かったのである。しかしある時同志たちはマルイギナをこう非難する。

「女たちの問題は後まわしにしたらどうかな？ 今は緊急の問題が山ほどあるではないですか！」

ヴァシリーサはこの同志たちの意見にいきりたってくっつく。

『女たちの』問題が、どうしてほかの問題より小さいのですか？ みんながそんな風に考えがちだから、『時代おくれの女』が生まれるんです。

もし女性がいなかったら革命はできません。女こそすべてです。女がよくよく考えたり、夫にぐずぐずいったりするから男も人生を無益にすごすのです。

『女を獲得することは、事を半ば成しとげる』ことなのです」

と、コロンタイはヴァシリーサに自己の見解を述べさせている。このヴァシリーサの言はソ連時代における男女のあり方を検証する場合、極めて示唆に富んだ意見である。つまり、ソ連においてはソヴェート憲法にも約束されているように、男女は平等ということが大前提であるが、女性の就業率が高いにもかかわらず実際には家事の大半が女性の手になんてまわっている。とりわけ1980年代の後半には女性の家事労働は週40時間に達しているのに、男性のそれは6時間のみといわれている。

もちろんこの背景には根強い男女の性別役割意識が働いていることは言うに及ばない。ペレストロイカやグラスノスチなど新しい社会変革のための波が押し寄せたにもかかわらず、このような男女の役割分担意識による女性に対する家事の押しつけの固定化は免れなかった。従来、ベーベルやエンゲルスは、女性解放は社会制度の変革の後で初めて達成されると言っているが、制度がいくら変わっても人間の意識変革を進めなければ、いつまでたっても女性の真の解放は達成されないことは自明である。制度の変革の後ではなくて、同時に意識の変革も強力に押し進めなくてはならないのである。コロンタイには恐らくこのマルクス主義的女性解放論の解釈のし方に誤解をもたらすことについて次のように言葉を補って論及している。「女性の隷属と無権利状態は私有財産制の確立と共に発生したと思われる。しかしそのような見解は誤りである。」<sup>(2)</sup> しかし、この私有財産制は実際、すでに存在していた女性の隷属状態を形式的に強化していたとコロンタイは言うのだ。コロンタイによれば、女性の隷属化の真の理由は「性による労働の分業化であり、生産労働を男が、補助的労働を女がするという分業の在り方にあった。」<sup>(3)</sup> という。一般的には男性論者はソヴェート

時代において、性差別は社会的モメントによって誘発されるものとし、生理的モメントによるものであることは殆ど無視していたようである。コロンタイは女性の解放論者としてこの点を鋭くみのがさなかったといえる。エンゲルスは資本家と労働者の対立は資本家と労働者が法律上平等となる民主共和制において初めて純粋な形で表れ、それはむしろ止揚されるものではなく、反対にそれが闘われる地盤が初めて整わされたのであると力説している。この論理を男女の対立に敷衍して、次のように喝破しているのである。「近代的家族における夫の妻に対する支配の独特の性格や、夫婦の真の社会的平等を実現する必要性とその方法も、夫婦が法的に完全に同権となった時初めて白日の下にあらわれるだろう。」<sup>(4)</sup> すなわち、エンゲルスの表現を借りれば、「社会主義は男女の対立を止揚するのではなく、むしろそれが真に解決されるための地盤を始めて提供するのである」と。

しかし、全身全霊で女性の解放を怒涛のごとく一気に社会主義によって達成されるべきものと考えていた彼女にはそのような段階的な達成の仕方はどうしても肯定することができなかった。

たとえば文中、ヴァシリーサにも前述のように、女の問題を後まわしにして緊急の問題を片づけるとは何事かとどならせてもいる。時折しも臨時政府ケレンスキー政権から革命政権への移行の時期であり、このヴァシリーサ、即コロンタイの考え方は、実にその時代そのものが要求していたアクチュアルなものでもあったわけである。この点に関しては、男性のレーニンも種々心を砕きつぎのような名言を吐いている。

「社会主義社会の建設そのものは、われわれが女性の完全な労働をかりとって、こまごました、人を愚鈍にする、非生産的な〔家事〕労働から解放された女性といっしょに新しい仕事にとりかかるときはじめてはじまるだろう……」<sup>(5)</sup>。

ソヴェートにおける社会主義的建設の揺らん期にはこのようなレーニンの柔軟な思考があったにもかかわらず、何故、70余年を経たロシアに全く逆の現象がみられるのであろうか。それはやはり、意識革命の不徹底さと、スターリンの台頭、家庭を生産の基礎単位とするためのスターリンの家父長的家庭強化策と強引な集団的農業の遂行による経済の失敗、スターリン自身のマルクス・レーニン主義の歪曲、社会主義理念を自己の都合で捻じ曲げ、それを個人的覇権主義に徹頭徹尾利用しようとした事に尽きる。この点は後述することにする。かくして生産の効率的追求のために、女性は再び家事労働の鎖につながれる革命以前の状態に戻ってしまったのである。

この小説でもご多聞にもれず、ヴァロージャが支配人になってからは、やたらと客が多くなり、その接待や料理の手配については料理女がいるにせよ、ヴァシリーサに主婦としての家事が全部委される。しかしヴァシリーサ自身にもそのことの責任の一端があることは否定できない。家庭の外では家事の軽減のために共同の炊事場や食堂や託児所を建設してもらおうと駆けずり廻りながら、家庭に戻ると相変わらず革命前よりつづいている古い夫と妻の役割分担を批判なく担っている。ヴァロージャが「腹がへった。メシはまだか」などと言うのを平然と許しており、首尾一貫性に欠けている。



ヴァシリーサはヴァロージャに対して負い目を一つもっていた。それは自分が処女でないという事実である。ヴァシリーサはヴァロージャと一緒にいる時、ヴァロージャの口から純潔な処女のために自分の心と愛を守り通したいというのを聞いて苦々しい気持ちになった。ヴァシリーサは、機械部隊のペーチャ・ラズグローヴィが戦線に旅立つ前に彼と関係したことがあるし、党の組織者で婚約者だった男とも関係をもったことがあるからである。ヴァロージャはヴァシリーサの杞憂を払いのけるかのように「君は僕のもの……君より清い人はこの世の中にはいないよ。君の心は純潔だ」と言ってくれるのであった。しかしこのヴァロージャの甘い言葉もそう長くはつづかなかった。7カ月の別居生活の後、ヴァシリーサが夫の赴任先を訪ねてみると、夫が看護婦と関係していたことがすぐにばれてしまうのである。その後しばらく平穏無事がつづくが、ふとしたことから彼にニーナ・コンスタンチノーヴァという若い愛人がいることに気づく。なんでも貴族の家庭の出身で、親類縁者も少なく、ネップマンのサヴェリーエフの世話をうけているとかで、五、六カ国語に堪能という理由でサヴェリーエフが仕事のあっせんをし、住み家もみつけてやったという。ヴァロージャにいわせると、ニーナはブルジョア家庭のお嬢様育ちのため、折れそうにひ弱で自分が守ってやらないと生きていけないのだという。また、ヴァロージャはニーナの処女を奪ったということで彼女に責任を感じ、世話をする義務感をもっているというのである。一方県議会の統制委員会はヴァロージャを告発しようとしていた。嫌疑をかけられた理由は「奔放な暮し」をし「模範的」ではない行状があること、とりわけ彼が二世帯を維持する金をどこから手にいれているかという点なのであった。しかし実際にはヴァロージャは二世帯を維持できるほどの金もっていなかった。確かにヴァロージャは、ニーナ・コンスタンチノーヴァを養っていたかもしれないが、ヴァシリーサにとってはヴァロージャの給料では足りなくて自分の蓄えを家計維持のためにどんどんつかっていたのであった。それにヴァロージャは派手好きで、次から次へと党の幹部やネップマンを自宅に招待するので、到底彼の給料だけではやっていけなかった。それにもかかわらず、夫はみさかいもなくニーナ・コンスタンチノーヴァに金をつぎこんでいるのだ。ヴァロージャに対するヴァシリーサの疑心暗鬼と不信感は深まるばかりであった。この小説の後半の部分には、如何にヴァシリーサが男に外に女ができたことで悶々とした日々を送り、ヴァロージャに対する未練と怒りの念が交互に彼女の脳裡をおそい、如何にヴァロージャから次第に愛する気持ちが薄れていったのかが実に詳細に綿々と書き連ねられている。そしてヴァシリーサのこの愛と慟哭の日々は、彼女の愛がヴァロージャに対して如何に真摯なものであるか、そして愛が深ければ深いほど傷も深いということを物語っている。ヴァロージャ自身も二人の女の間で苦しみかつ悩んだ。そして遂にヴァシリーサの方をとる決意をし、ニーナとの交渉をあきらめて彼女を思いきってモスクワに引っ越しさせようと決意するのである。ヴァシリーサはニーナが土地を離れるときにみせた涙に自分でも思いもよらぬあわれみの情が生まれてしまう。それはニーナの涙に対するあわれみの心であった。ニーナが指の先で涙をぬぐっていた姿を思い出すと、苦しみに悶え、嘆き悲しみ、子どもまでできたのに中絶してしまったというニーナの心の痛みややるせない女心にすっ

かりあわれみと同情を感じてしまうのであった。そしてヴァシリーサはニーナあてにペンをとる。

「……あなた方は互いに相性がとてもいいのです。あなたこそウラジーミルの妻になるべきです。

……二人の生活は苦しみ以外何もない」

とつづり、自分がヴァロージャと別れるのは、ニーナが夫をとりあげたのではなく、ヴァロージャの自分に対する愛がさめてしまったからであった、と書く。ヴァシリーサ自身もヴァロージャと別れた後に妊娠していることに気づくが、彼女は当時はやっただよに子どもを中絶しようとはせず社会の子として立派に育てあげる決心をするのであった。そのために早くも保育所をつくることに没頭してしまう。そして子どもと共に生きて働き、人生を勇敢に闘おうと新たな決意に燃えるところでこの小説は終わっている。

こうしてみると、女主人公ヴァシリーサが同時に何人もの男とあたかも喉の渇きをいやすかのように乱脈な性交渉をもったと一般にいわれていることとは程遠い内容なのである。一人の精神的にも経済的にも自立した女が、あの革命後の国内戦の時代を経た最も経済的に混沌とした時代に、主義のために、また女性の解放のために闘い、かつ愛し、傷つき、懊悩し、自己再生していく過程が極めて真面目に几帳面に描かれている。むしろこの場合、喉の渇きをいやすかのように同時に二つの家庭をもち、「一人の妻は家のなかの家事をやらせて、党員と結婚生活をやっているという口実にし、もう一人の妻は『秘密の家』に愛と心の慰めのためにおいておく」夫のヴァロージャの方がよっぽど乱れていると言った方が適当である。このヴァロージャの性的乱脈ぶりを、むしろ妻のヴァシリーサの方が、はじめのうちはそれをヴァロージャにとって「一杯のウォッカ」にすぎない、「飲み干せば、すぐに忘れる」と自ら心の高鳴りをしずめ、夫を理解し、そういう夫を受け入れようと無駄な努力をしているのである。

このように実際は性の渇きを「一杯のウォッカ」を飲み干すような感覚で満たしているのは、女主人公ヴァシリーサではなく夫のヴァロージャの方であることはすでに明らかになったのであるが、それでは何故世間一般には、全く180度逆の構図のすりかえがおこなわれ宣伝されてしまったのであろうか。これには明らかに意図的な理由がある。その理由の一つとしては例え赤い国の共産党員であっても、男性の性的乱脈を糾弾したからといって少しもセンセーションを巻き起こすことにはならないことによるのである。1920年から1930年代の社会的慣習からいうと、そのようなことは西欧では日常茶飯事で、むしろ男の甲斐性とするのが普通だったのである。ところが女の場合であると、処女であること、女が貞操を守るということは私有財産制度をとる国においては絶対的に求められた要件であり、女が男と同様に自由に性交渉をもちたいときにもち、しかも複数の男ともつなどということはタブーであり、このタブーを赤い国の女はじゃんじゃんやってのけるのだ、なんと空恐ろしい国ではないかということの一部の人が宣伝したかったのではあるまいかと思われる。またもう一つの点は、日本の20年代、30年代の左翼活動家のなかに、身の廻りの世話をしてく

れ、なおかつセックスの処理をしてくれるハウス・キーパー的なものを許す下地づくりにこの考え方が一役かったということもあながち嘘とは言いきれないであろう。

さて以上の点と関連して、女が男なみの性道德観をもつことがタブーとされたことと女の処女性に価値を見出すこととは、全く表裏一体のことなのである。前述した如く、ヴァロージャが当初ヴァシリーサに自分の愛を処女にのみ献げたいという願望を告白したことと、後に知りあったニーナ・コンスタンチノーヴァと別れられない理由を、自分がはじめてニーナの処女を奪ったからだと言ったことが述べたことは、彼がどちらの点でも陳腐なブルジョア的な道德観にのっかってしまっていることを明白に物語っているのである。ここで注目したいのは、コロンタイが女にも男と同様にブルジョア的な性道德観をもつことが、それがとりもなおさず男女平等であるとは短絡的に考えていないことである。せめて男も女も同じスタート地点に立って新しい社会にふさわしい新しい道德観をつくる必要性があることをその著『新しいモラルと労働者階級』（1918年）のなかでも力説しているのであって、受けとめる方もこの点を決して性急に誤解してはならない。コロンタイは、いずれ将来女性と男性が同一の道德的基準で考慮される時代が来ると信じて疑わなかった。要するにコロンタイは、性道德の内容の如何はさておき、女性が同じ道德的基準では全くはかられていないという社会的現実を手厳しく告発したかったのである。

さて、今まで『ヴァシリーサ・マルイギナ』におけるコロンタイ自身の独特な女性解放思想といくつかの問題点をみてきたのであるが、この小説『ヴァシリーサ・マルイギナ』は女性解放思想以外にも、革命後のロシア・ソヴェートが戦時共産主義時代を経て、ネップに突入していった時代そのものを実に克明に記録している点でユニークな作品となっている。ロシア・ソヴェート文学のなかでネップ時代を見事に反映させた作品としては、他にミハイル・ブルガーコフの一連の連作『若い医師の記録』の一部や『犬の心臓』、『ゾーイカのすまい』（戯曲）などのすぐれた作品群があるが、この『ヴァシリーサ・マルイギナ』は、ネップ時代におけるネップマン像を典型化させて描いたことですぐれた時代の証言としての役割を担っており、その描写のしかたもリアリティに富んでいて、別の側面から言えばこの小説はいわばネップ批判の小説といっても過言ではないのである。

この小説のもう一方の主人公ヴァロージャは、ネップ政策によって浮上してきた典型的ネップマンとして描かれ、否定的人物像になっている。例えば看護婦やブルジョアの娘に手を出せば、党员である以上、統制委員会の査問をうけることになるし、ひらの店員から支配人になり上がってからは、日夜客を呼びつけては豪華な晩さん会を開いたりするし、家政を妻のヴァシリーサに託しておかなければ気が済まなかった。毎晩招待される客は次から次へと変わるが、ほとんどが実務家であり、昔は商人だった人もいる。客のなかにはコムニストがいる場合もあるが、彼らは商売にすっかり馴れ、今では「赤い商人」になりきっていた。主人のヴァロージャも車一台の他に散歩用に馬まで資本として購入し、都会では圧倒的に部屋が不足しているというのに、広々とした一戸建ての家をあてがわれ、何人もの使用人を使い、ぜいたく三昧の暮らしをしているのである。ある時ヴァシリーサが外出から戻ってみる

と家の庭には積み込み人夫がワイワイあふれていた。彼らは口々に「最高額だ!」「……仕事は放棄だ」とか叫んでいた。やがて「かしら」が選ばれ、ヴァシリーサと交渉した。ヴァシリーサの方もすっかり興奮し、自分が「支配人の妻」であることを忘れてしまい、積み込み人夫たちの要求問題にすっかり夢中になってしまうのであった。そして彼らの要求をまとめるのを手伝っていると夫が血相を変えて帰宅し、一体どんな権利があつてシンジケート（新経済政策初期の計画的原料買付、製品販売のためのトラスト連合）の仕事に口をはさむのかとヴァシリーサを激しく責めたて、「いやらしいペテン師め」とまでヴァシリーサにむかって叫びたてた。ヴァシリーサはその夫の叫び声を聞いて、急に自分たち二人がまるで別々の陣営に所属する敵のように思えて心を深く傷つけられてしまう。ここでは労働者と〈支配人〉がまるで階級的に対立しているかのように描かれ、コロンタイがネップを全面的に否定していることが手にとるように分かるのである。

こうしてすっかりブルジョア的になったヴァロージャは、時々鏡の前でお化粧をし、香水などをにおわせながら囲っている女の家に出かけていく。ここまできると、シンジケートの人もブルジョアの旦那も全く同じであるというふうに感ぜられるのである。またヴァロージャはひどく浪費ぐせが身についてしまっている。ヴァシリーサが別居後、夫の赴任先にきてみるとヴァロージャは妻に自慢たつぷりの様子でミラーのついた洋服ダンスや絹のふとん、しゃれたランプなどを次々とみせびらかし、自分が如何に高給をとっているか、その額まで言うのであった。ヴァシリーサは夫に飢えている人がいるというのに、こんなガラクタ共に給料をつかうことがどうしてできるのか」と詰問したりするとヴァロージャは真っ青になって激昂するのであった。ヴァロージャのシンジケートでの有能な支配人ぶりは党中央からも高く評価され、新しい原理のもとに書かれた会計帳簿は特に賞賛され、支配人としての地位を不動のものにしたのであるが、一方では規律を無視し、エゴイスティックで性的放縦な私生活ぶりで何度か統制委員会にかけられ、国家保安部（ゲ・ペ・ウ）の追及もまぬがれないような事態を何度もひき起こした。その度に黨員で知名度の高い妻ヴァシリーサを隠れみのにして巧みに泳ぎきって、自己の私腹を肥やしていった。最初のうちはヴァシリーサも彼を努めて理解しようとするが、何度目かの彼の裏切りの後で決してこのような男とはやっていけないことに気づくのである。また、彼が何度も開く晩さん会には、ネップマンの連中がかわるがわる訪れ、度々ヴァシリーサに不愉快な思いをさせた。とりわけ人差し指に宝石入りの指輪をはめているサヴェリーエフは、眼が狡猾そうで、すべてを呑みつくすような不敵な笑いをいつも浮かべ、噂によればヴァロージャと「わりかん」でニーナ・コンスタンチノーヴァを囲っているともいわれている輩だった。ヴァシリーサはヴァロージャに、あのいやらしい山師のサヴェリーエフと交際しないでくれ、家には入れてくれるなど何度か懇請するのだが、ヴァロージャは聞きいれようとしない。確かに彼自身もサヴェリーエフを尊敬はしていないが、サヴェリーエフは古いつてをかなりもっていて、顔が広いから、サヴェリーエフを通じて商人たちともつきあいができる、無価値なブルジョアかもしれないが、モスクワは高く買っているから、彼との交際は断つことができないというのが、ヴァロージャの言い訳

であった。またサヴェリーエフ以外にも次から次へとヴァロージャの家にあられるネップマンたちの薄汚れた面々をコロンタイは実にこと細かく、また嘲笑をこめて描いている。また長い別居生活のあとでヴァシリーサが汽車で夫の赴任先を訪ねた時、偶然にも同じ車室で女のネップマンと出会った状況をつぎのようにリアルに典型化している。彼女はおしゃべりでイヤリングをつけ、香水をプンプンにおわせ、絹のものを身にまとしてシュルシュルいわせている女だが、何故か同室のヴァシリーサを敬遠し、時にはヴァシリーサにこんなことをいう。

「ねえ、ごめんなさい、あなたのお腰の下に私のショールがありますわ…。しわくちやになりますのよ」

「ねえ、夜のお仕度がございますの、その間廊下に出てくださらない？」

ヴァシリーサにはこの香水のにおいで鼻がまがりそうな女がこの車室の主人公で、自分がおなさけで入れてもらっているような不愉快な気持ちにたちまちなってしまうのであった。このように、この小説の全編を通じて墮落したネップマン<sup>(6)</sup>たちの生活や言動と、革命後国内戦時代を白衛軍と闘った、緊張はしていても充実した日々が交互に浮かびあがり、国内戦時代にはヴァロージャとヴァシリーサがいかにか手に手を取りあって同志的愛情のなかで共に戦友として闘ったか、そしてその忘れ去ることのできない日々は二度と戻らないという切なく甘い回想が現実のブルジョア的な生活の描写の合間合間に綿々とつづられているのである。

コロンタイがこの小説でネップ批判をしたことには、それなりに当時の政治的背景が存在していた。穀物の調達方法は、割り当て徴発制度から食糧税制度に移行した。この徴発制度のおかげで、農民の働く意欲をすっかり阻害してしまったのである。農民の不満をそらすためには新しい経済政策が緊急に必要となった。農民が国家に納入する食糧税以外の残りのものは収穫をあげればあげるほど農民自身の懐がより豊かになるという原理であった。当時農業のみならず商業の面でも一部手直しがなされ、段階的に完全独立採算制や自己調達制がとり入れられ、商業的才能のあるものは、メキメキ頭角をあらわし、ネップマンとして私腹をこやしながら泳ぎ回ることができたわけである。このように、レーニンは革命後の混乱期にネップを根付かせることによって固定税の思想をソ連の地に導入し、農業を飛躍的に発展させたが、ネップの主要な思想は経済的自主性であり、農業のみならず、一般的に集団的あるいは個人的な生産者が経済的自主性をもつということだったのである。当時「労働者反対派」という分派の党員グループを組織したコロンタイには農業政策を元にしてできたネップの核心を理解することは困難であった。

次章ではネップの意義と労働者反対派についての核心を述べる。

## 註

- (1) 本文中の『ヴァシリーサ・マルイギナ』からの引用は、ソ連国立出版所発行、1923年『感情革命と習慣革命』のなかの一巻による。

- (2) А. М. Коллонтай. *Труд женщины в эволюции хозяйства*, 1928, стр. 22
- (3) Там же стр.175
- (4) Karl Marx—Friedrich Engels, Werke Bd.21,1962, SS. 75-76  
戸原四郎 前掲書訳 97～98 ページ。
- (5) 「1919年女性労働者大会」レーニン全集、第30巻、27～37ページ。既出  
註；戦時共産主義の後、1921年3月21日に施行されだした。ソ連新経済政策  
Новый Экономический План の頭文字をとってネップと呼ばれた。
- (6) 私的商人、私の実業家。

註；補足；ネップ初期の食糧事情がいかに劣悪なものであるかはブルガーコフの『犬の心臓』や、リベジンスキー『一週間』（中編）などに詳しい。

ここでは、リベジンスキーの『一週間』の中の描写を挙げておく。

「クリーミンは静かな夜のとばりに覆われた荒野の限りない広がりを中心に思い浮かべた。また嵐に荒らされながら、雪の塊の中で生き返ろうとしている、種蒔きを待っている畑や、農民たちの姿が眼にうかぶようであった。彼らは天気の良い日には空き地のところに黒い人ばかりになって集まり、天候や収穫についてあれこれ話し合い、それから倉庫は空っぽで一粒の種子もないことを思い出し、黙々と別れて行く。町からの救済を震える思いで待ち焦がれ、毎日今か今かと期待しながらも、心の中には共産党員や、食料委員会、ソヴェートに対する敵意がむらむらとわきあがってくる。」（『20世紀ロシア文学アンソロジー』中の『一週間』からの抜粋。 新樹社刊 杉山秀子訳 18－19頁）

しかし、一般民衆の食糧事情は最悪にも拘らず、食料委員会に属している人間はなぜか特権があたえられているのだ。ネップ時代はうまく立ち回れる才覚のある人間はその利権をうまく吸い上げまたその利権から次々と利権をうみだすことができることはざらであった。つまり個人の力量によってかなり自由に富を得ることができた政策であり、それによって経済の活性化を図り、経済的不況に活性化を与える目論見であったようである。後に共産党中央からの厳しい政治的引き締めがさらに異端派弾圧に発展すらした。ここでは、特権にありついてヌクヌク暮らしている人間と全く特権に興味もなく党ひとすじに貧しく生きている人間の落差を次の一節は象徴的に描いている。

ある時、革命への献身に明け暮れ、孤独をかこつ党員のマルチノフは冬中一度だけ、同じく党員で家族持ちのマトーセンコの家招待された。

「そこでマルチノフは白い自家製のパン(当時白いパンといえば貴族以外は食べられなかった。ライムギ100%の黒パンにやっとありつけるのが関の山の食糧事情であった。)に黄色いクリーム・バターを塗って食べた。クリーム色の香りのよい甘いお茶をむさぼるように飲んだ。全く長い間こんなにおいしく食べたことはなかったので彼は正直驚いた。一体どこからマトーセンコはこんなものを手に入れたのか。

一方、丸顔で愛嬌のあるマトーセンコは、優しく微笑んで、非常に小さな眼をしばたたか

せ、上役に対する敬意を表しつつもそれでいて一家の主人らしいある種の自己満足をみせながら、マルチノフをもてなすのであった。— マルチノフさん、蜂蜜をどうぞ。私の家内は食料委員会に務めておりますので、給料は大変よろしいんです。牛乳も召し上がって下さい。自前の牝牛からのものがございます.....。家庭を持っている人間はすべて自分でやっていますんですよ！ご覧のように私は非常に家計の切り盛りのうまい人間なんです。一体飢えで苦しまなければならない理屈がどこにありますか？実際こんなことについては我々の綱領には、へ、へ、..... 何も書かれてちゃいません。へ、へ、本当にそうじゃありませんか？マルチノフさん？いやあ、あなた何も召し上がりにならないですね？グルーシャ、部長さんをおもてなししなさい」と、ふざけたような調子ではあるが、きつく妻をたしなめた.....」。

(同 『一週間』 36～37 ページ)

## 第9章 新経済政策—ネップと労働者反対派

そもそもネップとは何かと言え、革命後の内戦状態のなかで食糧の割り当て徴発制など、あらゆる資源を国の手に集中的に管理していた戦時共産主義の政策から生産者の自主性や商業の自由を認める新しい経済政策に移行（1921年）したことをさし示すものなのである。穀物の調達方法は、割り当て徴発制度から食糧税制度に移行した。割り当て徴発制度は農民のなかに絶大な不満をひきおこし、ソ連のあちこちで暴動が起こった。この徴発制度のおかげで、家族の人数分を差し引いた分が国家に全部強制的に徴発され、そのために農民の働く意欲をすっかり阻害し、不満分子を輩出せしめてしまったのである。この農民の不満をそらすためには新しい経済政策が緊急に必要となった。即ち、農民が国家に納入する食糧税を一定のものと決め、残りのものは自由に処分できるようにし、収穫をあげればあげるほど農民自身の懐がより豊かになるという原理であった。この原理はきわめて効果があり、ネップ導入の二年後1923年には、革命後はじめて外国に穀物を売り出すほど生産量が著しく上昇した。レーニンの表現を借りれば、コルホーズ以前の農村の社会構造は、まず家父長的、資本主義的、社会主義的、社会主義への過渡期という複雑な機能を持つ構造体であった。このうち、中農層は農民の基本的部分を構成しており、全面的集団化の過程にいたるまで維持された。貧農層は純粋にプロレタリア化せず、そのうちの多くの部分は中農層の隊列に移行した。

20年代農村の社会的、経済的發展はネップという政策の特殊性故に社会主義への道に移行しつつある特殊な形態をとったので以下、参考のため掲げる。

**農村住民（納税者）の社会的構成表（1）**

（人数—1000人）

社会構成グループ	1924年—25年度	1925年度	1926年—27年度
プロレタリアート	2184	2454	2560
貧 農	5803	5317	5037
中 農	13678	13822	14280
起 業 家	728	816	896

レーニンは革命以降、この社会的経済現象をむしろ一つの成果とみなして次のように評価している。

「農民国でプロレタリアートの独裁によって第一の利益を得たもの、最も多くの利益を得たもの、たちまち利益を得たものは、全体として農民であった。地主と資本家が利益を得ていたロシアでは、農民たちは飢えていた。農民は幾世紀もの間、我が国の歴史において、自分のために働く可能性を持ったことは一度もなかった。農民は数億プードの穀物を資本家に都市と外国に引き渡しなが、飢えていた。プロレタリアートの独裁の下で初めて農民は自分のために働き、都市の住民より良い食事をとるようになった。略」<sup>(2)</sup>。このネップの育



成は長い試行錯誤の過程を通じて社会に根を下ろすようになった。これに伴い、農業生産の急速な復興がはじまり、当時ソ連邦全体の播種面積は1927年に戦前より740万ヘクタール増加し、1億1240万ヘクタールになった。農民は初めて、自分のために働き、都市の住民より良い食事ができ、自分の穀物を食べる自由を得、飢えからの自由を得たのである。当時、商品貨幣的単純な交換は消費者から生産者への直接的購買により、43%の生産物が流通した。現物交換を通じては22%が可能になった。この交換関係を見ていくと20年代末までに社会的には小商品的な、小ブルジョア的な関係が成り立っていたが、生産関係においては、資本主義的側面と社会主義的側面が混然として存在したのである。この現象と20年代に階級闘争が農村で先鋭になったことは納得できる現象といえる。

レーニンは遅れた農村の社会主義的改造において次のような注意点を述べている。

「ここでは一層ゆっくりと進まねばならない……ここで布告や法令によって共同の土地耕作を導入しようとすることは最大の愚行であろう。」<sup>(3)</sup>ただ、ゆっくりと、ありとあらゆる漸進的、予備的段階を通じて「農民に全く近づきやすい広範な過渡的措置を利用しつつ」、「社会主義的改造の遂行方法を決定するに際しては、譲歩をおこないつつ」、「ありふれた農民の水準に」に適合しつつ、このようにしてのみ、農村に社会主義を建設し得ると力説した<sup>(4)</sup>。こうして農村に社会主義を根付かせるための漸進的方策としてレーニンはまず、共同組合の設立を推奨した。レーニンはこの協同組合こそ、農民にとってもっとも簡単で、容易で、新しい秩序への近づきやすい方法であると確信したのである。

労働関係ではこのネップの政策は遅ればせながら、1921-22年末において定着するようになったと言われているのが定説である。

当時組合、労働関係、農業のみならず商業の面でも一部手直しがなされ、段階的に完全独立採算制や自己調達制がとり入れられ、商業的才能のあるものは、メキメキ頭角をあらわし、ネップマンとして私腹をこやしながらか泳ぎ回ることができたわけである。

レーニンは革命後の混乱期にネップを根付かせることによって固定税の思想をソ連の地に導入し、農業を飛躍的に発展させたが、ネップの主要な思想は経済的自主性であり、農業のみならず、一般的に集団的あるいは個人的な生産者が経済的自主性をもつということだったのである。

さて、ネップを生きた実際の労働者たちの生活はいかなるものであったか。ここに極めて興味深い事例のいくつかがある。かの有名なエレーナ・カボ著の『労働者の日常生活概要』<sup>(5)</sup> E. O. Кабо, *Очерки рабочего быта*. の記録である。

ネップ時代の都会に生きる労働者の生きざまが生々しく、その体感温度まで感ぜられるような筆致で実に立体的に描かれている希少性の高い文献である。筆者は1980年代、レーニン図書館で閲覧、マイクロフィッシュを手に入れたが当時は危うく見過ごすところであったが、塩川伸明東大名誉教授の文献でその重要性を認識したのであえて引用しておく。

エレーナ・ガポは14家庭を、革命前の停滞的生活をそのまま保持している第一グループ、変化の兆しの見える第二グループ、新しい生活様式の発展しつつある第三グループに分けて

いる。これらの人々は例外的な人達ではなく、モスクワの諸工場の平凡な一般プロレタリアで、革命闘争や社会主義理念に目覚めて戦う意識の高い党员は含まれていないようだ。彼らはその有能さのゆえに行政任務や活動に携わっているのでグループには入っていないとのことである。ここではごく一般的な普通の労働者家庭の生活ぶりのほんの一例をとりあげる。

#### 第一グループ — 停滞型：

一番目に登場するのは 42 歳の紡績女工（低熟練）である。彼女はカルーガ県の農民の出身で、学校には一度もいかず、今でも文盲である。18 歳でモスクワにやってきて結婚し、農村との関係を断った（しかし調査年の 7 月には農村にいていたという。）その時以来一貫してトリョフゴルナヤ工場で働いている。

最初の夫と死別し、再婚したが、これは非登録婚である。夫は妻よりはるかに高賃金であるにもかかわらず、家計に入れる金額は妻よりすくない。典型的飲んだくれのタイプ。稼ぎの大半を自分で飲んでしまうからである。

彼女は映画にも演劇にもいかず文化的活動一切興味がなく、政治には全く無関心、労働組合とは何であり、何のために必要であるかさえ理解していない。これは繊維女工の典型的《否定的なタイプ》であり、このタイプは今や少なくなりつつあるが女性の中にはまだ珍しくない。夫の方は半熟練工で、書くことはできないが読むことはできる。新聞を読んだり、映画に行ったりしていて妻より文化的である。1905 年にはプレスニャのバリケード闘争にくわわったこともある。農村とは縁がない。両親とも子供の教育には注意をはらっていないが、トリョフゴルナヤ工場が教育を引き受けている。住宅の状態は著しく悪い。部屋には二つのコーナーがあって、妻のコーナーにはアイコンがあって夫のコーナーにはレーニンの肖像がある。家計収支を見ると、低い賃金に借金をかかえ、やっと最低生活を維持している状態である。……

— これを見ると文盲で低賃金の妻が一身に家計を守って懸命に働いている様子が彷彿とされる。但し、社会的には否定されるべき女性像として見下され、文盲であるがゆえに、共産主義理論学習もできず、生涯自己と他者を解放する手立ても見いだせず、死んでいくのみであった。

#### 第二グループ — 変化の見える生活型：

金属工と繊維女工の夫婦の例。その父親はクスターリ（手工業者）の下で旋盤工として働いていた。父親は早逝、母親は今も農村に住んでいる。調査対象家庭の三番目の息子を育てている。金属工の息子は農村の学校に一年のみ通学、その後、工場付属学校に 3 年通う。13 歳で故郷を出奔、モスクワに出てきて自活する。年に一回、30 日から 40 日農村に戻り、農作業に従事し、結婚も農村でした。1905 年の第一次革命時には 17 歳であったが、「革命は彼のそばを通りすぎただけであった。」18 歳まで労働運動に参加しなかった。その年赤軍に動員され、共産党に入党した。「これ以降彼は文化的にも政治的にもかなり成長したが、自分の家族および農村とは疎遠になる。」この調査開始以前に彼は工場長の非行を暴露する投書を『労働者新聞』に投書、紛争が起きて解雇される。この調査開始時には彼は失業中で

あった。彼はこれまで、勤務とクラブ、党の間を廻るだけで家庭からは疎遠になっていた。その理由は彼が酒好きで、そのことが党の間でも問題になっており、除籍の戒告をうけていたこともある。

家庭に夫が寄り付かないので、妻が事実上の家長の役をこなしていた。彼女はモスクワ県の農民の出身で、学校に一度も通わず、今でも文盲のままである。13歳でモスクワに出て、最初は子守、17歳で繊維工場の徒弟となった。農村に帰村した時、結婚、戻って再び工場勤務をした。彼女は教養もなく、記憶も悪く、いつモスクワに来たか、いつ組合に入ったかも憶えていない。この調査は長男の助けによってようやく可能となった。彼女は若いころダンスが好きだったが、今や何の趣味もなく、劇場にも映画にも行かない。これに対して夫の方は兵役と社会活動で視野を広げられ、新聞雑誌も数種類読んでいる。文学作品はほとんど読まないが、劇場にも行き、講演会にも出席する。

長男は調査時、母が務める工場の付属学校に通学。利発で明るい子、一家に活気と文化をもたらす。むさぼるように本を読み、革命的な内容の小説や回想が大好きであるが、『アンナ・カレーニナ』（レフ・トルストイ作、1877年）や『オブローモフ』（イ・ゴンチャーフ作、1859年）は気にいらなかった。そこには有閑マダムの不倫や、怠惰な貴族の地主のことしか書いていないからである。

長男とは対照的に長女は妹が生まれるや否や、妹の世話と家事手伝いのために学校を捨てるを得なかった。次男は農村の祖母元で暮らし、次女は生まれたばかりだが、革命家のローザ・ルクセンブルグにあやかり、ローザと名づけられ、洗礼は受けていない。この家にはアイコンがなかった……。

—このように実質父親不在家庭では特別の社会的援助が必要だが、十分に受けた形跡はない。男の子と女の子の育て方では差別があった。長女も家の犠牲になり、子守でこの一家にとっては文盲の再生産をしている。党員の父親は社会の鏡になるどころか、否定的父親像として表彰されるに値する。

### 次の事例

39歳の金属工が主人公である。彼は人生の4分の1を苦役と流刑で過ごした。彼は農村の靴やの息子で、学校に3年間通学、15歳で絹織工場に入ったが金属工場に移動、雑役から徒弟、その後仕上げ工になった。1905年の第一次革命の時、ストライキに参加、ポリシェビキの秘密会合に出席した折、逮捕された。1907年-13年アムールで苦役に携わり、その後、ザバイカルに流刑、2月革命を迎えた。モスクワに戻って再び金属工としてはたらき、その後旋盤の技術を身に付け熟練工になった。1902年、地区ソヴェートのメンバーに選出され、労働組合の職場代議員になり、24年レーニン記念で入党した。入党前の家庭は平穏だったが、入党後は家にいる時間は少なくなった。彼の妻は文化的、政治的に遅れており、3人の子供の世話という重圧下にあった。

妻は夫の社会活動を歓迎しなかった。調査の終わりのころには家庭内生活は非常に緊迫した不和状態に陥っていた。— 略 —

夫には家庭内の緊張事のみならず、工場でも気苦労がある。彼は職場代議員として労働者に報告しなければならないが、万事良好というわけではない。労働者を安心させるために現実と違った話をせねばならない時もある。団体協約締結は異常に長引いているし、人員削減に際して、専門家や職場長は個人的に気にいらぬ人間を解雇したり配転したりし放題である。

—このような余裕のない社会的状況では職場長から子持ちの女性などは職責果たせないことを理由に真っ先に処分の対象になったであろう。乳児保育の受け皿がなければ当然そうなるのは目に見えていた。このような状況を見てコロンタイは何の為に自分が闘いをしてきたか、忸怩たる思いに駆られたことに違いない。

ネップを通じて経済的自主性を持たせようとするレーニンの主たる意図の裏をかくて、個人的私企業が大手を振り、労働組合が党とは関係なく独立した存在として活動し始める弊害もでてきた。このような傾向は党組織を揺るがし、有害な動きとしてレーニンからは特に注意をむけられた。1918年にメンシェビキとエス・エルが非合法化され（註：エス・エル—1901年創立された。ロシアの小ブルジョア的、ナロードニキ的政党。個人的テロと暴動によってツァーリズムを打倒しようとした。一時的にロシアの革命運動に大きな役割を果たし農民に影響を与えた。10月革命後はソヴェート権力に反対。ツァーリズムと闘ったのと同様の手口でソヴェート権力を打倒しようとした。その間、この党は零細党に転落、党員は国外に脱出、亡命し反ソ活動をおこなった。その後いったん解除された後、内戦末期まで非合法化されていたが、ネップ導入とともにこれらは厳しい弾圧の憂き目に会った。）労働組合でメンシェビキは一定の力をもっており、1921年に入っても、メンシェビキの力は衰えず、モスクワの化学労働組合では、執行部は労働組合がソヴェート権力に対して独立した権力を持つべきだという理論保持者が多数を占め、執行部は「独立性派」11人、無党派4人、共産党員ゼロとなってしまった。ついに党上部組織からの指令で、化学労働組合が解散され、共産党員による大会準備委員会が招集された<sup>(6)</sup>。工場によってはエス・エルのほうがボリシェビキ党員よりも多くを占め、一か月に及ぶ大ストライキがエス・エルの大物オルグによって組織されたりしたが、1921年共産党の応援で形勢は逆転した。第4回労働組合大会の党フラクションでは大物エス・エルが党中央指導に対する異議を表示したため、以後、そのエス・エルの大物は労働組合で活動することを禁止させられた。

### 労働者反対派とコロンタイ

この当時より先鋭に活動したのは、労働者反対派であった。彼らは組合内部における職務管理、組合内民主主義、党内の民主化などを要求して指導部を批判した。

労働者反対派の公的資料<sup>(7)</sup>などによると、1921年5月の党フラクションによると中央委員会のリストには労働者反対派が多く占め、党員22名に対し、反対派は何と19人も占めており、ほとんど労働者反対派が多い事実は見過ごせない。これに対し、党中央委員会は変更を命じ、再度選挙が行われたが、相変わらず、多数を占め、労働者反対派は中央委員

会の命令を拒絶、再度の決議命令でようやく従った。この当時金属労働組合議長のシリャープニコフは決議命令不服従で1921年8月の党中央委員会で除名処分をレーニンから提案されたが、除名はかろうじて免れた。

当時「労働者反対派」という分派の党員グループにいたコロantaiには農業政策を元にしてきたネップの核心を理解することは困難であった。なぜなら、コロantaiの出自はもともと貴族の出で、汚れた労働（ロシア語では **черная работа**—すなわち直接、手を汚した仕事の経験）をしたことはなく、彼女の自伝によれば、政治的信念が固まり出したのは、1890年代の中頃で、その頃、啓蒙活動をしながら、労働者に講義をし、彼らと接触をはじめてからであった。その後、コロantaiの政治的見解を強固なものにしたのは、1896年のペトログラードにおける織物工による有名なストライキであった。それには男女合わせて3万6千人が参加し、エル・デ・スターソヴァ（1873—1906年の間に活躍した女性活動家、社会主義労働英雄、1927—1937年、社会主義革命戦士救援会、ソ連中央委員会議長）や、地方で活躍していた他の共産党員、と共にストライキ参加者の集会と援助を組織した。プロレタリアートが資本家に隷属され、無権利状態にある中で、プロレタリアートの意識がどんどん成長していく明白な実例が断固としてコロantaiをマルクス陣営に切り替えさせたのであった。このコロantaiの経歴を通して分かるように、彼女は実際には女工の経験もなく、文物を通してその階層の過酷さを追体験しただけであった。故に、未経験な彼女が理論的習熟さにのみ頼った自身の未発酵なマルクス主義への志向性は、彼女の中で、急転直下中庸を排除し、過激なものに昇華し己をラディカルな運動へと駆り立てて行ったのも無理もないことであった。しかも、その理論的習熟はシリャープニコフ等の労働者との知己と労働組合を通じて会得したものであったので、農業の知識は一切なく、ネップの政策がそもそも農業とのかかわりの中で生まれたことも理解することは土台できなかった。『赤い恋』にもみられるように、ネップマンたちの小金稼ぎに血道をあげる状況は彼女には全く理解できず、それがまるで資本主義的墮落としてうけとめられていたのであった。

モスクワの金属労働組合を中心にした「労働者反対派」の分派グループはほとんどが労働者出身であり、この反対派のもう一人の代表者シリャープニコフ（上述）も労働者あがりだった。彼に共鳴したコロantaiは、彼を真剣に一時期愛したこともあった。1920年末にはコロantaiはこの労働者反対派にコミットし、レーニンとたもとを分かち、ボリシェビキによるゆがんだ体制の立てなおし、官僚主義の排除、プロレタリアートの「階級独裁」を主張し、第10回党大会でレーニンの激しい理論的攻撃を受けるに至る。1922年コミンテルンにコロantaiは「22人の声明」の直訴状を提出するが、認めてもらえず、逆に共産主義の敵であるという烙印を押されるはめになってしまう。1922年の第11回党大会では党の規律に違反した、党にはむかう有害分子としてコロantai、シリャープニコフ、メドヴェージェフ等の除名処分までが党内からもちだされる始末であったが、除名に至らず、警告にとどめられた。これにより、コロantaiとシリャープニコフを代表とする「労働者反対派」は完膚なきまでの敗退を余儀なくされるに至った。その後、1923年にはコロantaiはロシアを

去り、ノルウェー・ソヴェート全権大使として派遣され、その後もメキシコ、スウェーデン全権大使としてめざましい活躍をみせるようになることは別記した。

しかし、その後も労働者の不満は鬱積され、様々な形で表出されたが、ネップ初期の反主流派の弾圧は一応この頃、鉾を収めた。なお、労働者反対派はこの後まとまったグループとしては解体されたが、元労働者反対派の活動家の多くは種々の反対派活動を展開し、党中央から迫害と弾圧を受けた。当時、コロンタイは外交官に転じ、20年代半ば以降内政にはタッチしていなかった。一方、シリャープニコフ、メドヴェージェフ等は1935年に「モスクワ反革命―労働者反対派グループ事件」なる裁判にかけられ、1936年にはスターリンによる弾圧が顕著になり、1937年には「テロリスト活動」のかどで、再度司法の手によって裁かれ、その後処刑された<sup>(9)</sup>。1990年代、ペレストロイカの政治状況下で、労働者反対派に対する30年代の弾圧・抑圧も見直され、社会的名誉回復と党籍回復も決定された。しかし、マルクス政治理論上、集团的に党に従い、民主集中制を貫くという点では、レーニンに刃向かったことが大きな汚点となっており、反対運動そのものが再評価されるようになったわけではない。1991年のソヴェート体制崩壊により、この件はお蔵入りとなった。

## 註

- (1) *Тяжесть обложения в СССР. Социальный состав, доходы налоговые платежи населения Союза ССР в 1924-25, 1926-27 г., 1929, с.74-77*
- (2) レーニン全集 30巻、27ページ。大月書店
- (3) レーニン全集 28巻、42～143ページ。大月書店
- (4) レーニン全集 28巻、366頁、29巻、103ページ。大月書店
- (5) Опыт монографического исследования домашнего рабочего быта. Вып.1, М.,1928 の記録、レーニン図書館マイクロフィッシュ、および塩川伸明東大名誉教授著『ソヴェート社会政策史』における事例研究の項(83ページ)で確認・参考にさせてもらったことをおことわりしておく。
- (6) Социалистический вестник 1921, 14-15; 1922, 1
- (7) М. Зоркий, Рабочая оппозиция. Материалы и документы 1920-1926 гг. М. Л., 1926
- (8) Правда, 2 ноября 1988 г., с. 2, 4 августа 1989 г., с. 3
- (9) Kollontai. A., 1872—1952 : The workers opposition in the Russian Communist Party: Originally published in Chicago: Industrial workers in the world 1921, p. 9

## 第10章 世間を驚かせたコロンタイの恋愛観

コロンタイは職業的作家ではなかったので生涯に四冊しか小説を残していない。かの有名な連作『働き蜂の恋』（このなかの一作が日本で『赤い恋』として1927年に翻訳された）のうちの一作『三代の恋』のヒロイン、ジェーニャに象徴されるコロンタイ自身の自由恋愛論は周囲に大きな波紋を投げかけた。「深く愛するには余りにも多くの時間と精力を奪われるが、双方にとって都合がよければ愛なくして結ばれてもそれは〈不道德〉というレッテルを貼られる必要はない」<sup>(1)</sup>という論理は当時党内でも激しく攻撃された。

このコロンタイの新しいモラル観は有害なブルジョア的恋愛観とみられ、レーニンから「水一杯論」として徹底的に批判を加えられたのである。とりわけこれらの小説の思想的バックボーンをなしている1918年刊行の論文『新しい道徳と労働者階級』は、党内では、もっともラディカルなテーゼとして一大論議をまきおこした。コロンタイは恋愛を多元的なものとみなし、恋愛の究極的目的は〈大いなる恋〉に基礎をおいた一夫一婦的結合でこれが根本的なものであるが、それがいつも全く不変で固定化されたものではなく、恋愛結合の様々な型のあらゆる段階がある、と主張し、個人的にも17歳年下のドウィベンコとの愛人関係を、華々しく堂々と展開させたことは前述した。

日本においても大正期より昭和の初期の年代にかけて、『働き蜂の恋』がわが国においてきわめてセンセーショナルに紹介されたことはすでに周知のことである。この『働き蜂の恋』が何故にかまびすしく、必要以上にわが国でさわぎたてられてしまったのかは今後とも慎重に検討する価値があるであろう。

特に論壇の集中砲火を浴びたものはかの有名な『三代の恋』に象徴されているコロンタイ自身の異端的『自由恋愛論』であった。『三代の恋』のなかのジェーニャ（日本の翻訳書ではゲニアとなっている）は新しい価値基準でつくられるべき社会主義社会の建設のために日夜奮闘している。この内乱時代を経て、新しい社会建設のために振り向けている時間を個人的な恋愛などにぬくぬくとさくことはとうてい許せない。奔放な自由恋愛に走る娘のジェーニャと母親のオリガ・セルゲーヴナは真っ向から対立する。ジェーニャの母、オリガ・セルゲーヴナはジェーニャと180度違う見解をもっているが故にジェーニャを理解することも許すこともできずに苦しむのであった。「一体これは何なのであろうか？ いかなる道徳的基準によっても抑制されることのない、野放図な好色さによるものであろうか？ それとも新しい慣習を創造する何かなのか？ あるいは建設途上の新しい階級の〈新しい道徳〉という課題を生み出す何かなのだらうか？」<sup>(2)</sup>。

オリガ・セルゲーヴナは自分の心のうちをつぎのように告白しているのである。

「それには何等の愛情も、苦しみも、悔恨もまったくありません。そこにあるのはただ自分の正当性に対する冷え冷えとした確信と、どこでどのように会うにせよ、快楽をもぎ取る権利が自分にあるという信念だけがあるのです。これこそが恐ろしいことなのです。そこには温かみなどもまったくなく、他人や他人の善意に対しても何等基本的デリカシーがみら

れないのです。……」<sup>(3)</sup>。

このジェーニャの考えに象徴されるコロンタイ自身の〈自由恋愛論〉は多くの論議をまき起こし、またいくつかの批判を免れることはできなかった。このうちレーニンのクララ・ツェトキンとの談話のうちの有名な「水一杯論」は公人の知るところとなった。「……両性間のお互いの関係は、社会の経済状態と、生理学的見地からの研究によって頭のなかで切り離された肉体的欲望との間の、力の競り合いの表現にすぎないものではありません。両性関係の変化をイデオロギー全体との関係から切り離して直接に社会の経済的基礎に還元しようとすることは、合理主義であって、マルクス主義ではありません。むろん渴はいやされねばなりません。しかしふつうの人間はふつうの境遇の下で溝にはいつくばって泥水を飲むであろうか、あるいは縁が幾人もの唇でぬらぬらにされたコップで水を飲むであろうか？ だが社会的側面がいちばん重要です。もちろん水を飲むのは個人的な事柄です。しかし恋愛においては二つの生命が問題であり、そして第三の新しい生命が生じてきます。このことのなかに社会の利害が社会に対する義務が潜められているのです」<sup>(4)</sup>とし、恋愛が単に個人的な枠組みのなかだけでは片づかず、社会性のなかで考慮されるべきであると真っ向からコロンタイの説に反論しているのである。またこの一杯の水論が当時の青年層に与える影響がいかに甚大なものか、この理論の信奉者がマルクス主義者であると主張しても、そんなマルクス主義はまっぴらご免だと激しい憤りをもって主張している。このことからわかるようにレーニンは「自由恋愛」をプロレタリア的なものではなく、反動的ブルジョア的なものであるとはっきり区別しているのである。このレーニンの考え方はイネッサ・アルマンドへの1915年1月17日ベルリンで執筆された手紙のなかで一層明快に述べられている。レーニンはイネッサの小冊子のプランについて「恋愛の自由」という要求の全文削除をアドバイスしている。すなわち「恋愛の自由」ということになるとさまざまな解釈が成り立つわけでレーニンはその自由を十通りにわけて分析している。

- 1 恋愛問題での物質的（経済的）勘定からの自由か？
- 2 物質的わずらわしさからの自由か？
- 3 宗教的偏見からの自由か？
- 4 ローマ法皇などの禁止からの自由か？
- 5 「社会」の偏見からの自由か？
- 6 狭い生活環境（農民あるいは小市民あるいはブルジョア・インテリゲンツィアの）からの自由か？
- 7 法律、裁判所、警察からの自由か？
- 8 恋愛にむきになることからの自由か？
- 9 子どもを産むことからの自由か？
- 10 姦通の自由か？

このうち筆者（イネッサのこと）の意志に反して「恋愛の自由」と言えば、一般読者大衆



は必ず8,9,10の意味ととられることは明白であるとレーニンが主張するのである<sup>(5)</sup>。

ソ連問題の研究者、ルドルフ・シュレジンガーはその著 *Changing Attitude in Soviet Russia* (1949年) のなかでイネッサ・アルマンドへのレーニンの手紙をとりあげ、この手紙には、自由恋愛に対する正統派マルクス主義者側からみた見解が最も顕著にうかがえるとし、見かけは革命的で左翼的であっても実際には反動的でブルジョア的な「自由恋愛」のような要求や様々な流行の考えに対する過熱ぶりに特にレーニンは警告を発していると解釈している。

またシュレジンガーの見解によれば「部分的にはラディカルなフェミニズムとまた部分的には現実的状況から発展させられたコロンタイの自由恋愛のイデオロギーはネップ下の社会的道徳の崩壊の一つの表現となった。そしてそのことが党の観点からけなされたのであった」という結論を下している。また別の箇所『三代の恋』についてふれ、マリア・セルゲーヴナとジェーニャとの対立を旧世代のボリシェビキと新しい若者のボリシェビキとのイデオロギー上の対立としてみて、単なる世代的ジェネレーションの間のギャップには決して解消させていないことが特徴的である<sup>(6)</sup> と評している。

これに対してイトキナはその著『革命家・雄弁家・外交官』(既出、1970年) のなかで、社会制度が変革され、打算による結婚の基礎が破壊されれば、両性の結びつきが正式の手続きによる(登録婚)形式をとるか、または一時的形式をとるかは問題ではないというコロンタイの見解を厳しく拒絶しながらも、コロンタイが恋愛を〈多角的〉なものとし、労働者階級のイデオロギーにおいては恋愛には形式的な境界線はまったくもうけられないという考え方を紹介している。そしてこのことが自由恋愛への呼びかけとして一般に受け取られてしまったとイトキナは述べ、コロンタイが決して単なるブルジョア的なラディカルなフェミニストではなかったことを暗に物語っているのである<sup>(7)</sup>。

以上みてきたように、コロンタイの「自由恋愛」論を強く押し出した性道徳観は当時様々な物議を醸し出したのであるが、当時コロンタイはさまざまな試行錯誤を経ながらも自ら理論構築を模索したのである(その模索中に執筆されたものが1918年の『新しい道徳と労働者階級』として出されている)。

なぜなら革命以降の新しい共産主義をめざす社会における結婚関係は、マルクスやエンゲルスによっても定式化されていないからである。わずかにエンゲルスが未来社会における両性関係についてつぎのように記述している。「……来るべき資本主義的生産の一掃後の性的関係の秩序について今日我々が推測できることは主として消極的なものであって大部分は脱落するものに限られる。だが何がつけ加わるであろうか？ それは新しい世代が成長したときに決定されるであろう。この世代はその生涯を通じて貨幣やその他の社会的権勢の手段で女性の肉体的提供を買い取る状況に一度も遭遇したことのない男性たちと真の愛情以外の何らかの配慮から男性に身を任せたり、経済的な結果を恐れて恋人に身を任せるのを拒んだりする状況に一度も遭遇したことのない女性たちとの世代である。このような人々がでてきた場合、彼らは、今日の人間が彼らのなすべきことだと考えていることなど、意に介さな

いであろう。彼らは彼ら自身の実践とそれに応じた個々人の実践に関する世論とを、みずからつくるであろう—それでおしまいだ」<sup>(8)</sup>。

このように両性関係の定式の理論化がまだおこなわれていないにも関わらず、現実には社会主義化が進行する社会において、コロantaiならずとも女性解放論に関心のあるものなら、当然両性関係の未来の構図を頭に思い描くに至るのではなかろうか。

もともとコロantaiはスイスのチューリヒでマルクス経済学を学び、このマルクス主義経済学の観点に立って女性問題を論じた著作が多いのである。1909年1月に書かれた『女性問題の社会的基礎』ではロシアの遅れた資本主義体制における女性の最も虐げられた状態を見事に浮き彫りにし、その解放の方向を明らかにしているし、1916年の『社会と母性』（既出）では各国の母親と子どもの状況を分析し、母と子どもを真に守るためには根本的社会変革が必要であり、早期の共産主義の実現が急務であるとし、1917年12月31日には「女性の社会的機能としての母性の保護と国家の直接的義務としての幼児の保護」についての審議機関として国家保護人民委員部に母子保護課を設立する。コロantai自身も自分のことを後年振り返って、「自分を社会主義に駆り立てたものは女性のおかれた劣悪な条件であった」と言っているように、エンゲルスやベーベルの女性解放論の忠実なる後継者といっても過言ではないのである。然るに『三代の恋』に代表されるコロantaiの新しい性道德観への試論はマルクス主義陣営のなかからもブルジョア的自由恋愛というレッテルを貼られ誹謗をうけるに至ったが、その原因は、当時の社会的状況と密接に関係していることは否定できない。即ち、革命後、国内戦を通過していった時代そのものの特異性を考慮に入れるべきなのである。この時代的特異性を考慮する上で、当時の社会主義政権成立直後の家族法のあり方とその後の推移と変化を視座に置いておくことはきわめて肝要であろう。コロantaiの恋愛観の核心に触れる前に当時の家族法の新しい視点について言及しておく。

## 註

- (1) Любовь пчел трудовых, Госиздат. 1923, стр. 44
- (2) Там же, стр. 41
- (3) Там же, стр. 43
- (4) ポリット編、土屋保男訳『婦人論』大月書店、136～137ページ。
- (5) 『レーニン全集』第35巻、182ページ。大月書店
- (6) 「ソヴェート・ロシアの変わりゆく姿勢」ルドルフ・シュレジンガー著『ソ連の家族』の章、72頁。  
Rudolf Schlesinger, *Changing attitude in Soviet Russia*. London, p. 72
- (7) Иткина, там же стр. 209
- (8) エンゲルス著、戸原四郎訳『家族・私有財産・国家の起源』岩波書店、109ページ。

## 第 11 章 超法規的性道德論と恋愛観

さて、コロンタイ自身がもっていた性道德論は未来社会における婚姻消滅論をも射程距離にいった、26 年法典よりもさらに上をいく超ラディカルなものであり、一般民衆の意識には、はるかに遊離した絵空言として映ったとしてもおかしくはなかった。しかしながらコロンタイの基本的理念は経済的諸条件の制約からの人間解放をめざした、原始的マルクシズムを余りにも純粹かつ忠実に履行せんがための模索であった。そしてそのラディカルな理論内容はその過程における試論であり、決して到達点を示すものではなかったのである。

コロンタイの道德論を強く反映した文学作品として『働き蜂の恋』（既述）のなかの三部作のひとつである『三代の恋』（既出）があることはすでに何度も言及した。この作品の理論上の中心的バックボーンをなすものとして『新しい道德と労働者階級』のうちの「恋愛と新道德」（1918 年執筆）という論文があるので、その理論的内容と構成を考察してみたい。日本においてもこの「恋愛と新道德」の内容がコロンタイ受容にあたっては誇張され、歪曲されたかたちでセンセーショナルに紹介されたきらいが大いにあった。

コロンタイは「恋愛と新道德」のなかでドイツの女流作家グレーテ・マイセル・ヘスの論文「性的危機」を参考にしながら、両性結合関係を（1）合法的結婚、（2）売淫、（3）自由恋愛に分類している。そこでコロンタイは両性関係の最も良き関係を築くためには人間心理を根本的に作り替え、恋愛能力をたかめるよりほかないと指摘し、そのためには当然の帰結として、社会的経済関係の根本的な再構築、すなわち、共産主義への移行が必要であることが大前提となっている<sup>(1)</sup>と指摘する。

合法的結婚は（1）結婚の不可解消性——一方的解消の宣言では不可能であること、（2）所有の不可分性という二つの嘘の原理に基礎をおいている。（1）の結婚の不可解消性は、心理学上の学説と矛盾する〈人は全生涯変わらない〉という考えに依拠しており、たった一度で幾百万人もの同時代人のなかから自分の魂とぴったり調和する他の魂を、ただそれだけで結婚を保障しうる第二の〈自己〉を見出すことを要求するのである。

グレーテ・マイセル・ヘスはこの点を住居にたとえて、〈結婚は住居のようである〉、〈その欠点は住んでみてはじめて分かる〉。だからといって不完全な住居を何度も取り替えることは、それは運が悪いことなのである。

長い人間の生涯のなかで、恋愛関係の取り替えは正常な、不可避的なこととして社会のなかで認められるべき現象である とマイセル・ヘスは主張している。

（2）の所有の不可分性については、結婚者に対する財産の支配をコロンタイは指摘し、財産が第一で恋愛が二の次になり、人格的幸福と喜びは金銭の所有関係に従属することになると述べている。こうして真実なる愛は窒息してしまう。この所有関係は夫婦関係においては狭量なる同居を導いてしまうのである。経済的独立のない夫婦の一方は、相手が自分とは調和しない精神・肉体の持ち主であっても適応するように義務づけられ、同居を余儀なくされるのである。たとえこの場合、災いのような愛があるとしても日常的同居は火のような恋を冷ややかなものにし、耐えがたい紛争を引き起こすものなのである。

合法的結婚の「不解消性」と「所有の不可分性」は人間の心理に有害な作用を及ぼす。合法的結婚の今日的形式は精神を貧困にし、ロシアの天才トルストイが憧れを抱いている「偉大なる愛」の蓄積をいかなる形にせよ、もたらさないのである。

つぎにコロンタイは第二の売淫についてふれ、売淫の社会に対する害毒を分析している。すなわち、売淫は人間のノーマルな観念を歪曲し、精神を不健全にし、貧弱なものにし、情熱的な恋愛経験の能力を精神から奪い取ってしまうと激しく批判している。コロンタイは1921年に書いた「売淫とその闘争手段」のなかで「売淫において役割を果たすものは女性の生得的な傾向ではなく、まずなによりも第一に女性のおかれた保障のない立場や、夫や家族、結婚から独立していない女性の立場と堅く結び付けられた社会的現象である。売淫の根は経済関係のなかに埋没されている」と売淫の根本原因を鋭くついている。革命政権樹立後、一時、街から消えていた売淫が、ネップ政策が原因になって息を吹き返した事実はコロンタイにとっては実にやるせない怒りを催させる事実であった。このブルジョア的社会現象に対して真っ向から抗議の狼煙をあげて書いたのが、『働き蜂の恋』のなかの一作『姉妹』（既述）であり、そのなかでコロンタイはネップによる混乱ぶりを克明に描くことによって最も激しいネップへの批判を展開させたのである。

つぎに第三としては自由恋愛についてである。これは古き道德に対して新しい道德という意味で出現したのである。真に自由な恋愛は、合法的結婚や金で得る売淫と比べるとはるかに時間と精力が必要になってくる。ただ会うだけでも仕事のための大切な時間が大幅にそがれてしまう（ゲニアの言い分として『三代の恋』のなかで同じことが繰り返されている）。自由恋愛は結局別れてしまうか、合法的結婚の型をとって終わりにになってしまうかである。

「大いなる恋」を基礎とした結婚を考察してみると、「大いなる恋」は僅かな幸福者にしか与えられておらず、運命の与えるごく希な贈り物なのである。マイセル・ヘスは「大いなる恋」がないときは「恋愛遊戯」で代用されると述べている。さらに「大いなる恋」が全人類の財産となるためには精神を高く深めてくれる恋愛学校を通過しなければならない、「恋愛遊戯」も人間の心理に恋愛能力の蓄積を可能にさせる学校であると力説している。「恋愛遊戯」は相手を完全に所有しようと要求したりすることや、すべてを呑みつくす悲劇的顔をしたエロスではないばかりか、単に生理上の行動にすぎない無教養なセクシャリズムでもない。（中略）

「恋愛遊戯」は非常に洗練された精神と細やかな思いやりと心理的な気配りを必要とする。それ故に、「大いなる恋」それ自体より、より多くの人間の魂を教育し、形成することができる。

こうして情愛的な僚友の学校を卒業したものだけが、「大いなる恋」を得るにふさわしい人間となり、情愛的僚友関係は恋愛能力を高め、「大いなる恋」を受け入れるための準備を整えてくれるとコロンタイは述べている。そして恋愛の秘める潜在能力についてコロンタイはつぎのように高らかに唱導するのである。

あらゆる恋愛経験は人間の精神を貧弱にするのではなく、逆に豊かにしてくれる。

恋愛はそれ自身一つの大きな創造力である。恋愛はそれを感じるもののみではなく、それを贈られるものの心を拡大し、豊かにしてくれる。

恋愛がなければ人類は味気ない、貧弱な感じをもつに違いない。恋愛はきっと未来にお

いて崇拜されるであろう。自分の個そのものの認識、永遠に我々を脅かしている精神的孤独から逃げんとする熱望は決して生理的飢餓の荒っぽい満足では達成されない。

恋するものとの完全な調和の感情だけが、この渴きをなおすことができる。ただ〈大いなる恋〉のみが完全な満足をあたえることができる。

このようにコロンタイは究極的恋愛の目的は単純な肉欲の満足ではなく、人間の精神生活を高め、真に精神的充足感を与えてくれるためのものであることを力説しているのである。

こうみてくると、コロンタイが性欲は一杯の水を飲む如く満たされるべきものだとして自由恋愛を唱えたと世間からこれまで喧伝されてきたこととは実質は180度異なっていることが分かる。そして最後にこの理想的究極の形は、「大いなる恋」に基礎をおいた一夫一婦的結合であり、この型は性的結合の根本的な型となるであろうことを予測しているが、だからといってそれが全く変わることなく固定化されたものではなく、一夫一婦制とならんで情愛的な僚友関係の限度において、恋愛結合の様々な型のあらゆる段階があるとしているのである。

このようにみてくると、一般的にジェーニャ（『三代の恋』）について、刹那主義的に恋愛の真似ごとをやっていると今までコロンタイは世間から輦蹙を買ってきたが、真面目な思考のもとに書かれていることが理解できるであろうし、コロンタイが究極的には一夫一婦制を目標としていたことは周囲の人々には理解されてこなかった意外なる事実であったと思われるのである。

コロンタイは1923年の論文「翼あるエロスに道を与えよ！（勤労青年への手紙）」<sup>(2)</sup>のなかで労働者階級のモラルはブルジョアジーのモラルよりいっそう厳しく、冷酷に翼のないエロスを排斥するであろうとし、ブルジョア社会における単なる肉欲の追求である売春のもとでの一方的な性欲の満足や、盗まれた愛である姦通を退けているのである。「翼なきエロスは肉体的消耗を招き、心のつながりや、快い感情の発展を妨げ、両性の相互関係における不平等を招くものとして労働者階級の利害に根本的に背くものである」<sup>(3)</sup>と述べ、「翼あるエロスは翼なきエロスと同様にその基礎には性愛がある」<sup>(4)</sup>としながらもこの二つの差異はつぎの点にあるとコロンタイは分析している。「他者に対する愛が新しい社会の建設に必要なものと認識され、プロレタリアートのもとでは愛は万人にむけられるが、ブルジョアのイデオロギーでは、愛は一個人に向けられる」<sup>(5)</sup>とし、翼なきエロスを墮落の象徴とみたのである。コロンタイはこのように一時的に俗流マルクス主義者が唱えていたような共産主義における間違ったモラル観を自らの論文の提示によって糾したのであった。

#### 註

- (1) *Новая мораль и рабочий класс*. Изд. Всероссийского исполнительного комитета советов Р.К. и депутатов М., 1919
- (2) *Дорогу крылатому эросу!* 1923, Молодая Гвардия
- (3) Там же, стр. 122
- (4) Там же.
- (5) Там же.

## 第四部 コロントイの家族論

### 第12章 事実婚の衰退と登録婚の固定化

ここでは、ソヴェート時代における家族法のあり方を俯瞰すると同時にコロントイがその在り方を基本的にどのように考えていたか、またそれが当時のマルクスの家族論の主流からはいかに遇せられ、その後 1926 年から 36 年にかけてその急進的マルクス主義がどのように疎まれていったのかを見ていく。

そもそも革命後のソヴェートにおいては国家の基礎的役割を形成すべき家族の意義は否定的評価を受けることに甘んじた。家族は古い存立基盤を形成するものとして社会的変革の妨げになると考えられた。私的な家族は労働者階級の団結心や連帯心の妨げになると考えられていたのである。ソヴェート国家の基礎単位は私的な家族ではなくて基本的には生産単位を基盤としたソヴェートそのものであった。故に、家族そのもののソヴェートにおける位置づけは甚だ弱い位置づけしかあたえられなかった。革命以前の市民社会では家族の意義は扶養機能、すなわち、社会保障機能に求められた。しかし、革命の成功後にもし国家が、その扶養機能を全面的に肩替りすることができるならば、家族の存続の意義はもはや存立しない。また生産手段のみならず、消費手段も共同化されるのであれば、もはや家族は存立の必要性を喪失することになることは当然の帰結である。ここから初期ソヴェートにおいての「家族消滅論」が通説になる所以があったといえる。この家族消滅論と並んで婚姻消滅論を唱える輩も出現したが、それは少数意見であった。革命後のソヴェート家族法では離婚の完全な自由、同居義務の否定、夫婦別産制、夫婦別姓などの自由な男女の独立平等な意思に基づくものと思料された。従って婚姻は独立、平等な男女の意志に基づくものであり、国家的、共同体的結びつきではなく、自由な個人としての人間的結びつきになったのである。ここから、事実婚主義の思想がうまれたのであった。

まず 1918 年の身分行為、結婚法、家族法および後見法に関する全ロシア中央執行委員会の法典<sup>(1)</sup>はツァーリ政府時代のブルジョア的な法典と比較すると画期的なものであった。このうち特色あることがらを以下いくつか挙げてみる。

- (Ⅰ) 夫婦の経済的独立性を保障する夫婦別産性の原則。
- (Ⅱ) 夫婦による子どもの扶養義務。
- (Ⅲ) 夫婦の同居の義務は負わないこと。
- (Ⅳ) 夫婦は夫あるいは妻と同一の姓を名乗るか、あるいは統合した同一の姓を名乗ることができる。
- (Ⅴ) 婚姻による子どもと婚姻外の子どもの間の平等性について。
- (Ⅵ) 結婚解消は双方または一方の希望で成立する。

以上の条件は様々な曲折を経て 1926 年 11 月 19 日、全ロシア中央執行委員会総会で新家族法典となって採択され、翌年、1927 年 1 月 1 日に正式発効された。ここではこの法典を 26

年法典と呼ぶことにする。当時事実婚主義に対して根強い反対意見があったが、賛否両論は、当時の世相をよく表しているといえる。ここでは便宜的に18年法典をAとし、26年法典をBとする)。

(I) について (第五章 夫婦の権利と義務)

A・105 条 婚姻は夫婦の財産の共有性を形成しない。

B・10 条 婚姻前に夫婦に属した財産はそれぞれ独立のものとして残され、婚姻中にえられた財産は夫婦の共通の財産と考慮される。係争中のそれぞれの夫婦の財産配分は裁判によって定められる。

(II) について (第三章 子どもと親の財産権と義務)

A・162 条 扶養の義務は平等な程度において両親にあり、両親によって与えられた扶養額は彼らの経済的状态によって定められている。しかし双方のどちらか一方によって支出される額は子どもが当該地で生活する最低額の半分より下回ってはならない。

B・48 条 子どもの扶養義務は両親にある。両親によって与えられる額は彼らの経済的状态によって定められている。

(III) について (第五章 夫婦の権利と義務)

A・104 条 夫婦のうちの一方の住居地の変更は夫婦のうちの他方にその変更に従う義務は生じさせない。

B・9 条 双方の夫婦は仕事と職業の選択の完全なる自由を享受する。共通の家政を営む方法は夫婦の双方の相互的同意によっておこなわれる。夫婦の一方の住居変更は他の一方にその変更に従う義務は生じさせない。

(IV) について (第五章 夫婦の権利と義務)

A・100 条 婚姻関係にあるものは共通の姓 (婚姻姓) を名乗れる。婚姻の際、両者には夫 (花婿) の姓を名乗るか、妻 (花嫁) の姓を名乗るか、あるいは両者の姓を結合させたものをはっきり名乗るのかを定めることが委ねられている。

B・7 条 婚姻登録の際には夫あるいは妻のどちらかの姓を名乗るか、あるいは婚姻前の姓のままでいるかの希望を出すことができる。

(V) について (第三部 家族の権利 第一章)

A・133 条 家族の基礎は実際的な出生によって認識され得る。婚姻外の出生と婚姻内の出生との間にいかなる差異もあってはならない。

注1 両親が婚姻関係にない子どもはあらゆる点で両親が婚姻関係にある子どもと同等の権利を有する。

注2 本条項の法令は1917年の12月20日の市民権の憲章の発布以前に生まれた婚姻外の子どもにも適用される。

B・25 条 子どもと両親の相互的権利は血縁関係にもとづかれる。婚姻を成立させていない両親の子どもは婚姻の成立しているものから生まれた子どもと同等の権利を有する。

(VI) について (第四章 結婚の解消)

A・87 条 離婚の基礎はどちらか一方の離別の要求と同様に夫婦両者の相互的同意にもとづく。

B・18 条 婚姻は夫婦の一方の要求と同様に夫婦双方の同意があれば解消されることが出来る。

以上二つの法典を通じて分かることは、まず (I) については 26 年法典の結婚前と結婚後の夫婦の財産の帰属を明らかにすることによって別産制の理念がより強化されており、(II) については子どもに対する両親の平等な扶養義務については変わらないが、18 年法典の扶養額規定を 26 年法典で削除することにより、親の双方の親権を認めつつも、現実的扶養に関する女性側の弱き立場を考慮した法典になっている。(III) の夫婦間の同居の義務はなしとしたところは 18 年も 26 年法典も同一であるが、26 年法典では個人の職業選択の自由をうたうことにより、夫婦の間柄であろうと拘束されないこと、従って場合によってはその結果として別居もやむをえないということが暗に強調されているわけである。(IV) の夫婦の姓については 26 年法典では婚姻前の姓を夫婦がそれぞれ使用することを許すことにより、画期的夫婦別姓制への転換になっている。また (V) の婚姻内の子どもと婚姻外の子どもの同等の権利を 18 年法典では注の形で述べているにすぎないが、26 年法典では本文中に堂々とその同等の権利が述べられているところが特筆されるべきであろう。(VI) については 18 年法典も 26 年法典も殆ど変わることなく、夫婦の一方の申し出により、結婚が解消できるということになっていたが、これが 1936 年になると双方の届出と変質し、実質的には離婚が容易にできないように歯止めがかかるようになっており、スターリン体制下における家庭が国家の一単位として厳格につなが止められていく過程の一証明にもなりえている。

さて上述の (I) から (V) の項に加えなかったが、18 年法典と 26 年法典との際だった対比を構成しているものとして言及せざるをえない項目に着目してそれらに言及しておく。

これまでのソヴェート時代の婚姻法を時系列的にたどると以下ようになる。

1917 年 民事婚、子および、身分証明登記の実施に関する布告 12 月 18 日

1918 年 身分証明書、婚姻法、家族法、後見法に関する法典 (18 年法典と仮に呼ぶ)

1926 年 婚姻、家族、後見に関する法典 (26 年法典と仮に呼ぶ)

1944 年 ソ連邦最高会議幹部会の幹部会令による家族法の改正 1944 年以降は登録婚主義期となる

以上、26 年法典により事実婚が正式に採用され、44 年改正により事実婚は正式に廃止されたのである。

まず 18 年法典と 26 年法典を比較してみる。18 年法典の婚姻法典の項を参照してみると、そのうちの第一章の婚姻の決定形式 (注) には、(教会によらない) 市民結婚のみがこの婚姻法に書かれている夫婦の権利と義務を生じさせる、と書かれている。宗教的儀式において僧侶を交えて遂行される結婚は、もし定められた方式にのっとって登録されなければいかなる権利も義務も生じない。あらゆる宗教婚を排除させるためには登録婚が唯一の効力ある手段であることを強調せざるをえなくなっている。ただし、注には革命前、即ち、1917 年の 12 月 20 日までの教会婚ないしは宗教婚は登録婚と同じ効力を発揮することが付記されて



いる。これに対して 26 年の法典では、これに対応して、次の諸条がある。「定められた方法で登録されていない事実上の婚姻関係にあるものは、事実上の同居期間を示す登録方法でいついかなる時でも正式手続きをとる権利がある」つまり、登録婚と事実婚には同等の権利があることを指摘しているのである。

また第三章の夫婦の権利と義務の第 11 条では、前述の如く、婚姻前と婚姻後における夫婦の財産帰属はその夫婦の関係が登録婚でなくても双方がお互いに夫婦とみなし、事実上の結婚形態をとっていると法廷が認知すれば、第 10 条と同じ効力を生ぜしめることを認めて、事実婚を承認しているのである。

同じ章の第 12 条では、登録婚によらぬ同居婚の証明は、

- (1) 同居の事実。
- (2) 同居の際に共通の家計であること。
- (3) 個人的文通、その他の文章や、また状況に応じて第三者の前に夫婦関係を明確化すること。相互的経済的支援、子どもの共同養育費。

などの場合になされとし、事実婚の内容まで定義化している。

このように、登録しなくても事実上婚姻関係にあるものは、もしも 11 条としての諸特徴に近似しているなら婚姻時にも婚姻解消時にも扶養をうける権利がある。

以上いずれも全体としては 26 年法典で事実婚を公に認めていく方向が積極的に条文化されていることが分かる。こうしてみると 18 年法典から 26 年法典への推移は事実婚を法的に認めるという方向に推移したといっても過言ではなかろう。この事実婚の法的認定は 1936 年のスターリンによる家族を国家組織の基礎細胞とみる家庭強化策が出現するまでのほんの数年の間のことにすぎないのであるが、当時のソヴェート権力化の社会に様々の波紋と混乱を巻き起こしたことはいうまでもないことである。

革命直後のソヴェート社会においては男女の法的・形式的平等のみならず、女性の社会参加という経済的自立志向の条件がある程度もうけられたため、共同体の内部での婚姻の位置づけも弱体化され、独立した自由な男女の市民社会的契約関係として夫婦別産制、夫婦別称制、単位離婚制、同居の非義務化などの法律の条文が発生してきた。これにより古典的マルクス主義のとなえていた家族消滅論にも拍車がかかり、初期ソヴェートにおける事実婚主義が一時的に謳歌される時代が到来したのであった。古典的マルクス主義理論における国家消滅論（例えば、レーニンはその著『国家と革命』の中で、【国家は死滅しはじめる。特権的少数者の特殊な制度—特権的官僚、常備軍の指揮官—に代わって多数者自身がこれに直接なりかわれる。そして国家権力の諸機能の遂行事態が全人民的なものになればなるほど、この権力の必要性はますます少なくなるのである】と論及した。）とならんでこの家族消滅論も当然の理として革命直後の初期ソヴェートにおいては一定の勢力によって唱えられていた。コロンタイもこの説の有力な唱導者であったことは例外ではない。たとえば 1918 年の論文「両性関係と性道徳」のなかでは家族の意味を消極的にとりあげ、むしろネガティブにさえ論じ、プロレタリアート階級にあっては階級利益のために奉仕することが義務であり、切り

離された独立した家族の網の眼は問題ではないと述べている<sup>(2)</sup>。さらにコロンタイは家族に対する過剰な関心はプロレタリアートのイデオロギーを損なうものであるとし、あくまでも「労働者階級の道徳は個人的幸福や家族を犠牲にして、女性もまた家の敷居の外で展開しつつある生活に参加することを要求するであろう」とし、「女性を家に束縛することや、家族の利益を第一義的なものとすることや、夫婦の一方による他方への完全なる独占権の普及は全て、労働者階級のイデオロギーの基本的原則である同志的団結を破壊するものであり、階級的団結の鎖を断ち切る現象である」と説いている<sup>(3)</sup>。コロンタイは、来るべき共産主義社会が家族的扶養から社会的扶養への転化を推進させることにより、家族が消滅するとともに、婚姻関係も共同体的諸関係の意味を喪失した同志的・性的・知的な個人関係に変化し、両性が登録の形式にある永久的な関係をとるか、または手続きをとらぬ一時的ないし半永久的な関係をとるかはまったく意味がなくなると主張した。この点であまりにも一般とかけ離れた論法により、レーニンから批判をうけたのである(既述)。ここにコロンタイの急進的、当時としては異端的家族消滅論の原初的萌芽をみることができるといっても過言ではない。

以上コロンタイの性道徳論のバック・グラウンドとなった初期ソヴェートの事実婚主義と家庭消滅論をみてきたが、これらは、そのよって立つ基礎、つまり①扶養の社会化や、②家事の社会化、あるいは③社会保障の完備および、④男女の形式的ではない実質的平等が実現されているところにはじめて効力を奏しだすのであるが、国内戦からネップ時代にかけてのソヴェート混乱期にはそのような前提条件はもちろん殆どなかった訳であり、いたずらに家族の崩壊を助長したりすることや、弱者としての女・子どもの立場を一層不利なものにするばかりか、成金のネップマンと称する者たちが女を財にあかせて共同保有したりすることが頻繁に起こり、これぞ共産主義社会の醍醐味などと吹聴したのであった<sup>(4)</sup>。とりわけ弱者保護という観点が貫徹されたはずの新法典は、都市部よりも農村部においてより裏目にでざるをえなかったようである。たとえばワースの『ロシア農民生活誌 1917 年～1939 年』<sup>(5)</sup>をみると、農村部においては、26 年法典の底流を流れる事実婚主義も男女関係の真の平等と解放を促進させるどころか、逆にいかに弱き性を抑圧し、虐げたかという事実の積み重ねであることの一面をみせたことに驚愕の念を抱かざるをえない。この農村における惨状をもし急進的女性解放論者コロンタイが眼のあたりにしていたら、いかなる感慨を述べたであろうか。この現状からみても、後述する『新しい道徳と労働者階級』などの理論が、観念が観念を次々と生み出すような浮き上がった異端的理論として当時評価された理由がわかる。前出のワースの『ロシア農民生活誌』から少し長くなるが引用してみる。

「農村における女性の境遇は 1917 年以降進化したであろうか？ 様々な布告は、農婦にソヴェートの選挙権と被選挙権、共同体の集会におけるメンバーとしての同等の権利を与え、あらゆる従属から解放し、男性と同じ権利を与え、夫婦の関係の終身性を破棄したが、まだ単なる宣言的な価値の決まり文句にとどまっていたように思われる」。

たとえば離婚の一方的申し立てによる解消は、立法者の意図に反して農村部では女性に

悲惨な結果をもたらしかねなかった。抜け目ない農村青年がいつでも解消できるソヴェートの結婚によって農繁期に無報酬の労働力を手に入れることもできた訳である（農閑期になれば一方的宣言で離婚も可能）。農村の伝統をまったく考慮しないでつくった家族立法の誤った解釈がいかにも女性の地位をおとしめたかの「結婚契約」の例証はつぎのとおりである。

『1924年6月19日。私ことドゥブロフェキー村の市民コヴァレフ・エス・ベは市民ロマネンコ・ア・エスとの以下の契約に、農業労働者組合の地方代表、同志カルペキンの立合いの下に署名する。(1) 私こと、コヴァレフは、ア・ロマネンコを私の家で、私の費用で扶養し、1924年以降私の妻とみなすことを約束する。(2) 私こと、ロマネンコは3年間上記の市民の妻であることを宣言する。(3) 私こと、コヴァレフはロマネンコを私の妻とみなすことを宣言し、彼女の世話をし、その権利を尊重することを約束する』。

さらに事実婚主義が農村で180度違った見解により、全くネガティブに受け取られてしまった例をあげる。

「1926年以降新しい家族法が討論された際に、事実上の結婚の承認の問題が提起されたが、村ソヴェートの代表たちはその問題に断固として反対の意志表示をした。ある農婦はある地方ソヴェート大会でつぎのように説明した。『我々村人は我々の所では、都市が体験している慢性的不安定はいらない。数千の捨て子、我が農村をおそう浮浪児に責任あるのはこの都市である。人口の80%以上（農村人口）が都市住民のように行動するならば、わが国はどうなるであろうか？ 判事の前でしか解消できない正式に登録された結婚、これこそ家族の安定性を保障するために我々に必要なものである！』実際両親と婚約者たちは、古風な、即ち教会における結婚をはるかに確実なものとしてみなしていた（結婚の99%は教会でおこなわれた）。これが、女性が臨時の召使いの役におとしめられないための唯一の方法であった」。

こうしてみると、弱者保護という目的のためにつくった新法典は場合によっては弱者虐待や搾取という初めの意図とはまったく違った予測しなかった側面もでてきて、両刃の剣になってしまう危険性もある。当時事実婚主義をとまって新法典が如何に一般の人々に理解されぬ、ラディカルな側面をもっていたかは容易に想像できる。例えば、弱者としての女性を保護する立場から、登録婚、事実婚のみならず、「男女の偶然的同棲に関しても、男に登録婚の場合と同じ責任を負わせるべき」だと発言しているケースもあり<sup>(6)</sup>、またコロンタイもこの点に言及し、登録婚上の妻、事実婚上の妻、偶然婚的な妻の三種類があるとし、第三のケースは保護されていないと批判したが<sup>(7)</sup>、特異的な事象として一般的には殆ど注意を払われなかった。それよりも何を持って事実婚とするかの定義づけの方がより注意が向けられた。

とりわけ、上述した第12条の事実婚を認定するための指標としての、同居の事実、共同家計の存在、第三者に対する配偶者関係の表示などに関して、できるだけ多くの事実婚を救済する立場から出来得る限り様々な条件を配慮すべしという意見も出たが、上記の三条件が

必要条件であることを全ロシア中央執行委員会で確認され、最終的に認定された。第12条の実際の運用となると、厳密な意味での運用は極めて困難な場合が生じた。厳格な運用は、当時事実婚の未来を理想主義的に予期した婚姻論とは折り合いがつかない場合がいくつか出てきた。例えば、同居の事実があったとしても女性を男の下で働く被雇用者としてしかみない農村の実態は判事をして都市、農村の具体的状況に応じて、個々の指標を結びつける柔軟な判断力が要求されると判事に言わしめているのである。第12条の解釈が実際法廷で争われた具体的判例を以下引用する<sup>(8)</sup>。

「1927年2月4日聖職者ボゴロフスキーが（当時60歳）が死亡したが、相続人は存在しないとみなされ、その遺産は国有化された。その後パブロワという23歳の女性が故人の事実上の妻であったことを理由に相続権を主張したのが本件である。彼女によれば、彼女は経済的困窮にあったが、故人の死まで2年間故人と性関係をもっていた。彼女はボゴロフスキーの家の間借り人としてその一室に住んでいたのであるが部屋代は払っておらず、彼のために買い物をし、しばしば一緒に食事をし、長時間彼とともに過ごし、時々夜を共にしたと主張した。ただ故人が聖職者であったため第三者に対しては隠していたのであると主張している。原告側の証人達は二人の夫婦関係は隠されていたとはいえ、明白であったとし、また故人もそのことを認めていたと証言したが、同じ間借り人の一人は、故人は厳格で臆病な人間であったと述べ、二人の性関係の存在を絶対的に否定した。

1927年10月24日、県裁判所は次のような理由で婚姻関係の存在を否定し、原告パブロワの請求を斥けた。①二人の間に性関係があったという原告側の主張は信用できない。しかし原告側の主張を前提としても、なおかつそれは家族法典第12条の定めた婚姻的同居でなく、単なる性関係であるにすぎない。彼女は庭を通して密かに神父の部屋に通い、窓をくぐり抜けて自室に戻っていたという主張も、この判断をうらづけるものである。②原告は経済的に困窮していたので故人と性関係を結び、故人の費用で食事をし、部屋代も免除してもらっていたが、その代わり、彼女は種々の日常的サービスを提供していた。このような関係を「共同関係を持つ同居」とみなすことはできない。③婚姻は男女の自由で公然たる勤労的結合である。本件ではボゴロフスキーと原告パブロワはそのことを第三者に対して示していなかったばかりでなく、それを全面的に隠していた。以上のように二人の関係には事実上の婚姻関係の存在を特徴づける要素は何もない。

パブロワによるこの判決の破棄申し立てを審理した最高裁も彼女の請求を棄却した県裁判所の結論を支持したが、その理由づけについては次のような若干の修正をおこなった。一原判決は事実婚を認める場合の指標として、その関係が公然たるべきことを強調している。しかし問題はそれが公然たるかにかかわらず、現実の関係がどのようなものであったかである。事実上の婚姻関係を隠すのは周囲の目をおそれるからばかりでなく、その関係から生じる責任を回避するためであることが甚だ多い。その場合苦渋を強いられるのは「隠し妻」の側であり、男女平等という美辞麗句に酔ってこのような現実から目を背けるとすれば、それは裁判所が偽善に陥っていることを意味する。事実上の婚姻関係の確認に際しては、個々の場合の

具体的状況に依拠すべきであり、原審のように、法律的判断によって一般的なかたちで婚姻の存在を否定することがあってはならない」。

このようなあらゆる状況を広い視野からみて女性にとって有利な状況をできるだけ見出す努力を司法は女性保護の見地から好意的に判断してくれた事例は当時ことのほか多かった。

18 年法典の第二章では婚姻成立の実質的要件で婚姻の可能年齢を定めることと同時にこれらの婚姻を無効とする取り決めも第三章で決められている。これに反して、26 年法典では「婚姻成立の実質的要件」が第二章で「婚姻登録の要件」になっており、婚姻登録の無効に関しての条項は消えている。婚姻の無効制度は登録婚が主体であり、事実婚主義をとれば無意味になるとされていたことがわかる。

究極的には 26 年法典は、婚姻無効制度は廃止された画期的なものとなり、婚姻登録の要件は婚姻登録のためには、婚姻登録者の相互の同意、結婚年齢に達していること、婚姻適齢は 18 歳とするなど、婚姻をしようとするものの当事者同志の意志の尊重に重点が置かれた緩やかなものになっている。

以上が婚姻登録時の要件に関して述べられた法律文であるが、実際には多くの識者が結婚登録要件に反する要件も事実婚として認定されるべきと判断することが多かった。なぜなら、婚姻関係を事実上認めなければ、多くの事実上の婚姻関係を結んでいる人の法的保護を奪うことになり、女性の利益に努めている法典の精神に矛盾するであろうと意見陳述する学者も散見したからである。また結婚を当事者の私事とみなす立場から、婚姻無効制度は当事者の意志の及ばない強制的解消のしかたであり、ソヴェート法では当事者による離婚が唯一の離婚の方法であり、国家権力の介入により、配偶者自身の意思に反する婚姻の解消が可能であったブルジョア婚姻法の名残が最終的にソヴェートから消滅した証であると論じたペ・ギドリャノフの言葉は銘記されるべきであろう。

さて、財産関係ではどのように登録婚と事実婚では区別されていたのかを次にみていきたい。18 年法典では登録婚主義をとっていたにもかかわらず、学説によれば事実婚の保護の立場をあきらかにしていたし、事実上の妻の財産分割請求を認めた判例が豊富に存在していた。この事実はその後の 26 年法典において、事実婚を採用する際の有力なる決め手となったのである。この場合、最大の理由づけになるのは、ソヴェート法に一貫してつらぬかれる基本原則としての「労働原則」に基本的視点をおけば、登録婚と事実婚を区別する論理性はなくなる。しかし実際の適用の場合には、「労働原則」を巡って解釈に若干の混乱がみられたようである<sup>(9)</sup>。

ソヴェート法では、共同財産制に用いられた基本は「労働原則」であり、妻も自らの労働によって財産形成に預かるのが普通であり、共同財産における夫婦の取り分はそれぞれの労働量によって決まる。この場合、家事、育児も社会的労働とみなされたことは画期的なことであった。妻の立場は強くなった。共同労働関係と一般的労働関係との間にはいかなる差別もなく、登録婚と事実婚を区別する理由もなくなる。ここから、ゲ・ラジンスキーは 1922

年の論文で、家族の共同財産に寄与したものは、登録婚、無登録婚に関係なく、財産持ち分があり、婚姻破棄の場合には財産の分割を請求する事ができると主張している<sup>(10)</sup>。また、家族社会学者のかの有名なイ・ヴォリフソンも共同労働関係の原理に基づけば、登録婚であろうが、事実婚であろうが関係ないと主張した。このように登録婚と事実婚との間に何ら利益がなければ、登録婚をわざわざする意味もなくなると一般的にみなされるようになった。また事実婚であっても、登録婚と変わりがなければ意味がないと考えられるようになった。こうして登録婚、事実婚の意味が真剣に問われるようになり、26年法典の事実婚主義にも微妙な陰りと揺らぎがみられるようになった。様々な案件からみていくと、登録婚に何の特点も見られなければ、登録する意味もないし、また事実婚主義をとらなくても、事実婚を保護できるし、事実婚を敷衍したからと言って格別な利点もみいだせないということになると、教会婚や登録婚に比較して、安定性を欠く事実婚主義を指して、ゼレツキーは、事実婚の配偶者権利は、家族法上の権利というより、債権者としての労働者の権利と呼んだ方がすっきりすると主張した。スラーヴィンもこの主張を定式化し、事実婚の権利に関して、共同経営に参加した各人の持ち分の権利はプロレタリア国家における一般的な「労働原則」と等しいと論じた。さて具体的判例を以下に取り上げてみる。判例はすでに18年法典より、財産制に関しては事実婚を保護しているようである。1922年、事実上の妻への財産分割を認めた判例である。この判例は「ガブリロワ訴訟」<sup>(11)</sup>として名高い判例になっている。ここでは事実婚の妻の財産権が保護されたが、それはガブリロワが事実婚妻だからではなく、彼女が実際の勤労経営に参加していたこと（下線筆者）により、認められたということが大切な論点なのである。

マリヤ・ガブリロワは同棲していた夫との共同生活の継続が不可能になったとして別れることを決意、自分自身と三人の未成年の子供のために自分の属する財産持ち分の分割を要求した。それに対して郷土地委員会と郡土地委員会財産の分割は可能と認め、マリヤの請求を受け入れた。ウラジーミル県土地委員会は1922年6月3日、夫、ガブリロワとマリヤの間には婚姻は成立していなかったとし、郷土地委員会と郡土地委員会の決定を破棄した。

マリヤ・ガブリロワによる、県土地委員会決定の破棄申し立てにより、土地紛争最高統制特別会議は事件の審理をおこない、同年11月20日次のように決定した。①この場合婚姻が成立しなかったとしても、マリヤとその子供達が共同財産に対する正当な権利をもっている。なぜなら彼女すでに12年間そこで共に働いたのだから。②したがって県土地委員会の決定は誤っており、不当である。③反対の郡土地委員会の決定は事件の本質と共和国現行法に基づいており、完全に正当である。④結論として当特別会議は、県特別委員会の決定を破棄し郡特別委員会の決定を有効なものと認める。

ソヴェート法では、共同財産制に用いられた基本的見地は「労働原則」であり、妻も自らの労働によって財産形成に預かるのが普通であり、共同財産における夫婦の取り分はそれぞれの労働量によって決まる。この場合、家事、育児も社会的労働とみなされていたことはいうまでもない。共同労働関係と一般的労働関係との間にはいかなる区別もなく、登録婚と事

実婚を区別する理由もなくなる。故にこの判例の最終審理でも分かるように、マリヤと子供達は共同財産に対する正当な権利を持っており、仮にマリヤが勤労経営に携わっていなくても、当時、家事・育児は立派な社会的労働とみなされていたので、正当なる事由として当然それを請求することができるのである。

以上ソヴェート事実婚主義に関して記述したが、1926年に確立された事実婚主義の原則は実質的には1944年のソ連邦のウカース YKA3 法令によって廃止された。登録婚主義への再転換は1936年スターリン憲法が制定された時期に開始されたのである。事実婚主義の完全なる原則の遂行は1926年から1936年のほんの短い10年間に過ぎなかった。家族と婚姻を巡るソヴェート・イデオロギーにおいても家族消滅論から家族強化論への重大な転換がなされたとみられる。その法的転換は以下の決定事項<sup>(12)</sup>で明確にされた。

1936年ソ連邦中央執行委員会・人民委員会において「堕胎の禁止、妊婦に対する物質的援助の増進、大家族に対する国家援助の制度化、産院、託児所、幼稚園の拡大、扶養代不支払いに対する刑罰化、離婚法の若干の改正について」という法が決定された。この法律は一見、母性と児童の権利、保護を明確化し強化しているようにみえ、コロンタイが提唱した「女性は国家に新しい成員を与える義務がある代わりに、国家も女性に配慮し、援助するべきである」という母性と児童を守るという根本理念と矛盾はしないが、27条で離婚の完全なる自由に対して制限をもうけるなど家族消滅論から、家族強化に急展開させていることは否めない。もちろん26年法典と同様に大規模な討論にかけられたようであるが、それが短期間のうちに全人民的キャンペーンに拡大していったことはスターリンの驚くべき人心操作の巧妙さを物語っているといえよう。36年の法令は、44年法典のように完全な急旋回の事実婚廃止ではなく、26年法典の第一条の登録婚の国家的、社会的利益の側面を発展させているように見える。しかしその底流には登録婚主義を暗黙のうちに是認させ、初期マルクス主義者達の家族消滅論の理想論から急展開の家族強化へ変化させたスターリンの狡猾な見えざる意思が垣間見えるのである。(スターリンのこの施策には大きな野望が実は占められていた。それを解き明かすには別の長論文になってしまうのでここでは割愛する。)

この期間 当のコロンタイは何をしていたかという点、ネップと労働者反対派の項でも説明したが、第11回党大会で、コロンタイはレーニンに徹頭徹尾批判され、党籍剥奪の憂き目にあったが、幹部会の差し金で外交官として国外にだされたのである。(体のいい半追放処分—筆者見解)これに及んで、コロンタイは女性労働者の国外からの組織化も、また更なる理論化も不可能になり、36年の事実婚の事実上の禁止に対する反論の討議の場にも参加し意見を開陳することはできなかったのである。国外にだされたといっても世界初の女性外務大臣としての職責は重く、その上心臓病も患っていたのでかなりの重労働であったはずである。これ以後、外交官としての経験を書いたものはあるが、事実婚消滅についての反論の文書はどこにも見当たらない。

こうして44年7月8日のソ連邦最高会議の幹部会令として多産の母親や母子家庭の母親に対する国家の援助拡大、母性の保護、児童の保護及び強化、「母親英雄」の名誉称号、「母

性メダル」の制定が策定<sup>(13)</sup>されたのである。

44年のウカースにより家族強化策の一環としての事実婚主義は廃止された。これにより、世界史上初のソヴェートの輝かしい事実婚主義の歴史は幕を閉じたのであった。

## 註

- (1) 『ソヴェート政権憲章』第三卷、全ロシア中央執行委員会刊行所、モスクワ、1919年、59ページ。  
Декреты Советской власти. Том3. 1964
- (2) 『両性関係と階級闘争』全ロシア中央執行委員会刊行所、1919年、モスクワ、59ページ。  
Отношение между полами и классовая борьба, стр.59, Изд. Всероссийского центрального исполнительного комитета советов Р. И. К. депутатов М. стр. 59-60
- (3) там же стр. 60
- (4) ≪『赤い恋』を検証する≫の中で記述。
- (5) エヌ・ワース 荒田洋訳『ロシア農民生活史1917－1939』平凡社、98～100ページ。
- (6) Речь Пасынковой 3 сессия ВЦИК X2 созыва 1926 г., стр. 690
- (7) Коллонтай А. М. *Брак и быт*, РС 1926 Номер 5 стр. 371
- (8) См. Определение ГKK BC по делу, Номер 36981 СП РСФСР, 1928г., Номер 21, стр. 6-7 『社会主義と婚姻の形態』80～81ページ。(森下敏男著 有斐閣刊)
- (9) См. Ростовский И. А. Новый закон о браке, семьей опеке и вопросы о практике, ЕСЮ., 1926, Номер48, стр. 1348. ; Бранденбургский Я.Н., К дискуссии о проекте брачного и семейного кодекса, ЕСЮ, 1925, Номер 46, стр.1414-Копалом П., По поводу проекта брачного и семейного Кодекса, РС, 1926.
- (10) Радзинский Г., Вопросы действующего семейного права, ЕСЮ., 1922 г., Номер 18, стр. 4-5.
- (11) 森下敏男著『社会主義と婚姻形態』119～120ページ。
- (12) Постановление о запрещении абортов, увеличении материальной помощи роженицам, установлении государственной помощи многодетным, расширении сети родильных домов, детских яслей и садов, усилении уголовного наказания за неплатеж алиментов и о некоторых изменениях в законодательстве о разводах, (17) СЗ СССР 1936 г. Номер 34, стр. 309.
- (13) Указ Президиума Верховного Совета СССР от июня 1944г., об увлечении Государственной помощи беременным женщинам, многодетным и одиноким Матерям, усилении почетного звания ≪мать-героиня, ≫и учреждении ордена ≪Материнская слава≫ и ≪медали медаль материнства≫.



### 第13章 事実婚主義の終焉

26 年法の事実婚主義の特徴はまず、初期マルクス主義学者たちは、社会主義制度のもとでは経済的機能は社会化され、貧富の差が排除され、平等化された男女は自由な価値観のもとに家族、婚姻関係を持つことができ、婚姻は私事となり、婚姻の為の登録制度は不要なものになり、婚姻関係の登録は必要なくなる、最終的には家族消滅、平等互恵的な男女関係が可能になると考えてきた。コロンタイは、革命後のソヴェート政権では、「家族は社会的変革の妨害要素として労働者階級の階級的団結や連帯性を阻害するものであり、新しい秩序のもとに共産主義社会を再編するための妨げになると」<sup>(1)</sup>考えていた。また第二点として戦時共産主義を経て、社会的混乱がいまだ平定されざる状況では、女性の経済力が十分保障されていない状況にあり女も男と同等の地位を占めるようになってきた。弱者としての女の保護という観点は必要ではない、事実婚の使命は終わったという論が述べられるようになったが、その歴史的使命終了の明確な論拠は残念ながら示されていない。代表的な論者としては例えば、デ・エム・ゲンキンはその著で「仕事のみならず、生活様式の点でも女性は男性と平等だ。もはや保護は必要でない。男に遺棄されようとも女は独力で生きていける。」<sup>(2)</sup>という見解であった。この論理は 26 年の法典が出来上がった頃、正統派マルクス主義者達は弱者保護の諸課題が実現される社会主義の制度の遂行の下ではじめて事実婚主義は完遂され、究極的には家族消滅論や自由恋愛にいたると考えていたが、ゲンキン等の考えは事実婚主義と家族消滅論とを切り離しており、その事由の明快な論理付けはなされていない。当初、彼らは、初期社会主義経済下の未発達な社会では、弱者保護という具体的な政策実現の方が現実味ありと考えたが、事実婚主義の使命は社会主義が 28 年に始まった 5 か年計画と急速なる農業集団化の波により国民経済が再編化された状況では、もはやそれは必要ではない、「むしろ家族の利益、未来の育ちゆく世代のために強固で安定した婚姻を保障する必要がある」<sup>(3)</sup>と主張した。

こうみてくると、正統派マルクス主義者の考える事実婚の位置づけと、ゲンキンらの考える事実婚の位置づけの間には大きな乖離があり、その乖離はそのまま放置され、あの激しい国内戦からネップの時代、その後のスターリン政権の成立、また 41 年のファシスト戦にいたる間の目まぐるしい歴史的展開の中では十分な論争も国民間の討議も合意もされずに放置されたままになった。この点で、かのシュレジンガー（既出）も、26 年法典が事実婚を承認したのは当時マルクス主義者の真に共産主義的な『自由恋愛』に対する渴望と『家族消滅論』を軽視したのではなく、万が一、夫亡き後夫婦の共同財産を事実上の妻に供与し、妻に対する保護を事実上の婚姻関係にある妻にも拡大供与するための便法であったのではではなかったかとはっきり述べている<sup>(4)</sup>。これに対して、コロンタイはどうか？すでに彼女は労働者反対派の事件により、1923 年より実質的に国外に追放され、その後外務大臣としての職務を全うすることにより、国内の政治には一切口出しをしていない。推論でしか言えないが、コロンタイがもし 36 年時点でロシアにいたなら、激烈な反論を法学者や

スターリン指導部に浴びせかけていただろう。まず、社会主義体制における家族とはどのようなものか？情勢分析から始まる事実婚の必要性、弱者保護の定義など侃侃諤諤の論議を巻き起こしたに違いない。しかし、残念ながら、当時彼女の論理を引き継いでくれる女性党员も殆ど組織化されておらず、まして広範な女性労働者の大きな輪もなかったのである。女性にとって女性自身に大切な法典内容を決断する場合には、女性個人のスタンド・プレーでは到底不可能であり、層の厚い女性労働者の支持層の存在とその組織化、また男性党员の理解と共感を得ることが是非とも必要であったが、惜しくも当時の状況はそのような大前提は皆無に等しかった。

36 年を一つの境にしてソヴェート事実婚主義は実質的に消滅、家族消滅論は形骸化し、強烈な家族強化論へと舵をきった。家族強化論は当時スターリンの台頭と同時に醸成され、この強化論によって社会主義国家をさらに強固なものにし、また強い家族の絆をもとに安定した人口再生産が目論まれた。戦力補強としての人口の増大化の掛け声は日増しに大になり、ファシズム戦を戦い、勝利を得、スターリンの覇権を更に強固なものにするという命題に貫徹されることになった。これらの事実を裏書きするものとして、元ゲペウの幹部、ソ連参謀本部情報部長代理、W・G・クリヴィツキーの会見記から驚くべき事実を引用しておく。彼の回想によれば、スターリンは10年間の間に数えきれない銃殺刑、赤軍幹部の根絶やしを銃殺により行ったと陳述。とりわけ最近の人口調査がなされていないこと、なぜなら中央委員会扇動部が1937年のソ連人口を1億7千百万人と見込んだのに、実際は1億4500万人しかいないことが判明。およそ3000万人の人口が不足していた。これはスターリンの狂気の農業政策や、劣悪な条件下での出生率低下、大量強制移住、流刑が原因の死亡などによる人口減少に見舞われたことによった。しかも農業ばかりではなかった。モスクワ、レニングラードで工業企業の幹部の75%が逮捕され、赤軍の幹部の頭部は切り落とされ、最も重要な軍管区の指揮は無能な軍人にまかされる。スターリンはソ連を滅亡に導いている。ソ連の本当の友、ロシアの本当の友とロシアに住む民族たちは、死刑執行人の手を止めるために声をあげるべきだと赤裸々に告発した<sup>(5)</sup>。

なぜそのような家族強化というコペルニクスの転回がソヴェート社会にもたらされたのか、その原因の一つには、スターリン専制強化により、列国と競合していくためには国民を組織し、対抗するための強力な家族政策が必要であり、その家族強化により人口増加を促進し、国力を強大なものにしたかったスターリンの野望から出たものである。これに対して当時の人口学者、家族社会学者達は殆ど反対することはなかったようだ。否、反対意見があろうともスターリンによって政敵とみなされ刺客に倒れるのが関の山であったであろう。二つ目の原因は女性自身の意見は全くうかがい知ることにはできないことである。黙っていれば賛成とみなされるのが関の山であるが、スターリンの家族強化策に対する反対意見、ないし論文はみあたらない。専制主義というものは怖いものである。戦時中の日本の暗黒軍国主義と何ら変わるところはないのだ。

## 註

- (1) А. М. Коллонтай, *Новая мораль и рабочий класс*, 1918, стр. 36.
- (2) Генкин Д. М. и др., *История Советского и гражданского права*, 1949 г., стр. 433.
- (3) Генкин Д. М. и др., *Указ. соч.*, 1949, стр.431-491.
- (4) R. Schlesinger, *Soviet Legal Theory*, 1951, стр.234.
- (5) 『スターリンの秘密機関に勤務して一元駐西欧ソ連諜報機関長によるロシアの秘密政策暴露』 1939年11月、W・G・クリヴィッツキー著、根岸隆夫訳『スターリン時代』 234～235ページ みすず書房1962年。

## 第五部 コロンタイ後の推移

### 第14章 女性解放の挫折とその後

1991年、ソヴェート政権の崩壊は世界を震撼せしめた。崩壊の直前までゴルバチョフのペレストロイカ政策によって厳格で秘密主義の鋼鉄のような社会主義政権もついに雪解けの時代に突入したかと世間に思われ、好意的に受け止められていた。それまでのソヴェート政権の中で、写真雑誌に散見される女性は大型トロリーバスを運転し、舗装道路の補修に出没し、たくましい腕で電信柱を肩にかつぐ女性の姿や、シベリア鉄道の駅ホームで見られるどっしりとした女性駅長のすがたは資本主義諸国の中で女性はいかにあるべきという固定的規範の鋳型に入れられていた世界の女性達には新鮮なイメージを与えた。

ソ連における労働者中の女性の比重は1928年の第一次五か年計画開始時には24%であったが、40年に39%、第二次大戦後の50年には47%と増加、70年以降は51%で移行、コルホーズにおける女性従業員は49%にものぼり、全体として労働能力のある女性の占める率は1959年68.4%から70年、82.1%にのぼり、就学中の女性の潜在的労働力をくわえると89.7%にのぼる<sup>(1)</sup>。

この統計からも分かるように社会的労働に関しては、ソ連の女性労働者の人口に占める比率は世界でトップであり、社会労働における男女平等は基本的に確立されているとみなされた。そして社会主義政権における男女平等の基本的確立は、就業中の男女差別の完全な排除をモットーとして守られてきたといわれてきた。しかし女性の就業意識を探ると、必ずしもそうとは言い切れない側面もある。例えば、1974年から1975年の企業調査によれば、女性が就業する主要動機は①追加的家計収入の必要性が42.8%、②集団生活への参加希望28.3%、③社会的労働への参加、21.9%、④経済的独立が7%となっており、女性が独立した家計を担うという意識よりも多数が追加的家計収入の必要性を訴えていることは自立した生計を担おうとする女性の意識が少ないことを物語り、女性労働者の意識のありようが問われているのではないかという問題性を投げかけているようだ<sup>(2)</sup>。

このように社会的労働における男女平等は一応確立されているといえるが、社会的労働における男女の地位は十分に確立されているとはいえない面があった。その男女不平等の原因の一つとして、真っ先にあげられることは家事労働の負担である。

グリゴロフとシコトフの『新・旧の生活様式』<sup>(3)</sup>の中で、1920年代の半ばで男女の一日の時間の過ごし方を簡略に紹介すると以下ようになる。

新・旧の生活様式 表		(単位：時・分)	
	家事	休息	睡眠
夫	2. 0 8	3. 2 7	7. 5 9
妻	5. 1 2	3. 2 1	6. 4 4

Старый и новый быт 1927, стр.75-76 より抜粋。

またカプースチナの言によれば、家事労働は70年代でも平均して女性は週35時間、男性週13時間から14時間といわれ、この週35時間という女性の家事労働に費やす時間は単純に計算すれば上記に掲げた20年代の女性の一日の家事時間5.12を7日間継続した時間数にほぼ匹敵する時間数であり、1920年半ばより、50有余年の時間的経過を経ても、少しも変わらぬ女性による家事労働時間数とは一体何事か？と問いたい。女性が約男性の2.5倍以上も家事労働に追われている事実が明らかであり、さらに89年には状況はもっと苛酷になっていることが、次の報告からわかる。1989年3月7日に社会主義政権末期に、文化省次官シルコワの演説によれば、「女性の家事労働は週40時間に達しているとのことである。それに対して男性は僅か6時間にすぎず、この原因としては、物不足による買い物の行列が長くなっていることと、家事の機械化が先進国の5倍遅れている」ことを挙げている。このような性別役割分業が極端に行われ、社会の意識が遅れている社会では、女性労働の質的向上をめざし、女性のさらなる技能習得や社会的地位の男性に劣らぬ向上を目指すことは極めて不利な立場に女性が追い込まれているといえる。この場合、家事・育児労働の育児については言及しないが、理由は簡単である。ソヴェート時代の全期間、育児については共同集団保育が積極的にとられ、子供を一週間、一か月単位で共同保育所に預けることが可能であった。但し、内容の良さ、質の高さを問わなければの話である。事実ソヴェート政権末期は西側の情報の流入とその比較が可能になり、中には、共同保育の質の悪さに気づいた親が、もしその親が、収入が高い場合には金にあかせて私設の保育所に預けたりする例がみられるようにさえた。

70年代、80年代のロシア社会の現実を知っている人ならわかるが、日常の食料品の買い出しの為の行列がどれほど女性のエネルギーを奪ってきたか、買い物の為の東奔西走がどんなに女性ないし男性のエネルギーを奪ってきたか、消費財、食料品の供給増加への取り組み、サービス業の業務拡大、改善が必要であったが、それらは遅々として進まず、家事労働の効率化と一層の社会化、また制度的、抜本的改革が本当は喫緊の課題であったが、ソヴェート政権崩壊までそれは取組が十分になされず、政権崩壊後も依然として改善されず今日にいたっている。

女性解放の命題として初期ソヴェート政権による私的所有の廃止から導入可能なことは計画経済により、女性労働力を計画的に配置することであり、それはそれなりに十分とは言いきれないが一定の成果を挙げてきた。しかしその条件をなす家事・育児からの女性の解放はそれに伴う重要課題として意識的に取り組まなければならない課題であった。この重要な課題を遂行するために初期ソヴェート政権成立時に彗星の如く現れたコロンタイのパーソナリティと彼女の問題解決への意欲と能力は残念ながらその後のソヴェート政権では十分に生かしきれず、その後数十年の長い年月その課題は放置ないし、停滞のままであったことは悔やまれる。ここにこそロシア革命100年を経ても女性解放が十分に成就されない要因があると言っても過言ではない。

エンゲルスは言った。「近代的家族において夫の妻に対する支配の独特の性格や、夫婦の

真に社会的平等を実現する必要性とその方法も、夫婦が法律上同権となった時、初めて白日の下に現れるであろう。」<sup>(4)</sup>つまり、社会主義になって初めて、男女の矛盾が純粋な私たちであられる地盤を提供するのであり、社会主義になって男女差別が直ちに止揚されるのではなく、その地点から男女の差別が明らかになり、戦われる地点が提供されるという認識は重要である。更にエンゲルスは言った。「近代的大工業は、女子労働を単に大規模に許すばかりでなく、それを本格的に要求し、また私的な家事労働をますます公的な産業に解消するように努めている」<sup>(5)</sup>。

コロンタイによれば、「技術進歩はそれぞれの分野で専門家を生み出し、炊事、洗濯、繕い物、掃除その他の仕事もそれぞれ専門労働者にゆだねるのが歴史の趨勢である。」と分析している<sup>(6)</sup>。

コロンタイは家事の社会化が資本主義社会の中に見出せるとし、家事の社会化が社会主義社会と資本主義社会の中で見られる違いは「資本主義下では金持ちのみがレストランを利用することができるが、社会主義下では食堂や炊事センターが共有財産になる」<sup>(7)</sup>。更にコロンタイは鋭く言及。「金持ちは退屈な仕事をすべて自分の妻の肩から取り去っているのに、なぜ働く女性労働者たちは家事に時間を奪われ、苦しまなければならないのか！」<sup>(8)</sup>。

コロンタイは社会主義の優位点は近代化による家事からの解放の恩恵を有産者階級のみならず、全女性労働者が享受し得る可能性を持ち得ていると喝破する。しかし現実にはそのような見通し、先見性があるろうともそれを喧伝し、実際に初期ソヴェート政権で組織化し、整然とした法制化し、部分的にはコロンタイの呼びかけで法制化もしたが、その政策の拡張・維持拡大には残念ながらできなかったのである。なぜならそのような家事・育児の社会化を可能とさせるような文化的・産業的基盤の発展は初期ソヴェートでは見られず、また仮に期待できたとしてもそれをどのように具体的に社会に組み込み、組織化すべきかの先見性と男女平等にはその具体化が必須という意識が一部の女性やコロンタイの認識を別にして、男性にも女性にも欠落していたと言える。

しかし暗雲垂れ込める中で曙光はある程度みられたのである。初期ソヴェート政権下で家事・育児労働も社会的労働と同等とみなすことを法理の中にくみこんだほんの短い時期があった。

この核心的なことをもう一度、ここに記載する。すなわち、16年家族法典では、その第10条で夫婦共同財産制を定め、それに続く第11条では、事実婚にも用されることが明記されている。このことは登録婚主義をとっていた18年法典においても事実婚の保護を要求し、事実上の妻の財産分割請求を認めた法令がその時点で豊富に認められた事例の存在により、その法令の存在は26年法典が事実婚主義を認める有力な根拠の事例となったのである。夫婦の共同財産制は様々な法関係の中で、事実婚への適用がもっとも容易なものとみなされた。ソヴェート法の全法典を貫く「労働原則」を支柱におけば、登録婚と事実婚を区別する必要性はなくなり、事実上の婚姻関係を婚姻として保護する必要性もな

くなる論理となる。これこそが最もすっきりした法理であり、そもそも18年法典では夫婦はそれぞれ独立した平等な主体性をもつものとして別産制をとっていた。完全な別産制のもとでは登録婚も事実婚も、その財産関係では差はまったくなくなる。かつてソヴェート初期政権時代にこんなシンプルな法理が存在していたのは驚きである。それもそのはず、夫婦各々が別産制をとることにより、女性も本来は社会的労働に携わるべきであり、その条件を満たすためには、家族機能の社会化は不可欠であること、その実現は結果的に初期ソヴェート政権マルクス主義者の抱いていた家族消滅論に行きつくという論理になる。家族消滅論へのプロセスで公的な社会的原理で構築された食堂、洗濯場、などは社会主義を生きる労働者の為の完全必須な条件として考えられた。

但し当時の革命直後の経済的混乱期においては女性の低収入その他の理由で必ずしも妻の自立的独立的別産制を保持することはできなかった困難な状況があったがゆえに、便宜的に共同財産制をとらざるをえなかったと解釈され得る。この場合共同財産制として用いられた法理の基本は「労働原則」であり、妻が自らの労働によって財産形成に参画している以上その財産は共同財産とみなすというものであった。この「労働原則」の中に家事・育児を組み込んだことは妻の立場を著しく強化した法理であった。初期ソヴェートの共産主義者たちは女性が家事、育児労働プロパーに専念することを批判してきたが、家事、育児労働そのものを否定的にみていたのではない。女性が家事、育児労働にのみ専念することを嗜好し、その中に沈潜することは社会的視野を狭め、狭い私的利害関係の中に身を置くことにより狭隘な視野を保持することしかできないことを彼らは批判していたのである。経済的混乱期に事情により家事、育児プロパーに従事せざるを得ない女性もいたわけで、それらの家事、育児労働も社会的労働と対等と一時期みなしてきた。彼らの頭の中には、遠からず、未来において、家事・育児労働が社会化され、公的な労働とみなされれば、「それはもはや人間精神をスポイルする必要悪的な労働ではなく、社会的に有意義な労働に転化するはずで」と理想をえがいていたのである<sup>(9)</sup>。この家事・育児労働を「労働原則」の一部と見なすことの原理がいつの間にか後の事実婚主義、登録婚主義の法理から抜け落ちてしまったことが大きな歴史転換的解釈の要因の一つであったといえる。つまり家事・育児労働を経済的混乱の中での女性を救う一時しのぎの論理ではなくて、マルクス・エンゲルスが主張するような、社会的有意義な労働に転化でき得たならば法理としても押しも押されもせぬ社会主義的法として周知されるべきであったが、初期ソヴェート政権においては歴史的に時期尚早というか、家事の効率的機械化、また専門化、集团的育児方法の質の高い、専門的展開がないままに場当たりのなコンミュニの食堂で家畜に喰わせるような質の悪い食事の提供、低レベルの居住空間や人に夢を与えないような実利中心の物資の蔓延では、人は昼間の労働が終了したら家庭の安楽な寛ぎ、優しい家庭的奉仕を望むであろう。戦時共産主義的時代を経て、ネップに突入した時代をへ、家事・育児労働が「労働原則」の一部として認められず、その正当なる対価を女性が要求することもできず、当然女性が家事・育児をこなすことが暗黙のうちに社会主義社会に生きる女性に要求され、女

性達も黙認してきた。ロシア女性は30年代以降、表向き同一賃金、同一労働を保障されたソヴェート社会で、実はブラック社会そのもののダブルスタンダードとどのように向き合い、それを打ち破ろうとしてきたか、男性と比較してその後の多くの女性が実質、二重労働を強いられ、長きに渡って息も絶え絶えの労働就業に縛り付けられ、耐えなければならなかったソヴェート時代は実に苛酷な生き方を女性に強いてきたといえる。そしてあまつさえ、事実婚主義が、登録婚主義に集約され、強権的スターリン社会になっていった移行過程において、その詳細な移行過程における理由づけを当時の法学者、家族社会学者らは検討を怠り、理論づけすることもできず、周囲の慣行に埋没して流されていったのである。

これまで憲法に保障されている男女平等と実生活における男女の関係の乖離について多くは語られてこなかったが、ソヴェート政権崩壊後の今日において初めてロシアにおける女性の口から語り出されるようになった。女性のおかれていた実態を過去のスターリン時代にさかのぼって検証されだした論文もようやく最近手にとることができるようになった。因みに『女性と社会主義』というオリガ・ヴォローニナの論文のなかではスターリン時代から80年代の末までを俯瞰しているのでそのうちの一部を要約しておこう。

30年代初頭のスターリンの本格的統治時代に突入して、女性は厳しい家父長的な権力と国家権力のくびきのもとにおかれ、新しい生活を築くための膨大な労働力の予備軍としてみなされ、自分の夫や、父と肩を並べることがすなわち女性解放の証であるとスターリンは唱えていたのである。ソヴェート女性の解放の神話は女性にたいする事実上の超搾取の実態を巧妙にカモフラージュしていたのである<sup>(10)</sup>。

女性の政治権力からの疎外は50年代から60年代にかけて継続していった。この政治権力からの疎外は党が準備した決定を形式的に承認するだけの国家権力の架空の機関への女性選出のオープンにされていない割当数をカモフラージュしたのである。60年代の初頭から1989年に至るまで、女性代議員の選出は33%にのぼっているが、これだけでは最高会議においても、党の中央委員会においても決定権を得るにはいたらなかったのである<sup>(11)</sup>。

ロシアにおける現代の女性は国民経済の半分を担い、平均的教育程度は男性を上回っているにも関わらず、国会に占める女性の数が少なすぎるので、女性のおかれている切実な立場を代弁し、政策、社会機構そのものを女性が社会に進出してその能力を十分に発揮し、社会貢献できるような条件づくりを通して意識構造を変革してこなかったことが挙げられる。

冒頭で述べた独立新聞のソヴェート政権崩壊直前の97年当時の分析結果でも依然として同様なことを指摘している。

- 1) 失業率の割合が極めて男性に比較して高いこと
- 2) 女性の平均賃金は男性の三分の二にしかない（非公式では三分の一と言われている。）



- 3) 女性は新しく進出してきた小規模のビジネスにはきわめて活動的であるが、大企業や大生産部門においては決定権をもっていないこと
- 4) 育児や家事の負担は依然として昔と変わらないこと
- 5) 女性の数は選挙人のなかでは優勢で、選挙においては男性に比べてはるかに積極的であるにも関わらず、政権機構のなかでの女性の参加はきわめて少ない。

このうち1)、2)、3)は専門職における女性の占める位置が男性に比べて貧弱であることで高度に突出した才能を発揮できないこと、またそれにより同レベルの男性をリードするだけの能力を社会が認めようとしないこと、また4)は、社会的に育児、家事にのみ女性力を投入することの社会的損失について十分に男の上に立って説得していないこと、否情けない話だが、女性自身がそれを当然女性の仕事として肯定している人がかなりいること、そしてこれこそが最も重要であると思うが、5)の点に関しては、ロシアの国会での女性議員の占める数は全体の14.5%で、列国議会同盟（IPU）の2016年12月のデータによると世界ランキング126位でイスラム国のトルコやマレーシアに近い数である。この数値では女性に対する性別役割分業の実態を改め、その意識を正そうにも国会での女性の声は余りにすくなすぎるのである。この点では日本の157位よりはランキングは上であるが、かつて男女同権を表面的にせよ華々しく謳ってきた輝かしい国がロシア革命100年目でこのありさまではコロンタイがもし生きていたら大いに落胆するであろう。

## 註

- (1) Н. И. Татарина, Указ. Соч., стр.103-104
- (2) Н. И. Татарина, *Применение труда женщин в народном хозяйстве СССР*, Наука, Москва 1979, стр.11
- (3) Григоров и С. Шкотов, *Старый и новый быт*, 1927, стр.75-76
- (4) Karl Marx-Friedrich Engels, Werke, Bd. 21, 1962, SS75 - 76.  
エンゲルス著 戸原四郎訳『家族・私有財産・国家の起源』岩波文庫、97ページ－98ページ
- (5) Karl Marx-Friedrich Engels, Werke, Bd. 21, 1962, S.158, S.75 エンゲルス著、戸原四郎訳前、前掲書、215ページ
- (6) А. М. Коллонтай, *Семья и Коммунистическое государство*, 1920, стр. 12, 13.
- (7) А. М. Коллонтай, *Семья и Коммунистическое государство*, 1920, стр. 13.
- (8) А. М. Коллонтай, *Семья и Коммунистическое государство*, 1920, стр. 13.
- (9) Vg・Marx-Friedrich Engels, Werke, Bd. 21, 1962, S.75.  
エンゲルス著、戸原四郎訳、『家族・私有財産・国家の起源』岩波文庫97頁
- (10) *Феминизм-Восток, Запад, Россия*, М., Наука, Издательская фирма-Восточная литература, 1993-243стр. стр.220
- (11) Там же с. 220.

## 第15章 プーチンの少子化対策

これまでコロンタイの女性解放論と主としてソヴェート政権における女性のおかれた立ち位置をみてきた。残念ながら、コロンタイを軸とした初期ソヴェート政権の思い描いて150年経過した今日、ロシアでは、女性の立ち位置は実際、どうなのかをプーチンの少子化対策政策と、統計データ等を見ながら現状を伝えておきたい。

まず初めに、人口が少ないということは経済上また安全保障上どのような問題点を生み出すかを3年前、筆者が極東および中露の国境地帯を廻り、強い衝撃を受けた経験を披露しておく。筆者がアムール川を挟んで、両国の産業をつぶさに見学した時のことをここに抜書きしておく。特徴的なことは、黒龍江省とロシアの国境地域間の産業においては中国の加工業がロシアの資源原料に頼っていることが明白な事実として捉えることができた。

中国側国境の職員に直接聞いた話では、ロシアから輸入している物品の70%は木材だという。中国側からロシアへの輸出品は衣類繊維品、加工軽工業品などである。ロシア側には技術がないわけではないが、加工業に携わることの出来る人口があまりにも少ないことにより資源のみを手っ取り早く輸出せざるを得ない状況なのだ。そのために原木輸出の場合には高い関税率をかけ、資源を当てにして安く買い叩こうとする中国側の思惑とその状況をロシアは何とか改善しようと努めてきた。そこでロシア政府はシベリアと極東を長期にわたって発展させるために大統領直轄の国営会社の設立の計画を立てたが、現実にはこの計画はどうも上手く行ったとは思えない。

ロシア側のプロジェクトでは、2009年~2018年までの中露国境地域間プログラムがたてられ、その中心的課題は資源依存の経済からの脱却をめざし、また中国の人口圧力と経済力に対抗できるよう、極東地域の産業の高度化、人口の増加をめざすという意欲的改革であった。またさらにプーチンによる2025年までの発展戦略プランが立てられ、その目的を以下の三点にしぼった。

- 1) インフラ、交通網の整備、資源開発により北東アジアとの結びつきを強化。
- 2) 極東地域に新しい産業を発展させる。
- 3) 極東に人口を定着させる。流出の防止。そのために良い居住環境をつくる。

何故このような急を要する計画をたてようとしているかといえば、2000~2050年の間に、世界の国々のなかで最大の人口減少数を記録すると見られているゆえである。これに対する危機意識から、プーチン政権は大々的な方策を講じることとなり、とくに、少子化対策については、2007年初めから強力な対策を実行するべく様々な策定を考慮してきたのである。

(しかし、数年経過した現在、ロシア側は幾分なりともその危機意識は収まった模様だ。なぜなら、クリミア半島の住民の自主的投票により、約200万の人々がロシアに帰属するようになったからである。)

## 人口減少問題

ロシア全土では1993年に人口減少が始まった。死亡率は、ソ連崩壊後の1992年から1994年にかけて著しく悪化した。これは一説には男性のアルコール飲みすぎによることではないかという研究発表もあったが、今のところ定説が確立しているわけではない。ただどの人口学者も触れていないが、チェルノブイリの被曝や内部被曝の影響もあながち否定はできないであろうということが筆者の類推である。

出生率は、1980年代後半から1993年まで急激に低下し、その後もそれほど改善されていない。

社会増加率は、1993～1995年には旧ソ連諸国からのロシア人の帰還により、プラスの値になった。そのため、自然増加率のマイナスが補われ、1994年には、若干の人口増加を見た。一方、社会増加数は、ロシア人のソ連諸国からの帰還が終わってから1999年以降小さくなり、1999年以降、増加率のマイナスも一段と大きくなった。

次に沿海州、ハバロフスク州、アムール州などの主たる極東の人口動態表によれば、いずれも死亡数が出生数よりも多いということは大幅な人口の自然増は期待できないということがわかる。この事実は極東のこれからの産業育成や将来性などを考慮する場合に由々しき事実であることはいふまでもない。

体制崩壊から10年位経った2000年以降、社会もいくらか安定し、高い経済成長が続くようになるなかで、出生率と死亡率に大きな改善が見られてもよさそうであったが、現実には、出生率の上昇はさほどでもない。合計特殊出生率（1人の女性が一生の間に生む子供の数）で見ても、日本の合計特殊出生率1.32人（2006年）と比較してもロシアは出生率ももっとも低い国の1つになってしまった。一方、死亡率の方は、1999年以降の経済回復の時期にむしろ高くなっている。

極東に焦点を当てると他の地域に比較してそれなりの人口の増加は見られるのであるが、それにしても隣国中国の東北三省合わせて1億人に対するに沿海州の600万人はいかにも少なすぎるといえよう。そこでプーチンの新たな人口増加策が発表された。2006年5月10日の年次教書を発表し、そこで初めて母親資本という新しい画期的な政策を明らかにしたのは周知のことである。

### 母親資本はロシアの人口減少をすくうか

もっとも注目を集めた母親資本は、12月29日付連邦法第256号「子供を有する家族に対する国家支援の追加策」によって、法制化された。それによると、この母親資本は、2007年1月1日以降に2人目以上の子供を出産した母親が、出産3年後に受け取ることができる資本である。受取額は25万ルーブルで、生涯で1回限り受け取ることができる。

今後のロシアにおける人口予測は残念ながら余り思わしくない。20歳から25歳の女性人口は多く、さまざまな人口増加策により今後10年間は効を奏するであろう。しかし16歳以下の女性の人口は極端に低いので10数年後には深刻な減少状態になることは目にみえ

ている。ロシア統計局では10年間は14000万人。10数年後 再び減少傾向。2031年13900万人、予測 で2031年に向けて人口は緩やかな右肩さがりになる。(2016年度では、クリミアが住民投票によってロシアに併合されたので、200万人増加している。)

2025年のプーチンの発展戦略のうち、1)と2)の成果は着々とあげてきたが、3)の人口政策はあまり成果を挙げているとはいいがたい。もっとも少子化の傾向は極東にとどまらず、ロシア全体の傾向であることが図表からわかる。極東に焦点を当てると他の地域に比較してそれなりの人口の増加は見られるのであるが、沿海州では高々600万人に過ぎないのであるからロシア人側の焦燥感は相当大きい。

そこでプーチンの新たな人口増加策が発表され、漸増の機運もみられるが、あくまでそれも向こう10年位のスパンである。2006年5月10日の年次教書を発表し、そこで初めて母親資本という新しい画期的な政策を明らかにした。教書によると、一人だけではなく二人以上の出産の母親に出産3年目に受け取ることができるもので、生涯に一度受け取る可能な制度である。この画期的人口増加政策により、プーチンは何とか少子化に歯止めをかけ、ダイナミックな国力創出の基礎を築きあげようとする。この並々ならぬ意図を反映させているのが、ロシアに出かけると町のあちこちに写真入りのプラカードが立てられているのだ。プラカードの元気のいい子供の写真の上にはロシア語で、“三人なんて大したことない！三人は、一人、二人、三人で、わけないでしょ！”という意味がこめられており、出産奨励が国家のかけ声で推進されているさまがよくわかる図だ。

### 今後の人口予測と人口増加策の問題点

2006年6月20日の安全保障会議において、「2025年までのロシア連邦の人口政策構想」を策定することが決められた。その後、メドヴェージェフ首相を中心に作成作業が進められ、2007年10月9日付大統領令第1351号により策定された。「人口政策構想」では、3段階での政策の実施が予定されている。

**第1段階：2007～2010年** →人口の自然減少率を低下させ、社会増加（移民増加）を確保することが予定される。

**第2段階：2011～2015年** →人口動態の安定化。2016年の目標は次の通りである。  
人口を1億4,200万～1億4,300万人で安定化させる。

2006年と比べて、合計特殊出生率を1.3倍に引き上げ（1.69人程度となる）、

**第3段階：2016～2025年** →移民の増加も計算にいれ、人口を1億4,500万人にまで増加させる。

2006年と比べて合計特殊出生率を1.5倍に引き上げ（1.95人程度となる）、死亡率を62.5%の水準に引き下げる。さらに 年間30万人以上の移民増加を確保する とあることはおどろきである。というのも図をみればあきらかであるが、大体において移民の定着率はそれほどよくない。

フランスの国立人口問題研究所は、2007年に出した研究報告の中で公式に移民が出生率

アップに貢献しているのは 0.1 ポイントと算出している。一見移民でトルコやアフリカから来た母親たちの合計特殊出生率はフランス人のものより高く 3.3 で、フランス国籍の母親より 1.5 倍も高い。しかしこれはあくまで現象的にそう見えるだけで、出産可能年齢を考慮すると、出産可能年齢に該当する外国人の女性の数がフランスにいる出産可能年齢のフランス人女性のわずか 7 % にしかないのである。合計特殊出生率が 1.5 倍でもその超過分も 100 分の 1 しか効果がないことがわかる。だから全体的に計算すると 0.1 ポイントのかさ上げしか期待できないことになる。単純な計算だけでも容易ならざるものがあるが、さらに移民の出産行動は受入国の女性の出産行動に大体同化することが多いらしいのだ。母国が多産国であっても移民は入国した国の文化的規範や習慣、その他を受け継ぐ傾向が多いそうである。

しかも生活が安定せず、十分な金を稼げない時には抑止行動をとり、出産を避けることになるケースが多い。

ロシアの場合は CIS（独立国家共同体）からの移民が極めて高いがほとんどが肉体労働の低賃金者が多く、十分な家庭生活をいとめないケースが多い。しかも 1991 年のソヴェート政権崩壊後以降に生まれた人々はロシア語もままならぬ人々が出現しており、そのためロシア政府は移民労働を志す人々にロシア語の試験も課しているようだ。極東においては北朝鮮からの移民労働者が多いが、彼らは大体において集団で入国し、集団の寮生活をし、労働は森林伐採などの一次産業の従事者が多い。彼らの大半は定住するより、季節労働者として働くケースが多い。CIS 以外で中国からの移民も多いが、定住する数は限定的である。しかし図表の数は極端に少ないといえる。どこに隠れてしまったのか、あるいは意図的に統計に出さないのか、そのところは不透明である。政府の移民政策には一貫性がなく、よく政策自体が変えられるとするなら、ロシア人と同様に移民に母親資本を与えたとしてもそれほど出産率がぐんと伸びることにはならないのである。しかし政府は移民の数を年間 30 万人ずつ増加させることを期待しているようだがそれは図表 1 からみても到底その数には及ばないだろう。その証拠として、図表 1 を参照してみると、2011 年のロシア連邦行政管区沿海州地域別移民の数は極東に来たものは 7035 人で極東を引き揚げたものは 6483 人で統計的に残留したものは僅かに 552 人である。それでも 7035 人という数は、APEC を目指してプーチンの掛け声でルースキー島開発の為に呼び寄せられた数で引き上げたものより一応プラスになっているが、2010 年の統計では来たもの 3569 人、引き揚げたもの 3830 人で残留は統計上わずか 261 人になっている。さらに住民として登録した人数を調べると 2011 年では 3341 人が登録し、そのうち引き揚げたものは 3667 人で滞留者はマイナス 326 人で、2010 年では、登録人数は 3369 人で引き揚げたものは 3830 人で滞留者はマイナス 469 人にのぼっている。この人口の移動状況をみると、移民として落ち着いて、余裕のある持続的生活を営み、子供をもうけようとしてもほとんど望みうすにみられてもいたしかたないのである。今極めて活気のある極東一つをとってもこうなのだからロシア政府当局が何を根拠に年間 30 万人ずつの移民の増加を考慮しているか甚だ疑問に思わざるを得ない。

図表 1 ロシア連邦管区地方ごとの沿海地方における地域間人口動態  
Межрегиональная миграция в Приморском крае  
по территориям федеральных округов РФ

	2011				2010	
	合 計		内訳：住所登録済み		住所登録済み	
	来た人々	去った人々	来た人々	去った人々	来た人々	去った人々
全 人 口	15314	20718	7375	14160	7357	14843
内 訳：						
中央連邦管区	1511	4099	706	3071	632	3418
北西連邦管区	702	2346	330	1637	401	1607
南連邦管区	832	2327	407	1754	413	1446
北カフカス連邦管区	468	356	211	276	182	358
沿ヴォルガ連邦管区	1307	1648	688	1245	559	1402
ウラル連邦管区	515	729	247	519	278	549
シベリア連邦管区	2944	2730	1445	1991	1323	2233
極東連邦管区：	7035	6483	3341	3667	3569	3830
サハ共和国						
(ヤクーチヤ)	396	174	131	100	142	118
ハバロフスク地方	2630	3799	1420	2153	1484	2104
アムール州	1312	732	679	572	792	635
カムチャツカ地方	1071	475	449	298	349	389
マガダン州	190	135	78	77	105	82
サハリン州	1063	918	421	302	491	319
ユダヤ自治州	311	169	127	132	173	151
チュクチ自治管区	62	81	36	33	33	32

図表2 2011年における年齢別構成



ДЕМОГРАФИЧЕСКИЙ ЕЖЕГОДНИК ПРИМОРСКОГО КРАЯ 2012 (С.78)

沿海地方の人口動態年鑑 (78 頁)

(2012 年の沿海州地方の人口動態年鑑) この図表 1 を見ると 2011 年に沿海州に来たもの ←左より沿海州から出ていったものが、右表の沿海州に入ってきたものより多いことが分かる。

ロシア連邦統計局は 2025 年までの人口予測をし、2016 年のロシアの人口は 1 億 3,749 万人、2025 年は 1 億 3,429 万人とみている。政府目標は、この予測と比べると、2016 年については 450～550 万人、2025 年については 1,100 万人程度、人口を増やすことである。この予測の数の中には当然移民の増加をみこしているであろうが、あまりにも移民の増加を高く見積もりすぎているようだ。筆者の推定ではそれほど爆発的に増加するということはないとみている。合計特殊出生率の目標は、相当に高い水準であるが、人口維持水準である 2.07 人よりは低いのが現実的だ。

### アンケートにあらわれた母親資本と女性の立ち位置

以上プーチンの人口増加策の問題点をみてきたが、実際にはそれを運用しようとする女性たちはどのように考えているのかをモスクワ、などの大都会や極東の都市ウラジオストックに住む女性からの聞き取りをしてみると、意外に人気がないことに驚く。因みに筆者は 2012 年春にウラジオストックで実際に女性 100 名からメールによる簡単な電子アンケート調査を試みた。メールによる電子調査であったため任意性がかなり高く、回収率は 61%と余り高い回収率ではなく、現在も一部続行中である。しかし、一定の傾向は読み取ることが出来

たので一部紹介する。項目は全部で 31 項目、筆者が注目したのはこのうち、1)医療施設と医療費 2)母親資本を貰っている人数 3)住居の広さ 4) 保育施設数 5)社会と家庭における女性の立ち位置 6)家事労働は男と折半でやるべきか などの項目である。このうち 1)に関して 殆ど 90%以上の人が医療代は高い、また薬価が高いと不満を述べている。またその不満の中で意見としては、①小児用の医院が遠い→子供が急に具合が悪くなると遠いのは困る。 ②金の支出が多い。特に歯医者が高い。③常に薬代に支払いがかかる→これは国家が支払うべきだ。④薬代は高いから、病気にならないようにしている。⑤ 医療費は高い。よい医師は少ない。⑥支払いは大。子供は病気になり、お金は薬代のために多く支出された。⑦病院は高い、よい治療のためには支出は大。 ⑧病気になると支出がかかるので、民間医療に頼っている→例えば薬草医療とかその他に頼る。このようなアンケート上の意見や不満は 世界各国が抱える現下の最重要問題 (2010 年)ロシアの項をみると医療制度に 28.3 として問題意識が最も高く反映されており、それとこのアンケートの結果は呼応していることがわかる。

2) の母親資本を貰っている女性の数はこのアンケートでは残念ながら 0 人であった。ロシアでも都市と農村の生活費の格差は相当なもので、大都市では住居費はことのほか高い。それゆえ、この住居費のことを考慮すると、高々 25 万ルーブリ貰ってもそれほど有り難味がないということを異口同音に聴く。さらに別の女性から聞いたことだがその使途が年金に回したり限定的ではあるが別の使途も可能であるが、都市によって枠組みはさまざまであり、母親資本の使用目的を子供の養育に関する物品を購買することに限定されたりする例もあるので意外と人気がないのだ。母親資本は 2006 年から始まり、この基金の制度が始まって以来人口数は地味ではあるがそれなりに伸びてきたことは否めない事実であるが、どうも政府が期待しているほど人口増加のための爆発的な起爆剤にはなり得ていないということが現状のようである。従ってこのような華々しいキャンペーンを展開すること以前にもっと大切なことがあるのではないかというのが筆者の感想になる。資金援助をする以前にもっと大切な母体をどうまもるか、ということを次の統計がものがたっているのではないだろうか。次なる表は産前産後の母親死亡率で、2009 年の統計を見ると、ロシアが、キルギス、メキシコ、アルゼンチンの次に高くなっている。

以下出産時母親死亡率の国際比較表である。



図表 2 母親死亡率

	年	母親死亡率
ロシア	2009	22.0
オーストラリア	2006	3.4
オーストリア	2008	2.6
アゼルバイジャン	2009	24
アルゼンチン	2007	47.4
アルメニア	2009	27
ベラルーシ	2009	1
ブルガリア	2008	6.4
ハンガリー	2008	17.1
ドイツ	2007	4.1
フランス	2007	7.6
スイス	2007	1.3
ギリシャ	2007	1.8
デンマーク	2006	7.7
スペイン	2005	3.9
イタリア	2007	2.3
カザフスタン	2009	37
カナダ	2004	5.9
キルギス	2009	63
ラトビア	2008	8.4
メキシコ	2006	55.2
日本	2008	3.8

ЖЕНЩИНЫ И МУЖЧИНЫ РОССИИ 2010 ИНФОРМАЦИОННО-ИЗДАТЕЛЬСКИЙ  
(С. 268)

ロシアの女性と男性 2010 情報一出版 (268 頁)

図表 2 は注目に値する。図に示されているように産前産後の母親の死亡率はロシア、22.0 で、55.2 のメキシコ、47.4 のアルゼンチンの次に高いということは注視すべきことである。ドイツ、フランス、スイス、などの先進国は皆一桁の死亡率で、ロシアは二桁になっている。

この項目のはじめに紹介したロシアの丸太生産の増大と中国への輸出、また輸出数の増大と自然保護とのバランスを考え、大幅な関税をかけて輸出数を調整するようには子供の数を増やすことや、調整することはできないのである。子供は生き物で帳簿上の数字を動かすの

と同じ考えでは駄目だ。女性も同じく、丸太と違うのだ。不幸にも女性の側は自分の体をさいなむことにより、調節を試みているようだが最後に帳尻が来るのはほかならぬ女性の体なのである。丸太の数と同じく、子供の数を増やすことばかり考え、母体保護をなおざりにしているとするなら、その考えの背後にはやはり女性が大事にあつかわれていないということが暗黙のうちにわかってしまう。母体保護という至極当たり前な、しかし大変重要な保健衛生の視点をロシア政府には是非もってもらいたいものだ。

さて母体保護の観点から少し寄り道になるが、さらに踏み込んで妊娠、中絶の事例ではロシア人女性はどうのような行動をとっているかを「ロシア NOW」のスペトラーナ・スメタニナ氏の寄稿からさぐってみる。その中で、かなりショッキングな事実にぶつかる。すなわち、ロシアでは依然として妊娠中絶が、避妊の主な手段の一つとなっている。これは裏を返せば、リング、避妊薬などの事前の手段をあまり講じておらず成り行き任せだということで、その結果、ロシアの中絶数は先進国に比べると数倍にのぼっている。このことはとりもなおさず、女性の母体保護がなおざりにされていることである。このような憂慮されるべき事実をロシアの保健省は精査し、率先して母性保護のために政策を早期にたてるべきなのだ。

図2 出生率及び妊娠中絶（墮胎）数

（棒グラフの斜線は出産数、網目は中絶数：単位は千）

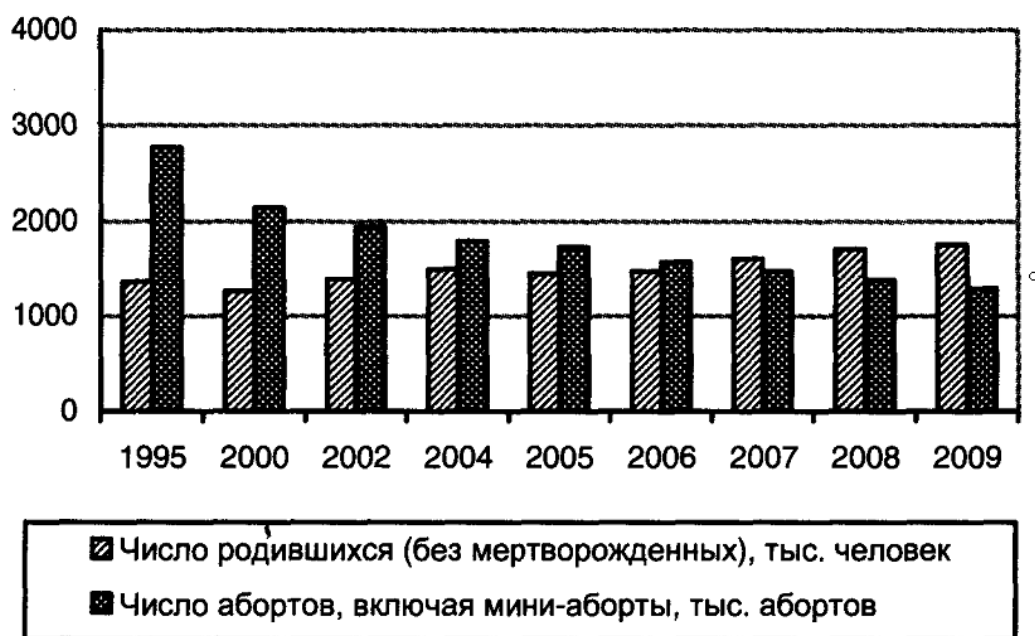
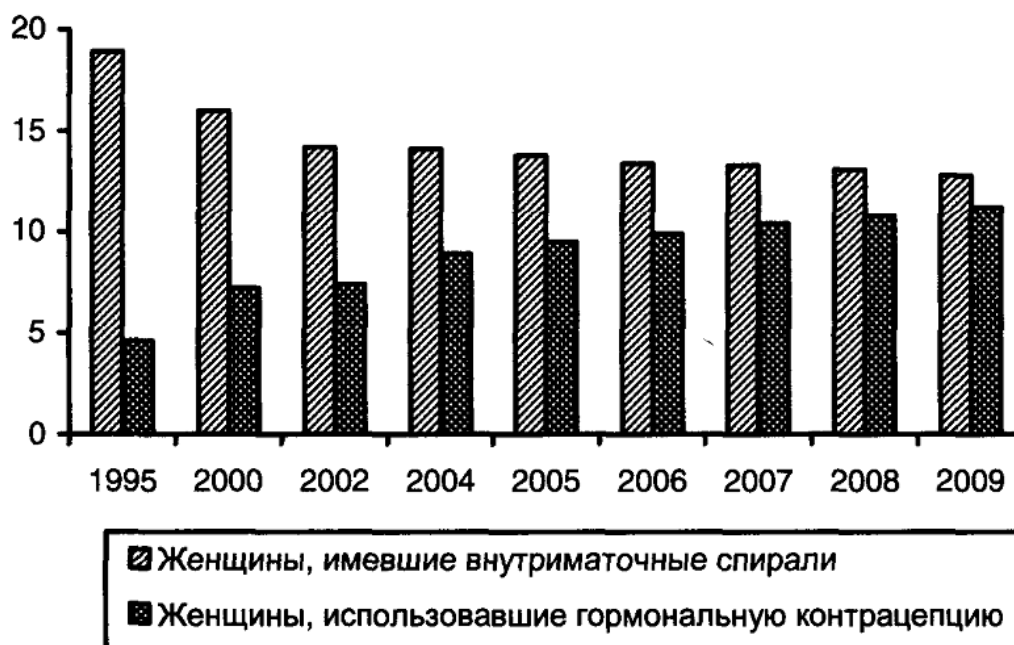


図3 女性による避妊の採用

年齢 15-49 才の女性 100 名に対する（斜線は子宮内装具を使用している女性、網目状の棒グラフはホルモン療法の場合）



ЖЕНЩИНЫ И МУЖЧИНЫ РОССИИ 2010 ИНФОРМАЦИОННО-ИЗДАТЕЛЬСКИЙ (C.81)

ロシアの女性と男性 2010 情報一出版 (82 頁)

しかしながら、現実には、ロシア人女性の 80%は、何らかの避妊をしていると答えている。しかし避妊リングと避妊薬のような確度の高い方法を使っているのは、それぞれ 20%と 14%と少ない。第四表の図で明らかであるが、ソヴェート政権崩壊直後では、相対的に中絶率も高く、女性により負担のかかる避妊用子宮内装具をしている女性の比率が高かったが、7～8年の経過で中絶率も下がり、ホルモン療法に移行している。ロシアの妊娠中絶に関する法律は極めて規制がなすすぎる。ロシアは妊娠中絶数で際立っており、先進国のみならず CIS 諸国の数をも数倍上回っている。中絶がこれほど多いのは、避妊の知識が不十分であることが伺える。避妊薬の錠剤を服用しているのは、ロシア人女性のわずか 14%だけだ。

社会団体「ジェラバヤ・ロシア」の顧問、アレクセイ・ウリヤーノフ氏は、あまりにも制約のない法律が原因だと主張するが、それは安易な男性発想の論理だろう。まず、女性が制約のない（一見制約のないように見える）法律に翻弄されるのではなく、自分の母体を自分でまず守るということを徹底的に教え込む啓蒙活動こそが必要になってくる。

ロシアでは妊娠 12 週目までは無料で中絶できる。その後は、医師の所見と女性の社会的

立場次第（年齢、境遇など）となるが、これも抜け穴がある。私立病院に行けば、「お金さえ払えば、どんなわがままでもかなえてくれる」のだ。 こういう状況を踏まえてウリヤーノフ氏は一連の措置を提言する。これが実現すれば、ロシアの中絶数は3分の1か4分の1になるだろうという。同氏はその措置として、例えば、以下のようなものを挙げている。① 病院に行ったその日に中絶するのではなく、一週間間をおく。② 女性に対し、心理学者や社会問題の専門家などとの面談を義務付ける。③ 不法な中絶を行ったか強制した医師・看護師の責任を問う。最後に ④ として中絶数を減らす方法として、避妊の知識を広める啓蒙活動がある。この点でロシアはヨーロッパから遅れをとっている。

モスクワ大学経済学部と人口学研究所の共同調査によると、ロシアでは10%のカップルがまったく避妊をしていないという。ハンガリーでは、そうしたカップルは4%、フランスでは3%、ベルギーでは2%にすぎない。

医薬品への不信感もあるかもしれないが、生命を生み出す女性の体の負担をすこしでも軽くしようとする根本的思考がないと先進的知見も啓蒙され、普及されにくい状況にされてしまうであろう。要するに母体保護の観点が弱いので先進的知見を多くの女性に啓蒙する活動がぬけ落ちているということがいえる。しかしながら、図でみられるようにじょじょにはあるが、体制崩壊の直後から比較するとしばしば副作用もあるような子宮内避妊具の装着よりもホルモン避妊薬の服用が多くなってきていることも事実であり若干の進歩もみることができる。

さてアンケート調査にもどるが、3) の住まいの広さに関しては平均して3人住まいで50〜から60平米台が一番多く、回答の殆どは広くはないがそれなりに満足しているというものが多かった。4) に関しては、いい保育施設がなくて困ったというのが2〜3例あったが、母親に面倒見てもらったとか、それなりに窮状を切り抜けている模様だった。

次に5) として社会と家庭における女性の立ち位置について→次のような問いかけをした。

В России бытует мнение, что женщина должна играть 4 роли: жена, мать, домохозяйка и работник. Согласны ли вы с этим утверждением? Какая роль ближе вам? （ロシアでは古くから貞女の鑑として、女性はず妻として、母として、主婦として、そして労働者としてふるまわねばならないという意見があるが、あなたはこの意見に賛成ですか？どんな役割があなたに一番近いと思いますか？）

この問いかけに対して何と驚いたことに回答者の95%以上がそんなことは今まで考えてもいなかった。自覚なしと答えたのである。筆者はソヴェート時代からの90年以上の刷り込みかと絶句してしまった。

6) Как думаете, должен ли супруг взять на себя половину работы по воспитанию детей и выполнению домашних обязанностей? （夫は育児と家事の半分を担うべきかどうかと思いますか？）

この問いに対しては たったの2%の女性がそうすべきだと賛意を示し、残りの98%の女性は 必ずしもそうとはいえない、夫は稼ぐのに忙しいから大変だ。女性が家事・育

児をするのは普通という意見が大半を占めた。現状肯定派が多数。ここに懸命に生きるロシア人女性の姿を垣間見ることが出来るのだ。一人の人間がこんなに何役も出来るはずはない、どこかで女性の体にストレスやひずみを与えているに違いないのだ。

プーチンの 2025 年までの極東発展戦略プランが立てられたことはすでに記述した。その三点にしばられた三つのプランのうち、(①インフラ、交通網の整備、資源開発により北東との結びつきを強化。② 極東地域に新しい産業を発展させる。Etc., ) ③ 極東に人口を定着させる、流出の防止、そのために良い居住環境をつくる、ということは説得性のある言葉ではあるが、母親資本を設け、人口増加のための金銭的援助に関しては、その積極的意義は買うが、次に繋がる言葉、そのために良い居住環境をつくるとする言葉には違和感がある。まず居住環境も大切だが、何よりも先に母体を守り、女性が生きやすい社会を創ることが先決ではなかろうかというのがこの稿での筆者の結論である。問題はこれだけではない。この稿ではこの点に絞ったが、これに関連したことでは枚挙に暇がないほど問題山積みであることを忘れないうちにここに記しておく。

#### 参考文献：

ДЕМОГРАФИЧЕСКИЙ ЕЖЕГОДНИК ПРИМОРСКОГО КРАЯ 2012  
СТАТИСТИЧЕСКИЙ СБОРНИК ВЛАДИВОСТОК

ЖЕНЩИНЫ И МУЖЧИНЫ РОССИИ  
СТАТИСТИЧЕСКИЙ СБОРНИК, МОСКВА 2010  
2010 ИНФОРМАЦИОННО-ИЗДАТЕЛЬСКИЙ ЦЕНТР «СТАТИСТКА РОССИИ»

МАТЕРИНСКИЙ КАПИТАЛ, А. ГУСЕВ изд. ФЕНИКС, РОСТВ-НА-ДОНУ 2012  
ВСЕ О МАТРИНСКОМ КАПИТАЛЕ: КАК ЕГО ПОЛУЧИТЬ И ИСПОЛЬЗОВАТЬ  
РОССИЙСКАЯ ГАЗЕТА, Т. А., МАСЛОВАЯ 2011

РАЗРАБОТКА ТЕМЫ, КОММЕНТАРИИ И РАЗЪЯСНЕНИЯ НАЛОГОВОГО  
ЭКСПЕРТА  
Т. А. МАСЛОВОЙ

## 結 論

まず本論ではコロンタイが社会主義政権の樹立によって輝かしい男女平等に基づく画期的政策の数々を策定するまでの経過を述べ、コロンタイの内なる論理形成が如何に19世紀末から20世紀初頭のロシアの伝統的・啓蒙的人道主義の影響を受けたこと、その影響をベースにし、ドイツに亡命した期間ベーベルによって画期的女性解放論の洗礼を受けた事柄を明らかにした。その経過を明らかにすることにより、従来のフミニズムとコロンタイが唱道する社会主義的フェミニズムとの内容の差異と社会主義的フェミニズムの優位点とその意義を明らかにした。

その後、男女同権を約束したソヴェート政権の初期にあつて、コロンタイが如何なる論理によって、母性と子供の権利を守り初期ソヴェート政権の特性である男女平等を唱道したか、またその後如何なる事情によってその実績が歪曲されていったかを論証した。

コロンタイはソヴェート政権の萌芽期に国家保護人民委員として極めて重要な役割を果たした。この時期コロンタイは墮胎の横行を防止するために母子保護をめざした母子宮殿の設立を家族政策の一環として呼びかけ、出産は女性の社会的権利と義務であることを高らかに宣言、ロシア史上初の「母子保護課」を設立。教会婚を廃し、同時に婚姻における事実婚の選択の自由も保障した。コロンタイのわずか数か月に渡る女性のための政策は人類史上驚くべき、画期的なものであったが、党内政争によりレーニンの批判を浴び、党籍剥奪の危機に一時的に陥った。その後世界初の女性全権大使として北欧及びメキシコの各国に派遣され、優れた業績を残した。

1936年のスターリンの台頭によりコロンタイが男女平等、女性の自立と母子保護に奉げたその事業の意義はかなり半減させられる羽目になる。上記の「母子保護課」の誕生により、初期ソヴェート政権下では、ほんの短い期間、家事、育児労働も社会的労働と同等と見なすという事が法理の中に組み込まれ、共同財産制を形成する項目として26年法典が事実婚主義を認める有力な根拠になった。これはソヴェート法を貫く労働原則を主たる原則として事実婚も登録婚も同一と見なす画期的な理念を形成するものであり、夫婦別産制をとる場合でもその差は全く存しないという意味になる。このことは女性も本来は社会的労働に携わるべきであるという基本的理念を示しており、その条件を満たすためには家族機能の社会化は必要なことであり、この論理の行く着くところは家族消滅論にいたるという事はコロンタイも含めて当時の社会主義者達には当然思考し得る帰結であった。このような前提を深く想定しないと事実婚が生じたバックグラウンドは到底理解することができないが、本論文ではその理念的背景を明らかにした。しかしながらその論理は余りにも当時の社会状況とはかけ離れていたがゆえにその奥意は万人には理解されなかった状況であった。コロンタイの大なる貢献は法理の中にこの労働原則を基礎として家事育児を組み込んでいくべき事を強く主張し、出産、育児を個々の家族の私的なことではなく、社会的な国家事業として位置付けるべきであると主張したところにあった。

次にこの事実婚主義がスターリンの台頭によりいかなる理由によって登録婚にとって代っていったかをそのプロセスを考察し、原因を明らかにした。その後の登録婚強化が国家の人口増加策と家庭を軸とした富国強兵策の礎になり替わることによって次第に女性の社会的権利が剥奪され

つつあった事由を鑑み、そのことが社会意識上、新しい理念のもとに男女平等の社会化を構築しようとする意欲をさまたげることになったこともあきらかにした。それ以降、スターリン没後から今日に至るも女性の地位がはかばかしくないことも共通の認識としてあきらかにされた。

今年はロシア革命からちょうど100年目にあたる。ロシアの女性のおかれた状況はグラフで提示したように実質的にはバックラッシュもあるせいか、進歩はほとんど見られない。プーチンは何とか、母親資本という出産のための援助をし、移民導入も画策しているようであるが、想念とは裏腹に余りうまくいっていないようだ。プーチンの頭の中には偉大なロシアという大国意識がこびりついているのであろうが、そう国民をうまく操作できるものではない。焦燥感に駆られて少子化を招く **LGBT** を排斥したりしているが無駄である。クリミア併合により、ロシア人の中には2016年は人口が増えたと喜んでいるむきもあるようだが、増加人口は200万人だけである。日本もロシアもそうだが、なぜ人口を増やすことばかり考えるのか。人口増加、大国意識、資源確保、生産力増強、自然破壊という古い歯車にのる方式ではこれからの時代はたちゆかなくなるだろう。

現代資本主義は人口増加により国力を強化し世界的規模での分業体制の再構築を創りあげた。しかし欧米などが作り上げた経済システムは労働者保護のためのセーフティネットの構築には殆ど手をつけていない。ロシアでも1991年のソヴェート政権崩壊後、資本主義の道を疾駆してきたが、これまでクレムリンの中では、経済委員を最近追放されたクドリンや、メドヴェージェフ首相等を中心とするネオコン欧米経済を目標とするグループと守旧派との経済論争が絶えなかったようである。しかしここに来て、ロシア、中国はタグを組んで、1944年のブレトンウッズ体制の崩壊、1973年の変動相場制への移行を歴史の教訓として、大きな通貨体制の賭けに出ている。すなわち、紙切れ同然になりつつあるドルに代わって金の裏付けのある通貨体制の構築に乗り出しているのである。この9月にウラジオストック開催の東方経済フォーラムでプーチンは“**Pivot to Asia**”と高らかに宣言した。これからは中国の金に裏付けされた元による石油取引はドルの大なる脅威になるであろう。ロシア自身も金を多く保持し、側面から大いに中国を支えているようだ。この10年で世界情勢は大きな変化をみることになるであろう。

ロシアは経済制裁に見舞われ一時的に苦しんだが、その時期は脱したようだ。プーチン政権は、いい加減で人口を増やし、ものを増産するという古い資本主義様式からは卒業するべきだ。むしろ環境保全、人にやさしい、今ロシアが取り組んでいる **NON-GMO** の作物を大いに作り、それを戦略物資として位置づけること、またシベリアには膨大な資源が眠っている。更に北極海も驚くべき有用鉱物資源があり、中国が一带一路政策で大きな食指を伸ばしている。人口増加策と開発は環境汚染の源である。シベリアの富を食いつぶしてもロシアは当分やっていける。例え人口増加がなくても可能だ。それより女性の国会における議員数を増やし、**LGBT** の人達と仲良く共生することの方が大切ではなかろうか。

これからの時代は **AI** と **IoT** の時代である。男女の身体的能力に関係なく、知力と創造力、オリジナリティを競い合う時代である。今後、ジェンダーに関係なく人と人がお互いに尊重し合い、わかり合う社会のほうが幸せなのではあるまいか。

## ロシア語文献

- "Бери и Гаага" (о значении женских конференций) ("Social-Demokraten", 29. IV. 1915)
- "Брак и быт" ("Рабочий суд", No.5, 1926 г.)
- "Брак, женщины, алименты" ("Экран", 6. II. 1926 г.)
- "В. И. Ленин и первый съезд работниц" (сб. "О В. И. Ленине. Воспоминания", 1900 - 1922 гг. М., 1963 г., а также в кн. А. М. Коллонтай "Из моей жизни и работы", М. 1974)
- "Важный пробел" (о привлечении женщин в профдвижение) - "Правда", 5(18)V. 1917 г.
- "Великий борец за право и свободу женщины" (Память об Августе Бебеле, 1913)
- "Всероссийское совещание коммунистов" ("Известия", 28. XI. 1920 г.)
- "Вторая женская международная социалистическая конференция" ("Социал-демократ", No.17, 1910 г.)
- "Вторая международная конференция коммунисток" ("Избранные статьи и речи", 1972)
- "Два течения" (по поводу 1-ой международной женской социалистической конференции в Штутгарте). ("Современный мир", октябрь 1907 г.)
- "Дворец материнства горит" (там же)
- "Демонстрация солдаток" ("Правда", 12(25), IV, 1917 г.)
- "День работниц - день победы и борьбы" ("Коммунар", No.50, 1920 г.)
- "Деятельность российского народного комиссариата социального обеспечения" (1919 г.)
- ("Государственное обеспечение", 1959, No.10)
- "Дорога крылатому эросу" ("Молодая гвардия", No.3, 1923 г.)
- "Еще одна победа коммунисток" (о первой Московской губернской конференции женщин). ("Известия", 14. VII. 1920 г.)
- "Женская конференции и III Интернационал" ("Moscow", июнь, 1921 г.)
- "Женские батальоны" ("Работница", No.6, 1917 г.)
- "Женский день" (А. М. Коллонтай. "Избранные статьи и речи" М., 1972)
- "Женское рабочее движение" ("Наша заря", No.2, 1913 г.)
- "Женщина-работница на первом феминистском съезде в России" ("Голос социал-демократа", No.12, 1909 г.)
- "Женщины - борцы в дни Великого Октября" ("Избранные статьи и речи", 1972)
- "Женщины в Семнадцатом году" ("Работница", No.31, 1937 г.)
- "Задачи и права работниц в Советской России" ("Известия", 26X. 1918 г.)
- "Задачи отделов по работе среди женщин" ("Избранные статьи и речи")
- "Задачи съезда по борьбе с проституцией" ("Возрождение", No.5, 1910 г.)
- "Защита материнства" ("Наша заря", No.9, 1913 г.)
- "И в России будет женский день" ("Избранные статьи и речи", 1972)
- "Интервью А. М. Коллонтай с норвежским драматургом и поэтом Н. Григом по вопросам семьи, брака и морали в Советском Союзе" ("Veien Frew", No.1, 1936)
- "Итоги второй международной женской социалистической конференции" ("Наша заря", No.8-9, 1910 г.)
- "Итоги съезда по борьбе с проституцией" ("Социал-демократ", No.14, 1910 г.)
- "К истории движения работниц России", 1920 г.
- "К предстоящей конференции организованных работниц в Вене" ("Новая рабочая газета", 8 декабря 1913 г.)



"К социалистическим женщинам всех стран" (обращение) ("Стромклокен", 14. XI. 1914)

"Как борются работницы за свои права", 1919 г.

"Как и для чего созван был I Всероссийский съезд работниц" ("Избранные статьи и речи")

"Как мы созывали первый Всероссийский съезд работниц и крестьянок" ("Коммунистка", No. 1 1, 1920 г.)

"Как надо работницам готовиться к учредительному собранию?" ("Рабочий путь", 14(27). X. 1917 г.)

"Клара Цеткин" ("Правда", 25. IX. 1920 г.)

"Классовая война и работницы" ("Коммунистка", Мо.5, октябрь 1920 г.)

"Кого потеряли работницы? (памяти Я. М. Свердлова)", ("Избранные статьи и речи", 1972)

"Коминтерн и вторая международная конференции коммунисток" ("Коммунистка". No.12-13, 1921 г.)

"Коммунизм и семья"

"Конференция работниц и партийные районы" ("Рабочий путь", 21.X (3.XI) 1917 г.)

"Красная Роза" (о Розе Люксембург). ("Вестник жизни", No.5, 1919 г.)

"Крест материнства и Советская республика" ("Избранные статьи и речи", 1972)

"Ленин и работницы в 1917 году" ("Работница", No.1, 1946 г.)

"Международная женская конференция" ("Наша рабочая газета", 30 мая 1914 г.)

"Международная женская социалистическая конференция в Берне" ("Наше слово", 7-8. IV.

"Международные задачи женского дня" ("Северная рабочая газета", 18. 2. 1914 г.) Задачи

"Листка работницы" ("Листок работницы", No.1, 25 мая 1914 г.)

"Международные социалистические совещания работниц", 1918 г.

"Международный день работниц", 1921 г.

"Мораль, как форма классового господства и классовой борьбы" ("Молодая гвардия", No.6-7, 1922 г.)

"На нашей линии огня" ("Правда", 7(20) и 9(22) V. 1917 г.)

"Наш праздник и наши задачи" ("Правда". 8.III.1920 г)

"Наши задачи" ("Избранные статьи и речи", 1972)

"Не 'принцип', а 'метод' " ("Правда", 20.III. 1923 г.)

"О 'Драконе' и 'Белой птице' " ("Молодая гвардия", No.2, 1923 г.)

"О Международной конференции женщин-социалисток в Копенгагене" (ж. "Женщины мира", М., 1974, No.1)

"О новом законе о семье и браке" ("Натиск", 8. III. 1926 г.)

"О профдвижении в России, об издании жур. 'Работница'" ("Die Gleichheit", N 19, 1911)

"Об организации работниц в России" ("Голос социал-демократа", No.10-11, 1909 г.)

"Об охране материнства и младенчества" (постановление народного комиссариата государственного призрения). ("Известия", 19(6) II. 1918 г.)

"Общество и материнство", 1916 г., 1921-1922 г.

"Организация работниц и право на свободу женщины" ("Луч", No.127, 1913 г.)

"Памяти В. Ф. Комиссаржевской" ("Красная новь", No.2, 1930 г.)

"Памяти Надежды Константиновны Крупской" ("Избранные статьи и речи", 1972)

"Первая и вторая международные конференции коммунисток" ("Коммунистка", 1921 г.)

"Первая конференция работниц" ("Рабочий путь", 26.X(8.XI) 1917 г.)

"Первая международная конференция коммунисток" ("Избранные статьи и речи", 1972)

"Первое Всероссийское совещание работниц" ("Правда", 5 октября 1918 г.)

"Первое совещание крестьянок–делегатов Тульской губернии" (там же)

"Первые шаги к созыву конференции работниц" ("Рабочий путь", 10 (23). X. 1917 г.)

"Первые шаги по охране материнства" ("Из моей жизни и работы", 1974)

"Первый Всероссийский съезд работниц и крестьянок" ("Советская женщина", ноябрь 1948 г.)

"Письмо к Н. К. Крупской о подготовке к женской конференции и резолюция норвежских рабочих", февраль 1915 г. ("Исторический архив", No.3, 1960, стр. 116-118)

"Письмо работницам Красного Петрограда" ("Избранные статьи и речи", 1972)

"Положение женщины в связи с эволюцией хозяйства", 1921 г., 1922 г.

"Последняя рабыня" (к съезду женщин Востока) ("Коммунистка", No.7, 1921 г.)

"Практические задачи конференции работниц" ("Рабочий путь", 24.X (6.X3) 1917 г.)

"Приветствие русских работниц к МЖД за подписью А. М. Коллонтай" ("Избирательное право для женщин", 19 марта 1921 г.)

"Проект резолюции к 3-й международной конференции работниц в августе 1914 г."

"Пролетариат и буржуазия в борьбе с проституцией" ("Правда" (Вена) No.14, 1910 г.)

"Профсоюзы и работница" ("Избранные статьи и речи")

"Работа депутатов в финляндском парламенте" ("Северная рабочая газета", No.10, 1913)

"Работниц и выбор в Государственную думу" ("Невский голос", 24 августа 1912 г.)

"Работница за год революции", 1918 г., 1919 г., 1920 г.

"Работница и Красная Армия" ("Раненый красноармеец" No.1, 5.VII.1920 г.)

"Работница и крестьянка в Советской России", 1921 г.

"Работница и хозяйственная разруха" ("Трудовая жизнь" 18.VI. 1920 г.)

"Работница крестьянка и красный фронт", 1919 г.

"Работницы и война" ("Луч", 6 ноября 1912 г.)

"Работницы и районные думы" ("Правда", 26.V. (8.VI) 1917 г.)

"Работницы и Советы" ("Коммунар", II.V. 1919 г.)

"Работницы и учредительное собрание" ("Правда", 19 марта 1917 г.)

"Работницы и учредительное собрание", 1917 г.

"Работницы, как революционный фактор против подготовки США к войне" ("Magazine Section of the New York sunday call", март 1917 г.)

"Рабочее движение в России в города реакции" ("Die Neue Zeit", 8. VI. 1901 г.)

"Равноправие женщин" ("Dresdner Volkszeitung", 18. III. 1911)

"Роль феминисток и пролетарок в освободительном движении женщины" ("Северо-западный голос" No.35, 22. 2. 1906 г.)

"Семья и коммунистическое государство", 1919 г., 1921 г.

"Советская женщина - полноправная гражданка своей страны" ("Избранные статьи и речи")

"Совещание коммунисток восточных национальностей" ("Правда", 10. IV. 1921 г.)

"Совещание Коммунисток-организаторов женщин Востока" ("Избранные статьи и речи", 1972)

"Совещание коммунисток–организаторов женщин Востока" (там же)

"Социалистическое женское движение в России" ("The Progressive Woman, VII. 1901 г.")

"Социальные основы женского вопроса", 1909 г.

"Творческое в работе К. Н. Самойловой" ("Коммунистка", No.3-5, 1922 г.)

"III Интернационал и работница" ("Избранные статьи и речи")

"Тридцатилетняя годовщина Всероссийского съезда работниц и крестьянок" ("Работница", No.12, декабрь, 1948 г.)

"Труд женщины в эволюции хозяйства", 1928 г.

"Трудовая повинность и охрана женского труда" ("Коммунистка", No.1-2, 1920 г.)

"Ударница пролетарской революции" (о К. Цеткин) ("Правда", 22-23. VI. 1933 г.)

"Что дал Октябрь женщине Запада" ("Избранные статьи и речи", 1972)

("Избранные статьи и речи", 1972)

(опубл. в кн. "Общество и материнство")

1915 г.)

Газетные материалы о созыве и проведении I Всероссийского съезда работниц и крестьянок

("Правда" и "Известия" за октябрь-ноябрь 1918 г.)

Доклад о работе среди женщин на съезде РКП (б). ("Избранные статьи и речи", 1972)

Рецензия на "Труды первого всероссийского съезда по борьбе с торгом женщины и его причинами" ("Современный мир", июнь 1912 г.)

Речь на XVI пленуме Лиги наций в правовой комиссии в защиту женского равноправия ("Правда", 16 сентября. 1935 г.)

Тезисы о коммунистической морали в области брачных отношений, ("коммунистка", No.12-13, 1920 г.)

Художественные произведения—повести:

"Большая любовь", 1927 г.

"Василиса Малыгина", 1923 г.

"Любовь пчел трудовых", 1923 г.

Гендерные вопросы в России в конце XX века

Фокус-групповое исследование в городской и сельской местности

И.Е. Калабихина 19 апреля 2000 г. ООО «Флинта» Москва

Гендерная сегрегация и трудовая мобильность на российском рынке труда И.О. Мальцева, С.Ю. Рошин 25.12.06 ООО ПД «Современник» Москва

История России в гендерном измерении

Современная зарубежная историография

О.В. Бошваком 8/VII-2010 г. ИНИОН РАН Москва

РАБОТНИЦА № 1-1979	Изд. Работница Бумажный пр. Москва
РАБОТНИЦА № 2-1979	Изд. Работница Бумажный пр. Москва
РАБОТНИЦА № 3-1979	Изд. Работница Бумажный пр. Москва
РАБОТНИЦА № 4-1979	Изд. Работница Бумажный пр. Москва
РАБОТНИЦА № 5-1979	Изд. Работница Бумажный пр. Москва
РАБОТНИЦА № 6-1979	Изд. Работница Бумажный пр. Москва
РАБОТНИЦА № 7-1979	Изд. Работница Бумажный пр. Москва
РАБОТНИЦА № 8-1979	Изд. Работница Бумажный пр. Москва
РАБОТНИЦА № 9-1979	Изд. Работница Бумажный пр. Москва
РАБОТНИЦА № 10-1979	Изд. Работница Бумажный пр. Москва
РАБОТНИЦА № 12-1979	Изд. Работница Бумажный пр. Москва

РАБОТНИЦА № 1-2012	Изд. Работница Бумажный пр. Москва
РАБОТНИЦА № 2-2012	Изд. Работница Бумажный пр. Москва
РАБОТНИЦА № 3-2012	Изд. Работница Бумажный пр. Москва
РАБОТНИЦА № 4-2012	Изд. Работница Бумажный пр. Москва
РАБОТНИЦА № 5-2012	Изд. Работница Бумажный пр. Москва

РАБОТНИЦА № 6-2012 Изд. Работница Бумажный пр. Москва  
 РАБОТНИЦА № 7-2012 Изд. Работница Бумажный пр. Москва  
 РАБОТНИЦА № 8-2012 Изд. Работница Бумажный пр. Москва  
 РАБОТНИЦА № 9-2012 Изд. Работница Бумажный пр. Москва  
 РАБОТНИЦА № 10-2012 Изд. Работница Бумажный пр. Москва  
 РАБОТНИЦА № 12-2012 Изд. Работница Бумажный пр. Москва

РАБОТНИЦА № 1-2013 Изд. Работница Бумажный пр. Москва  
 РАБОТНИЦА № 2-2013 Изд. Работница Бумажный пр. Москва  
 РАБОТНИЦА № 3-2013 Изд. Работница Бумажный пр. Москва  
 РАБОТНИЦА № 4-2013 Изд. Работница Бумажный пр. Москва  
 РАБОТНИЦА № 5-2013 Изд. Работница Бумажный пр. Москва  
 РАБОТНИЦА № 6-2013 Изд. Работница Бумажный пр. Москва  
 РАБОТНИЦА № 7-2013 Изд. Работница Бумажный пр. Москва  
 РАБОТНИЦА № 8-2013 Изд. Работница Бумажный пр. Москва  
 РАБОТНИЦА № 9-2013 Изд. Работница Бумажный пр. Москва  
 РАБОТНИЦА № 10-2013 Изд. Работница Бумажный пр. Москва

## 英語文献

Beryl; Coates, Jennifer, ed. by Madoc-Jones, *An Introduction to Women's Studies*, Blackwell Publishers, 1997

Brehm, Sharon S., *Seeing Female: Social Roles and Personal Lives*, Praeger, 1988

Collinson, David L., ed. by Hearn, Jeff R. *Men as Managers, Managers as Men: Critical Perspectives on Men, Masculinities and Managements*, SAGE Publications, 1996

ed. Rosaldo, Michelle Zimbalist and Lamphere, Louise, *Woman, Culture, and Society*, Stanford University Press, 1974

Eisenstein, Hester, *Contemporary Feminist Thought*, G. Allen & Unwin, 1984

Friedan, Betty, *The Feminine Mystique (50th Anniversary Edition)*, W. W. Norton & Company, 2013

Gerson, Kathleen, *No Man's Land: Men's Changing Commitments To Family And Work*, Basic Book, 1994

Jaggar, Alison M., *Feminist Politics and Human Nature*, Rowman & Littlefield Publishers, 1988

May, Larry, *Masculinity and Morality*, Cornell University Press, 1998

Millett, Kate, *Sexual Politics*, Avon, 1971

Reed, Evelyn, *Is Biology Woman's Destiny?*, Pathfinder Press, 1972

Reed, Evelyn, *Problems of Women's Liberation*, Pathfinder Press, 1972

Stanford, Barbara, *On Being Female*, Pocket, 1974

## 関連文献

### イランの出生率の転換－革命と再生産

Abbasi-Shavazi, Mohammad Jalal / McDonald, P. / Hosseini-Chavoshi, M.,  
*The Fertility Transition in Iran: Revolution and Reproduction*. 225 S. 2009 (Springer, GW) Anderson, David G.  
(ed.), *1926/27 Soviet Polar Census Expedition*. 356 pp., 51 tables, 10 maps, 18 photos. 2011:3 (Berghahn, US)

### 欧州とアジアにおける死亡率と生活水準 1700～1900

Bengtsson, Tommy / Campbell, C. / Lee, J. Z. et al.,  
*Life under Pressure: Mortality and Living Standards in Europe and Asia, 1700 – 1900*. (The MIT Press Eurasian  
Population and Family History Series) 531 pp., 29 illus. 2009 (MIT Pr., US)

### 人口高齢化－福祉国家への脅威：スウェーデンの事例 Bengtsson, Tommy (ed.),

*Population Ageing – A Threat to the Welfare State?: The Case of Sweden*. (Demographic Research  
Monographs) 140 S., 18 color & 18 b/w illus. 2010 (Springer, GW)

### ヨーロッパの国際移民を予測する－ベイジック的視点

Bijak, Jakub,  
*Forecasting International Migration in Europe: A Bayesian View*. (The Springer Series on Demographic  
Methods and Population Analysis 24) x, 230 S. 2011 (Springer, NE)

### 幸運な少数派－最も偉大な世代の人々とベビーブームの間で

Carlson, Elwood,  
*The Lucky Few: Between the Greatest Generation and the Baby Boom*. 250 pp. 2008 (Springer, NE)

### 移民と経済社会変動－英国の大都市の 2001 年センサス分

析 Champion, Tony / Coombes, M. / Raybould, S. et al.,  
*Migration and Socioeconomic Change: A 2001 Census Analysis of Britain's Larger Cities*. 84 pp. 2007:4  
(Policy Pr., UK)

### 日本とドイツの内破する人口－比較

Coulmas, Florian / Luetzeler, R. (eds.),  
*Imploding Populations in Japan and Germany: A Comparison*. (International Comparative Social Studies 25)  
545 pp., 94 figures, 56 tables. 2011 (Brill, NE)

### 西洋世界における宗教と出生率の衰退

Derosas, Renzo / van Poppel, F. (eds.),  
*Religion and the Decline of Fertility in the Western World*. 300 pp. 2006 (Springer, NE)

### 英国の人口 第2版

Dorling, Danny,  
*The Population of the UK. 2nd ed.* 172 pp. 2012:11 (Sage, UK)

### 不毛な国家－欧州の人口内破

Douglass, Carrie B. (ed.),  
*Barren States: The Population "Implosion" in Europe*. 270 pp. 2005 (Berg, UK)

### 20 世紀における避妊・断種運動とグローバルな出生率

Dowbiggin, Ian R.,  
*The Sterilization Movement and Global Fertility in the Twentieth Century*. 262 pp. 2008 (Oxford U. Pr.,  
US)

### 欧州の来るべき人口上の課題

Eberstadt, Nicholas / Groth, H.,  
*Europe's Coming Demographic Challenge: Unlocking the Value of Health*. 71 pp. 2007 (AEI, US)

### Engelman, Robert, I

*More: Population, Nature, and What Women Want*. (A Caravan Book) 304 pp. (Island Pr., US)

### 欧州の最近の人口学上の推移 2005 年版

European Population Committee of the Council of Europe,  
*Recent Demographic Developments in Europe 2005*. 150 pp. 2006 (Council of Europe, FR)

### Farmer, Ann,

*By Their Fruits: Eugenics, Population Control, and the Abortion Campaign*. 448 pp. 2008:8 (Catholic U.  
America Pr., US)

*Generations & Gender Programme: Survey Instruments*. (Sales No.: E.05.II.E.20). 128 pp. 2006:4 (UN, US)

### Goel, S. L.,

*Population Policy and Family Welfare: Reproductive and Child Health Administration (RCH)*. 526 pp. 2005  
(Deep & Deep, II)

### カイロ合意－人口サーベイ、女性のエンパワメント、人口政策の制度変化

Halfon, Saul,  
*The Cairo Consensus: Demographic Surveys, Women's Empowerment, and Regime Change in Population  
Policy*. 261 pp. 2007 (Lexington Books, US)

## ドイツの人口変動－経済的・財政的結果

Hamm, Ingrid / Seitz, H. / Werding, M. (eds.),

*Demographic Change in Germany: The Economic and Fiscal Consequences*. 216 pp. 2008 (Springer, GW)

## 出生率の急低下

Harris, Fred R. (ed.),

*The Baby Bust: Who Will Do the Work? Who Will Pay the Taxes?* 238 pp. 2006 (Rowman & Littlefield, US)

## 速水融著 前近代日本における人口、家族、社会

Hayami, Akira,

*Population, Family and Society in Pre-Modern Japan*. (Collected Papers of Twentieth-Century Japanese Writers on Japan 4) 382 pp. 2009 (Global Oriental, UK)

## 第1巻: 家族変動

Hoehn, Charlotte / Avramov, D. / Kotowska, I. E. (eds.),

*People, Population Change and Policies: Lessons from the Population Policy Acceptance Study*. Vol. 1: Family Change. (European Studies of Population 16/1) 480 pp. 2008:2 (Springer, NE)

## 第2巻: 人口学的知識、ジェンダー、エイジング

Hoehn, Charlotte / Avramov, D. / Kotowska, I. E. (eds.),

*People, Population Change and Policies: Lessons from the Population Policy Acceptance Study*. Vol. 2: Demographic Knowledge – Gender – Ageing. (European Studies of Population 16/2) 375 pp. 2008:2 (Springer, NE)

## 世代とジェンダーが人口変動をいかに形成するか

*How Generations and Gender Shape Demographic Change: Towards Policies Based on Better Knowledge*. (Sales No.: E.09.II.E.8). 180 pp. 2009 (UN, US)

## シンガポールにおける人口政策と生殖

Hsiao-Li Sun, Shirley,

*Population Policy and Reproduction in Singapore: Making Future Citizens*. (Routledge Contemporary Southeast Asia Series 43) 189 pp. 2012 (Routledge, UK)

## 太平洋岸アジア地域における超低出生率－傾向、原因、政策問題－

Jones, Gavin / Straughan, P. T. / Chan, A. (eds.),

*Ultra-Low Fertility in Pacific Asia: Trends, Causes and Policy Dilemmas*. (Routledge Research on Public and Social Policy in Asia 1) 217 pp. 2009 (Routledge, UK)

## 欧州の人口変化を再構成する－ジェンダーと福祉国家の転換への視点－

Kahlert, Heike / Ernst, W. (eds.),

*Reframing Demographic Change in Europe: Perspectives on Gender and Welfare State Transformations*. (Focus Gender 11) 232 S. 2010 (Lit, GW)

## 低出生率の原因と結果

Kaufmann, Eric / Wilcox, W. B. (eds.),

*Whither the Child?: Causes and Consequences of Low Fertility*. 256 pp. 2011:12 (Paradigm Pub., US)

## ドイツの地域的な死亡率の差異

Kibele, Eva U. B.,

*Regional Mortality Differences in Germany*. (Demographic Research Monographs) xii, 252 pp., 34 color illus. 2012:7 (Springer, NE) <596-476>

## 高齢人口をシミュレートする－スウェーデンに適用されたマイクロシミュレーション・アプローチ

Klevmarken, Anders / Lindgren, B. (eds.),

*Simulating an Ageing Population: A Microsimulation Approach Applied to Sweden*. (Contributions to Economic Analysis 285) xxxiii, 429 pp. 2008 (Emerald, UK)

## 欧州における国際移民と将来の人口・労働者

Kupiszewski, Marek (ed.),

*International Migration and the Future of Populations and Labour in Europe*. (The Springer Series on Demographic Methods and Population Analysis 32) viii, 294 pp. 2012:5 (Springer, NE)

## 妊娠中絶、公共政策、出生率の経済学

Levine, Phillip B.,

*Sex and Consequences: Abortion, Public Policy, and the Economics of Fertility*. 215 pp., 55 line illus. 2007 (Princeton U. Pr., US)

## ヨーロッパ人の新世代－拡大欧州連合における人口学と家族

Lutz, Wolfgang / Richter, R. / Wilson, C. (eds.),

*The New Generations of Europeans: Demography and Families in the Enlarged European Union*. (Population 2006 (Earthscan, UK) and Sustainable Development Series) 389 pp.

## グローバルな人口高齢化と欧州における移民

Malmberg, Bo / Tamas, K. / Bloom, D. et al.,

*Global Population Ageing and Migration in Europe*. (Routledge Studies in the European Economy) 256 pp. 2011:12 (Routledge, UK)

#### 出生率と女性の労働供給の相互依存

Matysiak, Anna,

*Interdependencies between Fertility and Women's Labour Supply.* (European Studies of Population 17) vi, 200 pp. 2011 (Springer, NE)

#### 移民の出生率—ドイツにおける二世代アプローチ

Milewski, Nadja,

*Fertility of Immigrants: A Two-Generational Approach in Germany.* (Demographic Research onograph) 176 pp. 2010 (Springer, GW)

イギリス国家統計局編 人々と移民・移住 Office for National Statistics,

*Focus on People and Migration.* 214 pp. 2005 (Palgrave Macmillan, UK)

#### 中国における出生率、家族計画、人口抑制

Poston, Dudley L., Jr. / Lee, Che-Fu et al. (eds.),

*Fertility, Family Planning, and Population Control in China.* (Routledge Studies in Asia's Transformations 1) 192 pp. 2006 (Routledge, UK)

#### 市場とマルサス—新自由主義時代における人口、ジェンダー、健康—

Rao, Mohan / Sexton, S. (eds.),

*Markets and Malthus: Population, Gender and Health in Neo-liberal Times.* 380 pp. 2010 (Sage, II)

#### グローバルな家族計画革命—人口政策・計画の 30 年

Robinson, Warren C. / Ross, J. A. (eds.),

*The Global Family Planning Revolution: Three Decades of Population Policies and Programs.* 470 pp. 2007 (World Bank, US) [日本総代理店 極東書店]

#### 欧州の人口 1945 年以降

Rothenbacher, Franz,

*The European Population since 1945.* (The Societies of Europe) 1030 pp. 2005 (Palgrave Macmillan, UK)

#### 仏英における人口学と 生命維持に必要な統計 1830～85 年

Schweber, Libby,

*Disciplining Statistics: Demography and Vital Statistics in France and England, 1830 – 1885.* (Politics, History, and Culture) 277 pp. 2006 (Duke U. Pr., US)

#### 英国における死亡率地図

Shaw, Mary / Thomas, B. / Smith, G. D. et al.,

*The Grim Reaper's Road Map: An Atlas of Mortality in Britain.* (Health and Society Series) 256 pp. 2008 (Policy Pr., UK)

#### 出生率、生活環境、ケア、移動性

Stillwell, John / Coast, E. / Kneale, D. (eds.),

*Fertility, Living Arrangements, Care and Mobility.* (Understanding Population Trends and Processes 1) 350 pp. 2009 (Springer, NE) *ertility, Living Arrangements, Care and Mobility.* (Understanding Population Trends and Processes 1) 350 pp. 2009 (Springer, NE)

#### 高山憲之他編 出生率と公共政策—低下する出生率の傾向を逆転する—

Takayama, Noriyuki / Werding, M. (eds.),

*Fertility and Public Policy: How to Reverse the Trend of Declining Birth Rates.* (CESifo Seminar Series) 296 pp., 51 illus. 2011 (MIT Pr., US)

#### 20 世紀ベルリンの出生率政

Timm, Annette F.,

*The Politics of Fertility in Twentieth-Century Berlin.* 352 pp. 2010 (Cambridge U. Pr., US)

#### 津谷典子他著 欧州とアジアにおける 生殖と人間の主体的行為 1700～1900 年

Tsuya, Noriko O. / Feng, Wang / Alter, G. et al.,

*Prudence and Pressure: Reproduction and Human Agency in Europe and Asia, 1700 – 1900.* (The MIT Press Eurasian Population and Family History Series) 416 pp., 33 illus. 2010 (MIT Pr., US)

#### 男性の出生率パターンと決定要因

Zhang, Li,

*Male Fertility Patterns and Determinants.* (The Springer Series on Demographic Methods and Population analysis 27) x, 190 S. 2010:11 (Springer, NE)

## 日本語文献

朝日新聞(2013) 「夫は外、妻は家庭」なぜ増加:上:20代、選べぬゆえの願望?(2013、1月10日)

尾嶋史章(1998)「女性の性役割意識の変動とその要因」尾嶋史章編『現代日本の社会階層に関する全国調査研究第14巻ジェンダーと階層意識』

釜野さおり(2012a)「結婚・家族に関する妻の意識」『平成22年第14回出生動向基本調査(結婚と出産に関する全国調査)―第I報告書―わが国夫婦の結婚過程と出生力』国立社会保障・人口問題研究所

釜野さおり(2012b)「結婚・家族に関する意識」『平成22年第14回出生動向基本調査(結婚と出産に関する全国調査)―第II報告書―わが国独身層の結婚観と家族観』国立社会保障・人口問題研究所。

小山雄一郎(2008)「性別役割意識の規定要因」安河内恵子編『既婚女性の就業とネットワーク』ミネルヴァ書房

佐々木尚之(2012)「累積データ2000-2010に見る日本人の性別役割分業意識の趨勢-Age-Period-Cohort Analysisの適用-」『日本版総合的社会調査共同研究拠点 研究論文集』GSS Research Series, Vol.12 No.9.

穴戸邦章, 佐々木尚之(2011)「日本人の幸福感」『社会学評論』Vol. 62No. 3.

竹ノ下弘久, 西村純子(2005)「性役割意識の規定要因に関する国際比較-日本と韓国の比較から」渡辺秀樹編『現代日本の社会意識-家族・子ども・ジェンダー』慶應義塾大学出版会。

太郎丸博, 永瀬圭(2012)「性役割意識はなぜどのように変化したのか?」『日本人の意識』調査のコホート分析 1973-2008」第85回日本社会学会大会, 札幌学院大学(札幌市)、2012年11月3日。

西岡八郎(2011)「夫と妻の役割関係」『現代日本の家族変動 第4回全国家庭動向調査』国立社会保障・人口問題研究所。

日本女性学会ジェンダー研究会編(2006)『男女共同参画/ジェンダーフリー・バッシング〜バックラッシュへの徹底反論』明石書店。

早瀬保子 (2005) 「ジェンダーに関する意識と実態」毎日新聞社人口問題調査会編『超少子化時代の家族意識-人口・家族・世代世論調査報告書-』毎日新聞社

釜野さおり(2013)「1990年代以降の結婚・家族・ジェンダーに関する女性の意識の変遷」『人口問題研究』

松田茂樹(2005)「現代日本における母親の就労の子どもへの影響に関する規範意識」渡辺秀樹編『現代日本の社会意識-家族・子ども・ジェンダー』慶應義塾大学出版会

見田宗介(1993)「社会意識」『新社会学辞典』有斐閣

目黒依子 西岡八郎編(2004)『少子化のジェンダー分析』勤草書房

森康司(2009)「性別役割分業意識の復活」友枝敏雄編『現代の高校生は何をを考えているか-意識調査の計量分析をととして-』世界思想社

安蔵伸治(2008)「少子社会における結婚観」, 谷岡一郎, 仁田道夫, 岩井紀子編『日本人の意識と行動-日本版総合的社会調査 JGSS による分析』東京大学出版会。

山田昌弘(2009)「若者はなぜ保守化するのか」東洋経済新報社。

山田昌弘(2012)「男性のジェンダー意識とパートナー関係」目黒依子, 矢澤澄子, 岡本英雄編, 『揺らぐ男性のジェンダー意識』新曜社



吉川徹 (1998) 「性別役割分業意識の形成要因—男女比較を中心に」尾嶋史章編『現代日本の社会階層に関する全国調査研究 第14巻ジェンダーと階層意識』

渡辺秀樹 (2005) 「総論 社会意識の現在」渡辺秀樹編『現代日本の社会意識—家族・子ども・ジェンダー』慶應義塾大学出版会.

### ロシア語文献

Бородин С.С., Громыко С.С., Лойт Х.Х. - Миграционная политика России и зарубежных стран.  
Бородин С.С.: ロシアおよび諸外国の移民政策

Взаимодействие мигрантов и местного сообщества в условиях крупного российского города.  
Сборник научных статей.  
ロシアの大都市における移住者と地元社会の相互関係

Гендерные стереотипы в меняющемся обществе. Опыт комплексного социального исследования.  
Рощин Ю.В. - Эмиграция в судьбе России.  
変化する社会におけるジェンダー問題の典型 包括的社会科学の事例

Женская история и современные гендерные роли: переосмысливая прошлое,  
задумываясь о будущем. В 2 тт.  
女性史と現代ジェンダーの役割 未来を思索しながら過去を再検討する

Калабихина И. - Гендерные вопросы в России в конце XX века. Фокус-  
групповое исследование в городской и сельской местности  
20世紀末ロシアのジェンダー問題

Миграции населения Азиатской России: конец XIX - начало XXI вв. /Отв. ред.  
В.А. Исупов.  
ロシアアジア部の移民者数 19世紀後半から21世紀初め

Практики и идентичности. Гендерное устройство.  
Изд. Европейского университета в Санкт-Петербурге  
実践と同一性 ジェンダー制度

Садовская Е.Ю. - Китайская миграция в Центральной Азии в начале XXI века.  
Экономическое наступление и миграция из КНР на примере Республики  
Lambert Academic Publishing 2012  
サドフスカヤ Е.: 21世紀初めの中央アジアにおける中国人移民 カザフスタンを事例にした中国からの経済進出と移民  
挑戦と可能性

Хайтун С.Д. - Количественный анализ социальных явлений. Проблемы и перспективы.  
КомКнига  
ハイトウン S.D.: 社会現象の数量的分析 問題と展望

Численность и миграция населения РФ в 2011 году (статистический бюллетень).  
ロシア連邦の人口と移民数 2011年